甲州市文化財調査報告書　第10集

梶畑B遺跡

―市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書―

2012年3月

甲　州　市
甲州市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

甲州市文化財調査報告書　第10集

梶畑B遺跡

―市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書―

2012年3月

甲　州　市
甲州市教育委員会
㈶山梨文化財研究所

序

本書は市道下塩後22号線建設に伴って発掘調査が実施された、甲州市塩山下於曽熊野に所在する梶畑Ｂ遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査が行われたことにより、調査地点から縄文前期・古墳前期・平安後期・中世と、複数の時代にわたる遺構・遺物が発見されました。竪穴住居や掘立柱建物といった人々の生活に関わる遺構の発見からは、当地に何千年、何百年もの昔から集落が営まれ、人々が活動してきた場所であることを窺い知ることができます。中でも、古墳前期の焼失家屋や土器製作に使用されたと考えられる粘土玉の発見は大変注目され、新聞報道や遺跡見学会により広く周知されるところとなりました。

このように古くから豊かな歴史のあるこの地域で、遠い祖先達が暮らしていた梶畑Ｂ遺跡の報告書を刊行できたことは喜ばしいことであり、この報告書が本市の歴史を深く考究する基礎資料となれば幸いです。

最後となりましたが、遺跡発掘調査ならびに報告書作成に関係して、多大なるご理解とご協力を賜った関係諸機関および関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成24年３月

甲州市教育委員会

教育長　保　坂　一　仁

例　言

1　本書は平成22年度に発掘調査を行った、山梨県甲州市塩山熊野303番地ほかに所在する梶畑Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は市道下塩後22号線（旧41号線）建設に伴うもので、事業主体は甲州市である。

3　試掘調査は甲州市教育委員会が実施し、本調査は甲州市より委託を受けて（財）山梨文化財研究所が実施した。
本書の原稿執筆は次のとおりである。なお編集は櫛原功一が行った。
第４章第３節　河西学（(財）山梨文化財研究所)、第４章第１・２節　松元美由紀・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社)、その他　櫛原功一（(財）山梨文化財研究所)

4　発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務を（株）テクノプラニングに、炭化材の樹種同定、年代測定分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また生粘土塊および土器の胎土分析は（財）山梨文化財研究所地質研究室、金属製品の保存処理は同　保存修復研究室に依頼、実施した。

5　本書に関わる出土品、記録類は甲州市教育委員会で保管している。

6　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略)。
依田文吾･日原美希彦（甲州市役所建設課)、飯島泉･入江俊行･雨宮亨（甲州市教育委員会)、宮澤公雄･平野修･望月秀和･河西学・鈴木稔・畑大介（(財）山梨文化財研究所)、笠原みゆき・塩谷風季（山梨県埋蔵文化財センター)、稲垣自由（大月市教育委員会)、大嶌正之（甲斐市教育委員会)、佐藤勝広（北杜市教育委員会)、三枝哲雄（三枝興業)、森谷忠･柴田直樹（(株）テクノプラニング)、千葉博俊（パリノ・サーヴェイ株式会社)、雨宮久美子・沢登淳子・深沢茂子（甲州市教育委員会スタッフ)、長谷川規愛

凡　例

1　遺跡全体図におけるＸ・Ｙ数値は、平面直角座標第８系（原点：北緯36度00分00秒)、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北で、真北の方向角は－0°07′53″である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴・掘立柱建物跡	１：60　（竪穴住居は「竪穴」と呼称する）
竈	１：30
土坑・ピット	１：30
全体図	任意
土器	１：３
土製品・鉄製品	１：２
石器	１：３

3　土器断面図中のドット網掛けは陶磁器を表す。また土器器面の網掛けは油煙・スス等の付着を示す。

4　遺構平面図における細かい破線は硬化面を示し、焼土範囲はやや細かい破線で表す。撹乱および床下の掘り方面におけるピット等は長めの破線で示す。平面図における遺物の種別は以下のとおりである。
●土師器類　◎縄文土器　▲須恵器　□土製品　△石器　■陶磁器　★炭化物
◇粘土　◆骨　○金属製品

5　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。
平面図における遺物番号は、遺物図版、遺物観察表と一致する。

6　本書の図１は国土地理院発行１/200,000地勢図、図２は同1/25,000地形図、図３・４は1/10,000甲州市都市計画図を使用した。

本　文　目　次

第１章　経　過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 2
　第３節　整理等作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と成果 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　第２節　層　序 …… 13
　第３節　遺　構 …… 14
　第４節　遺　物 …… 26
第４章　理化学的分析 …… 32
　第１節　梶畑Ｂ遺跡２号竪穴の放射性炭素年代測定・樹種同定 …… 32
　第２節　梶畑Ｂ遺跡の炭化種実同定 …… 36
　第３節　梶畑Ｂ遺跡出土土師器、内耳土器、粘土塊の胎土分析 …… 43
第５章　総　括 …… 51
　第１節　調査の成果 …… 51
　第２節　縄文前期 …… 51
　第３節　古墳前期 …… 52
　第４節　平安末 …… 56
　第５節　中　世 …… 59

挿図目次

図１　遺跡の位置 …… 6
図２　周辺の遺跡分布図 …… 7
図３　調査区の位置 …… 9
図４　試掘坑の位置 …… 10
図５　試掘調査トレンチＡ～Ｅ …… 11
図６　２竪炭化材出土状況（略図）および炭化材の樹種 …… 35
図７　分析土器試料 …… 44
図８　試料の岩石鉱物組成 …… 45
図９　岩石組成折れ線グラフ …… 45
図10　土師器・内耳土器のクラスタ分析樹形図 …… 47
図11　土器・粘土塊と甲府盆地河川砂とのクラスタ分析樹形図 …… 48
図12　竪穴の規模 …… 52
図13　西田遺跡の竪穴住居（１） …… 53
図14　西田遺跡の竪穴住居（２） …… 54
図15　平安末の土器群 …… 57
図16　伊保水遺跡１号溝および周辺出土土器 …… 59

写真目次

写真１　炭化材 …… 41
写真２　種実遺体 …… 42

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 8
表２　ピット一覧表 …… 15～18
表３　土器・陶磁器観察表 …… 30
表４　石器観察表 …… 31
表５　土製品観察表 …… 31
表６　遺跡出土遺物量 …… 31
表７　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 34
表８　樹種同定結果 …… 34
表９　炭化種実同定結果 …… 38
表10　主な炭化種実の計測値 …… 38
表11　試料表 …… 43
表12　土器胎土中の岩石鉱物 …… 44
表13　折れ線グラフによる分類 …… 45

図版目次

第１図　調査区全体図および地形図 …… 61･62
第２図　調査区分割図１ …… 63

第３図　調査区分割図２ …… 64
第４図　調査区分割図３ …… 65
第５図　調査区分割図４ …… 66
第６図　調査区分割図５ …… 67
第７図　調査区分割図６ …… 68
第８図　１号竪穴 …… 69
第９図　２号竪穴 …… 70
第10図　２号竪穴 …… 71
第11図　２号竪穴 …… 72
第12図　３号竪穴 …… 73
第13図　４・５号竪穴 …… 74
第14図　４・５号竪穴 …… 75
第15図　６号竪穴 …… 76
第16図　７号竪穴 …… 77
第17図　８号竪穴 …… 78
第18図　９号竪穴 …… 79
第19図　１号掘立 …… 80
第20図　土　坑 …… 81
第21図　土　坑 …… 82
第22図　土　坑 …… 83
第23図　土　坑 …… 84
第24図　土　坑 …… 85
第25図　ピット …… 86
第26図　溝・１号河道 …… 87
第27図　２号河道 …… 88
第28図　河道・試掘坑 …… 89
第29図　溝 …… 90
第30図　１・２号竪穴　遺物 …… 91
第31図　２号竪穴　遺物 …… 92
第32図　３～６号竪穴　遺物 …… 93
第33図　７・９号竪穴　遺物 …… 94
第34図　９号竪穴・１号掘立　遺物 …… 95
第35図　土坑・ピット・溝・河道・遺構外　遺物 … 96

写真図版目次

図版１　１　梶畑Ｂ遺跡全体
図版２　１　調査区俯瞰（南より）
　　２　調査区俯瞰（上より）
図版３　１　調査区俯瞰（西より）
　　２　調査区俯瞰（東より）
図版４　１～３　調査区俯瞰（東区）
図版５　１・２　調査区俯瞰（東区）
　　３　調査区俯瞰（西区）
図版６　１・２　１号竪穴礫出土状況
　　３　１号竪穴ポール撮影による俯瞰
　　４　１号竪穴完掘状況（列状配石を残す）
　　５・６　２号竪穴調査状況
　　７　２号竪穴炭化材出土状況
　　８　２号竪穴遺物出土状況
図版７　１・２　２号竪穴炭化材出土状況
　　３　２号竪穴ミニチュア土器出土状況
　　４・５　２号竪穴遺物出土状況
　　６～８　２号竪穴炭化材出土状況
図版８　１～４　２号竪穴炭化材出土状況
　　５　２号竪穴粘土塊出土状況
　　６　２号竪穴炭化材出土状況
　　７　２号竪穴完掘状況
　　８　２号竪穴南西隅土手構造
図版９　１　２号竪穴南東隅土手構造
　　２・３　２号竪穴柱炭化材
　　４　２号竪穴完掘状況　５　２号竪穴掘り方面
　　６　３号竪穴遺物出土状況
　　７　３号竪穴完掘状況　８　３号竪穴掘り方面
図版10　１・２　４・５号竪穴遺物出土状況
　　３　５号竪穴遺物出土状況
　　４　４号竪穴竈付近遺物出土状況
　　５　４・５号竪穴完掘状況
　　６　４・５号竪穴掘り方面
　　７・８　６号竪穴遺物出土状況
図版11　１　４・５号竪穴竈　２　６号竪穴完掘状況
　　３　１～５号竪穴付近
　　４　７号竪穴遺物出土状況
　　５　７号竪穴竈周辺遺物出土状況
　　６　７号竪穴完掘状況　７　７号竪穴掘り方面
　　８　７号竪穴竈
図版12　１　７号竪穴竈　２　８号竪穴遺物出土状況
　　３　８号竪穴完掘状況　４　８号竪穴竈
　　５　８号竪穴掘り方面
　　６～８　９号竪穴遺物出土状況
図版13　１　９号竪穴完掘状況
　　２　９号竪穴台石出土状況
　　３　１号掘立完掘状況　４　１号土坑完掘状況
　　５　１～７号土坑付近　６　５号土坑
　　７　９号土坑　８　10号土坑
図版14　１　11号土坑　２　15号土坑　３　16号土坑
　　４　17号土坑　５　18号土坑　６　21号土坑
　　７　６号竪穴内27号土坑遺物出土状況
　　８　27号土坑完掘状況
図版15　１　29号土坑　２　38号土坑　３　39号土坑
　　４　40号土坑礫出土状況　５　40号土坑完掘状況
　　６　41号土坑遺物出土状況
　　７　41号土坑完掘状況　８　42号土坑
図版16　１　44号土坑　２　45号土坑上層
　　３　45号土坑下層　４　45号土坑完掘
　　５　46号土坑　６　1号河道
　　７　１号河道断面
　　８　１号河道断面（９号竪穴上層）
図版17　１・２　１号河道内土器出土状況
　　３　２号河道　４　２号河道下層
　　５　１号溝　６　４号溝　７　９号溝
　　８　２号河道内溝

第1章　経　過

第1節　調査の経過

甲州市では都市計画プランに基づき市内で道路整備を進めているが、塩山市民病院前の東西道路を東側の熊野地内へ延長するため、市道下塩後22号線（旧下於曽41号線）建設を予定したところ、梶畑Ｂ遺跡が存在することが判明した。平成22年６月に甲州市教育委員会は試掘調査を実施し、古墳～平安時代の集落遺跡の存在が明らかとなったため、約1800㎡に関して本調査が必要と判断、本調査を実施することになった。本調査実施については、甲州市より財団法人山梨文化財研究所に依頼があり、甲州市と山梨文化財研究所の間で平成22年９月30日に契約を締結し、発掘調査期間は平成22年10月１日～12月28日とされた。業務名は「市道下於曽41号線梶畑Ｂ遺跡発掘調査業務委託」で、整理、報告書刊行に関しては次年度（平成23年度）に実施することとなった。

甲州市教育委員会による試掘調査報告を以下に掲載する。

試掘調査概要

(1) 調査に至る経緯

梶畑Ｂ遺跡は、甲州市塩山熊野303番地ほかに立地し、かねてより古墳～平安時代の遺物が散布する地点として知られている。本地点は畑地として利用されているが、市道下塩後22号線（旧市道下於曽41号線）建設に伴い、当該地の遺跡の有無を確認するため、平成22年６月18日から同22日にかけて甲州市教育委員会は試掘調査を実施した。概要は以下の通り。

(2) 調査概要

道路建設予定地のうち、塩川左岸の道路予定地に５箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削の後、人力による遺構確認作業を行った。各試掘坑は便宜上東からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅとする。

試掘坑Ａは、幅約1.5m×長さ約13.7mの範囲で設定し、地表面から50～60cmほどの深さで地山面に達した。遺構確認の結果、径30～50cmの小穴が13基確認された。なお試掘坑東側で、時期不明の土地の造成痕跡が一部確認されている。

試掘坑Ｂは、幅約1.35m×長さ約2.85mの範囲で設定して掘削した。掘削当初、土坑の直上であることに気づかず掘削深度を誤認したこともあり、地表面から1.1mの深さまで掘り下げたが、土層断面観察の結果、地表面から40cmほどの深さで地山面に達していることがわかった。土坑の規模は土層断面から、上端径1.3m、確認面からの深さ50cmほどと推定される。

試掘坑Ｃは、幅約1.3m×長さ約16.3mの範囲で設定し、地表面から30cm～60cmほどの深さで地山面に達した。遺構確認の結果、径20～90cmの小穴が41基確認された。

試掘坑Ｄは、幅約1.3m×長さ約4.5mの範囲で設定し、地表面から40cmほどの深さで地山面に達した。遺構確認の結果、本坑内北西隅で径約60cm以上の小穴が１基確認された。

試掘坑Ｅは、幅約2.6m×長さ約5.15mの範囲で設定し、地表面から20cmほどの深さで地山面に達した。遺構確認の結果、少なくとも推定3.5m×3.5m以上の竪穴住居跡１軒、径70cm以上の小穴１基が確認された。

出土遺物は試掘坑Ａ、Ｃ、Ｅから土師器の破片が少量検出されている。細片であることから時期判定は困難であるが、本遺跡の年代は古墳～奈良・平安時代の間に収まると推定される。

(3) まとめ

Ａ～Ｅいずれの試掘坑からも遺構が確認されており、またＥからは住居跡が見つかったことから、今回の調査地域に遺跡が存在することが確認され、古墳～奈良・平安期の間に営まれた集落跡と想定される。

【試掘調査参加者】（敬称略）

雨宮久美子・沢登淳子・萩原里江子・正木なつ子

第２節　発掘作業の経過

調査は平成22年10月１日に着手した。幅約14.5m、長さ約200mの道路予定地内のうち、市教育委員会が試掘坑を設定したすべての地点で何らかの遺構が検出されたことから、市教育委員会が指示した調査対象範囲を重機で表土剥ぎする中で遺構・遺物の状況に応じて調査区を広げ、撹乱があれば対象外とするなどして調査範囲を確定した。調査区を塩川低地面の「西区」と一段高い台地面の「東区」に分けて呼称すると、東区南壁については、周辺の畑への農作業のための車両進入が可能な幅で路肩を残す必要があったことから調査時の廃土運搬のための通路としたが、遺構確認が進むなかで竪穴住居が調査区壁面にかかって検出された部分については道幅の限界まで拡張し、できるだけ竪穴の全体像を明らかにできるよう努力した。また東区東端についても農作業との関係でブドウ園への進入路脇までを当初の調査範囲としたが、調査後半では農作業に差支えがないとのことで改めて東側へ調査区を拡張したところ、１号河道により包含層、遺構面の範囲が判明し、調査区を河道付近までとした。塩川脇の低位面の西区に関しては試掘調査が実施されていなかったが、同じ低地面の150mほど南で一ノ坪遺跡が調査されていることから、可能な範囲で調査を実施することとした。

調査の経過としては、東区西端より重機による掘削を開始し、台地面の大半を掘削したのち西区の塩川脇低地を掘削、再び東区の南側を拡張しながら東端へ重機を移動し、東区東端を拡張、１号河道を検出し、一部重機により掘り下げ、調査すべき遺構面を見極めた。遺構確認および調査は重機による表土剥ぎが済んだ順に実施していった。12月９日にはおおむね調査が完了し、全体写真撮影のためラジコンによる空撮を実施した。調査終了を控え、12月11日（日）には甲州市教育委員会と山梨文化財研究所の共催で遺跡見学会を実施することとなり、地元に対して事前周知を図るとともに、12月10日付の山梨日日新聞紙上にて調査を伝える記事および遺跡見学会の案内についての報道が行われた。見学会当日には遺跡全体についての説明を行うとともに、プレハブ内で一部の出土遺物を展示するなど、発掘調査の成果の一端を公開した。12月15日には器材を撤収、その後、甲州市による検査を受け、現地での調査を終了した。

【調査日誌】

平成22年（2010）10月１日(金)晴　調査準備に着手。

10月４日(月)曇　機材搬入、調査区内の草刈、プレハブ等設置。建設課、市教委との打ち合わせ。重機による表土剥ぎ開始。

10月５日(火)晴　重機による表土剥ぎ。基準杭打設。

10月６日(水)晴　表土剥ぎと並行して鋤簾がけ開始。遺構確認、溝調査。市教委来跡。

10月７日(木)晴　重機稼動。ピット調査。市教委、建設課来跡。

10月８日(金)晴　ピット・撹乱調査。重機稼動。

10月９日(土)雨　重機稼動。

10月12日(火)晴・曇　重機稼動。ピット・土坑調査。研究所職員１名来跡。

10月13日(水)晴　１号竪穴調査開始。ピット調査。

10月14日(木)曇　１・２号竪穴、ピット、土坑、溝調査。

10月18日(月)曇　ピット、土坑、１・２号竪穴調査。見学者１名あり。

10月19日(火)曇　2·3号竪穴調査。ピット等調査。

10月20日(水)小雨　１～３号竪穴調査。２号竪穴の炭化材出土状況ポール撮影。市教委、建設課来跡。

10月22日(金)曇　２・３号竪穴、３号溝調査。鋤簾がけ。ピット調査。

10月25日(月)雨・曇　２号竪穴下層炭化材ポール撮影。粘土塊２個検出。ピット等調査。県埋文センター職員等３名来跡。

10月26日(火)曇　２～５号竪穴、ピット調査。研究所職員２名来跡。

10月27日(水)晴　３・４号竪穴、ピット等調査。炭化材の採取。市教委、建設課来跡、協議。

10月29日(金)曇　４・６号竪穴、ピット、土坑等調査。見学者１名。

11月２日(火)晴・曇　鋤簾がけ。ピット調査。建設課来跡。
11月４日(木)晴　ピット、土坑、溝調査。見学者３名あり。
11月５日(金)晴　１・６号竪穴、ピット、土坑調査。
11月８日(月)晴　鋤簾がけ、１・４～６号竪穴、ピット、溝、土坑等調査。見学者１名あり。
11月９日(火)晴　鋤簾がけ、４～６号竪穴調査。市教委・建設課来跡。
11月10日(水)晴　調査。
11月15日(月)曇　重機によりプレハブ移動。西区の表土剥ぎ開始。２・４・５号竪穴調査。市教委来跡。
11月16日(火)晴・曇　２号竪穴、土坑、ピット調査。西区の表土剥ぎ。見学者２名あり。
11月17日(水)晴・曇　２号竪穴床面精査。西区表土剥ぎ、遺構確認。
11月18日(木)晴　重機稼動。
11月19日(金)晴　重機により東側拡張。遺構確認、ピット等調査。見学者５名あり。
11月20日(土)晴　重機稼動。東端で埋没河道確認。市教委等来跡者２名あり。
11月22日(月)曇・雨　重機稼動。埋没河道掘削。河道断面の写真測量。
11月24日(水)晴　１号河道掘り下げ。７・８号竪穴調査。鋤簾がけ。ピット確認。
11月25日(木)曇・晴　７・８号竪穴、土坑調査。市教委来跡。見学者２名あり。
11月26日(金)晴・曇　７～９号竪穴、土坑調査。１号河道ポール撮影。
11月29日(月)晴　７～９号竪穴床面精査。ピット、土坑調査。１号掘立確認。市教委と見学会に関し協議。見学者２名。
11月30日(火)晴　７～９号竪穴内精査。１号掘立北側の拡張。ピット、集石調査。
12月１日(水)晴　土坑、ピット、１号掘立、集石調査。研究所２名来跡。
12月２日(木)晴・曇　土坑・ピット調査。西区調査。見学会の準備。市教委と協議。
12月３日(金)曇・晴　土坑、ピット調査。見学会の準備。
12月６日(月)晴　西区調査。
12月７日(火)晴　西区調査。
12月８日(水)晴　西区２号河道調査。シート片付け。周辺整備。市教委来跡。
12月９日(木)晴　空撮のための清掃。土嚢解体。器材撤収開始。お昼ごろ、ラジヘリによる空撮。市教委来跡。山梨日日新聞記者取材。
12月10日(金)晴　ピット等調査。山梨日日新聞で報道。遺跡見学会の案内掲載。
12月11日(土)晴　10時半より遺跡見学会実施。約90名参加。
12月13日(月)曇・雨　ピット等調査。器材撤収。市教委来跡。
12月14日(火)雨・晴　ピット等調査。片付け。
12月15日(水)晴　甲州市副市長、市議会議員10名遺跡見学。機材撤収。片付け。
12月27日(月)晴　完成検査実施。

【発掘作業参加者】（敬称略）
岩崎誠至・小澤正臣・小幡敬一・河西元彦・河西町男・窪田信一・河野直美・輿石邦次・清水征二・武井美知子・田中丹朗・土屋常子・角田勇雄・原義仁・保坂悌司・山上和

第３節　整理等作業の経過

整理作業については、平成23年11月21日に甲州市と財団法人山梨文化財研究所とで契約し、平成23年11月22日～平成24年３月15日までの間を梶畑Ｂ遺跡整理業務委託とし、報告書刊行までの作業を山梨文化財研究所内で実施した。

出土遺物については、水洗、注記、接合したのち実測遺物を抽出し、実測、トレース、図版組を行った。また遺構平面図については、空撮による図化データと現場での出土地点データを統合するとともに、遺構図の細部についてはデジカメ写真を参考にしながらデータ修正した。また手取りで作図した断面図についてはスキャニングによりデジタルデータ化し、平面図との統合を図った。

自然科学分析としては１号竪穴の内耳土器の胎土分析、２号竪穴の炭化材樹種同定・年代測定、生粘土塊と関連土器の胎土分析、４・７・８号竪穴竈の土壌分析を実施した。１号竪穴出土の内耳土器については、信濃型鍋（内耳土器）普及の前段階にあたる15世紀頃段階の内耳土器であり、擂鉢系の胎土を示すことから、胎土分析により原材料の産出地の推定を試みた。２号竪穴の炭化材については、古墳時代前期の焼失家屋に伴う上屋構築材であり、現地で出土状況を観察しながら採取した炭化物のうち、44点について樹種同定を行い、また１点については年代測定を実施した。生粘土塊については同じく２号竪穴の壁際にまとまって遺存した珍しい資料で、土器制作のため保管状態にあった粘土塊ではないか、という推測のもと、同じ竪穴内から出土したＳ字甕などの土器破片とともに鉱物的な胎土分析を行い、粘土塊の用途、採取地域に関して検討を行った。竈土壌分析については、食生活に関わるデータを得ることを目的に、竈内の焼土層付近に堆積した土壌内の炭化物を水洗し、種実同定等の作業を行った。炭化材、炭化種実の分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社、胎土分析については山梨文化財研究所地質研究室　河西学氏に依頼した。

なお本遺跡の出土遺物のうち、２号竪穴、４・５号竪穴の土器類の一部は山梨県立考古博物館実施の「山梨の遺跡展 2011」（山梨県埋蔵文化財センター共催）にて、平成23年３月13日より４月10日までの間、展示公開された。

【整理作業参加者】（敬称略）

伊藤美香・岩崎満佐子・大村加代子・角屋さえ子・川口三和・櫛原ゆかり・小林典子・斉藤ひろみ
末木美保・須田泰美・竜沢みち子・田中真紀美・林紀子・原野ゆかり・藤原五月・古郡フミ子・古郡明
松野百合子・柳本千恵子・山下詩雅

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

甲州市は山梨県北東部に位置する人口約３万４千人の市である。平成17年（2005）の市町村合併により塩山市、東山梨郡大和村･勝沼町が合併して誕生し、西は山梨市、東は大菩薩峠をはさんで小菅村、丹波山村、大月市と接している。梶畑Ｂ遺跡が所在するのは旧塩山市の市街地域、JR 中央線塩山駅に近い塩山熊野地内で、山梨市境に南流する笛吹川と支流の重川などの小河川が形成した扇状地面から形成されている。旧塩山市の名の由来となった塩ノ山は扇状地面にある単独の山で、南側には塩ノ山と重川間の緩やかな傾斜面に JR 中央線が通過し、JR 塩山駅周辺には市街地が発達する。市街地周辺はモモ・ブドウを主とした果樹園が広がる閑静な住宅地、農村地域で、昭和53年に市街地を避けて青梅街道と勝沼方面を結ぶ旧塩山バイパス（現上於曽81号線）が開通し、市街地は南北に拡張した。さらに平成20年に全線開通した塩山バイパス（国道411号線、塩山東バイパス）により道路網は一段と整備された。

今回発掘調査を行った梶畑Ｂ遺跡は甲州市塩山熊野地内にあり、塩川左岸、重川右岸に位置する。旧塩山バイパスと旧青梅街道を結ぶ東西方向の道路予定地内に所在する。笛吹川扇状地面の東側、重川と塩川に挟まれた南北に細長い地形の南端近くにあたるほぼ平らな地形で、標高は376～377m。塩川に面した西区は標高 373 ｍで、東区とは比高差４ｍの一段低い面となっている。遺跡北方にある JR 塩山駅までは約 1.5km と近く、一帯はブドウを主にスモモ、野菜などを栽培する畑地が広がる緩やかな南傾斜面となっている。北には塩ノ山が位置し、その背後には金峰山を主峰とする奥秩父山地の連山を望む。東側には大菩薩をはじめとする山嶺が取り巻き、西側には小楢山などの山梨市、甲府市方面の山々が連なり、三方に山を背負って南に開けた景観を呈している。旧塩山バイパスと塩山バイパスにはさまれた中間地帯で、調査区西側には重川の支流、塩川が流れ、さらにいくつかの小河川、流路が遺跡周辺に存在する。調査区東脇には東京都青梅市方面へ通じる青梅街道旧道が通過し、勝沼町休息方面から熊野神社の横を通り、遺跡の東側を通過して JR 塩山駅に通じる道路が直線的に伸びている。道沿いや周辺には、古い酒造業の店舗や大きな土蔵のある旧家、土塁や堀を巡らした於曽屋敷や中世の金山衆の流れを汲む屋敷群が点在し、往時の賑わいを偲ぶことができる。

第２節　歴史的環境

最初に甲州市塩山地区（旧塩山市域）における遺跡の概要を記しておく。

本地域では旧石器時代の調査例はない。また縄文時代草創期～早期には遺跡が少なく、縄文時代草創期の有舌尖頭器が採集されているに過ぎないが、前期になると大木戸遺跡、獅子之前遺跡などに見るべきものがある。中期前半～後半の時期には濃密な遺跡分布が知られ、重郎原遺跡、安道寺遺跡、町田遺跡などいくつかの著名な遺跡が調査されており、とくに中期中葉では優れた造形美をもつ縄文土器が多数出土していることが特筆される。縄文後期から弥生時代には低調だが、古墳前期には後述するように西田遺跡で大集落が方形周溝墓を伴って存在するなど、同時期の集落遺跡がいくつか分布する。ただし前期古墳は確認されておらず、後期古墳もほとんどなく、古墳の少ない地域としての特徴がうかがえる。古墳時代後期～奈良時代の遺跡はやや少ないが、平安時代中期以降、平安末から鎌倉前期にかけて隆盛し、古代末の竪穴住居を主とした遺跡が多い。また中世以降の状況については、安田義定をはじめとする甲斐源氏や館跡伝承地のある武田信春らの拠点であり、特に中世前期ではこの地域に甲斐守護所が想定されるなど、甲斐国の中心的な地域であった。

本遺跡周辺には２本のバイパス工事に伴い発掘された遺跡のほか、於曽屋敷をはじめとする中世館跡およ

図１　遺跡の位置

び伝承地が多数集中している。ここでは梶畑Ｂ遺跡周辺の調査事例および中世館跡について述べたい。

これまでに調査された遺跡としては、調査区南側100ｍに位置する県営熊野団地建設に伴う一ノ坪遺跡（山梨県教育委員会ほか 1997)、塩山バイパス建設に伴う西田遺跡（山梨県教育委員会 1988・1997)、塩山東バイパス建設に伴う獅子之前遺跡（山梨県教育委員会ほか 1991)、下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡（山梨県教育委員会ほか　2002)、五反田遺跡（山梨県教育委員会ほか 2002)、大木戸遺跡（山梨県教育委員会ほか 2003）のほか、学校建設に伴う伊保水遺跡（山梨県教育委員会ほか 1998）がある。ここでは、今回の調査成果で明らかになった縄文前期、古墳時代初頭、平安時代末～中世前期あたりに焦点を絞り、各遺跡を概観する。

一ノ坪遺跡は本遺跡南側にある隣接遺跡で、本遺跡西区と同じ塩川左岸の河岸段丘低地面に位置する。図３の県営塩山熊野団地内にあたる。縄文前期の竪穴は２軒あり、１軒は諸磯ｃ期である。平安末の竪穴住居は６軒あり、１軒を除いて北東隅に竈をもち、画一性が認められる。

西田遺跡は本遺跡の南側、塩川左岸に位置する古墳時代前期の集落遺跡で、１次調査で竪穴住居７軒、掘立柱建物跡１棟、方形周溝墓５基、２次調査で竪穴住居54棟のほか、Ｌ字に曲がる大溝が検出された。住居の配置は、ベッド状遺構をもつ大形住居を小形住居が取り巻くようにして集中的に配置し、大溝が集落内を二つに区画する。そのうち大溝が取り囲む南側が集落の中心として継続性をもち、溝に囲まれた居館等の

甲州市塩山
山梨市
甲州市勝沼
梶畑B遺跡
0
(1:25000)
2km
塩山
上於曽
下於曽
梶畑B
上粟生野
下粟生野
日市場
七日市場
八日市場
上井尻
下井尻
上之割
三ケ所
西広門田
東後屋敷
鴨居寺
勝沼町
赤坂
花園山
中原
萩原
牛奥
赤尾
熊野
塩山温泉

図２　周辺の遺跡分布図

表１　周辺遺跡一覧表

甲州市塩山

No.	遺跡名	時代
1	前田遺跡	縄文
2	牛奥遺跡	縄文
3	滝ヶ上遺跡	縄文(前～中)
4	西堀遺跡	平安
5	住蓮木平遺跡	縄文(中)
6	西田遺跡	縄文(中)・弥生・古墳・奈良
7	東田遺跡	縄文(中)
8	芦原田遺跡	縄文(中)
9	下整田遺跡	縄文
10	村北遺跡	奈良・平安
11	向原遺跡	奈良・平安
12	扇田Ａ遺跡	縄文(中)
13	扇田Ｂ遺跡	奈良・平安
14	扇田Ｃ遺跡	縄文・奈良・平安
15	十王前遺跡	平安
16	町田遺跡	縄文
17	薬師平遺跡	
18	清水田遺跡	奈良・平安
19	道替遺跡	弥生(後)～古墳
20	知光田遺跡	
21	上塩後境遺跡	
22	中道遺跡	平安
23	熊野前田遺跡	平安
24	熊野八反田遺跡	平安
25	熊野神社遺跡	弥生(後)～古墳
26	梶畑Ａ遺跡	古墳・奈良・平安
27	梶畑Ｂ遺跡	古墳・奈良・平安
28	ケカチ遺跡	古墳・平安
29	坂之上・后畑遺跡	平安
30	五反田遺跡	古墳
31	石骨Ａ遺跡	縄文・平安
32	石骨Ｂ遺跡	
33	横井・大木戸遺跡	平安
34	池田遺跡	中世
35	下於曽八反田遺跡	平安
36	正泉Ａ遺跡	古墳・平安
37	正泉Ｂ遺跡	
38	檜遺跡	縄文
39	影井遺跡	縄文(中)・平安
40	久保田遺跡	平安
41	下西畑遺跡	縄文・弥生(後)～古墳
42	横堰遺跡	中世
43	受地遺跡	平安
44	林際遺跡	縄文・平安・中世
45	天神原遺跡	縄文(中)・平安
46	宮沢遺跡	縄文(中)・古墳・平安
47	宇賀屋敷遺跡	奈良・平安・中世
49	西畑Ａ遺跡	平安・中世
50	於曽屋敷遺跡	平安・中世
51	神之木遺跡	縄文(中)・古墳・平安
52	西畑Ｂ遺跡	縄文(中)・中世
53	相ノ田遺跡	縄文・古墳・平安
54	南畑遺跡	弥生
56	稲荷林遺跡	
57	宮之前遺跡	
58	清水尻遺跡	縄文・古墳・平安
59	千手院前遺跡	
61	高林遺跡	縄文(中)・中世
62	塩山前遺跡	縄文(中)
63	金山遺跡	平安・中～近世
64	青木沢遺跡	
65	番匠屋遺跡	
66	上三狐神遺跡	
68	向獄寺庭園	近世
69	向獄寺大方丈跡	近世
70	乙川戸前遺跡	縄文・平安
71	屋敷添Ａ遺跡	縄文(中)・平安
72	武士原前下遺跡	縄文・平安
73	北原遺跡	
74	諏訪神社遺跡	
75	東林遺跡	
76	屋敷添Ｂ遺跡	縄文(前)・奈良・平安
77	欠通遺跡	縄文・平安
78	天神前遺跡	縄文(前)
79	腰巻遺跡	縄文・近世
80	腰越遺跡	
81	中堀Ａ遺跡	
82	中堀Ｂ遺跡	
83	宮之下遺跡	
84	天神遺跡	
85	中原遺跡	縄文・平安
86	松葉田遺跡	縄文・平安
87	滝之上前遺跡	縄文(中)
104	梅ノ木遺跡	
105	中村遺跡	縄文
106	獅子之前遺跡	縄文(前)・弥生・平安
107	小山平南遺跡	縄文(前・中)・平安
108	札之辻東Ａ遺跡	平安
109	札之辻東Ｂ遺跡	縄文(前)・平安
110	観音堂東遺跡	縄文・平安
111	八桑田西遺跡	縄文(中)・平安
112	青田Ａ遺跡	平安
113	青田Ｂ遺跡	縄文(中)・平安
114	中原遺跡	平安
115	身洗田遺跡	平安
116	御獄前田遺跡	縄文(中)
117	洗在家遺跡	縄文(前・中)・平安
118	宮之前遺跡	平安・中世
119	安道寺遺跡	縄文(前・中)・平安
122	牛久保遺跡	
123	原中割遺跡	縄文
173	馬場平遺跡	旧石器・縄文(前)
180	切付平遺跡	
181	髪切塚	中世・近世
182	おせん稲荷塚	
183	おまん稲荷塚	
184	下萩原浅間塚	平安
185	鈴の宮塚	
189	お文殊稲荷塚	
190	梅ノ木塚	
191	栗塚稲荷塚	
192	車塚	
197	西野原煉瓦工場跡	近代
199	田草川氏屋敷	
201	西の原の堡	中世
202	深沢氏屋敷	
204	中村氏屋敷	
205	風間氏屋敷	
206	依田宮内佐衛門屋敷	
207	田辺氏屋敷	中世
208	池田氏屋敷	中世
209	宇賀屋敷	
210	於曽屋敷	
211	八代氏屋敷	
212	保坂氏屋敷	
213	於曽三郎屋敷	
214	橋爪氏屋敷	
215	古屋清佐衛門屋敷	
216	平城	
217	武田信春館跡	中世
218	村田氏屋敷	中世
219	古屋氏屋敷	
220	網野氏屋敷	
221	仏師原墨址	
222	網野新五佐衛門屋敷	
223	十組屋敷	
A	一ノ坪遺跡	縄文(前)・平安

甲州市勝沼

1	大塚南遺跡	縄文
2	大塚北遺跡	平安
3	松原遺跡	平安
4	若林遺跡	縄文
5	山富士塚	中世・近世
6	上野経塚	中世
7	天神遺跡	縄文
8	塚穴古墳	古墳
9	姥屋敷遺跡	縄文
10	下立石西遺跡	縄文・弥生
11	下立石東遺跡	縄文・弥生
12	下立石遺跡	縄文
15	上中居遺跡	
17	大門後遺跡	平安
18	坂上遺跡	平安
62	大塚経塚	
63	塚穴遺跡	
67	立正寺旧境内	近世
68	休息経塚	
69	本立寺後	近世
70	大聖院跡	近世

山梨市

83	十王堂遺跡	奈良・平安
84	中沢遺跡	平安
85	神明遺跡	奈良・平安
95	阿弥陀堂遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
96	天神原遺跡	平安
97	宮ノ西遺跡	古墳・中世
103	大橋遺跡	平安・中世
104	樋口屋敷	古墳・平安・中世
107	三ヶ所遺跡	平安・中世
109	東後屋敷遺跡	縄文・奈良・平安
123	宮ノ前遺跡	平安
171	武田金吾屋敷跡	中世
175	連方屋敷	中世

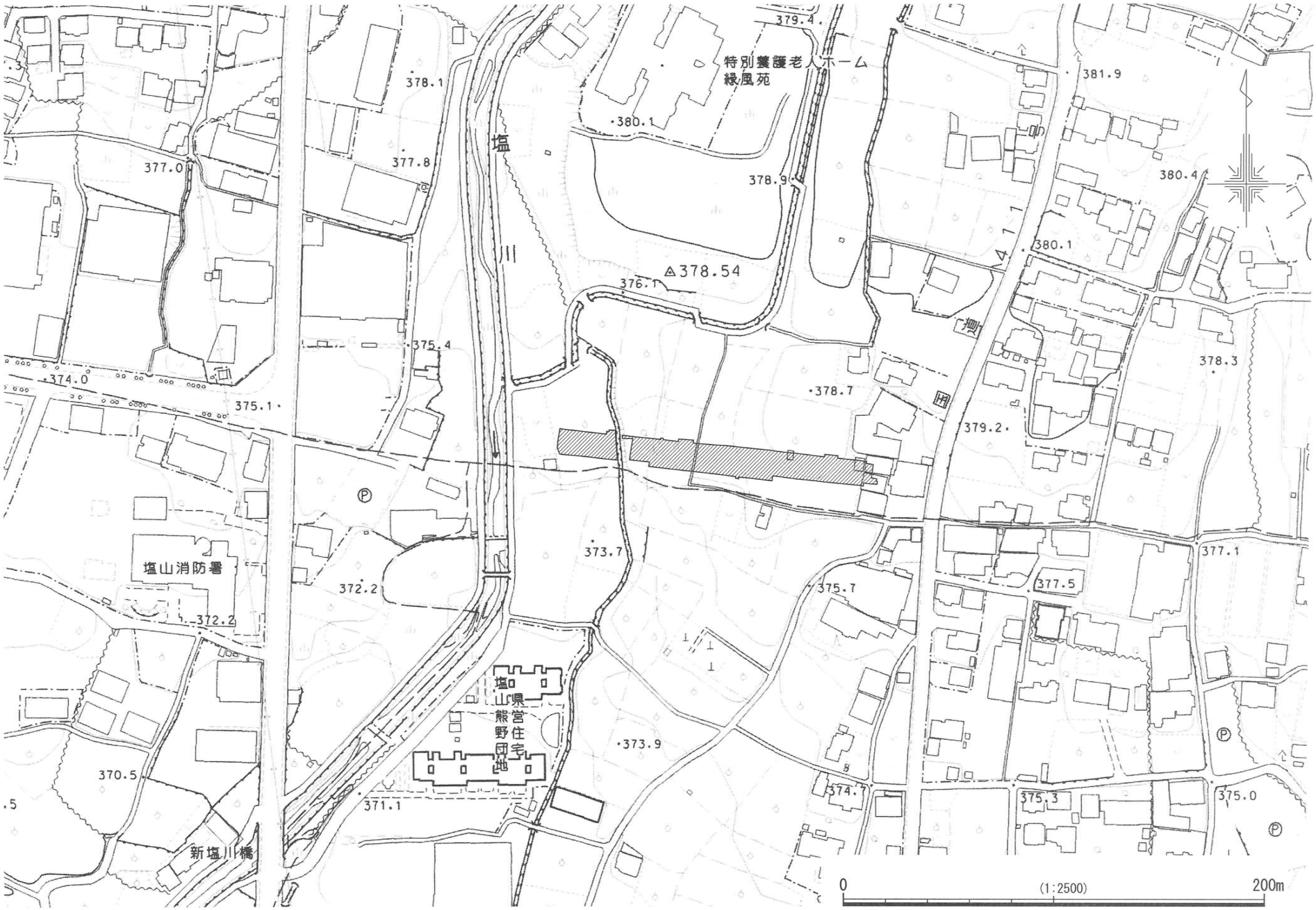

特別養護老人ホーム
緑風苑
塩
川
411
塩山消防署
新塩川橋
塩山県営熊野住宅団地
△378.54
379.4
381.9
380.1
378.1
377.8
377.0
378.9
380.4
380.1
376.1
375.4
374.0
375.1
378.7
378.3
379.2
373.7
377.1
377.5
375.7
372.2
372.2
373.9
370.5
371.1
374.1
375.3
375.0
0
(1:2500)
200m

図３　調査区の位置

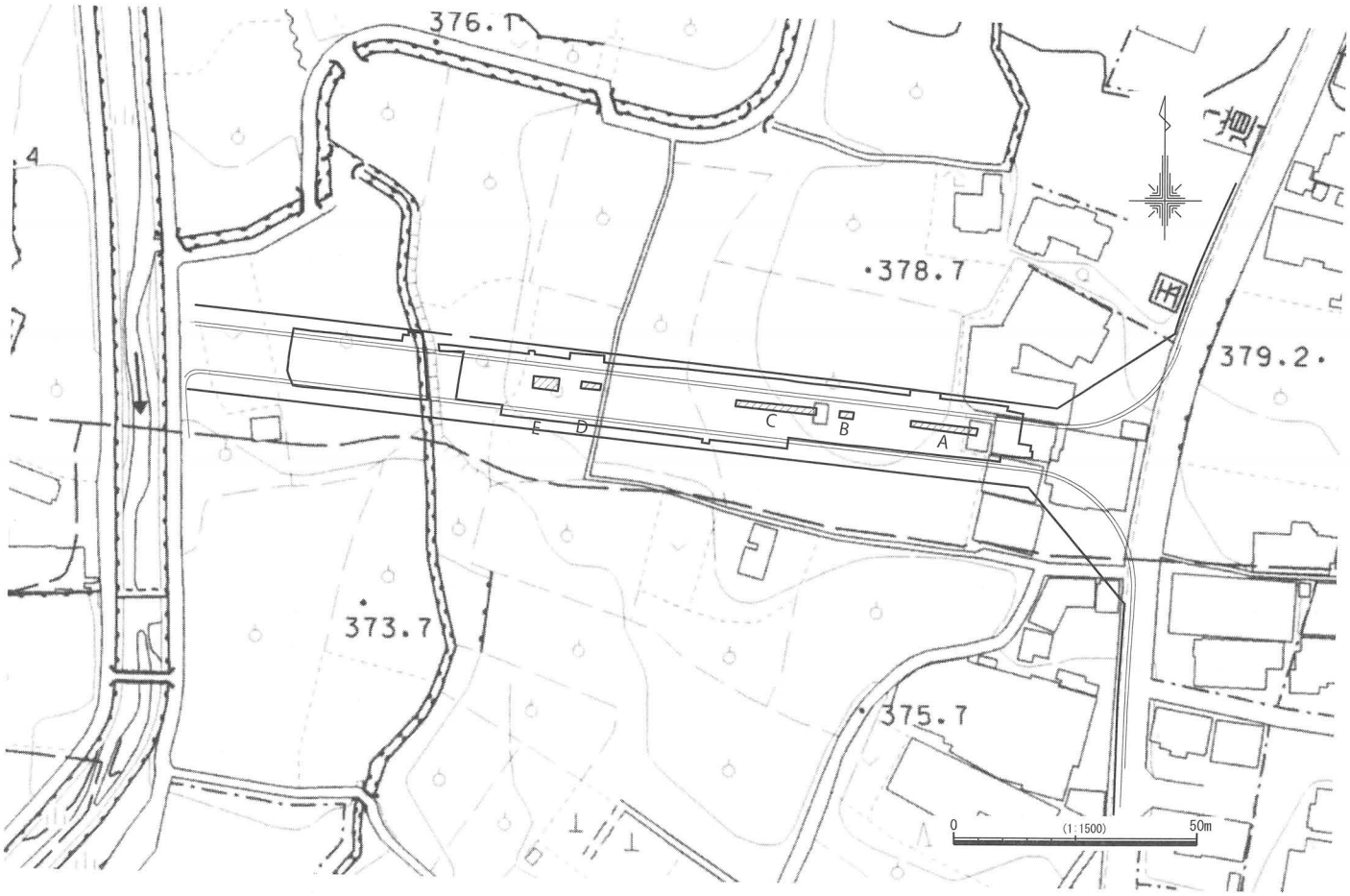


図４　試掘坑の位置

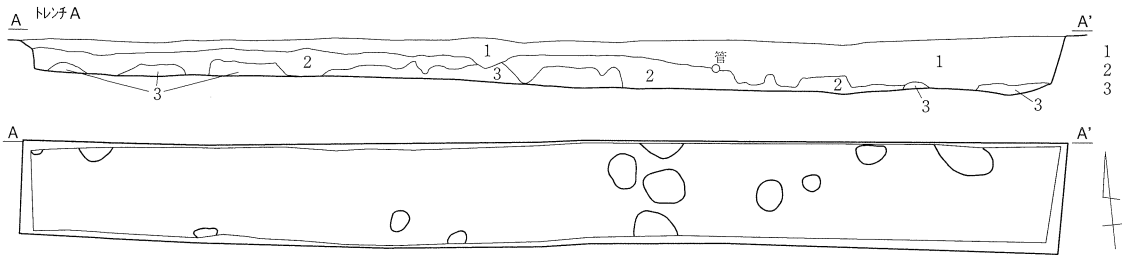
可能性もある。また方形周溝墓は竪穴群の南北、集落域周辺に存在する。また土坑などから平安末の皿類が出土している。

獅子之前遺跡は本遺跡北方に位置し、本遺跡と同じく重川右岸に位置する。縄文前期（諸磯ａ～ｂ）竪穴７軒、平安期の竪穴７軒、平安末期の竪穴１軒があり、縄文前期集落、平安時代前期を主とした竪穴群が明らかにされた。

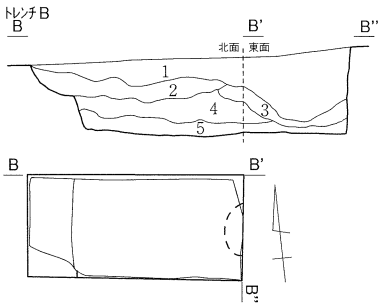
伊保水遺跡は本遺跡の北方、塩ノ山東側に位置し、平安末～中世前期の竪穴１軒のほか、土坑、溝、近世墓がある。竪穴は南東隅に焼土をもち、コーナー竈と考えられる。溝からは内耳土器とともに土師質擂鉢が出土し、内耳土器と擂鉢がともに類似した胎土であることが指摘されているが、梶畑Ｂ遺跡１号竪穴出土の内耳土器と同類の擂鉢系内耳土器（甲斐型鍋）として注目される。

五反田遺跡では古墳前期の竪穴６軒、平安時代11軒、平安末の竪穴２軒のほか、埋納遺構と称する平安末の特殊遺構１基が検出された。特殊遺構は、直径約70cmの断面ボール状のピット内に黄褐色粘土を塗り、高台皿を伏せ、土器の周囲に小さな円礫13個を置いたものである。平安末の甕には羽釜の鍔が把手状に変化した把手甕がある。

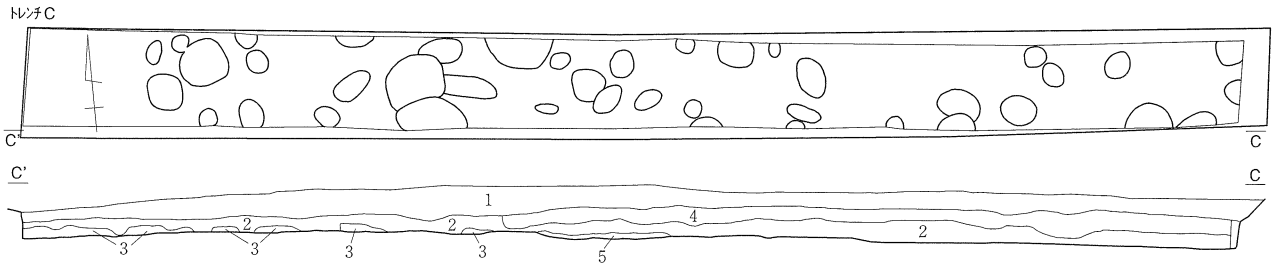
大木戸遺跡は本遺跡の東、約500mと近い位置にある。縄文前期諸磯ａ期１軒、同ｂ期10軒と多数の前期竪穴が検出された点に特色がある。そのほか縄文中期４軒、平安期21軒があり、うち平安末は13軒と多く、平安末の竪穴群の存在も見逃せない。報告書では、重川右岸での平安期の様相について次のようにまとめられている。８世紀前半～９世紀後半までは軒数が少ないが、９世紀前半代の竪穴が点々と分布し、10世紀前半にやや増加傾向にあり、この時期にピークをもつ集落もある。10世紀後半から11世紀前半には、この一帯では一挙に遺跡が増加し、次第に標高の低い地域に拠点が移動する。11世紀後半から12世紀には引き続き竪穴が多いが、その後竪穴の存在は不明となるものの、近くに鎌倉前期に起源をもつ於曽屋敷などが存在す



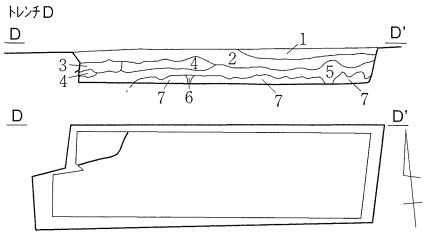
1　耕作土
2　黒褐色粘質土
3　暗赤褐色粘質土　地山。



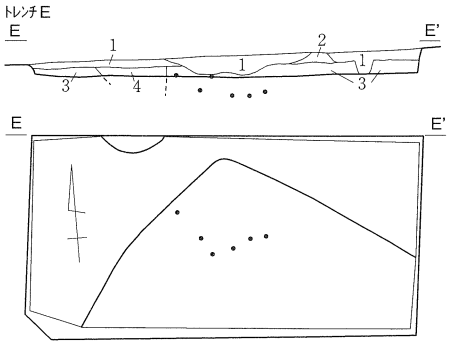
1　黒褐色粘質土
2　暗赤褐色粘質土　地山。
3　1層土＋2層土
4　暗赤褐色粘質土　白色砂粒を多く含む。
5　暗赤褐色粘質土　粒子細かい。



1　耕作土
2　黒褐色粘質土
3　暗赤褐色粘質土　地山。
4　暗赤褐色粘質土　砂を含む。2層土を多く含む。
5　暗赤褐色粘質土　2層土＋3層土。



1　耕作土
2　耕作土
3　耕作土？
4　暗褐色粘質土　砂を含む。耕作土か。
5　黒褐色粘質土
6　暗褐色粘土　4層に似るが、5層が若干入る。
7　暗赤褐色土　地山。



1　黒褐色強粘質土
2　1層土＋3層土
3　暗赤褐色粘質土　地山。
4　暗褐色粘質土　3層土を含む。

0　(1:100)　5m

図5　試掘調査トレンチA～E

ることから、中世館跡への発展が考えられる。そのほか15世紀代とみられる土坑墓３基がある。

西畑遺跡は奈良２軒、平安５軒があり、そのうち平安期の竪穴は９世紀前半～中が１軒、10世紀前半が３軒である。

下西畑遺跡は本遺跡の北東に位置し、縄文中期１軒、古墳前期３軒、奈良１軒、平安末２軒、古墳前期の方形周溝墓４基があり、古墳前期の集落は方形周溝墓と同時期の竪穴が混在する状態にある。また遺構外ではあるが、13世紀代の手捏ね系のかわらけが存在するほか、青磁蓮弁文碗片など出土している。

影井遺跡は本遺跡西側、約500mに位置する。平安末の竪穴３軒があり、いずれも11世紀後半～末に位置づけられているほか、多数の柱穴は掘立柱建物に帰属するものと考えられ、梶畑Ｂ遺跡のピット群のあり方と共通する。煮沸具には把手付甕、鍔の付いた羽釜など多彩で、11世紀末の竪穴に伴って鉄製鈴が出土するなど興味深い出土遺物がある。

これらの調査成果によれば、縄文前期、諸磯式期に大木戸遺跡、獅子之前遺跡でやや大きな集落が成立し、中期前半～後半に大木戸遺跡、下西原遺跡で数軒からなる集落が断続的に存在する。縄文時代後期から弥生時代の様相は明らかでないが、古墳前期に方形周溝墓を伴う大形集落が出現した後、古墳時代後期には低調となる。律令期には甲斐国山梨郡於曽郷に相当する地域だが、奈良～平安時代前半では遺跡数、竪穴数はやや少ない。10世紀前半から増加に転じ、平安末になると遺跡数、竪穴数は急増するものの、その後、竪穴住居は姿を消し、平地建物へと移行することから、中世前期への継続性の確認は難しくなってしまう。竪穴の代わりに目立つのが多数の柱穴で、平地式建物としての掘立柱建物が家屋の主流となり、いくつかの遺跡では白磁・青磁の破片が検出されている。

本遺跡の北側、約１km付近には旧青梅街道に面するように複数の方形館跡が知られる。その代表例に県史跡於曽屋敷がある。南北153ｍ、東西112ｍで一部二重土塁となり、『甲斐国志』では甲斐源氏加賀美遠光四男、四郎光経の居館と推測する。またJR塩山駅付近に於曽三郎屋敷とも五男光俊の屋敷とも伝える於曽館があったとされるほか、田辺氏屋敷、依田宮内左衛門屋敷、宇賀屋敷、池田氏屋敷、保坂氏屋敷など、黒川金山に関わる金山衆が構えた屋敷を中心に旧青梅街道に沿うように南北に連なる特異な歴史的景観を呈した地域といえる。

【参考文献】

山梨県教育委員会　1988『西田遺跡―第１次発掘調査報告書―』

山梨県教育委員会ほか　1991『獅子之前遺跡発掘調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第61集

山梨県教育委員会　1997『西田遺跡―第２次発掘調査報告書―』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第138集

山梨県教育委員会ほか　1997『一ノ坪遺跡発掘調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第141集

山梨県教育委員会ほか　1998『伊保水遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第149集

山梨県教育委員会ほか　2002『下西畑遺跡　西畑遺跡　影井遺跡　保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第196集

山梨県教育委員会ほか　2002『五反田遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第194集

山梨県教育委員会　2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第205集

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

まず甲州市教育委員会による試掘結果を参考にしながら、遺物包含層上面または遺構確認面まで重機により表土剥ぎを行い、廃土は調査区外へまとめた。また調査区外に光波測量機器を設置するための国家座標に基づく基準点を４か所打設した。遺構確認面は人力により鋤簾で精査を行い、竪穴住居、ピット、土坑、溝などの掘り込みを確認した。おおよその遺構分布を把握したのち調査順序を決め、近年の耕作等に伴う掘削痕は撹乱として最初に全掘し、遺構については構築が新しい順に遺構調査を開始した。

竪穴や土坑、溝などの遺構は、まずサブトレンチを入れて断面観察を行い、遺物は原位置を残しながら掘り下げ、出土状況の写真撮影後、光波測量機器およびノートパソコンによる図化システム（「遺構くん」）により３次元データを記録して遺物取り上げを行った。掘り上がった遺構は、集石、配石、炭化材などを伴う場合には、必要に応じて図化用簡易空撮システム（ポール撮影）で図化用写真を撮影した。また調査区全体がおおむね掘り上がった時点でデジカメ搭載のラジコンヘリにより全体図の図化用空中写真撮影を行い、それをベースとして個別の遺構写真、地点ごとの全体写真を合成し、全体図作成を行った。

竪穴住居跡については、床面での完掘状態のほか、貼り床面除去後の掘り方面を出すことを原則とし、床の断ち割りを行った。遺物の取り上げ№については通し番号とし、取り上げの際に遺構名、床面直上、床下、竈内といった出土状況に関する情報を入力した。竈については十文字のベルトを設定して掘り下げ、断面観察、図化を行った。また竈内土壌については炭化物を含む層を中心に土壌サンプリングを行い、炭化種実同定のための試料とした。掘立柱建物跡については、柱穴配置の列に沿って半截し、断面写真撮影、断面図を作成した。土坑については南面半截を基本として断面観察、図化を行い、完掘した。土坑よりも小さな柱穴サイズの穴はピットとし、撹乱を除くすべてに対し通し№を付けて半截したのち、深さ、土層、断面形態をチェックした。ピットの配列については、現地で空撮写真などをもとに建物としての配置を検討した。河道については一部を深掘りして土層の堆積状況、断面観察を行い、遺物が出土する面を見極めて掘り下げた。２号河道については水田面の可能性が想定されたことから半分だけ掘り下げ、底面を精査したところ、足跡状の窪みが多数みつかったことから、それらを完掘し、実測についてはポール撮影で対応した。

第２節　層　序

基本層序は特に設定していないが、調査区中央、Y=20400付近の調査区北壁に面して土層確認のための試掘坑を設け、約1.3m掘り下げた。それによれば１層－灰黄褐色土（表土）、２層－黒褐色土、３層－黒褐色土（黒味強い）、４層－暗褐色粘質土、５層－鈍い黄褐色砂質土、６層－黄褐色砂質土で、遺構確認面は４層上～中位、２・３層は包含層である。１層は約20cm、２・３層は約25cm、４層は約25cm、５・６層は60cm以上の厚さをもち、いずれの層中にも礫をほとんど含んでいない。したがって重機により１～３層分、約45cmを除去し、４層上面を人力により精査することで遺構確認を実施した。

調査区東端には１号河道が確認され、調査区東端から10m付近（Y=20460付近）より浅く下がり始め、東端から４m付近から急激に落ち込んでいる。南北方向の流路の西側の岸部分にあたり、南流する自然の流れが埋積により埋没谷化したもので、岸部分からまとまって出土した平安期の土師器類が河道形成期を示すと考えられ、その時期は10世紀前半と推定される。その河道断面の層序については第28図に示したとおりで、地表から約３m下げて断面を観察したが、最深部はさらに下層にあり確認できなかった。また１号河道下層に存在する９号竪穴断面部を地表から床面まで断面観察し、９号竪穴が河道によって浸食、埋積された状況を確認した。

調査区西端では、塩川に面した低位面にトレンチを設定し、土層堆積状況を東西方向で観察した。Ⅰ層－灰黄褐色土（表土）、Ⅱ層－暗褐色土、Ⅲ層－黒色粘土、Ⅳ層－黒褐色土、Ⅴ層－黒色粘質土と下層には黒色粘質土が堆積し、Ⅲ層からは土師器片が出土したことから、水田面の可能性が考えられた。

第3節　遺　構

調査区は幅約 14.5 m、長さ 155 mで、西寄り、Y=20355 付近に南流する流路があり、その部分で段丘状の段差を形成し、西側の塩川沿いに低地面がある。したがって流路を境に東側の長い東区と西側の低位面の西区の２区に分けられる。検出された遺構は以下のとおりである（遺構としてNo.を付けたもの）。

東区　竪穴－９軒（縄文前期１軒、古墳前期２軒、平安末５軒、中世１軒）
　　掘立柱建物跡－１棟
　　土坑－ 45基
　　ピット－ 979本
　　河道－１本
西区　河道－１本
　　溝－３本
　　ピット－１本

東区の遺構分布については、西寄り、Y=20380付近に古墳前期の竪穴２軒がまとまり、Y=20390以東一帯に平安末の竪穴が一定の間隔を開けるようにして点在する。また墓域とみられる長方形土坑、円形土坑の集中部がY=20370付近にあり、それらが平安末に位置づけられるとすれば、集落域の西端、低位面を見下ろす段丘端部に墓域が形成されたことになる。東区全体で検出された多数のピットは、建物に伴うものが大半を占めることは推定されたが、整然とした建物配置を示すものはなく、現地で柱穴の並びについて検討することが十分できなかった。したがって図面上で配列を探ったものの、確実な建物配置については捉えることができていない。

〈１号竪穴〉調査区西寄り、Y ＝ 20370付近に位置し、１号溝と接する。南北4.7m、東西3.4mの隅丸長方形プランで、東壁には緩やかにカーブした段差が付属する。主軸方向はN-18°-N。中央東壁寄りに直径約 1.3 mの不整円形の浅い落ち込みがあり、それに向うように北西隅と南西隅から直線的なごく浅い溝が連結している。また竪穴北東側、1/4 の範囲には床面直上に人頭大の礫が 2.2 × 0.9 mの範囲で堆積し、その南端を長さ 1.5 mの直線的な列石が区切る。列石は竪穴を南北に２分する中央の東側半分にあり、浅い窪みの中央に南壁と平行するように並ぶ。覆土は暗褐色土を主とし、遺物は竪穴北半にごく少量が散在する。とくに礫の間や床面上、覆土下層から出土した内耳土器片が注目されるが、これは信濃型鍋が普及する以前の甲斐型鍋で、竪穴の時期を示唆する資料である。なお周溝、柱穴、炉や竈、焼土範囲はなく、床面は平らでないことから居住施設としての竪穴住居とは考えにくい。しかし配石や溝を床下構造と推測すると、竪穴内を仕切ったうえで一部を礫敷きとし、排水機能を備えた竪穴状遺構と推測でき、配石周囲は板敷きとしていたのかもしれない。時期は内耳土器の形態から 15 世紀代と考えられる。

〈２号竪穴〉調査区西寄り、Y＝20375付近、１号竪穴東隣に位置する。6.9×5.5mの隅丸長方形で、主軸方向はN-34°-E。柱穴は721～724号ピットの４本で、壁から１～ 1.2 m間隔をあけて長方形に配置する。柱穴の直径は35～50cmで、深さは 40 ～ 60cm。柱穴で囲まれた内側の長方形の空間は、壁際よりも数cm低い土間空間となり、非常に堅い。一段高い壁際のスペースはいわゆるベッド状遺構で、南を除く東西北にコの字状に土間を取り囲む。寝間を主とする個人的な空間で、ベッド状遺構面は土間空間に較べると硬さは弱い。南東隅には724・725号ピットを囲うように長さ2.5mの弧状の土手があり、また西南隅にも723号ピットに接するように 1.3 mの範囲を囲う土手が巡り、内側に37号土坑を取り込む。柱穴の723号ピットは土手の外側に

表２　ピット一覧表

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
1	26	28	柱状	暗褐	炭化粒
2	20	17	筒	暗褐	
3	18	19	筒	暗褐	
4	22	7	鉢	暗褐	
5	24	18	筒	暗褐	
6	21	19	筒	暗褐	焼土
7	20	15	筒	暗褐	
8	17	16	筒	暗褐	
9	39	15	皿	暗褐	
10	25	11	鍋	暗褐	
11	31	40	鉢	暗褐	
12	34	38	柱状	黒褐	炭・焼土
13	29	28	筒	暗褐	
14	85	16	皿	暗褐	焼土・土器
15	29	21	鍋	暗褐	
16	35	21	鍋	暗褐	礎板礫か
17	17	17	鍋	暗褐	灰釉碗
18	33	31	柱状	暗褐	焼土
19	41	22	鉢	暗褐	
20	43	17	鉢	暗褐	
21	37	9	鍋	暗褐	
22	32	26	鍋	暗褐	炭
23	39	39	柱状	暗褐	焼土・炭
24	10	8	鉢	暗褐	
25	13	10	皿	暗褐	
26	35	18	鉢	暗褐	
27	23	7	皿	暗褐	
28	17	15	筒	黒褐	
29	31	26	鉢	暗褐	
30	43	37	柱状	黒褐	
31	20	9	鉢	暗褐	
32	113	13	皿	暗褐	
33	42	14	皿	暗褐	
34	41	12	皿	暗褐	
35	30	5	皿	暗褐	焼土・炭
36	65	8			
37	110	22	皿	暗褐	土器
38	24	21	柱状	暗褐	
39	30	14	鉢	暗褐	
40	49	19	鉢	暗褐	
41	23	22	鉢	暗褐	
42	28	10	鍋	黒褐	
43	25	13	鉢	黒褐	
44	28	10	皿	暗褐	
45	26	13	鉢	黒褐	礫
46	14	9	小鉢	黒褐	焼土
47	31	15	鉢	暗褐	撹乱か
48	31	36	筒	黒褐	炭
49	40	11	鉢	暗褐	
50	27	23	筒	黒褐	焼土
51	32	11	鉢	黒褐	
52	49	35	鍋	暗褐	
53	42	43	鍋		1竪
54	41	22	鍋	暗褐	1竪
55	28	23	筒	黒褐	
56	27	23	筒	暗褐	
57	35	16	皿	黄褐	
58	49	21	皿	黄褐	炭
59	27	18		暗褐	
60	18	21	筒	黒褐	
61	26	20	筒	暗褐	
62	55	25	鍋	暗褐	焼土・炭
63	22	14	鍋	暗褐	焼土
64	44	40		黒褐	焼土・炭
65	35	13	鉢	暗褐	
66	36	18	筒	暗褐	
67	32	16	筒	暗褐	
68	41	32	柱状	黒褐	焼土・炭
69	28	31	柱状	黒褐	焼土・炭
70	22	9	鉢	黒褐	
71	19	22	柱状	黒褐	
72	18	15	筒	黒褐	炭
73	26	21	柱状	黒褐	炭
74	21	23	柱状	黒褐	炭
75	32	18	鉢	暗褐	炭
76	21	14	鉢	暗褐	
77	14	7	小鉢	黒褐	
78	26	22	筒	灰黄	
79	48	8	皿	灰黄	
80	25	24	鉢	黒褐	
81	19	11	小鉢	黒褐	
82	18	24	鉢	黒褐	
83	42	35	筒	暗褐	
84	38	25	鉢	黒褐	
85	30	18	鉢	黒褐	
86	63	15	皿	黒褐	
87	49	29	鍋	黒褐	
88	27	12	鉢	黒褐	
89	20	14	鉢	黒褐	
90	40	25	鉢	黒褐	
91	23	20	筒	黒褐	焼土・炭
92	15	19	筒	黒褐	焼土・炭
93	14	8	鉢	暗褐	
94	32	30	筒	黒褐	
95	38	30	筒	黒褐	
96	45	37	柱状	黒褐	炭
97	29	36	柱状	黒褐	
98	24	28	柱状	黒褐	炭
99	39	47	柱状	黒褐	土器・炭
100	26	19	鉢	黒褐	
101	19	26	鉢	黒褐	
102	27	21	鉢	黒褐	
103	26	44	柱状	黒褐	焼土
104	32	37	柱状	黒褐	焼土
105	32	31	柱状	黒褐	炭
106	31	28	鉢	黒褐	
107	17	13	鉢	黒褐	
108	26	7	皿	黒褐	
109	25	17	鉢	黒褐	炭
110	22	14	鉢	黒褐	炭
111	27	38	柱状	黒褐	炭
112	33	14	筒	黒褐	
113	23	24	筒	黒褐	
114	24	6	鉢	暗褐	炭
115	35	6	柱状	黒褐	炭
116	78	17	鍋	暗褐	炭
117	26	14	筒	暗褐	
118	32	13	皿	暗褐	
119	28	16	鉢	黒褐	
120	29	23	鉢	黒褐	
121	18	16	柱状	黒褐	
122	27	28	柱状	黒褐	土器
123	14	20	鉢	黒褐	
124	29	17	鉢	暗褐	
125	30	24	柱状	黒褐	炭
126	30	19	筒	黒褐	
127	38	12	鉢	黒褐	焼土・炭
128	22	9	鉢	黒褐	
129	16	10	鉢	黒褐	
130	20	10	鉢	黒褐	炭
131	34	4	鉢	黒褐	
132	42	26	柱状	黒褐	
133	21	17	筒	黒褐	
134	42	13	鍋	黒褐	
135	41	16	鉢	黒褐	
136	15	10	筒	黒褐	
137	16	22	柱状	黒褐	
138	24	6	鉢	暗褐	焼土
139	15	12	柱状	黒褐	
140	48	24	柱状	黒褐	炭
141	15	12	筒	黒褐	
142	36	7	皿	黒褐	
143	26	12	鉢	黒褐	炭
144	20	6	鉢	暗褐	
145	28	14	柱状	暗褐	
146	25	17	鉢	暗褐	
147	23	23	柱状	黒褐	
148	15	10	筒	黒褐	
149	39	26	鍋	暗褐	
150	24	20	柱状	黒褐	
151	50	23	筒	黒褐	
152	22	20	柱状	黒褐	
153	41	6	鉢	黒褐	
154	65	15	皿	黒褐	
155	27	11	鉢	黒褐	
156	23	6	鍋	暗褐	
157	24	10		暗褐	炭・土器
158	16	12	鉢	黄褐	
159	52	22	鍋	暗褐	
160	19	8	鉢	暗褐	
161	30	12	鉢	暗褐	
162	21	14	柱状	黒褐	
163	38	12			
164	41	30	柱状	黒褐	
165	57	6	皿	黒褐	
166	56	9	皿	黒褐	
167	36	11	鉢	黒褐	
168	64	15	皿	黒褐	
169					不明
170					不明
171	15	11	筒	黒褐	
172	35	8	皿	黒褐	
173	30	7	鉢	黒褐	
174	57	15	皿	黒褐	
175	27	10	鉢	黒褐	
176	28	14	筒	黒褐	
177	22	20	筒	黒褐	
178	24	15	筒	黒褐	
179	35	12	皿	黒褐	
180	49	14	鉢	黒褐	
181	34	10	鉢	黒褐	
182	27	7	皿	黒褐	
183	28	20			
184	23	12	筒	黒褐	炭・焼土
185	55	49			3竪
186	49	50			3竪
187	57	21	鍋	暗褐	3竪、炭
188	43	25	鉢	黒褐	3竪
189	23	25	柱状	黒褐	3竪、炭・焼土
190	22	11	筒	黒褐	3竪、炭
191	64	38			
192	69	48			3竪
193	37	15	鉢	黒褐	3竪
194	38	21	鉢	黒褐	3竪
195	24	11	鉢	黒褐	
196	56	19	皿	黒褐	
197	37	15	鉢	黒褐	
198	41	22	皿	黒褐	
199	43	17	鉢	黒褐	
200	43	24	鉢	黒褐	
201	47	28	鍋	黒褐	
202	67	27	鉢	暗褐	
203	27	11	鉢	黒褐	焼土
204	48	15	鉢	黒褐	
205	44	21	鉢	黒褐	焼土
206	43	14	鉢	黒褐	
207	35	19	鉢	黒褐	
208	29	10	鉢	黒褐	
209	45	22	鍋	黒褐	
210	30	17	鉢	黒褐	
211	17	11	鉢	黒褐	
212	22	17	柱状	黒褐	
213	37	12	皿	黒褐	
214	52	18	鉢	黒褐	
215	41	15	鉢	黒褐	
216	27	12	鉢	黒褐	
217	38	14	皿	黒褐	
218	30	19	筒	黒褐	
219	54	23	鉢	黒褐	土器片
220	50	27	鉢	黒褐	
221	51	35		黒褐	
222	50	20	皿	黒褐	
223	24	13	鉢	黒褐	
224	52	18	鉢	黒褐	礫
225	44	13	鉢	黒褐	
226	56	29	鉢	黒褐	縄文土器
227	56	35	柱状	黒褐	
228	51	26	鍋	黒褐	
229	57	25	鉢	黒褐	
230	41	18	鉢	黒褐	
231	29	16	鉢	黒褐	
232	30	18	鉢	黒褐	
233	54	32	鉢	黒褐	
234	31	16	鉢	黒褐	
235	27	23	鉢	黒褐	
236	38	14	鉢	黒褐	
237	33	16	鉢	黒褐	
238	62	26	鍋	黒褐	
239	25	19	鉢	黒褐	
240	36	19	鉢	黒褐	
241	40	14		黒褐	焼土・炭
242	40	22	鉢	黒褐	
243	22	14	鉢	黒褐	
244	23	11	鉢	黒褐	
245	40	24	柱状	黒褐	
246	51	19	皿	黒褐	焼土

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
247	37	18	鍋	黒褐	
248	18	16	小鉢	暗褐	
249	44	31	柱状	黒褐	
250	56	32	鉢	黒褐	
251	32	19	鉢	黒褐	
252	47	20	鍋	黒褐	
253	38	15	鉢	黒褐	
254	30	9	皿	黒褐	
255	32	9	皿	黒褐	
256	41	19	鉢	黒褐	
257	84	31	鉢	黒褐	
258	51	28	鉢	黒褐	
259	100	36	鉢	黒褐	
260	101	40	鉢	黒褐	
261	53	28	柱状	黒褐	
262	39	18	鍋	黒褐	
263	47	19	皿	黒褐	
264	28	17	鉢	黒褐	
265	38	19	鉢	黒褐	
266	47	12	鉢	黒褐	
267	19	15	小鉢	黒褐	
268	44	17	鉢	黒褐	
269	43	21	鉢	黒褐	
270	39	16	鉢	黒褐	
271	33	20	鉢	黒褐	土器
272	52	20	鍋	黒褐	
273	32	17	皿	黒褐	
274	40	19	鉢	黒褐	
275	38	32	鉢	黒褐	
276	61	21	皿	黒褐	
277	53	25	鉢	黒褐	
278	48	25	鉢	黒褐	
279	46	25	鉢	黒褐	
280	21	10	鉢	暗褐	
281	17	12	小鉢	黒褐	
282	30	34	鉢	暗褐	
283	34	23	柱状	暗褐	
284	21	18	鉢	暗褐	
285	30	16	鉢	暗褐	
286	33	15	鉢	黒褐	
287	52	19	鉢	暗褐	
288	57	25	鉢	黒褐	
289	22	7	鉢	暗褐	
290	56	26	柱状	黒褐	
291	55	26	鉢	黒褐	
292	40	21	鉢	黒褐	
293	42	12	鉢	黒褐	
294	34	18	鉢	黒褐	
295	38	18	鉢	黒褐	
296	72	22	皿	黒褐	撹乱か
297	46	17	鉢	黒褐	
298	54	18	鉢	黒褐	
299	39	22	鉢	黒褐	
300	60	11	鉢	黒褐	
301	35	18	鉢	黒褐	
302	75	25	鍋	黒褐	炭
303	44	29	鉢	黒褐	
304	58	26	鉢	黒褐	
305	21	11	鉢	黒褐	
306	31	15	鉢	黒褐	
307	36	13	鉢	黒褐	
308	28	14	鉢	黒褐	
309	83	45	柱状	黒褐	
310	38	24	鉢	黒褐	
311	55	19	鉢	黒褐	
312	46	18	鉢	黒褐	
313	65	23	鉢	黒褐	
314	22	7	小鉢	黒褐	
315	22	11	鉢	黒褐	
316	40	15	鉢	黒褐	焼土・礫
317	17	10	鉢	黒褐	
318	36	13	鉢	黒褐	焼土
319	24	19	鉢	黒褐	
320	22	8	鉢	黒褐	
321	20	11	鉢	黒褐	
322	32	24	筒	暗褐	
323	18	17	鉢	黒褐	
324	20	8	鉢	黒褐	
325	41	26	鉢	黒褐	
326	44	47	鉢	黒褐	
327	30	53	柱状	黒褐	
328	50	19	鉢	黒褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
329	26	15	鉢	黒褐	
330	42	18	鉢	黒褐	炭
331	26	16	鉢	黒褐	
332	20	15	鉢	暗褐	
333	28	12	鉢	黒褐	
334	40	29	柱状	黒褐	
335	86	25	皿	黒褐	
336	25	12	鉢	黒褐	
337	28	12	鉢	黒褐	
338	52	17	鉢	黒褐	炭
339	25	10	鉢	黒褐	
340	28	12	皿	黒褐	
341	46	15	皿	黒褐	
342	18	12	鉢	黒褐	
343	47	14	鍋	黒褐	
344	29	12	鍋	黒褐	
345	77	32	鍋	黒褐	焼土
346	67	30	鍋	黒褐	
347	45	18	鉢	黒褐	
348	34	17	鉢	黒褐	
349	72	25	鍋	暗褐	
350	25	12	筒	黒褐	
351	33	23	鉢	黒褐	
352	35	20	鉢	黒褐	
353	52	21	鉢	黒褐	
354	49	26	鉢	黒褐	
355	31	11	皿	黒褐	
356	40	14	鉢	黒褐	
357	58	19	皿	暗褐	
358	37	20	鉢	黒褐	
359	55	16	皿	暗褐	
360	29	13	鉢	黒褐	
361	36	14	鉢	暗褐	
362	29	8	鉢	暗褐	
363	16	14	鉢	黒褐	
364	16	7	鉢	黒褐	
365	14	10	鉢	黒褐	
366	44	15	鉢	黒褐	
367	38	14	鉢	黒褐	
368	52	19	鉢	黒褐	
369	34	12	鉢	黒褐	
370	24	12	鉢	暗褐	
371	44	9	鉢	暗褐	
372	32	7	鉢	黒褐	
373	25	8	鉢	黒褐	
374	31	10	鉢	黒褐	
375	57	12	鉢	暗褐	
376	13	14	鉢	黒褐	
377	49	20	鉢	黒褐	
378	64	22	鉢	黒褐	
379	100	35	鉢	黒褐	
380	44	19	鉢	黒褐	
381	51	23	鉢	黒褐	
382	61	34	柱状	黒褐	
383	64	46	柱状	黒褐	
384	18	7	小鉢	黒褐	
385	22	11	鉢	黒褐	
386	35	18	鉢	黒褐	
387	48	13	鉢	黒褐	土器
388	38	16	鉢	黒褐	
389	51	24	鉢	黒褐	
390	28	23	皿	黒褐	
391	41	44	柱状	黒褐	5溝下
392	61	30	鍋	黒褐	
393	27	10	鉢	黒褐	
394	33	7	皿	暗褐	
395	82	24	鉢	黒褐	
396	117	26	鉢	黒褐	土器
397	80	20	鉢	黒褐	
398	46	16	鍋	黒褐	5溝下
399	40	17	鉢	暗褐	
400	33	33	筒	黒褐	焼土
401	62	29	鉢	黒褐	
402	51	22	鉢	黒褐	
403	65	20	鉢	黒褐	
404	83	26	皿	黒褐	
405	61	40	鉢	黒褐	
406	29	9	皿	暗褐	
407	32	21	鉢	黒褐	
408	34	13	皿	黒褐	
409	37	15	鉢	黒褐	
410	27	11	鉢	黒褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
411	15	10	小鉢	黒褐	
412	30	11	鉢	黒褐	
413	32	10	鉢	黒褐	
414	21	14	鉢	黒褐	
415	59	12	皿	黒褐	
416	21	7	鉢	暗褐	
417	24	16	鉢	黒褐	
418	55	11	皿	黒褐	
419	90	17	皿	黒褐	
420	40	11	皿	黒褐	
421	28	10	鉢	暗褐	
422	16	6	小鉢	暗褐	
423	75	19	鉢	黒褐	
424	40	28	鉢	黒褐	
425	31	23	鉢	黒褐	
426	53	30	鉢	黒褐	
427	33	12	鉢	黒褐	
428	50	16	皿	暗褐	
429	21	7	鉢	黒褐	
430	22	12	鉢	暗褐	
431	14	7	小鉢	黒褐	
432	23	9	皿	暗褐	
433	59	21	皿	暗褐	
434	45	27	柱状	黒褐	
435	56	37	柱状	黒褐	
436	37	28	皿	黒褐	
437	60	26	柱状	黒褐	
438	118	25	皿	暗褐	
439	31	20	鉢	黒褐	焼土
440	64	9	皿	黒褐	撹乱
441	35	4	皿	黒褐	
442	42	19	鉢	黒褐	柱痕状
443	28	15	鉢	黒褐	
444	42	16	皿	黒褐	
445	22	9	鉢	暗褐	
446	21	10	鉢	暗褐	
447	25	10	鉢	黒褐	
448	15	12	小鉢	黒褐	
449	24	7	鉢	黒褐	
450	39	23	鉢	黒褐	
451	100	27	鉢	黒褐	
452	37	44	鉢	黒褐	
453	39	26	皿	黒褐	
454	60	40	柱状	黒褐	
455	50	19	鉢	黒褐	
456	85	26	柱状	黒褐	
457	28	12	鉢	黒褐	
458	25	19	筒	黒褐	
459	31	14	鉢	暗褐	
460	48	26	鉢	暗褐	
461	51	38	筒	黒褐	
462	44	15	鉢	暗褐	
463	37	15	鉢	黒褐	
464	57	10	鉢	黒褐	
465	25	14	鉢	黒褐	
466	43	20	鉢	黒褐	
467	70	11	鉢	暗褐	
468	58	18	皿	黒褐	
469	36	25	柱状	黒褐	
470	60	52	鉢	黒褐	
471	37	64	鉢	黒褐	
472	68	19	鉢	黒褐	
473	66	9	皿	暗褐	
474	61	32	鉢	黒褐	
475	44	10	鉢	黒褐	
476	20	7	鉢	暗褐	
477	56	20	鉢	黒褐	
478	16	19	鉢	黒褐	
479	14	6	鉢	黒褐	
480	19	4	小鉢	黒褐	
481	21	11	鉢	黒褐	
482	78	10	皿	暗褐	
483	21	13	鉢	灰褐	撹乱か
484	56	18	皿	暗褐	
485	24	9	鉢	黒褐	
486	45	23	鉢	黒褐	
487	18	7	小鉢	黒褐	
488	24	11	鉢	黒褐	
489	133	33	鍋	暗褐	
490	32	11	鉢	暗褐	
491	37	20	鉢	黒褐	
492	26	17	鉢	暗褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
493	94	33	鍋	暗褐	
494	49	26	鍋	暗褐	
495	22	11	小鉢	黒褐	
496	36	10	鉢	黒褐	土器
497	38	8	鉢	黒褐	
498	31	18	筒	黒褐	炭
499	40	13	鉢	暗褐	
500	34	27	鉢	黒褐	溝状
501	48	16	鉢	黒褐	
502	15	9	小鉢	暗褐	
503	28	12	鉢	黒褐	
504	41	11	鉢	暗褐	
505	36	18	鉢	暗褐	
506	49	18	筒	暗褐	
507	24	7	鉢	暗褐	
508	32	10	鉢	黒褐	
509	42	17	鉢	黒褐	
510	34	17	鉢	黒褐	
511	38	13	鉢	暗褐	
512	46	21	鉢	黒褐	
513	34	14	鉢	黒褐	
514	37	24	鉢	黒褐	土器
515	23	10	鉢	暗褐	
516	37	26	鉢	黒褐	
517	40	12	鉢	暗褐	
518	20	11	鉢	黒褐	
519	34	10	鉢	黒褐	
520	23	10	鉢	黒褐	
521	18	6	小鉢	黒褐	
522	40	17	鉢	黒褐	
523	32	8	皿	黒褐	
524	45	25	鉢	暗褐	焼土
525	32	17	鉢	黒褐	
526	80	33	鍋	黒褐	
527	54	24	鉢	暗褐	
528	105	24	皿	暗褐	
529	31	15	鉢	暗褐	
530	21	10	鉢	暗褐	
531	30	15	鉢	暗褐	
532	17	19	筒	黒褐	
533	20	26	筒	黒褐	
534	16	13	小鉢	暗褐	
535	40	41	柱状	暗褐	
536	38	11	鉢	暗褐	溝状
537	41	11	皿	暗褐	
538	21	17	筒	黒褐	
539	32	11	鉢	黒褐	
540	40	22	鉢	黒褐	
541	25	8	鉢	暗褐	
542	28	19	鉢	黒褐	
543	36	8	鉢	黒褐	
544	47	24	鉢	黒褐	
545	42	18	鉢	暗褐	
546	25	32	鉢	暗褐	
547	18	6	小鉢	暗褐	
548	30	22	鉢	黒褐	
549	72	27	鉢	黒褐	
550	41	52	柱状	黒褐	焼土・炭、6竪
551	40	45		黒褐	6竪、炭
552	42	21		灰褐	6竪、撹乱
553	34	12		黒褐	焼土・炭、6竪
554	27	13		暗褐	炭
555	42	12		暗褐	6竪
556	22	8	鉢	暗褐	
557	38	17	筒	黒褐	
558	36	14	筒	黒褐	
559	66	14	皿	黒褐	焼土
560	54	31	柱状	黒褐	
561	35	11	小鉢	暗褐	
562	20	14	小鉢	黒褐	
563	27	8	鉢	暗褐	
564	30	15	鉢	暗褐	
565	62	23	鉢	黒褐	
566	38	23	鉢	暗褐	
567	31	11	鉢	暗褐	
568	48	14	鉢	暗褐	
569	18	10	小鉢	暗褐	
570	128	65	筒	暗褐	
571	108	51	鍋	暗褐	礫
572	17	9	小鉢	暗褐	
573	64	30	鉢	黒褐	
574	85	20	鉢	暗褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
575	49	25	鉢	黒褐	
576	60	25	鉢	暗褐	
577	20	9	小鉢	暗褐	
578	32	18	鉢	暗褐	
579	29	14	皿	暗褐	
580	23	15	鉢	黒褐	
581	108	37	鉢	暗褐	
582	93	36	鉢	暗褐	
583	27	19	皿	黒褐	
584	68	23	皿	黒褐	
585	53	31	皿	暗褐	
586	24	50	鉢	暗褐	
587	29	29	鉢	黒褐	
588	33	23	鉢	暗褐	
589	62	43	鉢	暗褐	
590	43	24	鉢	暗褐	
591	26	16	鉢	暗褐	
592	55	45	鉢	黒褐	
593	26	12	小鉢	暗褐	
594	42	18	鉢	暗褐	
595	30	11	小鉢	暗褐	
596	19	10	小鉢	暗褐	
597	19	12	小鉢	暗褐	
598	37	25	鉢	黒褐	
599	54	26	鉢	暗褐	
600	37	11	鉢	暗褐	
601	20	17	小鉢	黒褐	
602	44	20	皿	黒褐	
603	12	23	小鉢	黒褐	
604	22	10	小鉢	黒褐	
605	24	15	小鉢	暗褐	
606	36	10	鉢	黒褐	
607	24	10	小鉢	黒褐	
608	19	5	鉢	暗褐	
609	17	9	小鉢	暗褐	
610	17	9	小鉢	暗褐	
611	55	41	筒	黒褐	
612	21	8	小鉢	暗褐	
613	28	14	皿	暗褐	
614	40	9	皿	暗褐	
615	87	39	鍋	黒褐	
616	46	23	鉢	黒褐	
617	29	22	皿	黒褐	
618	50	13	皿	暗褐	
619	59	28	鉢	暗褐	
620	41	16	鉢	暗褐	
621	32	20	鉢	黒褐	
622	64	23	小鉢	黒褐	
623	50	9	鉢	黒褐	
624	23	7	小鉢	暗褐	
625	28	17	鉢	黒褐	
626	23	7	小鉢	暗褐	
627	24	10	小鉢	暗褐	
628	21	7	小鉢	暗褐	
629	36	16	鉢	黒褐	炭
630	50	15	皿	黒褐	
631	26	11	小鉢	暗褐	
632	74	26	鉢	黒褐	
633	58	23	鉢	黒褐	
634	35	17	鉢	黒褐	
635	27	13	小鉢	暗褐	
636	36	32	皿	黒褐	
637	45	7	皿	暗褐	
638	34	13	鉢	暗褐	
639	28	14	小鉢	暗褐	
640	56	36	鉢	黒褐	
641	60	24	鉢	黒褐	
642	73	36	鉢	黒褐	S字甕片
643	58	23	鉢	黒褐	炭
644	20	38	鉢	暗褐	
645	34	41	鉢	暗褐	
646	19	11	小鉢	暗褐	
647	28	18	鉢	黒褐	
648	22	11	小鉢	黒褐	
649	30	15	鉢	暗褐	
650	19	12	小鉢	暗褐	
651	20	8	小鉢	暗褐	
652	19	16	小鉢	暗褐	
653	47	42	柱状	暗褐	焼土
654	24	10	皿	暗褐	4竪
655	33	30	柱状	暗褐	4竪
656	47	38	鍋	暗褐	4竪

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
657	28	15	鉢	黒褐	
658	36	30		黒褐	焼土・炭
659	29	21	皿	暗褐	
660	62	16	溝状	暗褐	溝状、焼土
661	20	12	小鉢	黒褐	
662	23	13	小鉢	黒褐	
663	20	18	小鉢	黒褐	
664	44	17	鉢	黒褐	
665	43	12	鉢	黒褐	
666	77	15	鉢	暗褐	
667	16	9	小鉢	黒褐	
668	16	7	小鉢	黒褐	
669	34	12	小鉢	暗褐	
670	34	13	鉢	暗褐	
671	21	14	小鉢	黒褐	
672	33	8	鉢	暗褐	
673	58	18	鉢	黒褐	溝状
674	59	15	鉢	黒褐	
675	26	7	小鉢	暗褐	
676	34	13	小鉢	暗褐	
677	30	10	小鉢	黒褐	
678	40	14	鉢	暗褐	
679	17	8	小鉢	黒褐	
680	32	9	鉢	黒褐	
681					205と同一
682	25	17	鉢	黒褐	
683	29	20	鉢	黒褐	溝状
684	20	9	鉢	黒褐	
685	14	17	鉢	暗褐	
686	25	21	鉢	黒褐	
687	69	28	柱状	黒褐	土器
688	23	10	皿	黒褐	焼土・炭
689	45	13	皿	暗褐	
690	26	11	鉢	黒褐	
691	24	11	鉢	黒褐	
692	35	12	鉢	黒褐	
693	32	15	鉢	暗褐	
694	45	18	鉢	黒褐	
695	35	31	鉢	暗褐	
696	26	14	小鉢	黒褐	
697	12	22	筒	黒褐	
698	34	12	皿	暗褐	
699	20	6	皿	黒褐	
700	30	18	鉢	黒褐	溝状
701	56	21	鉢	暗褐	4竪
702	56	19		黒褐	
703	17	20	鉢	黒褐	
704	19	9	鉢	暗褐	
705	60	34		暗褐	
706	58	20		暗褐	
707	27	15		暗褐	
708	30	9		黒褐	
709	21	10		黒褐	
710	23	22	筒	黒褐	
711	15	17	筒	黒褐	
712	230	17	皿	黒褐	
713	15	18	筒	黒褐	
714	21	20	筒	黒褐	
715	23	20	筒	黒褐	
716	28	29	柱状	黒褐	
717	20	10	鉢	黒褐	
718	27	15	筒	黒褐	
719	35	8	鉢	暗褐	
720	42	39	鉢	暗褐	焼土
721	38	22	柱状		2竪
722	53	45	柱状		2竪
723	35	22	柱状		2竪
724	37	20	柱状		2竪
725	47	41	鍋		2竪、貯蔵
726					不明
727					不明
728	20	10	鉢	黒褐	
729	34	13	鉢	暗褐	
730	42	33	鉢	黒褐	
731	54	24	鉢	黒褐	
732	57	11	皿	暗褐	
733	43	18	筒	黒褐	
734	36	12	鉢	黒褐	
735	20	14	鉢	黒褐	
736	51	23	鉢	黒褐	
737	44	16	鉢	黒褐	溝状
738	29	21	鉢	黒褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
739	59	53	柱状	黒褐	炭
740	41	24	鉢	黒褐	
741	46	19	鉢	黒褐	
742	31	15	鉢	暗褐	
743	42	13	皿	黒褐	
744	60	23	皿	暗褐	
745	35	12	皿	暗褐	
746	29	20	皿	暗褐	
747	36	24	鉢	黒褐	土器
748	62	49	皿	暗褐	
749	45	28	鉢	黒褐	土器
750	44	18	鉢	黒褐	焼土
751	41	15	鉢	黒褐	
752	45	27	溝状	黒褐	土器
753	45	19	鍋	暗褐	焼土
754	35	7	皿	暗褐	焼土
755	23	22	柱状	暗褐	焼土
756	35	7	鉢	暗褐	焼土・炭
757	22	14	皿	黒褐	
758	19	93	柱状	黒褐	
759	36	6	皿	暗褐	
760	34	19	鉢	暗褐	
761	40	13	鉢	黒褐	土器
762	30	9	鉢	黒褐	
763	27	16	鉢	黒褐	
764	44	24	柱状	黒褐	45土
765	58	22	鉢	黒褐	
766	34	14	鉢	黒褐	
767	29	15	柱状	黒褐	
768	55	17	鍋	黒褐	
769	23	17	鉢	黒褐	
770	30	11	鉢	黒褐	
771	127	27	鉢	黒褐	
772	23	21	小鉢	暗褐	
773	43	8	鉢	黒褐	
774	23	15	鉢	暗褐	
775	28	20		灰黄褐	撹乱
776	36	20	鉢	黒褐	土器
777	32	22	鉢	黒褐	
778	47	15	鉢	黒褐	炭
779	50	24	鉢	黒褐	炭
780	35	8	鉢	暗褐	
781	42	12	鉢	黒褐	
782	47	13	鉢	暗褐	
783	88	9	皿	暗褐	
784	23	7	鉢	黒褐	焼土
785	36	21	鉢	黒褐	
786	23	14	小鉢	黒褐	
787	69	8	皿	暗褐	
788	38	19	鉢	黒褐	
789	27	9	鉢	黒褐	
790	31	19	鉢	黒褐	
791	32	17	鉢	黒褐	
792	41	25	鉢	黒褐	
793	26	9	鉢	暗褐	炭・土器
794	42	26		黒褐	
795	76	34		黒褐	炭・土器
796	44	19	鉢	暗褐	
797	14	15	鉢	黒褐	
798	54	10	皿	黒褐	
799	25	6	皿	暗褐	
800	57	11	鉢	黒褐	
801	53	8	鍋	暗褐	土器
802	62	22	鍋	暗褐	土器
803	55	14	皿	黒褐	
804	46	11	皿	黒褐	
805	25	19	鉢	黒褐	
806	37	11	鉢	暗褐	
807	25	9	鉢	黒褐	
808	31	13	鉢	暗褐	
809	85	18	鍋	黒褐	
810	34	15	鉢	黒褐	
811	28	12	鉢	黒褐	
812	47	20	鉢	黒褐	白磁
813	74	30	皿	黒褐	炭
814	70	26	皿	黒褐	炭
815	34	19	鉢	暗褐	
816	34	17	鉢	黒褐	
817	73	25	鉢	黒褐	
818	35	17	鉢	黒褐	
819	57	22	柱状	暗褐	
820	41	17	鉢	暗褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
821	33	18	鉢	黒褐	
822	46	18	鉢	黒褐	焼土
823	58	22	鍋	黒褐	焼土・炭
824	58	25		暗褐	
825	50	34	柱状	黒褐	焼土
826	48	22	鉢	黒褐	
827	25	82	鉢	黒褐	
828	34	24	鉢	黒褐	
829	32	25	鉢	黒褐	
830	45	17	鉢	黒褐	
831	29	36	鉢	黒褐	
832	55	38	鉢	黒褐	
833	65	26	鍋	黒褐	炭
834	25	20	鉢	黒褐	
835	71	41	皿	黒褐	
836	62	20	鉢	黒褐	
837	90	76	柱状		1掘立
838	114	59	柱状		1掘立
839	112	57	柱状		1掘立
840	25	10	小鉢	黒褐	
841	77	15	鉢	黒褐	
842	65	18	皿	黒褐	
843	52	8	皿	暗褐	焼土・炭
844	88	36	皿	黒褐	
845	75	37	鉢	黄褐	
846	65	19	皿	黒褐	
847	43	21	鉢	黒褐	
848	43	27	柱状	黒褐	炭
849	26	17	柱状	黒褐	
850	23	16	小鉢	黒褐	
851	52	287	鉢	黒褐	
852	35	26	柱状	黒褐	
853	32	27	柱状	黒褐	
854	34	38	柱状	黒褐	
855	56	19	鉢	黒褐	
856	100	26		黒褐	土器
857	34	57			9竪
858	21	47	柱状	暗褐	9竪、炭
859					欠番
860	38	19	鉢	暗褐	
861	42	6	皿	黒褐	焼土・土器
862	24	15	柱状	黒褐	焼土
863	72	18	皿	暗褐	
864	35	15	鉢	黒褐	
865	58	20	皿	黒褐	土器
866	31	13	皿	黒褐	焼土
867	74	17	皿	黒褐	焼土
868	65	32	柱状	黒褐	土器
869	52	43			
870	51	15			
871	54	34		暗褐	焼土・炭、8竪
872	44	29		暗褐	8竪、炭
873	23	40		黒褐	8竪、炭
874	25	12		黒褐	8竪、炭
875	31	18	鉢	暗褐	焼土・炭
876	43	22	鉢		炭
877	93	35			
878	54	28			
879	36	12			
880	55	37	鉢	暗褐	焼土・炭
881	97	38	鍋	黒褐	
882	41	22	柱状	黒褐	
883	20	9	小鉢	黒褐	
884	28	12	筒	黒褐	
885	19	11	小鉢	暗褐	
886	37	10	鉢	黒褐	
887	45	10	皿	黒褐	
888	189	9			
889	28	16	柱状	黒褐	
890	24	16	柱状	黒褐	
891	22	15	小鉢	暗褐	
892	45	13	鉢	黒褐	
893	42	16	鉢	黒褐	焼土
894	32	9	鉢	黒褐	
895	67	22	鍋	黒褐	焼土・炭
896	35	10	鉢	黒褐	
897	89	29		黒褐	
898	45	13		黒褐	
899	25	45	鉢	黒褐	
900	123	62			縄文
901	27	36	柱状	黒褐	
902	50	30	筒	黒褐	

No.	径cm	深cm	断面	土層	覆土
903	30	25	鉢	黒褐	
904	26	9	小鉢	暗褐	
905	26	10	小鉢	暗褐	
906	17	8	小鉢	暗褐	
907	42	16	鉢	暗褐	
908	36	16		暗褐	
909	28	15		暗褐	
910	27	10		暗褐	
911	48	10		暗褐	
912	78	19			
913	32	9	鉢	黒褐	
914	81	46			1掘立
915	45	20	鍋	暗褐	
916	42	20	鉢	暗褐	
917	29	17	鉢	暗褐	
918	20	10	鉢	暗褐	撹乱か
919	23	20	鉢	黒褐	
920	21	13	小鉢	暗褐	
921	34	15	鉢	暗褐	
922	35	14	鉢	黒褐	
923	20	7	小鉢	暗褐	
924	24	11	小鉢	黒褐	
925	58	26	鉢	黒褐	
926	76	26	鉢	黒褐	
927	42	14	鉢	黒褐	焼土
928	46	15	皿	暗褐	
929	34	7	鉢	暗褐	
930	43	24	鉢	黒褐	
931	29	21	鉢	黒褐	
932	51	51	柱状	黒褐	
933	25	15		灰褐	撹乱か
934	42	35	鉢	灰褐	
935	53	38	鉢	黒褐	
936	56	21	鉢	暗褐	
937	55	13	皿	暗褐	
938	42	12	鉢	黒褐	
939	46	18	皿	黒褐	
940	66	28	鉢	黒褐	
941	18	15	小鉢	黒褐	
942	73	38	柱状	黒褐	
943	46	22	鉢	黒褐	
944	40	28	鉢	暗褐	
945	27	28	柱状	黒褐	
946	33	15	鉢	暗褐	炭
947	27	22	鉢	黒褐	焼土・炭
948	37	35	柱状	黒褐	焼土・炭
949	49	18	溝状	暗褐	
950	23	20		黒褐	炭
951	43	12	鉢	黒褐	
952	57	43	柱状	黒褐	
953	25	6	鉢	暗褐	
954	26	7	小鉢	暗褐	焼土
955	30	17	鉢	黒褐	焼土・炭
956	38	27	鉢	暗褐	焼土
957	77	48			陶器、撹乱か
958	34	11	鉢	黒褐	
959	17	14	小鉢	暗褐	
960	40	15	鉢	暗褐	
961	18	12	小鉢	黒褐	
962	21	9	小鉢	暗褐	
963	31	16	鉢	黒褐	
964	45	29	小鉢	黒褐	
965	26	13	鉢	黒褐	
966	37	10	小鉢	暗褐	
967	71	11	皿	黒褐	
968	47	19	皿	暗褐	
969	17	14	柱状	黒褐	
970	25	13	鉢	黒褐	
971	27	11	鉢	黒褐	
972	29	10	鉢	黒褐	
973	24	13	鉢	黒褐	
974	23	15	鉢	黒褐	
975	24	11	鉢	黒褐	
976	20	6	小鉢	黒褐	
977	39	11	皿	暗褐	
978	65	49			3竪
979	38	51		黒褐	
980	44	39	鍋	黒褐	

位置する。土手の高さは５～８cm程度である。ともに、いわゆる出入口施設遺構で、この竪穴には南側の２隅に出入口施設があったと考えられるが、東南隅側がより大きいことから主、南西側は従といえる。土手に囲まれた37号土坑と725号ピットはいわゆる貯蔵穴だが、穴の容量は小さく、果たして貯蔵穴として機能したかどうか疑わしい。壁高は25～35cmで、壁際には幅15～20cm、深さ10～12cm程度の周溝が全周し、覆土は黒褐色土を主とする。焼失家屋で、覆土下層～床直面には多数の炭化材が遺存し、それらは上屋が床面に焼け落ちたような状況を呈して検出された。中央やや東寄りには太い炭化材が南北方向に存在し、それを長軸方向の棟と考えると、東･西壁側では棟に懸けるようにして東西方向に平行した炭化材の配置が認められ、南壁側では棟と平行した南北方向の配置がある。北壁側では炭化材が細かく、遺存状況は良好ではない。また南西隅、北西隅側では壁から棟に向って放射状の配置を示している。全体的に南西側が良好に遺存し、北東側が少なく、長いもので1.5～２mに及ぶものがある。ほとんどの材は床面直上に存在するが、壁際では壁の上端方向に立ち上がりをみせ、周溝より浮いている。721・723号ピットでは柱穴内に柱の基部が炭化した状態で遺存した。ともに床面、柱痕確認面上に炭化材が直立方向で残り、柱がそこに立っていたことを示している。壁際の焼土は西壁寄り、北壁寄りに存在し、東壁、南壁側では少ない。土葺き屋根の裾を構成した土が被熱して堆積したものであろう。また土間付近を中心に焼土が分布するが、中でも中央南寄りに1.5×0.9mの範囲で楕円形に浅く窪んだ範囲は地床炉と考えられ、深さは約8cmである。ただ炉内の底面は被熱が弱く、炉内覆土中に焼土が堆積する状況であった。遺物は南東出入口施設付近を中心に西壁南側に分布のまとまりがあり､そのほか北側､北東隅などに散在している。特に注目されるのが４つの球状生粘土塊（粘土玉）の存在で、西壁南寄り、周溝上から壁寄りの1m程度の範囲内に床面上から検出された。これらの粘土塊については土器制作用と考えておく。また粘土塊の近くには北側にミニチュア土器があったほか、南側に高坏があり､北東隅には床面からやや浮いた焼土上面付近にミニチュア土器があった。南東隅の725号ピット 周辺では小形壷・甕などが出土している。掘り方面の調査では、ベッド状遺構付近で約15cmの埋土が行われていることがわかった。掘り方面はほぼ平坦で、まず竪穴構築に当たっては掘り方面を平らに掘り下げたのち、壁際に盛り土をして貼り床を行い、ベッド状遺構としている。

〈３号竪穴〉 調査区やや西寄り、Y＝20385付近に位置する。東西4.8m、南北5.1mの隅丸方形で、北西隅を道路の擁壁工事で一部欠失し、南西隅を耕作に伴う撹乱により欠失する。竪穴の床面中央には１×２mの範囲で不整形の焼土分布範囲があり、非常に厚い焼土堆積が認められた。その面が竪穴床面と考えられるが、焼土周辺には一段下がって床面が存在したことから、２面程度の貼り床面があったことが推測される。主軸方向はN-42°-Eで、１号竪穴とほぼ同じである。柱穴は４本で、185・186・192・978号ピットが該当する。直径45～65cm、深さ約50cm。そのほかにも床面上には10本程度の大小ピットが存在する。また北側には柱穴をつなぐ線よりも内側に幅35～45cm程度、深さ20cmの溝が東西方向に存在するが、断面によれば上層からの耕作痕とみられる溝である。床面中央は2.8×2.8mの不整形の範囲で床面の硬化面が存在した。遺物は東･西壁寄り、床面付近から少量の土器片が出土している。また掘り方面は床面から10cmの深さがある。炉は地床炉とみられ、床面から浮上して存在した焼土範囲が該当する可能性があるが、焼土を除去した段階では、炉に伴う掘り方は検出されていない。

〈４号竪穴〉 調査区西寄り、Y＝20390付近に位置する。５号竪穴と重複し、５号竪穴を縮小する形で内側に一段深く掘り込んでいる。覆土上層には３号溝がＬ字に曲がって存在する。南北4.8m、東西4.4mの隅丸方形で、主軸方向はN-9°-E。壁高は深いところで40cmあり、覆土は黒褐色土を主とする。竈は南東隅に石組コーナー竈がある。竈の掘り方は1.4×0.8mの楕円形で、深さは10cm程度である。石組は竈に向って左側の列のみ遺存し、４個の礫を並べ、右側には礫が皆無であった。竈内には焼土が良好に遺存した。煙出の構造はない。床面には30～34号土坑、654～656・701号ピットが存在するが、柱穴はない。床面には土坑が５基存在し、直径70～80cmの円形または隅丸方形、深さは31・32・34号土坑が10cm以下と浅く、30号土坑については深さ25cm、33号土坑は35cmとやや深いが、竪穴との並存関係は不明である。またそれらの合間

を縫うようにして焼土範囲が広がる。焼土に伴う大形の炭化材はなかったが、火災住居といえる。周溝は竈を除いて全周し、幅20～30cm、深さ10cm程度を測る。掘り方面はごく浅く、薄い貼り床面が存在する程度であった。

〈５号竪穴〉調査区西寄り、４号竪穴と重複して存在し、東壁寄りの床面、約80cm程度が細長く残る。また４号竪穴の西壁と北壁上にわずかに壁が遺存する。竪穴規模は東西5.3ｍ、南北５ｍの隅丸方形で、主軸方向N-10°-Eは東側床面の東壁、北壁の一部に幅10cm程度、深さ数cmの周溝が存在する。西壁下にも図示されていないが周溝の一部が存在し、本来竈を除いて周溝が全周したとみられる。竈は４号竪穴と切り合うようにして南東隅にあり、向って左脇に礫が数個あるが、竈の構築材かどうかはわからない。80×65cmの楕円形で深さは約10cmの窪みを呈する。竈内には60×35cmの範囲で焼土が広がる。遺物は竈周辺のほか北東隅近くに５点の土器が床面上に存在する。そのうち皿３枚は上向きで重ねられ、その脇に柱状高台皿があり、そばにもう１点の柱状高台皿が存在する。これらは何らかのセットで、使用時または保管状態を示す出土状況と考えられる。４号竪穴と５号竪穴は主軸、竈の位置をほぼ同じにして縮小するように入れ子状態を呈していることから、４号竪穴と５号竪穴は時期的に近接し、両者の居住者は同一または血縁関係と推測され、竪穴の建替えに際しては５号竪穴の竈の構築材をすべて４号へ移設したのではないかと考えられる。

〈６号竪穴〉調査区中央、Y＝20410付近に位置する。覆土中に６号溝が重複し、南壁は調査区外にかかっている。また竪穴が全体的に浅く、耕作による撹乱が遺構下部にまで及んでいることから、東南壁については壁・周溝ともに失っている。南西隅がわずかにカーブして南壁に続くように見えることから、竪穴の規模を推測すると、南北5.3ｍ、東西4.5ｍの隅丸長方形とみられる。主軸方向はN-20°-E。壁高は比較的高い北・西壁側でわずか5cm程度である。周溝は北・西壁、東壁の一部に存在するが、前述したような理由から本来は全周したのであろう。幅は15～25cm、深さは５cm程度。竈は南西・北東・北西隅に存在しないことから南東隅と思われるが、調査区外にあたり、また28号土坑が重複するため欠失すると考えられる。遺物は非常に少なく、北側に散在するほか、床面に重複する27号土坑内にいくつかの土器が存在するが、北壁際からは床面よりわずかに浮上して土錘状土製品が出土している。床面には焼土が分布し、断面をみたところ、わずかな窪みを伴うことはわかったが、焼土は上面のみで、窪み面が被熱するような地床炉のようなあり方ではなかった。床面には南西隅に35号土坑、北東隅に27号土坑が存在する。竪穴との平行関係は定かではないが、27号土坑は出土遺物が竪穴と同時期であり、竪穴に伴う貯蔵穴の可能性もある。そのほか550～555号ピットがあるが、いずれも柱穴ではない。貼り床面を下げて掘り方面を出したところ、床面中央付近では約7cmの厚みがあった。

〈７号竪穴〉調査区東側、Y＝20445付近に位置する隅丸方形の竪穴で、東西2.85m、南北3.3m。主軸方向はN-9°-E。壁の高さは北で20cm、東で25cmと高く、南・西では約15cmと低い。周溝・柱穴はないが、壁際には細かな小穴が存在する。覆土は黒褐色土を主とし、覆土中には南壁寄りに少量の遺物が散布し、直径20cm大の礫が分布した。竈は南東隅のコーナー竈で、1.1×0.9m程度の浅い不整形の窪み内に焼土が70×80cmの範囲で広がり、小形棒状の礫が３個存在するが、竈構築材に関わる礫ではないようである。向って左側には炭化物が広がり、竈周辺には遺物がやや多く存在した。北東隅は角を斜めに落としたような形態を呈し、その外側に付随するように41号土坑が重複する。７号竪穴に切られた土坑とみられるが、ほかの３つの隅のような通常の隅丸形状ではなく、竪穴と一体のものとして何らかの施設の可能性もある。しかし、41号土坑からは竪穴よりも１段階古い土器群が出土していることから土坑として別に扱いたい。床面には南西側に43号土坑が存在する。竪穴の断面観察によれば、43号土坑は竪穴埋没後の構築ではなく、竪穴と同時期の所産と考えられることから貯蔵穴の可能性が高い。43号土坑の北側、竪穴床面中央付近やや西寄りには床面の硬化面が1.1×0.8mの範囲で広がる。また東壁寄り、竈北側には直径約１ｍの浅い落ち込みがある。床硬化面をさらに掘り下げたところ、中央付近で直径１ｍ程度の円形のごく浅い落ち込みを検出したほか、浅いピット、多数の小穴が見つかった。ただ、とくに明確な掘り方面が存在したわけではなく、床面との間に確実に貼り

床層といえる堆積土が存在したとはいい難い状況にある。

〈８号竪穴〉調査区東側、Y＝20460付近に位置する。東西3.9m、南北3.9mの方形竪穴で、隅は隅丸というよりは直角に近い。主軸方向はN-13°-E。中央付近には試掘坑が通り、東西の壁を一部失うほか、東南隅は１号河道に向う傾斜面のため、壁がない。壁高は西壁で25cm。北壁から西壁の一部と南壁に幅20cm程度、深さ約5cmの周溝が存在する。竈は南西隅のコーナー竈で、85×65cmのごく浅い楕円形の窪み内に50×30cm大の焼土範囲があり、両脇に小ピットが存在する。煙道はないが、隅の壁が弱く被熱する。遺物は南壁側にごく少量の土器片が出土したが、図示できる資料はない。東壁寄りには、南北方向に長軸を向けた39号土坑がある。断面によれば覆土中位、２層下からの掘りこみを示すことから、竪穴埋没後の構築である。また北東隅には床面下に40号土坑が重複する。直径2.4ｍもの大形円形土坑で、時期は縄文前期と推測される。竪穴床面には869～874号ピットがある。柱穴状の深いピットもあるが、配置をみると竪穴に伴う柱穴ではない。竪穴中央やや西寄りには２×1.5ｍの範囲で不整形の硬化した床面が存在し、貼り床面となっていて、掘り方面まで下げたところ、その範囲がごく浅い窪みとなった。また掘り方面では小穴が多数検出されている。

〈９号竪穴〉調査区東端、Y＝20465付近に位置する。１号河道を掘り下げていく中で確認され、東壁は１号河道により失い、南側は約半分が調査区外に存在するため、調査できたのは竪穴全体の半分以下である。断面図によると、深さは地表から1.3ｍ。約１ｍの厚さのある１～８層までは１号河道に伴う堆積土で、９層以下が竪穴覆土となり、12層の褐色砂質土を主とする。壁は皿状に緩やかに立ち上がり、また北壁でははっきりした段差をもっている。中央付近から徐々に傾斜をもって壁に至るような状況であり、平坦面といえるのは中央付近だけである。遺物は南壁中央付近にまとまりをみせている。調査した範囲は３×５ｍだが、竪穴の全形としては６～７ｍに及ぶ円形であろう。床面には特に硬化面がなかったが、北西側には台石が床直面に置かれ、また中央北側から段差付近には諸磯ｃ式深鉢の胴下半を再利用したらしい土器が２点あり、段差付近のものは上向き、中央側のものは下向きで床面に置いたような状態で出土した。柱穴としては857・858号ピットがあり、直径20～30cm、深さ50cmを測る。４本柱穴のうちの２本と考えると、住居の主軸方向はN-6°-Eか。焼土、炉は調査範囲では確認できなかった。そのほか南東隅には直径1.2ｍ以上の土坑状の落ち込みがあり、土器が覆土中からややまとまって出土している。断面観察では竪穴覆土上層から堆積土が落ち込んでいることから、竪穴埋没後の土坑と考えられるが、ここでは出土土器を本竪穴出土として報告しておく。また中央付近に42号土坑がある。竪穴との時期的な前後関係は定かではないが、屋内貯蔵穴の可能性が高い。

〈１号掘立〉調査区東寄り、Y＝20450付近に位置する。743・837～839・914号ピットをつなぐ東西２間（心心4.4m）、南北推定２～３間の建物跡で、南北に長い主軸をもつと考えられる。柱穴間隔は心心で2.1～2.2ｍ。南北方向を主軸とすると主軸方向はN-5°-E。北側に関しては調査区外にかかること、道路の擁壁工事で消失するため全体形は不明である。柱穴は70×90～110cm、深さ55～75cmで、断面観察では明瞭な柱痕は確認できていないが、いずれも黒褐色土を主とした覆土である。いずれも南北に長い楕円形を呈し、抜き取り痕ともみられる中段を南方向に伴う特徴がある。なお743号ピット周辺には900号ピット等が重複するが、現代の撹乱により743号ピット自体の形状が不明瞭になっている。837号ピットには覆土中に平安時代、９世紀中頃の土師器片を含む。

〈１号土坑〉Y＝20370に位置する長方形土坑で、東隣りには同一形態の７号土坑が並列する。2.06×0.7ｍ、深さ50cmで、主軸方向はN-19°-E。断面形は短軸方向が箱状もしくは内傾した台形状、長軸方向の壁が外傾した鍋底状を呈する。底面は平らで、壁が直立あるいはオーバーハングする特徴がある。覆土は黒褐色土で、地山と同質のロームブロックを含み、埋め戻ししたような状況を示す。遺物はなく時期不明だが、古代末または中世の土坑墓であろう。

〈２号土坑〉３号土坑南に重複する。同規模の円形土坑が２基重複して隅丸長方形を呈した土坑で、北側部

分は深さが３号土坑とほぼ同じ54cm、南側は37cmである。断面形は底が平らな鍋底状である。重複関係は断面観察から３号土坑よりも古い。２基の円形土坑の重複関係については観察できなかったが、北側部分は暗褐色土を主とした覆土で、遺物はとくにない。仮に２基の重複を１基単独と見ると、主軸方向はN-5°-Wの長方形土坑とみることもできる。

〈３号土坑〉調査区西寄り、１・７号土坑と平行する長方形土坑で、南端に２号土坑が重複するため、端部の形状が不明瞭だが、3.2m×78cm、深さ52cm。２号土坑との重複部分での断面観察によると、２号土坑を切っている。断面形は短軸方向が箱状、長軸方向は壁が外傾した鍋底状で、底はほぼ平らである。主軸方向はN-17°-E。覆土は黒褐色土・暗褐色土で、遺物はなく時期不明。

〈４号土坑〉調査区西寄り、Y＝20365付近にある隅丸方形に近い円形土坑で、1.25×1.35 m、深さ80cmを測る。断面形は壁がやや強く内傾した箱状で、底面はほぼ平らとなる。中央付近、下層～底に近い位置で少量の土器片が出土した。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とする。

〈５号土坑〉調査区西寄り、Y＝20363付近にある。直径64cmの円形土坑で、深さ24cm。覆土上層に花弁状に並べた配石をもつ。配石は６個の平たい楕円形の礫で構成し、上面がほぼ平らになるように組んでいる。配石周辺の覆土は炭化物を多く含む黒褐色土である。縄文時代の屋外炉に伴う配石と考えられ、集石土坑の下部にこうした花弁状配石を設ける事例は多い。集石炉であれば、土坑の壁上端はさらに30～50cm程度上部にあったとみられ、地形が傾斜する塩川の方向に向かって表土が流失した結果、壁の大半を失ったものと考える。遺物はとくにない。

〈６号土坑〉７号土坑の南側に位置する長方形土坑で、1.76×0.5 m、深さ30cmである。断面形は短軸方向の壁がやや内傾した箱状で、覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とする。遺物はとくにない。主軸方向はN-12°-E。

〈７号土坑〉１・３号土坑の間にある長方形土坑。2.6×１m、深さ62cmで、断面形は短軸方向が壁の直立ないしはオーバーハングした箱形である。主軸方向はN-20°-Eで、ほかの長方形土坑同様、南北方向に主軸を向ける。覆土は黒褐色土、暗褐色土を主とし、遺物はなく、時期不明。南側に焼土を伴う９号土坑と重複する。

〈８号土坑〉調査区西寄り、Y ＝ 20363付近にある浅い不整円形土坑。１×0.9 m、深さ6cmで、覆土は褐色土。遺物はとくにない。

〈９号土坑〉７号土坑の南側にある不整円形を呈した土坑。1.2×１mで、２基の土坑が重複したような形状で、北側がより深い落ち込みとなる。上層に40 × 35cmの範囲で焼土が堆積し、枕石状の棒状礫が１点存在することから地床炉の可能性もある。深さは40cmで、断面形は最深部が偏った烏帽子形である。覆土は褐色土・暗褐色土を主とする。遺物はなく、時期不明。

〈10号土坑〉調査区西寄り、Y ＝ 20379付近にある円形土坑。86 × 96cm、深さ55cmで、底が平らで壁が直立した断面箱状を呈する。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とし、遺物はない。

〈11号土坑〉調査区西寄り、Y=20375付近にある円形土坑。1.1 × 1.1 m、深さ35cmで、底面はほぼ平ら、壁は直に立ち上がる断面箱状を呈する。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とし、遺物はない。

〈12号土坑〉調査区西寄り、Y=20363付近にある円形土坑で、90 × 90cm、深さ20cmを測り、断面形はボール状を呈する。覆土は鈍い黄褐色土で、遺物はない。

〈13号土坑〉調査区西寄り、Y=20388付近にあるごく浅い円形土坑で、96 × 87cm、深さ5cmを測り、断面形は皿状、覆土は暗褐色土・褐色土を主とする。遺物はない。

〈14号土坑〉調査区西寄り、Y ＝ 20392付近に位置する円形土坑で、85 × 77cm、深さ6cmとごく浅い。覆土は黒褐色土で、遺物はない。

〈15号土坑〉Y=20396付近にある楕円形土坑で、1.1 × 0.85 m、深さ25cmを測る。断面形は鍋底状、覆土は黒褐色土・暗褐色土で、遺物はない。

〈16号土坑〉 Y=20399付近にある円形土坑で、70×85cm、深さ12cmを測る。断面形は鍋底状、覆土は黒褐色土・褐色土で、遺物はない。

〈17号土坑〉 Y＝20396付近にある円形土坑で、ピットが重複する。86×90cm、深さ35cmで、断面鍋底状。覆土は黒褐色土で、遺物はない。

〈18号土坑〉 Y=20398付近にある円形土坑で、ピットが重複する。78×80cm、深さ24cmの断面鍋底状で、覆土は黒褐色土・暗褐色土となる。遺物はない。

〈19号土坑〉 Y=20404付近にある楕円形土坑で653号ピットと重複する。1.05×0.9 m、深さ44cmで、断面ボール状。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とし、遺物はない。

〈20号土坑〉 調査区中央、Y＝20408付近に位置する円形土坑で、67×58cm、深さ23cmを測る。断面鍋底状、覆土は黒褐色土で、遺物はない。

〈21号土坑〉Y=20401付近にある不整円形土坑で、565号ピットと重複する。85 × 70cm、深さ16cmで、断面ボール状。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土で、遺物はない。

〈22号土坑〉 Y=20405付近にある円形土坑で、80 × 68cm、深さ37cmを測り、南北方向に細長く深みがある。覆土は灰黄褐色土・黒褐色土・褐色土を主とし、断面はＶ字状を呈する。遺物はない。

〈23号土坑〉 調査区東寄り、Y=20430付近にあり、299号ピット等と重複する。90 × 76cmの円形土坑で、深さ35cm。断面形は鍋底状。覆土は黒褐色土を主とし、遺物はない。

〈24号土坑〉 調査区東寄り、Y=20434付近にある。60 × 60cmの円形土坑で、深さ30cm、断面形は鍋底状。覆土は暗褐色土・黒褐色土で、遺物はない。

〈25号土坑〉 調査区東寄り、Y=20437付近にあり、試掘坑により北側を欠失し、5号溝が東側に重複する。1.4 × 0.9 mの不整形土坑で、深さ55cmを測る。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とし、遺物はとくにない。

〈26号土坑〉 調査区東側、Y=20441付近に位置する。82 × 79cmの円形土坑で、深さ26cmを測る。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とし、遺物はとくにない。

〈27号土坑〉 6号竪穴内、北東隅に位置する。80 × 80cmの隅丸方形に近い円形土坑で、深さは30cm。底から6cm浮いて土師器皿と柱状高台皿底部が出土した。土坑の断面形は底が平らな鍋底状で、覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とする。竪穴と同時並存の可能性がある。土壌中の炭化種実分析を実施。

〈28号土坑〉 6号竪穴南東、Y=20412付近に位置する。調査区南壁にかかり、大部分が調査区外に存在する。2.1 × 0.75 m、深さ45cmを測り、断面は鍋底形。覆土は暗褐色土・褐色砂質土・黒褐色土を主とし、覆土中位から柱状高台皿が出土している。

〈29号土坑〉 調査区東側、Y=20439付近にある長楕円形土坑で、試掘時の深掘りにより土坑西壁付近を欠失する。土坑は2.3 × 0.64 m、深さ56cmで、断面形は段を持つ鍋底状となる。楕円形土坑が南北に連結した形態を呈しているが、断面観察では重複状態を示しておらず、覆土は黒褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積している。遺物はない。

〈30号土坑〉 4号竪穴、北壁東寄りに位置し、周溝に接する。80 × 75cmの円形土坑で、深さ22cm。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土・黒褐色土を主とする。遺物はとくにない。竪穴に伴う土坑かと思われる。

〈31号土坑〉 4号竪穴東壁寄り中央に位置する。75 × 65cmの円形土坑で、深さは7cmと浅い。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土である。遺物はなく時期不明だが、通常の土坑とすると浅いため、5号竪穴床面から掘り込まれた土坑と考え、5号竪穴に伴うものと推定したい。

〈32号土坑〉 4号竪穴内、南壁寄り中央に位置する。75 × 60cm、深さ8cmの隅丸方形土坑で、覆土は暗褐色土を主とし、焼土ブロックを覆土中位に含む。断面皿状で、遺物はない。深さが浅いことから、5号竪穴に伴う土坑かと推測される。

〈33号土坑〉 4号竪穴内、南西隅にある土坑。90×70cmの隅丸方形で、深さは36cm。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土を主とし、土師器甕片、磨斧等が出土した。4号竪穴に伴う貯蔵穴と推測しておく。

〈34号土坑〉 4号竪穴西壁寄り、中央付近にある70 × 65cmの円形土坑。深さは6cmと浅く、覆土は暗褐色砂質土を主とする。断面形は底が平らな鍋底状。竪穴に伴う土坑とみられるが、浅いことから4号竪穴に伴うものではなく、本来5号竪穴に伴うものではなかったかと思われる。遺物はとくになく、時期不明。

〈35号土坑〉 6号竪穴南西隅にある70 × 60cmの円形土坑。断面形は鍋底状。覆土は黒褐色土で、竪穴覆土と同質である。遺物はとくにない。27号土坑同様に竪穴と同時並存する可能性があり、その場合、貯蔵穴かと思われる。

〈36号土坑〉 4号竪穴南壁に接するように位置する土坑で、1 × 0.8 mの楕円形を呈する。深さは55cmで、断面形は西側が深く抉れた烏帽子状を呈す。覆土は黒褐色土を主とし、遺物はとくになく、時期は不明。

〈37号土坑〉 2号竪穴南西隅にあり、出入口施設と考えられる土手状遺構の内側、周溝に接するようにして存在する。60 × 55cmの円形土坑で、深さ17cmと浅く、断面形はボール状を呈する。覆土は暗褐色土で、遺物はとくにない。2号竪穴の出入口施設に伴う掘り込みだが、貯蔵穴と判断するには浅い。

〈38号土坑〉 調査区東寄り、Y=20459付近に位置する円形土坑で、1.1 × 1.08 m、深さ85cmを測る。断面形はボール状で、覆土は黒褐色土を主とする。上層に土師器片を含む。

〈39号土坑〉 8号竪穴東壁寄りにある1.4×0.7mの楕円形土坑。8号竪穴の覆土中、3層を掘り込んで構築し、断面形は鍋底状、覆土は暗褐色土である。遺物には縄文期の打斧1点があるが混入とみられる。時期は8号竪穴よりも後で、8号竪穴に近いと推定される。形状から墓坑か。

〈40号土坑〉 8号竪穴北東隅、床下に重複する円形土坑で、直径2.4mを測り、断面形は桶形。覆土は暗褐色土、黒褐色土で、深さ約60cm。南側壁際には周溝状の細い溝が存在し、土坑というよりは小竪穴といえるが、竪穴住居にしては小さ過ぎ、床面には焼土や炉がないことから居住施設ではない。柱穴も存在しないが、上屋構造をもった竪穴状の貯蔵施設と考えておきたい。縄文前期末の土器片が覆土中から出土したことから、同時期と推定でき、時期的に近くに存在する9号竪穴と関連するものと思われる。

〈41号土坑〉 7号竪穴北東隅に付随する土坑状施設で、竪穴の北東隅に重複する（7号竪穴参照）。80 × 60cmの隅丸方形で、南西壁は竪穴の北東コーナーに斜めに直線的に切られた形となる。深さ12cmを測り、断面形は箱状。平安後期の土師器皿と高台坏または皿が出土した。時期は7号竪穴と同時期である。

〈42号土坑〉 9号竪穴床面に存在する85 × 75cmの隅丸方形に近い土坑で、深さは約30cmを測る。断面形は桶状で、覆土は暗褐色土を主とする。竪穴との時期的関係は定かではないが、竪穴に伴う貯蔵穴の可能性もある。遺物はとくにない。

〈43号土坑〉 7号竪穴床面の南西隅側に存在する直径約70cmの円形土坑。深さは52cmとやや深く、断面はボール状に近い。覆土は暗褐色土、黒褐色土が自然堆積を示す。7号竪穴と同時期で、貯蔵穴と推測するが、覆土が竪穴から連続的でないことから、検討を要する。遺物はとくにない。

〈44号土坑〉 調査区東寄り、Y=20452付近に位置する。調査区南壁にかかるようにして検出された不整形土坑で、65×76cm、深さ18cmを測るが、断面観察によれば土坑の掘り込み面からは40cmの深さとなる。断面形はボール状、覆土は黒褐色土で、底面付近から柱状高台皿が出土した。

〈45号土坑〉調査区東寄り、Y = 20457付近にある不整円形を呈した集石土坑で、902号ピットと重複する。1.1 × 1.15 m、深さ58cmで、断面ボール状。覆土中位から上層にかけて多量の円礫が集中した集石土坑で、覆土は礫周辺に炭化物を多量に含んだ黒褐色土が堆積し、集石下層には炭化材を含む暗褐色土が堆積する。集石の範囲は70 × 80cm、集石の厚さは約30cmで、遺物はとくにないが、縄文時代の屋外炉と思われる。なお集石下部に配石はない。近くにある縄文前期末の竪穴と時期的に関連すると考えられる。

〈46号土坑〉 調査区東寄り、Y=20458付近にある円形の集石土坑で、85 × 85cm、深さ30cmを測る。集石は中央やや北寄りにあり、45 × 35cmの範囲で円礫が分布する。土坑の断面形はボール状で、覆土上位～中位に礫が堆積し、集石周辺の覆土は炭化粒を含んだ黒褐色土となる。集石下部には配石を伴っていない。また遺物はない。縄文時代の屋外炉で、近くにある縄文前期末の竪穴と時期的に関連する遺構であろう。

〈47号土坑〉調査区東側、Y=20460付近にある楕円形土坑で、南側に912号ピットが重複する。912号ピットとの重複関係は、断面から判断すると912号ピットの方が新しいらしい。1.25 × 0.8 mの楕円形土坑で、断面ボール状。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土で、遺物はない。

〈48号土坑〉調査区東端、Y=20466付近にある円形土坑。1.32×1.27m、深さ33cmで、壁は鍋底状～箱状となる。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土で、遺物はない。

〈1号溝〉調査区西寄り、Y=20367付近に位置する南北の溝で、2号竪穴に接する。幅1.4 m、長さ6.4 mで、北端は2号竪穴脇から始まり、南端は調査区南壁にかかり、調査区外へ伸びている。断面形は皿状で、最も深い南端で深さ30cmを測る。覆土は鈍い黄褐色土で、遺物はない。覆土から判断すると、近世以降の形成とみられるが、東側、Y=20390には対になるように3号溝があり、先端はL字状に西へ伸びている。1号溝と3号溝がセットになって一辺24m程度の方形区画を形成すると考えられ、何らかの土地区画だったと思われる。

〈2号溝〉東区と西区の境にある流路に向って落ち込む部分に調査区西壁からトレンチ状に掘り下げ、断面の一部を観察し2号溝としたが、溝ではなく段差に伴う落ち込みの可能性が高い。また断面観察した部分は、流路にかかる暗渠部分の工事の際に埋め戻された形跡がある。

〈3号溝〉4・5号竪穴付近に存在するL字状に屈折した溝で、4・5号竪穴西側から東方向にのび、4・5号竪穴北側で屈曲して4・5号竪穴上層を通過し、調査区南壁に至る。幅60cm～1.8 m、深さ12～22cmと浅く、出土遺物はほとんどない。溝の断面形は皿状で、何らかの地境、境界を示す溝とみられ、前述したように1号溝とセットで方形区画を形成するのではないだろうか。

〈4号溝〉Y=20427付近に位置する南北方向の溝で、長さ4.5m、幅50 ～ 80cmを測る。断面形は鍋底状で、深さ10cm程度。覆土は黒褐色土で、遺物はない。調査区南壁にかかる断面図によれば、6層の黒褐色土を掘り込んでいて、6層上面からの掘り込みは約30cmである。

〈5号溝〉Y=20438付近にある南北方向の直線溝で、25号溝から発し、南端は調査区南壁に至り、調査区外へ延びている。長さ6 m、幅30 ～ 45cm、深さは10cm程度で、覆土は暗褐色土、暗褐色砂質土を主とする。遺物はとくにない。4・6溝とほぼ平行するように存在し、それらと組み合う可能性があり、畑などの地境溝と考えられる。

〈6号溝〉6号竪穴覆土中、Y=20409付近にある南北方向の直線的な溝で、竪穴の範囲内に限定的である。長さ4m、幅25 ～ 35cm、深さ5cm程度で、溝の南端は調査区南壁にかかり、調査区外に延びる。調査区壁での断面観察によれば、4層上面からの掘り込みで、覆土は暗褐色土を主とし、4層上面から溝底部までは深さ20cmである。断面は浅い皿状で、遺物はない。東側の4・5号溝と平行するように存在し、それらが全体で何らかの土地区画溝を構成していたと考えられる。

〈7号溝〉Y=20400 ～ 20404付近にある調査区に対して斜めに延びる溝で、北側は調査区北壁にかかる。長さ3.7 m、幅25cm程度の不連続な小ピットのつながりで、溝というよりは地割れ、噴砂のようなあり方である。断面はボール状で、灰黄褐色砂層、鈍い黄褐色砂層を主とし、砂が流れたような形跡があり、白磁碗などの遺物を伴う。

〈8号溝〉Y=20400付近にある斜めの直線溝で、7号溝と平行する。長さ4.5m、幅10cm程度のピットが不連続に並んだような遺構で、溝でない可能性が高い。覆土は7号溝同様に砂層を主とし、噴砂のようなものかと思われた。

〈9号溝〉調査区東端、Y=20464 ～ 20469付近にある東西方向の直線溝。40号土坑そばから1号河道にかけて存在し、長さ4.5 m、幅20 ～ 35cmを測る。断面皿状で、覆土は灰黄褐色土を主とし、遺物はない。東端は1号河道により切られている。

〈10号溝〉Y=20390 ～ 20400にかけて東西にのびる直線的な溝で、4・5号竪穴の南東角から東へ11 mの長さがあり、幅70cm～1 m、深さ10cm程度である。断面皿状で、覆土は灰黄褐色土、暗褐色土からなり、遺

物はとくにない。３号溝と直交するように接続していることから、３号溝の区画との関連性が推測される。近世以降の何らかの区画溝であろう。

〈１号河道〉調査区東端に位置する。８号竪穴付近より浅い落ち込みがあり、９号溝東端から谷状に落ち込んでいる。調査では河道の西岸を確認し、一部東西方向へ重機によりトレンチを入れ、深さ、東岸の位置、遺物の有無を見極めようとしたが、掘削した範囲内では底面、東岸ともに不明のままとなった。したがって河道の規模は不明だが、南北方向の南流する埋没河道で、深さ３ｍ以上の大形の自然流路といえる。遺物はほとんどないが、川岸にあたるX=－33795、Y=20469付近にいくつかの土坑状の窪みがあり、その中から平安時代、10世紀後半代の土師器坏類がまとまって出土した。その時期に形成され、その後埋没した河道といえる。なお土坑状の窪みについてはとくに遺構と判断していない。そのほか、８号竪穴から９号竪穴付近の浅い川岸の表面に多数の足跡状の小ピットが存在し、河岸が水田利用された可能性も大いにあると推測した。河道深掘りセクションに図化したように、上層には数面の水田耕作土と止水層とみられる互層が存在することから、そのような推測を現場で行ったが、遺構としては水田跡とする判断材料に乏しく、検討を要する。

〈２号河道〉西区西端、低地面にある。西区内の北壁に沿ってトレンチを入れ、東西方向の断面を観察したほか、黒色粘土層が堆積した10m四方を中央にベルトを残して北側、南側に２分し、南半は黒褐色土層の上面で溝状遺構を調査し、北半では黒褐色土層を除去した黒色粘土層の上面で足跡状の小ピットを調査した。その結果、南半では南北方向の溝３本で区画された面があり、近世以降の水田跡と考えられた。北半も水田の可能性が十分あり、小ピットの群は足跡ではないかと推測されたが、確実に足跡といえるものはなかった。遺物には平安末とみられる土師器小破片が数片あり、時期とすればその時期の可能性がある。また西区遺構外で13世紀の古瀬戸片が出土していることを考えると、西区低地面は平安末以降の土地利用が行われたことが推測される。なお、北半の東側に取り付く直線溝は、暗渠排水とみられる溝で、現代の掘削痕である。

〈ピット〉表２に整理したとおりで、そのうち遺物を伴うピットについては第25図に図示した。平面・断面形、規模でいくつかの分類が可能であるが、表２では主に形態から柱穴状、鍋状、小鉢状、溝状、皿状に大別し、径、深さ、堆積土、遺物の有無などを記載した。

第４節　遺　物

〈１号竪穴〉１は内耳鍋。県内で知られる一般的な内耳土器（信濃型鍋）と異なる特徴として器壁が1.2cmとやや厚く、底部が平らではなく丸いこと、胎土が土師質の擂鉢系である点、体部外面を縦位ヘラナデする点があげられ、佐々木満氏のいう甲斐型鍋である(2011)。断面をみると、半分から内側が灰色、外面は褐色となっていて、瓦質土器に類似している。耳部は内面が弱く屈折して外反した上側にやや小じんまりとした釣手状のブリッジが付いている。外面は褐色の表面にススが全体に付着し、内面は還元状態のような灰色の色調を呈している。２は混入と思われる打製石斧。著しく劣化する。

〈２号竪穴〉１～13は土師器。１は口縁部が大きく開いた土師器坩で、底部には直径３cmほどの孔が開く。内面は縦位に細かくヘラ磨きを行い、放射状暗文のような効果をもつ。内面は全体に黒味がある。２は外面縦ハケ、内面横ハケの小形壷口縁部で、口縁部のみ一周する。甕の脚の可能性もある。３は小形甕の底部付近で、外面は斜位のハケメ、底部はヘラ削り風のナデ、内面は指ナデとする。４は無文の壷の小破片で、口縁部には段があり、やや強く外反する。５は高坏で、ラッパ状に開く脚には直径１cmの円孔が４ヶ所開く。坏部は外面横ハケののち、間隔を開けて縦位に指ナデを行う。内面は放射状のヘラナデ（磨き）を密に行い、内面全体が暗褐色に変色している。同様な変色は外面にも部分的に見られる。６は小形壷で、完品。外面は縦ハケののちナデを行い、内面は口縁部に横ハケが残るが、内面はナデを行う。また底部はナデにより無文となる。内面は薄いピンク色を呈している。７は小形甕で、外面は縦ハケ、内面は口縁部にのみ横ハケを行う。図では正確に捉えていないが、外面のハケメは胴下半が幅広で、胴部上半を中心に細かいハケメとなる。

また胴部の最大径よりやや下がった位置に接合帯があることから、分業的に土器が制作されたことを意味していると考えられる。底部は削り風のナデにより無文となる。8は器壁が2㎜と非常に薄いハケメ甕胴部で、S字甕とみられる。外面には長く勢いのいいハケメを施し、内面はナデとする。内面中央付近に赤色塗彩らしき付着があるが、塗彩と断定することは難しい。9は球胴形を呈した壷胴部の大形破片で、器壁は約4㎜。内面の色調は、上半が濃い黄色、下半が淡い黄褐色で、上下で異なっている。調整は外面ナデ、内面横ハケであるが、外面にはかすかに斜位のハケメ痕を認めうる。10・11はミニチュア土器甕（壷）。10は口縁部が2段の複合口縁風となり、内外面とも全体的にナデで整形するが、外面頚部の一部にハケメ痕が残る。外面には黒斑がある。11は外面縦ハケ、口縁部内面を横ハケとするミニチュア甕で、口縁部の一部を欠く。12はS字甕の底部から脚部で、脚部上半から上を縦ハケ、内面を横ハケとし、脚部下半および内面はナデとする。脚部内面は指ナデ痕があり、全体に赤味が強い。塗彩ではなく焼成時の色調であろう。外面は全体にくすんだ色調を呈し、被熱の影響とみられる。13は壷底部で、内外面ともハケメ上にナデを行っている。底部も丁寧なヘラナデで無文となる。14～17は粘土玉である。いずれも未焼成で、竪穴の西壁寄り、床面直上にまとまって出土した。14は長軸長約19cmで、一部平らな面をもつ球状の粘土塊。7240g。15は長軸長約17cmで、裏面がやや平たい不整球形。3360g。16は長軸長約18cmで、裏面がやや平たい粘土塊。2680g。17は長軸長約15cmで、裏面に平坦面をもつやや平たい不整形の塊。1440g。胎土分析によれば、14・15、16・17の鉱物組成がそれぞれ類似し、いずれも土師器の胎土に近いという（第4章第3節）。18は打製石斧の刃部、後部を欠く中間部片で劣化する。

〈3号竪穴〉 1は坏または椀かと思われる口縁部片で、器壁は厚さ1.5～2㎜程度と薄い。外面はハケメ調整ののちナデを行う。2は台付甕脚部と思われる破片で、磨耗のため内外面の調整痕は不明である。脚端部は内側に折り返しとする。

〈4号竪穴〉 1～4は土師器（土師質土器）である。1は直径8cm余の柱状高台皿で、皿部がわずかにくぼんだ程度で中央は盛り上がっている。高台部は円柱状で、下寄りにロクロナデによる節が1条巡り、端部はわずかに張り出している。皿部内面には弱く黒変した部分があり、灯明皿の可能性がある。2は坏あるいは椀で、底部が1.5cmと厚く、器壁も厚みがある。内面は薄く黒変する。底部は磨耗により整形痕が不明だが、糸切痕をもつとみられる。3は坏または椀の底部で、底部はやや厚く、糸切痕をもつ。全体に焼成不良で、とくに内面は磨耗が顕著である。4は直立した角口縁の甕で、外面には弱いハケメ調整、内面は指頭調整ののち口縁部に近い内面を弱い横ハケ調整し、口唇部脇を削りにより調整している。内面下半は器面が荒れ、砂粒が浮き上がったような状態を呈している。また胴部外面の一部と口唇部付近にススが薄く付着する。5は4号竪穴内33号土坑出土の磨斧片で、混入品か。両端部を欠く。断面形は楕円形で、縄文中期以前とみられる。

〈5号竪穴〉 1～6は土師器（土師質土器）で、5・6は柱状高台となる。1は完形の皿で、雲母をやや多く含み、外面および内面見込み部にロクロ目を残す。表面の調整はやや粗い。2は完形の皿で、底部がわずかに高台状に立ち上がる。全体に焼成不良で、調整は粗い。3は口縁をほとんど欠く皿で、底部に糸切痕をもつ。4は底部に立ち上がりがあり、高台化した皿で完形。5は柱状高台皿で、完形。口縁端部は角口縁状で、皿部のくぼみは浅く、中央に直径1cmの円形の窪みがある。6は口縁部を大きく欠く柱状高台皿で、脚端部はやや強く張り出し、先端は角頭状となる。焼成不良のため、全体に磨耗が顕著で、底部をはじめとする整形痕は不明瞭となる。

〈6号竪穴〉 1は台形を呈した土錘状土製品で、胴部の中央上に直径1cm程度の孔が貫通し、孔の上には溝状の窪みが伸びている。底部は平らで、筋状の圧痕が1条ある。紐を通して錘としたことが推測できるが、類例の有無は不明で、何に用いた錘なのかわからない。

〈7号竪穴〉 1は口径14.7cmの大形の坏または皿で、口縁部は直線的に強く開く。口縁部内外面の一部に黒斑がある。2は推定径14cmの甕底部で、底部には木葉痕をもつ。内面は使用によって器面が荒れ、炭化物により一部薄く黒変している。3は口縁が外反する甕で、高さは25cm程度と推測される。外面は幅広のハ

ケメ状の工具により縦ナデを行い、内面は口縁部に横ナデを行う。胴部内面については使用により器壁の砂粒が露出している。また外面には一部スス状の付着物がある。

〈９号竪穴〉 1は無文の小形深鉢。図は細片化した破片からの復元実測で、高さは正確ではない。底部は鋭く張り出し、胴部は輪積み痕を残しつつ単純、直線的に開く器形で、内外面とも整形は粗く、指頭痕を残す。外面は部分的に黒変し、灰が付着している。2・4・5は諸磯ｃ式期の底部を中心とした深鉢。2は半截竹管文を横位施文した深鉢底部で、底部外面は無文だが、何らかの細かい圧痕が残り、凸凹がある。内面の器壁は使用により強く黒変している。3は鉢形土器または有孔土器の底部で、高台が付いている。外面は横ナデを行い、内面は丁寧なナデにより滑らかに整形している。内面には全体に薄い褐色の黒変がみられるが、一部は自然のサビ状の付着物のようである。また内面見込み部は使用によってわずかに磨り減っているようにもみえる。4は底部がわずかに裾広がりを呈す深鉢で、胴部には横位、斜位の半截竹管文で鋭い「く」の字状に充填し、さらに2個セットで円形浮文を多数貼付している。竹管文の幅は約4㎜と狭い。内面の整形は丁寧で、ナデののち縦位のヘラナデを行っている。底部内面は使用により荒れ、内面の器壁は帯状に薄く変色している。外面には変色部はない。底部外面は同心円状の何らかの圧痕が付着し、土器製作のためのなんらかの敷物を用いたことがわかる。5は4より小振りの深鉢で、竹管文により底部付近は横位、胴部は矢羽根状に斜位に施文し、円形浮文を貼付する。貼付文は基本的に2個セットだが、1個のみのところ、3個のところがあり、雑となる。竹管文の幅は5㎜で、4よりは広く、やや雑となっている。内面は炭化物が付着し、煮沸を物語っている。底部は同心円状にごく弱い痕跡、あるいはナデまたは擦痕があり、4の圧痕との共通性があるが、4ほど明瞭ではない。また底部の張り出しはほとんどなく、直角に近い角度で器壁が立ち上がっている。4・5はともに床面上に底部を下にして置かれたようにして出土し、胴部の割れ口はいずれも水平ではある。両者とも割れ口部分を再調整したような痕跡がごく一部に存在することから、割れた底部を容器として再利用したことが推測される。6・7はいわゆるトロフィー形を呈した十三菩提式土器の口縁部。6は波頂部に環状把手をもち、幅の狭い半截竹管文による押し引き文と、三角抉り文により施文する。器面には白褐色の粘土かと思われる物質が薄く付着している。7は6と同じ形式とみられ、口縁部に近い部分にあたる。8～14は諸磯ｃ式土器片。8は斜行竹管文上に2個セットの円形浮文および縦位の竹管隆線文を2～3条セットで貼付する。ラッパ形に開いた深鉢である。内外面黒変するが、土中のサビ分の付着によるものである。9も斜行竹管文上に円形浮文を貼付する。10は半截竹管文により肋骨文またはレンズ状に施文し、円形浮文を貼付する。11はほとんど縦位の竹管文上に円形浮文を貼付する。12は肋骨状の竹管文上に円形浮文を貼付する。13は文様帯の境付近で、上が斜行竹管文、下が縦位に近い竹管文となる。外面が薄く黒変する。14は斜行竹管文上に円形浮文を一つずつ貼付したもので、竹管の幅は2㎜程度と狭い。内面は変色する。15は無文土器片で、いわゆる粗製土器とみられる。外面は横位の粗いナデ痕で調整する。16・17は打斧。ともに粘板岩で後端部を欠損し、16は劣化が著しい。18～21は磨石。18は楕円形で断面角状を呈した磨石で、表裏面には短軸方向にやや粗い使用痕が見られる。両手で横方向に掴み、台石や石皿の上で動かした擦痕であろう。図の左側面には敲打痕、右側面には長軸方向の擦痕が付いている。また両端部にも敲打痕があるが、主たる使用面は表裏面であろう。図の表面は、裏面に較べて薄く黒変している。19は不整形の磨石で、表面を磨り面として主に使用しているほか、図の左側面が平らに潰れていて、敲打を行ったとみられる。そのほかの面はやや弱い磨り面となっている。20は不整形の磨石で、表裏面を中心に3面の磨り面があるほか、図の左側面の稜を磨り面とした稜磨り石である。端部に敲打痕はない。21は小形円形の磨り石で、円礫の表裏面を磨り面とする。とくに図の裏面が平らに磨耗していて、主たる使用面とみられる。側面にもわずかではあるが不明瞭な使用痕がある。22は台石。23は焼成粘土塊。7×4㎝大の不整形で、ちょうど片手で指を閉じて握った程度の大きさ、形を呈している。表面には2～3本の指頭痕が深く付いていて、強く握り締めたような状況である。胎土は同じ竪穴内から出土している諸磯ｃ式土器片と比べ、やや雲母の量が少ないようにみえるが、ほぼ同じといってよいだろう。明瞭な指頭痕が2本存在するが、図の左側の圧痕が右手人

差し指、左の圧痕が中指とみられ、右手で粘土塊を握った様子が想像できる珍しい資料である。

〈1号掘立〉 1は837号ピット出土の土師器坏で、底径は推定9.2cmと大きい。内面の暗文はほとんど認められないが、甲斐型土器の中ではやや古手といえる。2は888号ピット出土の土師器坏で、胎土はやや粗く、底部を糸切りのままとする。平安末とみられるが、1との時間差が大きい。

〈27号土坑〉1は土師器坏。底部は糸切りのままで、見込み部にはロクロナデの痕跡を残す。胎土はやや粗く、口縁部には灯明具として用いた際のタール痕が1箇所存在する。2は柱状高台皿または坏の底部で、器壁は厚く、糸切り痕の残る底部には大きな窪みがある。

〈28号土坑〉 1は柱状高台坏の底部付近で、底部は2.5cmと非常に厚く、見込み部はロクロ目を残し、胎土はやや粗い。高台側面には指頭痕の窪みが付着する。

〈39号土坑〉 1は打斧として図化したが、左側辺を刃部とする剥片石器であろう。

〈40号土坑〉 1は縄文前期の有孔土器で、浅鉢形となる。体部から口縁部に到る屈曲部に直径5mmの円孔を穿つ。内面の一部に赤彩が残る。胎土には雲母を多量に含み、9号竪穴出土の諸磯c式土器片と類似している。同時期の所産であろう。2は横位の竹管条線文の上に細い粘土紐を肋骨状に貼付し、その上に竹管押し引き文を施文した、いわゆる結節浮線文を施文した、ラッパ状に開く深鉢。内面はひどく黒変する。3は縦位竹管文を主とした深鉢片で、表面は薄く黒変する。4は大柄な斜格子竹管文に円形浮文を貼付した深鉢片。

〈41号土坑〉1は土師器皿または坏で、小さな口径の割りに底部が大きく、口縁部が丸く外反する特徴をもつ。磨耗のため細かな整形は不明である。2は高台皿または坏の底部で、見込み部は丸く突出し、高台部は丸く外反する。

〈44号土坑〉 1は柱状高台坏または皿で、口縁部を欠くが大形品である。柱状部は逆台形を呈し、端部は面取りを行う。底部は回転糸切りのままとする。胎土はやや粗い。

〈37号ピット〉1は器壁4mmの薄手の土師器甕で、口縁部が緩やかに外反した、あまり例をみない器形である。胎土は平安末に多い柱状高台坏に類似している。幅広のヘラでなでたらしい痕跡が内面に残る。外面がごく薄く変色する。2は土師器羽釜で、幅2.3cm程度の鍔が巡る。内外面とも黒変している。

〈122号ピット〉 1は土師器柱状高台坏あるいは皿で、全体に磨耗するため細部の形状、製作技法は不明である。

〈957号ピット〉 1は古瀬戸瓶子肩部片で、肩部には3条の状線があり、灰釉を施釉する。首は細く、内面には指頭痕が多数付着する。

〈7号溝〉1は白磁碗で、口唇部は端反とし、外面はヘラ削りののち釉を上半に施釉し、内面は全体に施釉する。内面の釉の表面には白色粒、鉄分が浮き出ている。

〈8号溝〉1は白磁碗で、口縁部は丸く外反し、内外面には全体的に施釉する。外面には隆起した部分があるが、文様かどうかは不明。2は直径4.7cm程度の土製円板で、片面には糸切り痕らしき痕跡があるが、全体に磨耗が著しく、整形技法など不明である。胎土は平安末の柱状高台土器に似る。

〈1号河道〉 1は直径12cm余の土師器坏で、ロクロナデ整形、回転糸切りを行う。内面は薄く黒変し、灯明具に使われたらしい。2は直径17cmの大形坏で、ロクロナデ、底部に回転糸切痕をもつ。底部はわずかに柱状高台状に立ち上がっている。内外面は全体的に薄く黒変し、1同様に灯明具への転用がみられる。3は円筒形の土師器小形甕で、口縁部と底部の接点のない破片のため、器高は不明である。外面口縁部には横位ハケメがみられ、体部は荒れている。内面はヘラナデとする。底部には木葉痕が付着し、外面は全体に薄く変色する。

〈遺構外〉 1は口縁部が緩やかに外反する甕で、外面を指等によるナデ、内面を幅広のナデにより調整する。内外面ともに変色するが、とくに外面は薄く黒変している。

〈2号竪穴胎土分析用土器片〉（図7）いずれも土師器片で、1・2は高坏脚、3～5はS字甕で、3·4は胴部、5は底部である。1は外面ナデ、内面は横ハケとする黄褐色の色調を呈し、2は甕に類似した茶褐色系の色

調で、内外面ともにハケメを残す。３・４はともに外面ハケメ、内面ナデとし、内面には指頭痕が残る。３の外面には薄くススが付着する。５は台付甕の底部から脚にかけての部分で、外面にはハケメがかすかに残り、内面はナデとする。３・５の色調が褐～黄褐色でやや類似し、４は被熱のためか暗褐色となっている。

表３　土器・陶磁器観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形技法　外/内/底	色調　外/内	胎土	残存率%	焼成	注記	備考
30	1竪	1	瓦質	内耳鍋	中世	(28.3)/-/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い黄橙/灰褐	赤・長・雲	30	やや不良	20,21,147,152	外面スス付着
30	2竪	1	土師	坩	古墳	19.3/-/7.0	ナデ/ナデ・磨き/ナデ	明橙/鈍い橙	長・赤・雲・石・角	70	良	82,85,86	底部孔径2.8cm
30	2竪	2	土師	壺	古墳	8.8/-/-	ハケメ/ハケメ/-	橙	長・雲・石・赤・角	－	良	2竪84	
30	2竪	3	土師	甕	古墳	-/4.1/-	ハケメ/ナデ/ナデ	鈍い褐/褐・黒褐	雲・長・石・赤	－	良	2竪83	内面黒斑
30	2竪	4	土師	壺	古墳	(15.4)/-/-	ナデ/ナデ/-	赤褐/鈍い赤褐	長・雲・赤	－	良	2竪床47	
30	2竪	5	土師	高坏	古墳	12.0/-/-	ハケメ・ナデ/ミガキ/ハケメ・ナデ	黄橙/鈍い黄褐	長・雲・赤	80	良	2竪77	内面変色
30	2竪	6	土師	小形壺	古墳	8.6/5.3/12.2	ハケメ・ナデ/ナデ/ナデ	赤～暗褐/赤～淡橙	長・赤・角	100	良	2竪37	外面黒斑
30	2竪	7	土師	小形壺	古墳	11.5/4.8/13.4	ハケメ/ハケメ・ナデ/ナデ	橙・明赤褐	長多・角・雲少	80	やや良	2竪43,44,81,床94	外面やや荒れ
30	2竪	8	土師	台付甕	古墳	-/-/-	ハケメ/ナデ/-	黄橙/赤橙	長・雲・石・角	－	良	2竪床88	
30	2竪	9	土師	壺	古墳	-/-/-	ナデ/ハケメ/-	黄褐/黄・黄褐	雲多・赤・長	－	良	2竪87,床225,床226	
30	2竪	12	土師	台付甕	古墳	-/9.2/-	ハケメ/ハケメ/ハケメ・ナデ	鈍い褐/明赤褐	雲・長・角	－	良	2竪76	
30	2竪	13	土師	壺	古墳	-/(8.3)/-	ハケメ・ナデ/ハケメ・ナデ/ナデ	鈍い黄橙	長・雲・角	－	良	2竪床58	外面黒斑
32	3竪	1	土師	坏？	古墳	(11.8)/-/-	ハケメ・ナデ/ハケメ・ナ	赤褐	長・雲・角	－	良	3竪71	
32	3竪	2	土師	台付甕	古墳	-/(8.8)/-	ナデ/ナデ/-	明黄褐/橙	長・雲・角・赤	－	不良	3竪62・63	摩滅顕著
32	4竪	1	土師	柱状高台皿	平安	8.4/5.4/4.1	ナデ/ナデ/糸切	鈍い褐	長・雲・石・赤	70	やや良	4竪床113・115	内面黒変
32	4竪	2	土師	坏	平安	-/(7.0)/-	ナデ/ナデ/糸切？	明褐/鈍い褐	長・雲・赤・角	－	やや良	4竪112	内面変色
32	4竪	3	土師	坏	平安	-/6.2/-	ナデ/ナデ/糸切	橙	長・石・雲・赤	－	不良	4竪117	
32	4竪	4	土師	甕	平安	(34.0)/-/-	ハケメ/ナデ・ハケメ・指頭痕/-	明褐～黒褐	雲多・長多・角・赤	－	良	4竪床107・108・110・竈	
32	5竪	1	土師	皿	平安	8.7/4.8/2.7	ナデ/ナデ/糸切	鈍い褐/褐	雲多・長・石・赤	100	良	5竪122	
32	5竪	2	土師	皿	平安	8.4/2.6/4.5	ナデ/ナデ/糸切	黄橙	長・石・赤・雲	100	不良	5竪123	磨耗顕著
32	5竪	3	土師	皿	平安	8.6/4.4/2.5	ナデ/ナデ/糸切	鈍い橙	長・雲・赤	50	やや良	5竪床126	
32	5竪	4	土師	皿	平安	8.4/4.4/3.4	ナデ/ナデ/糸切	橙	長・雲・角・赤	100	やや良	5竪121	
32	5竪	5	土師	柱状高台皿	平安	8.5/4.9/3.3	ナデ/ナデ/糸切	黄橙	長・赤・角・雲	100	やや良	5竪124	磨耗顕著　外面黒斑
32	5竪	6	土師	柱状高台皿	平安	(8.6)/4.8/3.6	ナデ/ナデ/糸切	明褐	長・石・角・赤	70	不良	5竪120	摩滅顕著
33	7竪	1	土師	坏	平安	14.7/6.0/3.8	ナデ/ナデ/糸切	橙	長・石・角・赤	80	やや良	7竪竈372	内外面一部黒斑
33	7竪	2	土師	甕	平安	-/(14.0)/-	ナデ/ナデ/木葉痕	鈍い赤褐	長多・角・石	－	良	7竪床329	
33	7竪	3	土師	甕	平安	(31.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い赤褐	長多・角・雲・赤	－	良	床323・324・327・328,竈377・378・399	
33	9竪	1	縄文	深鉢	縄文前	(13.2)/(10.0)/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い褐	雲多・長・石・赤	－	やや良	1河310・315・316・342・344	
33	9竪	2	縄文	深鉢	縄文前	-/(9.8)/-	竹管文/ナデ/ナデ	褐	雲多・長・石・赤	－	やや良	1河302	内面黒変
33	9竪	3	縄文	鉢	縄文前	-/11.0/-	ナデ/ナデ/ナデ	明褐/鈍い褐	長・石・雲・赤	－	良	1河274	内面薄く黒変
33	9竪	4	縄文	深鉢	縄文前	-/14.9/-	竹管文・貼付文/ナデ/圧痕	褐/暗褐	長多・雲多・角	－	やや良	9竪353	内面薄く黒変
33	9竪	5	縄文	深鉢	縄文前	-/12.0/-	竹管文・貼付文/ナデ/？	明黄褐/暗褐	長多・雲多・石・赤	－	良	9竪352	内面黒変
33	9竪	6	縄文	把手	縄文前	－/－/－	竹管文・三角抉り文/ナデ/-	暗褐/褐	雲多・赤・長	－	良	1河297	外面白色付着
33	9竪	7	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・三角抉り文/ナデ/-	鈍い褐/灰褐	雲多・長・角	－	良	1河373	
33	9竪	8	縄文	深鉢	縄文前	－/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	暗褐	長・雲・角	－	良	1河298・300	
33	9竪	9	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	鈍い褐/褐	長・雲・角・石	－	良	1河282	
33	9竪	10	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	暗褐/黒褐	雲多・長・赤	－	良	1河265	内外面薄く黒変？
33	9竪	11	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	暗褐/黄褐	雲多・長多	－	良	1河264	外面黒変
33	9竪	12	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	暗褐	長多・雲多・石・赤	－	良	1河266	外面黒変
33	9竪	13	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文/ナデ/-	黒褐/明褐	雲多・長・角	－	良	1河281	外面黒変
33	9竪	14	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	明褐/暗褐	雲多・長・角	－	良	1河312	内面変色
33	9竪	15	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	ナデ/ナデ/-	明褐/黒褐	長多・雲・角	－	良	1河307	内面黒変
34	1掘(837ピ)	1	土師	坏	平安	-/(9.2)/-	削り/暗文？/削り？	橙	長・雲・赤	－	良	362	
35	27土	1	土師	坏	平安末	13.6/6.1/5.1	ナデ/ナデ/糸切	鈍い褐	長・赤・角・石	100	良	192	タール痕
35	27土	2	土師	柱状高台坏か	平安末	-/6.5/-	ナデ/ナデ/糸切	赤褐	長・石・赤	－	良	193	
35	28土	1	土師	柱状高台	平安末	-/6.6/-	ナデ/ナデ/糸切	明赤褐	長多・雲・赤・角	40	良	216	
35	40土	1	縄文	有孔土器	縄文前	(23.2)/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い褐/褐	雲多・長・角	－	良	40土398	内面一部赤彩
35	40土	2	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・結節浮線文/ナデ	鈍い黄褐/黒褐	雲多・長・石・赤	－	良	40土346	内面黒変
35	40土	3	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文/ナデ/-	鈍い褐/明赤褐	長多・雲・角	－	良	40土397	
35	40土	4	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管文・貼付文/ナデ/-	褐/暗褐	雲多・長・角	－	良	40土351	
35	41土	1	土師	皿	平安末	9.4/4.8/2.6	ナデ/ナデ/？	橙	長・石・赤・雲	60	やや不良	41土361	磨耗
35	41土	2	土師	高台皿	平安末	-/7.4/-	ナデ/ナデ/ナデ	明橙	長・石・赤・雲	40	良	41土360	
35	44土	1	土師	柱状高台坏	平安末	-/6.2/-	ナデ/ナデ/糸切	明褐	長多・赤・角・雲	40	良	44土366	
35	37ピ	1	土師	甕？	平安？	(18.8)/-/-	ナデ/ナデ/-	褐/明褐	雲多・長・角・赤	－	良		
35	37ピ	2	土師	羽釜	平安	(21.8)/-/-	ナデ/ナデ/-	黒褐	長・赤・石・雲	－	良	37ピ1	内外面黒変
35	122ピ	1	土師	柱状高台	平安末	-/5.8/-	ナデ/ナデ/？	橙	長・雲・赤	－	不良	122ピ168	磨耗
35	888ピ	1	土師	坏	平安末	-/4.9/-	ナデ/ナデ/糸切	黄橙	長多・石・赤・雲	－	良	392	
35	957ピ	1	古瀬戸	瓶子	平安末	-/-/-	沈線・施釉/ナデ・指頭痕/-	灰オリーブ/灰白		－	良	957ピ431	
35	7溝	1	白磁	碗	平安末	(13.8)/-/-/	削り・施釉/施釉/-	灰白～灰褐		－	良	7溝178	
35	8溝	1	白磁	碗	平安末	(12.9)/-/-	施釉/施釉/-	灰白		－	良		
35	1河	1	土師	坏	平安末	12.8/7.0/4.0	ナデ/ナデ/糸切	褐/暗褐	雲・赤	100	良	1河292	内面薄く黒変
35	1河	2	土師	坏	平安末	17.2/7.4/5.2	ナデ/ナデ/糸切	暗褐	雲・赤・長	60	良	1河291	内外薄く黒変
35	1河	3	土師	小形甕	平安？	(10.0)/7.0/-	ナデ/ナデ/木葉痕	赤褐	長・雲・石・角	－	良	1河286,289	
35	遺構外	1	土師	甕	平安	(25.5)/-/-	ナデ/ナデ/-	暗褐/褐	長多・石・雲・角	－	良	13	

表４　石器観察表

図	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	重さg	石材	色調	注記	備　　考
30	1竪	2	打斧	8.4/5.2/1.7	108	ホルンフェルス	灰オリーブ	1竪16	劣化
31	2竪	18	打斧	8.4/7.2/1.3	135	粘板岩	灰白	2竪36	劣化
34	9竪	16	打斧	8.9/4.3/1.5	47	ホルンフェルス	浅黄	1河276	劣化
34	9竪	17	打斧	8.2/4.3/1.1	39	粘板岩	灰オリーブ	1河340	
34	9竪	18	磨石	12.4/6.9/4.3	713	花崗岩類	灰白・灰	9竪356	表裏面中心に擦痕
34	9竪	19	磨石	11.8/8.1/7.0	1024	安山岩	灰オリーブ	1河285	表面・側面に使用痕
34	9竪	20	磨石	15.7/9.4/6.5	1400	花崗岩類	灰白	335	
34	9竪	21	磨石	8.8/8.1/4.3	460	花崗岩類	浅黄	1河303	表裏面を使用
34	9竪	22	台石	39.1/35.5/12.3	25400	花崗岩類	灰白	363	
35	33土	1	磨斧	7.7/4.9/2.4	176	緑色凝灰岩？	褐	33土219	
35	39土	1	打斧	9.6/5.0/1.1	63.6	粘板岩	灰黄	338	

表５　土製品観察表

図	地点	No.	種別	長/短/厚cm	残存率%	重さg	整形技法　外/内	色調 外/内	胎土	焼成	注記	備考
30	2竪	10	ミニチュア壷	口4.9/底3.0/高6.6	95	91.0	ナデ/ナデ/ナデ	明褐～黒褐	長・雲・石	良	2竪75	外面黒斑
30	2竪	11	ミニチュア甕	口(7.7)/底3.4/高6.8	90	106	ハケメ・ナデ/ハケメ・ナデ/ナデ	鈍い赤褐	長・雲・角	良	2竪32	
31	2竪	14	粘土玉	16.9/16.4/15.2	100	7420	ナデ	暗褐～黒褐	長・赤・雲	－	2竪128	未焼成
31	2竪	15	粘土玉	17.1/16.2/11.8	100	3360	ナデ	暗褐	長・赤・雲	－	2竪127	未焼成
31	2竪	16	粘土玉	18.0/14.4/11.4	100	2680	ナデ	暗褐	長・花・雲・赤	－	2竪227	未焼成
31	2竪	17	粘土玉	15.4/11.3/8.2	100	1440	ナデ	鈍い黄褐～暗褐	長・赤・雲	－	2竪228	未焼成
32	6竪	1	土錘	6.0/5.5/6.0	95	139.1	ナデ・穿孔	鈍い橙	長・雲・赤・角	不良	6竪144	
34	9竪	23	焼成粘土塊	6.9/3.8/3.5	－	69.5	指頭痕	褐	長・雲・赤・角	良	1河309	
35	8溝	2	土製円盤	4.7/4.5/1.1	90	20.6	ナデ	橙	長・雲	やや良		磨耗

表６　遺跡出土遺物量

遺構名	縄文	土師坏系	土師甕系	須恵器	土師質土器	灰釉陶器	中世陶器	近世陶器	焼成粘土
1竪	30	24	352		308				
2竪		455	3051			4	4		8
3竪	85	69	221					2	
4竪		442	2310			15			
5竪		490	236			4			
6竪			203						35
7竪		248	1784	5					
8竪	79	71	88						
9竪	172	2326	326		471				14
1掘立		13	12						70
1溝		10	30				4		
2溝		5	6					10	
3溝		6	60						
4溝	3		7						
7溝		60	54			13			
8溝	9	1	7						
9溝		4	5						
1河	445	443	333	40				84	
2河	20	104	64						
2土	9								
3土			10			10			
4土	20		34						
6土			2						
7土	48								
9土	43	3							
12土			30						
27土	9	340							
28土		262							
33土	12								
38土		6							
39土			35						
40土	91		78						
41土		109							
44土		268							
45土	28								
14ピ			27						
17ピ						5			
36ピ			35						
37ピ			110						
75ピ			5						
84ピ			4						
94ピ			4						
99ピ			6						
108ピ			3						
109ピ			4						
122ピ		64							
157ピ			8						
180ピ	20								
191ピ			8						
201ピ			21						
215ピ			7						
233ピ			7						
242ピ			20						
263ピ	27								
271ピ			6						
316ピ	45								
396ピ	10								
415ピ	20								
424ピ			4						
438ピ	13								
467ピ	7								
472ピ	8								
482ピ	6								
495ピ			6						
496ピ			9						
528ピ			10						
559ピ			3						
570ピ	9								
573ピ	90								
574ピ	6								
579ピ			13						
581ピ			42						
597ピ	14								
622ピ	2								
642ピ			5						
651ピ			4						
662ピ			8						
674ピ			5						
687ピ	24								
722ピ			4						
723ピ			12						
724ピ	11		8						
734ピ			5						
736ピ			8						
737ピ	9								
741ピ	18								
744ピ	17								
752ピ	8								
755ピ			4						
763ピ			16						
776ピ			7						
783ピ			6						
793ピ	10								
795ピ	19								
801ピ	21								
802ピ	10								
809ピ	10								
812ピ							5		
814ピ			6						
825ピ	5								
837ピ	16	4	123						
855ピ	10								
856ピ	19								
865ピ			7						
867ピ	6								
868ピ			6						
869ピ			18						
871ピ			56						
877ピ	16								
881ピ	14								
888ピ		40							
900ピ	58		33						
935ピ	12								
944ピ			3						
952ピ			4						
957ピ							60		
981ピ	13		7						
1焼土			73						
西区	22	3	24					23	
遺構外	336	1	834	61			40	6	
合計	2064	5871	10986	106	779	51	113	125	127

第４章　理化学的分析

梶畑Ｂ遺跡の理化学的分析として、２号竪穴の炭化材樹種同定と年代測定、各竪穴竈・土坑出土の炭化種実分析、２号竪穴出土の生粘土塊（粘土玉）および土師器の胎土分析、１号竪穴の内耳土器の胎土分析を実施し、炭化材・炭化種実についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、胎土分析に関しては（財）山梨文化財研究所地質研究室に分析依頼をした。

２号竪穴は古墳時代前期の焼失家屋で、上屋が焼失し床面に焼け落ちた状態で床面上から多量の炭化材が検出された。また主柱４本のうち南西、北西の２本については床面と同レベルで炭化材が見つかり、柱が直立状態で焼失し、火の回りが遅い床面に近い部分が炭化したものと思われた。したがって柱、垂木材に用いられた樹種を同定し、木材利用に関するデータを得るとともに周辺植生史解明のための材料とすること、炭化材の年代測定により建築年代の推定を行い、土器編年との対応関係に用いることを目的とする。

炭化種実については、２号竪穴床面上の炭化物を多く含んだ覆土、平安末の竪穴の竈覆土、土坑のうち炭化物を多く含む土をそれぞれ１～２袋程度、現場でサンプリングしていたので、それらを水洗選別し、炭化物を抽出した。そのうち肉眼的に炭化種実（イネ・雑穀類など）が含まれると判断された試料を同定分析した。なお土壌水洗にあたっては、土壌を乾燥させたのち重量を測定し、浮遊選別および0.5ミリメッシュの金属製篩を通して得られた全ての炭化物を回収し、その状態で同定試料とした。

粘土玉については２号竪穴西壁寄りで４点出土し、笛吹市鞍掛遺跡例での類例の存在から土師器制作に用いられた粘土の可能性が推測できることから、同じ竪穴出土の土師器片との鉱物組成上の比較を行い、その可能性を探った。比較した土師器については煮沸用のＳ字甕、器台に用いた高坏などの小破片で、さらに県内各地の分析事例との比較を行っている。

１号竪穴の内耳土器については、16世紀代を中心に甲斐国内に普及した信濃型鍋が出現する以前、15世紀以前に甲斐国内に存在した甲斐型鍋ともいわれる内耳土器で、土師質土器擂鉢との胎土の類似性がうかがえ、内耳土器が擂鉢制作の系譜で出現をみたと考えられている。鉱物組成上、在地といえるかどうか、県内の土師質土器との比較を行う。

第１節　梶畑Ｂ遺跡２号竪穴の放射性炭素年代測定・樹種同定

松元美由紀・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

１．試　料

試料は、古墳時代前期の２号竪穴から出土した炭化材である。なお、今回の分析では、発掘調査時に試料を採取する機会を得たことから、可能な範囲で出土状況や断面（木口）を主体とした形状および木取りの観察も行った。分析に供した試料は、図６に示した炭化材42点（№１～42）と、これらの炭化材取上げ後の床面精査時に確認された北西柱穴（721号ピット；取上番号242）および南西柱穴（723号ピット；取上番号241）より出土した炭化材２点である。また、放射性炭素年代測定には、上記した721号ピットから出土した炭化材（取上番号242）を選択し、観察範囲内の最外年輪部より採取した試料を供した。

２．分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・

酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に^{13}C/^{12}Cの測定も行うため、この値を用いてδ^{13}Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が68%、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3．結　果

(1) 放射性炭素年代測定

723号ピットの炭化材（取上番号241）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は1,870±30yrBPを示す。較正暦年代（測定誤差σ）はcalAD 83-calAD 210である（表7）。

(2) 樹種同定

結果を表8、図6に示す。2号竪穴から出土した炭化材は、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

表７　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代		相対比	測定機関 Code No.
2号竪穴 723ピット 取上番号241 炭化材(コナラ節)	1,870±30	-28.28±0.43	1,869±26	σ	cal AD 83 - cal AD 140	0.685	IAAA-112362
					cal AD 151 - cal AD 170	0.170	
					cal AD 194 - cal AD 210	0.145	
				2σ	cal AD 77 - cal AD 222	1.000	

表８　樹種同定結果

試料 No.	試料 枝番	断面形状 (木取り)	樹種	備考
1		半円状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
2		半円状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
3	①・②	板状(板目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
4		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
5		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
6		楕円状(柾目～追柾)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
7		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
8	①	-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
9	①	半円状か？(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	③	半円状か？(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
10		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
11	①	半円状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
12		半裁状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
13		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
14		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
15	①	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
16		-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
17	①・②・③	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	④	(円形,1/4分割材か?)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	上面が木口
18		楕円状(柾目～追柾)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
19		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
20	①・②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
21		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
22		-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
23		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
24		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
25	①	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	③	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
26	①	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
27		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
28		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
29		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
30	①	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
31		板状(板目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
32		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
33		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
34		-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
35		板状(柾目～追柾)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
36	①	半円状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	②	板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
37		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
38		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	本体(中央部)
39		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
40		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
41		板状(柾目)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
42		(板目か)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
241		分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	723ピット,試料No.17と同一個体か？、残存径約9cm
242		分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	721ピット,残存径約4cm

4．考　察

２号竪穴から出土した炭化材には、落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節が認められた。クヌギ節には、クヌギとアベマキの２種類があるが、現在の本地域ではクヌギが一般的であるのに対し、アベマキは分布していないことから、２号竪穴で確認されたクヌギ節はクヌギの可能性が高い。また、コナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワがあるが、現在の本遺跡周辺で最も一般的なのはコナラである。

クヌギとコナラは、共に二次林構成種であるが、コナラがやや乾燥した台地上を好む。一方、クヌギは水分の多い土地を好み、関東地方では後背湿地などにエノキと共に生育している事例もみられる。前述したように、本遺跡周辺は段丘化した扇状地面に位置するが、今回の分析結果からクヌギ節やコナラ節からなる二次林が周辺に分布していた可能性がある。また、クヌギ節とコナラ節の木材は、いずれも重硬で強度が高い部類に入ることから、建築材として有用な木材の利用が示唆される。

山梨県内における古墳時代前期の竪穴住居跡から出土した炭化材の事例についてみると、峡東地域では、当該期の事例は確認することはできないが、横町遺跡（旧春日居町）の弥生時代末とされる住居跡にクヌギ節を主体として、コナラ節やケヤキが混じる組成が確認された事例や、諏訪尻遺跡（旧境川村）の弥生時代最終末～古墳時代前期初頭の24号住居跡からクヌギ節が確認された事例などがある（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2000,2002）。また、峡北地域では、当該期の事例が比較的多く、坂井南遺跡（韮崎市）ではクヌギ節を主体として、針葉樹のモミ属、マツ属複維管束亜属、カヤ、ヒノキ属、落葉広葉樹のアサダ、カエデ属、ケヤキ、ケンポナシ属、ヤマグワ、コナラ節、カバノキ属、クリ、サクラ属、常緑広葉樹のツバキ属が混じる組成、龍角西遺跡（旧長坂町）ではコナラ節とクヌギ節、酒呑場遺跡（旧長坂町）ではコナラ節を主体としてハンノキ属が混じる組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1986,2001,2005）。以上の遺跡では、クヌギ節やコナラ節を利用する、あるいは主要構成種となる状況が窺える。一方、曽根遺跡（南アルプス市）の弥生時代末および古墳時代初頭の住居跡ではヤマグワを主体としてアサダ、コナラ節、クリ、

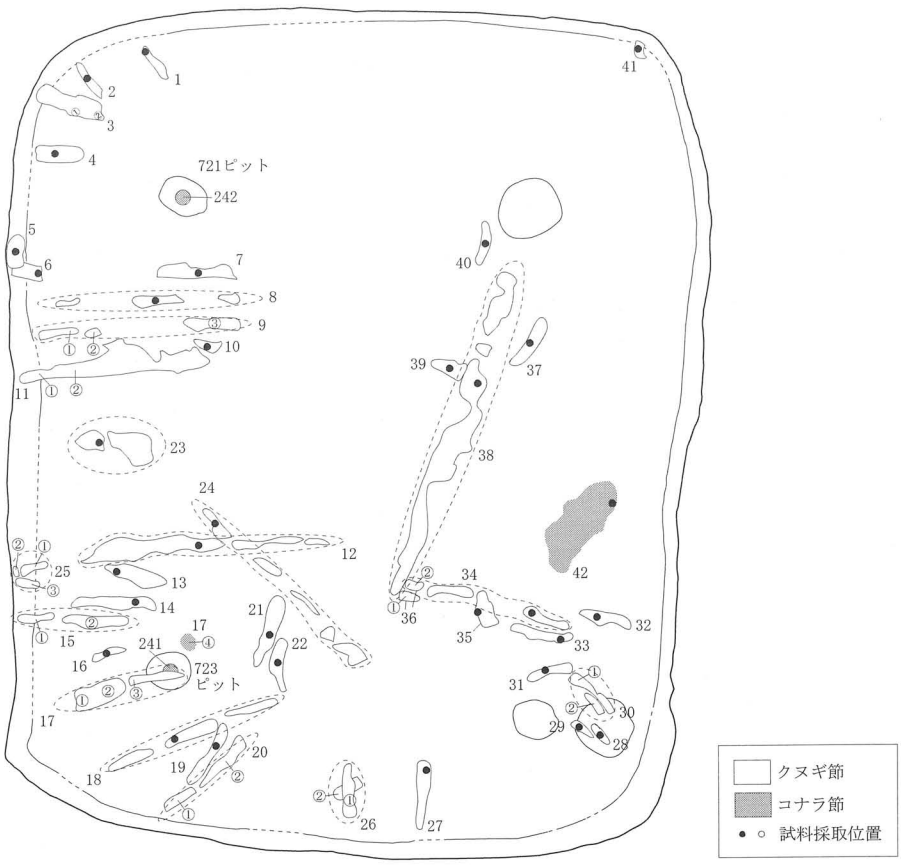


図６　２竪炭化材出土状況（略図）および炭化材の樹種

カツラ、カエデ属が混じる組成（パリノ・サーヴェイ株式会社,2011）も確認されており、甲府盆地においても木材利用は一様でないことが確認できる。

なお、２号竪穴から出土した炭化材は、覆土下層に認められた焼土の下位より検出されている。炭化材の出土状況の確認では、屋根材に相当するカヤ材などに認められることの多い、イネ科の稈や小径木は確認できなかった。また、床面付近における炭化材の分布は、住居跡北東部は疎らであるが、その他の箇所では比較的密に分布する。詳細にみると、竪穴西壁と南壁、さらに東壁南側では、壁際から住居中央に向かって並行に分布しており、住居北および南西隅付近では壁際に向かって放射状に並ぶ様子が確認できる。これらの出土状況から、住居跡壁際および隅より出土した炭化材は垂木および垂木に付随する部材と推定される。また、№24、№38の炭化材２点は、垂木と推定される炭化材と交差する状況から、梁や桁に由来する可能性がある。さらに、床面の精査時に確認された北西柱穴（721号ピット）の炭化材（取上番号242）と南西柱穴（723号ピット）の炭化材（取上番号241）は、それぞれ出土状況から柱材と考えられる。これらの２試料からはコナラ節が確認されており、クヌギ節を主体とする他の部材と樹種が異なるため、木材の選択利用も想定される。なお、南西柱穴（723号ピット）付近からは、試料採取時に楕円形を呈し木口を上面とする炭化材（№17④）が確認されている。当試料は、出土位置や確認された樹種から炭化材（取上番号241）と同一個体の可能性が高い。

次に出土炭化材の横断面（木口）の形状と木取りについてみると、薄板～膜状で観察が困難であった試料を除くと、板状（柾目板）が多数を占め、半円状（柾目）や楕円状を呈するものも認められた。また、柱穴から出土した炭化材（取上番号241,242）も分割材状を呈する試料であった。本来の形状の推定は困難であるが、これらの所見から建築部材には分割材が多く利用されたことが推定される。なお、竪穴東壁付近から出土した炭化材（№42）は、出土状況が垂木などと推定される炭化材と異なり、形状も幅広であるという特徴が認められた。確認された樹種から柱材の可能性も示唆されるが、柱穴よりやや離れた位置より出土しているため、部材の特定には至らない。

第２節　梶畑Ｂ遺跡の炭化種実同定

松元美由紀・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

１．試　料

試料は、上記した古墳時代前期の竪穴住居跡（２号竪穴）の炉埋積物、平安時代の竪穴住居跡（４号竪穴、５号竪穴、７号竪穴）のカマドおよび土坑（27土）埋積物の水洗選別により回収された炭化物（試料番号１～７）である。本分析では、前述した分析目的を考慮し、炭化種実を対象として調査を行った。試料の詳細は結果とともに表９に示す。

２．分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な炭化種実を拾い出す。炭化種実の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）などとの対照から実施し、結果を一覧表に示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、炭化種実を分類群毎に容器に入れて保管する。

３．結　果

(1) 炭化種実の出土状況

結果を表９に示す。７試料からは、木本２分類群（モモ、オニグルミ）41個と、草本13分類群（イネ、オ

オムギ、コムギ、アワ、ヒエ近似種、キビ、イネ科、アサ、タデ属、アズキ類、マメ類（２型）、アカネ科）181個の、計222個の炭化種実を確認した。栽培種は、モモの核の破片が10個、イネの穎の破片が74個、胚乳が13個、オオムギ（？含む）の胚乳が３個、オオムギ－コムギの胚乳が２個、コムギの胚乳が16個、アワ（近似種含む）の胚乳が36個、ヒエ近似種の胚乳が１個、キビの胚乳が６個、アサの果実が４個、マメ類（アズキ類や大型を含む）の種子が13個の、計178個が確認され、全体の８割を占める。栽培種以外は、落葉高木のオニグルミの核の破片が30個、草本のイネ科の胚乳が８個、タデ属の果実が１個、アカネ科の核が４個の、計43個が確認された。

以下に、遺構別出土状況を記す。

1）２号竪穴（試料番号１）

コムギの破片が２個出土した。

2）４号竪穴（試料番号２）

カマドから、オオムギ－コムギが１個、コムギが３個出土した。

3）５号竪穴（試料番号３）

カマド内から、コムギが１個出土した。

4）７号竪穴（試料番号４、５）

カマド（試料番号４）から、イネの穎が３個、胚乳が２個と、種類不明の堅果類の破片が１個出土した。カマド焼土（試料番号５）からは、イネの穎が１個と、草本のアカネ科が２個出土した。

5）27号土坑 ２層（試料番号６，７）

試料番号６から、栽培種のモモが９個、イネの穎が69個、胚乳が４個、オオムギが１個、コムギが３個、アワ（近似種含む）が27個、キビが２個、アズキ類が２個、マメ類が５個と、草本のイネ科が５個、タデ属が１個の、計128個が出土した。また、試料番号７からは、栽培種のモモが１個、イネの穎が１個、胚乳が７個、オオムギが２個、コムギが７個、アワ近似種が９個、ヒエ近似種が１個、キビが４個、アサが４個、アズキ類が１個、マメ類が４個、マメ類（大型）が１個と、木本のオニグルミが30個、草本のイネ科が３個、アカネ科が２個の、計77個が出土した。試料番号６、７の出土個数の合計は205個で、全体の92％を占める。

(2) 炭化種実の記載

同定された各分類群を写真２に示し、形態的特徴等を以下に記す。また、状態が良好な炭化種実の計測結果を表10に示す。

〈木本〉

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo)Kitamura）クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ３～４cm、径2.5～３cm程度の広卵体。頂部が尖り、１本の明瞭な縦の縫合線がある。破片の大きさは、最大1.5cm程度。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・モモ（*Prunus persica* Batsch） バラ科サクラ属

核（内果皮）は炭化しており黒色。完形ならば、長さ２～３cm、幅1.5～1.8cm、厚さ1.4～1.7cm程度のやや偏平な広楕円体で、頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片の大きさは、最大1.0cm程度。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。核の内側表面は平滑で、種子１個が入る楕円状の窪みがみられる。

・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

胚乳と胚乳を包む穎（果）は、炭化しており黒色。一部の穎は、灰化しており灰白色を呈す。胚乳は、長さ3.8～4.6mm、幅2.4～3.0mm、厚さ1.3～1.9mmの偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、２～３本の隆条が縦列する。表面に穎（籾殻）の破片が付着した個体もみられる。

表9　炭化種実同定結果

分類群	部位	状態	古墳前期 2号竪穴 炉 1	平安時代 4号竪穴 カマド 2	5号竪穴 カマド内 3	7号竪穴 カマド 4	7号竪穴 カマド焼土 5	27号土坑 2層 6	27号土坑 2層 7	備考
木本										
オニグルミ	核	破片	-	-	-	-	-	-	30	
モモ	核	破片	-	-	-	-	-	9	1	
堅果類		破片	-	1	-	-	-	-	-	
草本										
イネ	穎(基部)	破片	-	-	-	1	1	4	-	
	穎	破片	-	-	-	2	-	65	1	27土：灰化
	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	1	-	
	胚乳	完形	-	-	-	1	-	-	5	
		破片	-	-	-	1	-	3	2	
オオムギ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	1	1	
オオムギ?	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	1	
オオムギーコムギ		破片	-	2	-	-	-	-	-	
コムギ	胚乳	完形	-	1	1	-	-	3	1	
		破片	2	2	-	-	-	-	6	
アワ	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	2	-	
アワ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	1	-	
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	24	8	
		破片	-	-	-	-	-	-	1	
ヒエ近似種	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	1	
キビ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	2	3	
		破片	-	-	-	-	-	-	1	
イネ科	胚乳	完形	-	-	-	-	-	5	3	
アサ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	
		破片	-	-	-	-	-	-	3	
タデ属	果実	完形	-	-	-	-	-	1	-	
アズキ類	種子	破片	-	-	-	-	-	2	1	
マメ類	種子	完形	-	-	-	-	-	3	1	
		破片	-	-	-	-	-	2	3	
マメ類(大型)	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	
アカネ科	核	完形	-	-	-	-	-	-	2	
		破片	-	-	-	-	2	-	-	
分析残渣(乾燥重量)	0.5mm以上	[g]	70.6	0.6	0.5	8.4	1.5	14.3	11.9	炭化材,植物片,砂礫など
	0.5mm未満	[g]	10.6	0.1	0.1	1.8	1.0	3.9	0.9	
土壌水洗量		[kg]	2.28	3.46	6.80	0.67	2.78	4.18	4.43	

表10　主な炭化種実の計測値

分類群	部位	試料番号	遺構・地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
イネ	穎・胚乳	6	27土　2層	4.62	2.41	1.29	
イネ	胚乳	7	27土　2層	4.88	3.04	1.27	
イネ	胚乳	7	27土　2層	4.48	2.19	1.86	
イネ	胚乳	7	27土　2層	3.84	2.23	1.57	
イネ	胚乳	7	27土　2層	4.15 +	2.83	1.67	
オオムギ	胚乳	6	27土　2層	4.46 +	2.17	1.89	基部欠損
オオムギ	胚乳	7	27土　2層	5.14	2.71	1.97	
オオムギ?	胚乳	7	27土　2層	5	3.54	2.39	
コムギ	胚乳	1	2堅	2.7	1.17 +	2.13	
コムギ	胚乳	2	4堅　カマド	4.13	2.81	2.35	
コムギ	胚乳	3	5堅　カマド内	3.06	2.45 +	1.94	
コムギ	胚乳	6	27土　2層	3.5	2.47	2.3	
コムギ	胚乳	6	27土　2層	3.26	2.22	2.17	
コムギ	胚乳	6	27土　2層	2.49	1.5 +	1.93	
コムギ	胚乳	7	27土　2層	3.51	3.14	2.99	
アサ	果実	7	27土　2層	3.99	3.19	2.5	
アズキ類	種子	6	27土　2層	4.82	3.41	1.63 +	半分未満
アズキ類	種子	6	27土　2層	3.66	2.5	1.16 +	半分
アズキ類	種子	7	27土　2層	5.44	3.16	1.73 +	半分
マメ類	種子	6	27土　2層	4.59	3.21	2.64	臍欠損
マメ類	種子	6	27土　2層	4.06	2.72	2.59	臍欠損
マメ類	種子	6	27土　2層	3.04	1.93	1.89	臍欠損
マメ類	種子	6	27土　2層	3.17 +	2.41	1.18 +	半分未満
マメ類	種子	7	27土　2層	3.66	2.17 +	2.97	臍欠損
マメ類	種子	7	27土　2層	3.3	2.4	1.17 +	半分
マメ類(大型)	種子	7	27土　2層	6.49 +	5.34	3.51	臍欠損

＊計測値はデジタルノギスによる。完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス(+)で示した

穎は、完形ならば、長さ６～7.5㎜、幅３～４㎜、厚さ２～３㎜程度の偏平な長楕円体。破片は最大1.3㎜程度。基部に大きさ１㎜程度の斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は５脈、内穎は３脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

・オオムギ（*Hordeum valgare* L.）　イネ科オオムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ 5.1㎜、幅 2.2 ～ 2.7㎜、厚さ 1.9 ～ 2.0㎜のやや偏平な紡錘状長楕円体で、両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で微細な縦筋がある。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ2.5～4.1㎜、幅2.2～3.1㎜、厚さ1.9～3.0㎜の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面は微細な粒状模様がある。

・アワ（*Setaria italica* (L.) P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

胚乳、穎は炭化しており黒色。長さ1.2～1.5㎜、幅1.1～1.3㎜、厚さ１㎜程度の半偏球体で、腹面は平ら、背面は丸みがある。基部正中線上は、背面に長さ0.8㎜、幅0.4㎜の馬蹄形、腹面に径0.3㎜の広倒卵形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で横皺状模様があり、表面に穎（果）の破片が付着する。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。なお、小型で細身の穎・胚乳と、穎の付着が確認されない胚乳をアワ近似種としているが、ほぼアワと思われる。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科ヒエ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ1.6㎜、幅1.6㎜、厚さ1.2㎜の半偏球体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上は、背面に長さ1.3㎜、幅 0.8㎜の馬蹄形、腹面に径0.5㎜程度の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で微細な網目模様が縦列する。

・キビ（*Panicum miliaceum* L.）　イネ科キビ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ1.8～２㎜、幅1.5～1.7㎜、厚さ1.3㎜のやや偏平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。胚乳の基部正中線上に、径 0.5㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面

なお、幅が0.5㎜程度の細身の胚乳をイネ科（Gramineae）としている。野生種に由来する可能性と、生育状態が不良なアワ、ヒエ、キビなどの栽培種に由来する可能性が考えられる。

・アサ（*Cannabis sativa* L.）　クワ科アサ属

果実は炭化しており黒色。長さ4.0㎜、幅3.1㎜、厚さ3.0㎜の歪な広卵体で一側面は鈍稜のある狭卵形、他方は稜をなす。稜に沿って割れた破片もみられる。両端は切形で、頂部に径0.7㎜程度の楕円形の突起がある。果皮表面は粗面で葉脈状網目模様があり、断面は柵状。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実は炭化しており黒色。径 1.3㎜程度の３稜状広卵体で、焼き膨れている。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面。

・アズキ類（*Vigna* subgen. *Ceratotropics* (Piper) Verdc.）　マメ科ササゲ属

種子は炭化しており黒色。やや偏平な楕円体。出土種子は、子葉の合わせ目から割れた半分未満の破片で、大きさは、長さ3.7～5.4㎜、幅2.5～3.4㎜、半分の厚さ 1.2 ～ 1.7㎜であった。子葉内面には、北大基準（吉崎 ,1992）の「アズキグループ（幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる）」に該当する初生葉が確認された。種皮は薄く、表面は粗面。焼き崩れている種子は少ない。なお、初生葉が確認できない種子や、腹面の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍を欠損する種子をマメ類としているが、ほぼアズキ類と思われる。マメ類の種子の大きさは、長さ3.0～4.6㎜、幅1.9～3.2㎜、径1.9～3.0㎜であった。

・マメ類（大型）　マメ科

種子は炭化しており黒色、残存長さ6.5㎜、幅5.3㎜、厚さ3.5㎜の偏平な楕円体。上記のアズキ類を含むマ

メ類よりも大型で偏平であるため、区別している。ダイズ類（*Glycine max* (L.) Merr. subsp. *max* (L.) Merr.）の種子に似る。腹面の子葉合わせ目上には、長さ2.5㎜程度の幼根がやや突出し、長楕円形の臍を欠損する。種皮は薄く、表面はやや平滑で、断面は柵状。焼き膨れにより、種皮が短軸方向に裂開している。

・アカネ科（Rubiaceae）

核は炭化しており黒色。長さ0.8～１㎜、幅1.1～1.3㎜、厚さ1.1㎜程度の偏球体。腹面中央に径0.5㎜程度の楕円体の孔がある。表面には微細な網目模様がある。

４．考　察

古墳時代前期および平安時代の遺構からは、栽培種のモモ、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ（近似種）、キビ、アサ、アズキ類と大型粒を含むマメ類の炭化種実が確認された。栽培種のモモは、果実や核の中にある種子（仁）などが食用、薬用、祭祀等に広く利用される。穀類のイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ（近似種）、キビは胚乳が、アズキ類と大型粒を含むマメ類は、種子が食用される植物質食料である。アサは、果実が食用や油料に、繊維が衣料や縄などに利用される。

時期別および遺構別に出土した炭化種実の組成についてみると、古墳時代前期の２号竪穴の炉からはコムギが確認された一方、平安時代では、コムギ（オオムギ－コムギを含む）が確認された住居跡、イネが確認された住居跡とに分けられる。さらに27号土坑では、モモ、イネ、ムギ類、アワ（近似種を含む）、ヒエ近似種、キビ、アサ、アズキ類を含むマメ類およびマメ類（大型）が確認され、上記した各住居跡より分類群および数量が多いという特徴が明らかとなった。

山梨県内では、櫛原（1999）によって住居跡から出土した炭化種実の調査事例の集成が行われているが、本遺跡周辺では事例を確認することができない。また、上述した櫛原（1999）に示された甲府盆地の傾向では、弥生時代後期、古墳時代はイネ主体あるいはイネの割合が高く、８世紀前～11世紀頃はムギ類の比率が高くなり、12～13世紀はムギ類が優勢となるとしている。今回の調査では住居跡の炉やカマドから出土した炭化種実は少量であったため量比の比較には至らないが、上記した栽培種の炭化種実の出土により、本遺跡および周辺ではこれらの植物質食糧の利用が示唆される。

一方、栽培種を除いた分類群は、木本のオニグルミと、草本のイネ科、タデ属、アカネ科が確認された。オニグルミは、川沿いなどの湿潤な肥沃地に生育する落葉高木であることから、当時の遺跡周辺の森林に生育していたと考えられる。また、オニグルミは、核内部の種子が生食可能であるため、古くより植物質食糧として利用されてきた有用植物である。出土したオニグルミの炭化核は、周辺の森林から持ち込まれ、利用された植物質食料の痕跡と考えられる。イネ科、タデ属、アカネ科は、明るく開けた場所に生育する人里植物であることから、調査地近辺に生育していたことが考えられる。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

櫛原功一 ,1999, 炭化種実から探る食生活　―古代～中世を中心に―. 食の復元　―遺跡・遺物から何を読み取るか , 研究集会報告集２, 帝京大学山梨文化財研究所 ,81-98.

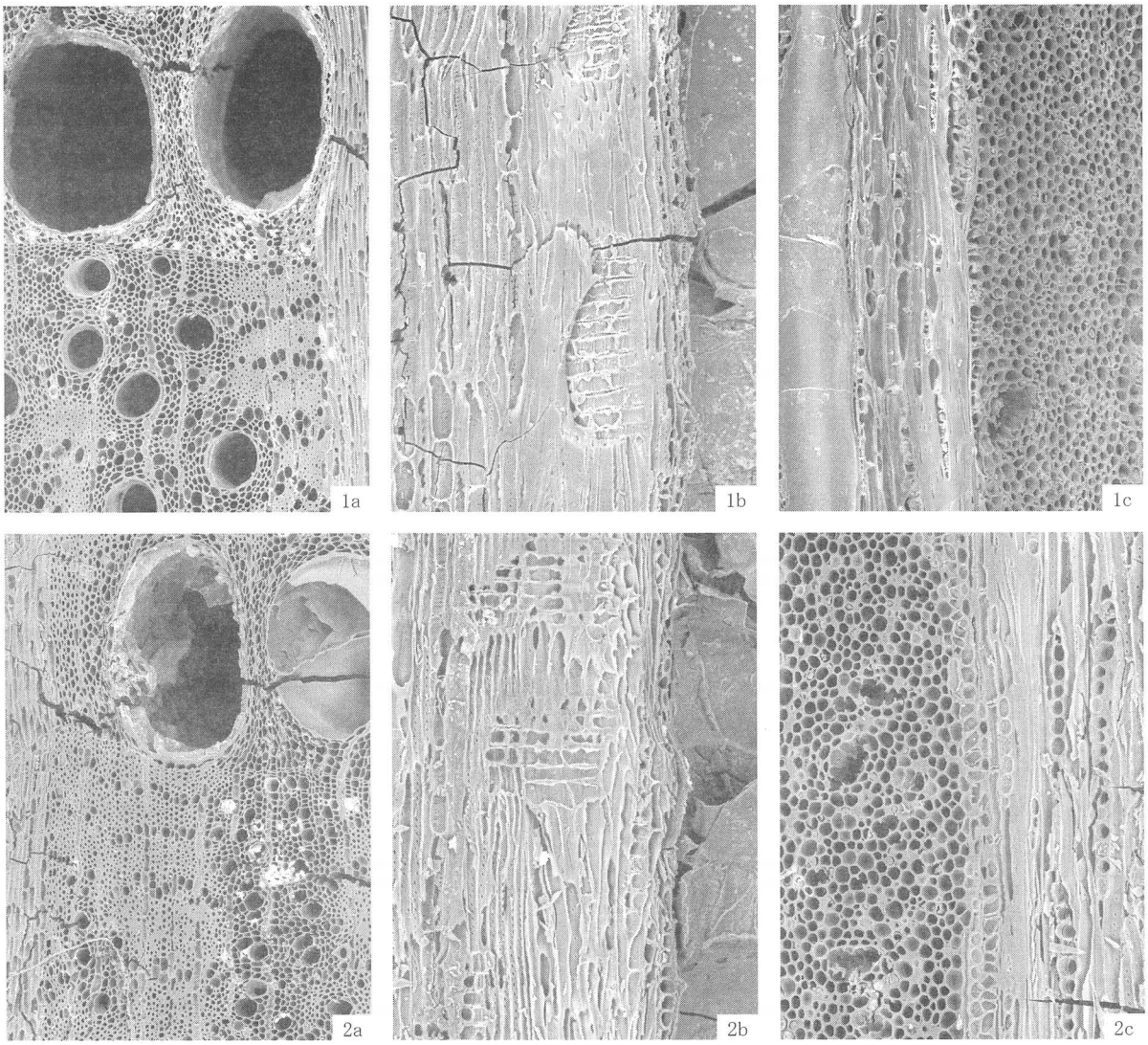
三村弘二・加藤祐三・片田正人 ,1984, 御岳昇仙峡地域の地質 . 地域地質研究報告（５万分の１図幅）, 地質調査所 ,61p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1986, 坂井南遺跡試料　花粉分析　材同定　重鉱物分析　粒度分析及び種子同定報告 . 坂井南遺跡　山梨県韮崎市坂井南遺跡発掘調査報告書 , 韮崎市教育委員会・東京エレクトロン株式会社 ,1-19.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2000,13号住居跡出土炭化材の樹種同定.東八代郡境川村　諏訪尻遺跡　境川分譲地造成事業に伴う発掘調査報告書,山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第180集,山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社,116-117.
パリノ・サーヴェイ株式会社,2001,自然科学分析.龍角西遺跡　県営広域営農暖地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査,長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集,長坂町教育委員会・狭北土地改良事務所,7-21.
パリノ・サーヴェイ株式会社,2002,横町遺跡の自然科学分析.横町遺跡,山梨県埋蔵文化財センター,97-98.
パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,酒呑場遺跡における自然科学分析.酒呑場遺跡（第１～３次）-酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書-（遺物編-本文編）,山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集,山梨県教育委員会,101-109.
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.
吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出.月刊考古学ジャーナル,№355,2-14.

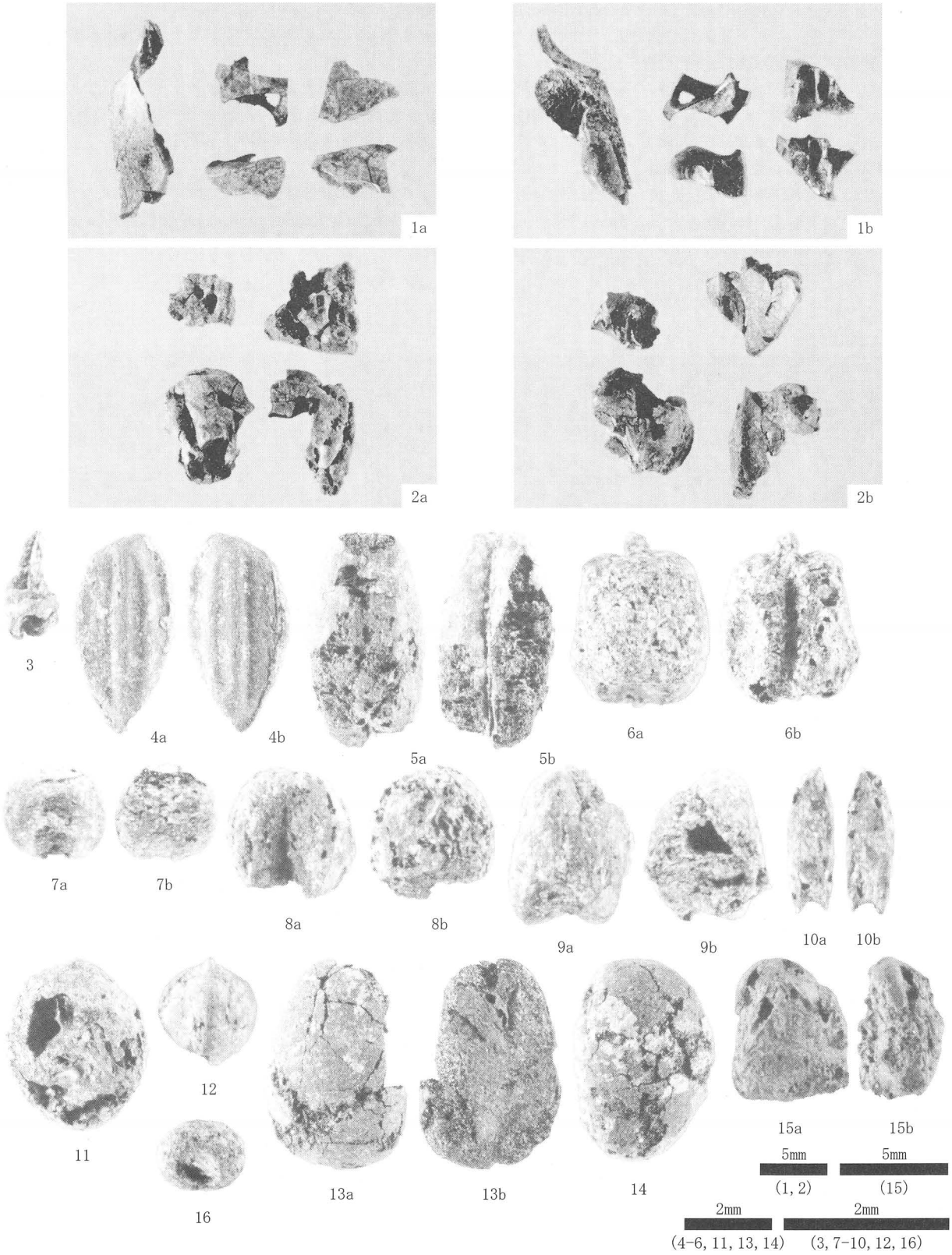
写真1　炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2号竪穴;№12)
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(2号竪穴;№17④)
a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

写真2　種実遺体



1. オニグルミ 核(7;27土 2層)
2. モモ 核(6;27土 2層)
3. イネ 穎(6;27土 2層)
4. イネ 穎・胚乳(6;27土 2層)
5. オオムギ 胚乳(7;27土 2層)
6. コムギ 胚乳(7;27土 2層)
7. アワ 穎・胚乳(6;27土 2層)
8. ヒエ近似種 胚乳(7;27土 2層)
9. キビ 胚乳(7;27土 2層)
10. イネ科 胚乳(7;27土 2層)
11. アサ 果実(7;27土 2層)
12. タデ属 果実(6;27土 2層)
13. アズキグループ 種子(6;27土 2層)
14. マメ類 種子(6;27土 2層)
15. マメ類(大型) 種子(7;27土 2層)
16. アカネ科 核(7;27土 2層)

第３節　梶畑Ｂ遺跡出土土師器、内耳土器、粘土塊の胎土分析

河　西　　学

はじめに

梶畑Ｂ遺跡は、重川の扇状地上に位置する。重川の扇状地は、笛吹川の扇状地と塩川を境界に接している複合扇状地であり、重川の堆積物が主体であると考えられるが、笛吹川および鬢櫛川による堆積物の影響も過去には想定される地形環境である。笛吹川扇状地や鬢櫛川扇状地が同心円状の等間隔の等高線分布を示すのに対し、重川扇状地では複雑な等高線が分布する特徴を示す。重川上流域は、甲府深成岩体を構成する花崗岩類と四万十帯の堆積岩および花崗岩体の接触変成作用で生じたホルンフェルスが広く分布している。梶畑Ｂ遺跡は、縄文前期、古墳前期、平安後期、中世などの時期からなる複合集落遺跡である。古墳前期の焼失家屋である２号竪穴からは西壁際に生粘土塊（粘土玉）４個が検出されていることから、ここではこれらの粘土塊と古墳前期の土師器の胎土の関係を調査することを主要な目的とし、中世の甲斐型鍋とされる内耳土器と合わせて胎土分析を行ったので、以下に報告する。

分析試料

分析試料は、表11に示す土師器５点（図７）、内耳土器１点（第30図１）および生粘土塊４点（第31図14～17）の計10点である。

分析方法

分析試料は、以下の方法で薄片を作製した。土器試料は切断機で４×2.5cm程度の大きさに切断し、残りは保存した。生粘土塊は、表面から最小限度の試料を掻き取った。試料をエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器片では鉛直断面切片（厚さ３㎜）を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.3㎜、短辺方向に0.4㎜とし、各薄片で2,000ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05㎜以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含めた。

表11　試料表

試料番号	器種等	部位	時期	地点
No.1	土師器高坏	脚部	古墳前期	2号竪穴
No.2	土師器高坏	脚部	古墳前期	2号竪穴
No.3	S字状口縁台付甕	胴部	古墳前期	2号竪穴
No.4	S字状口縁台付甕	胴部	古墳前期	2号竪穴
No.5	台付甕	底部	古墳前期	2号竪穴
No.6	内耳土器(甲斐型鍋)	胴部	15世紀	1号竪穴
No.14	粘土玉		古墳前期	2号竪穴
No.15	粘土玉		古墳前期	2号竪穴
No.16	粘土玉		古墳前期	2号竪穴
No.17	粘土玉		古墳前期	2号竪穴

分析結果

分析結果を表12に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を図８に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。変質火山岩類（凝灰岩を含める）・玄武岩・安山岩・デイサイト[1]（含流紋岩）・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩（含チャート）・炭酸塩岩（含石灰岩）・苦鉄質岩類のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示した岩石組成折れ線グラフを図９に示す。折れ線グラフのピークに基

図７　分析土器試料写真

表12　土器胎土中の岩石鉱物（数字はポイント数を、＋は計数以外の検出を示す）

試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17
石英-単結晶	118	103	96	59	95	69	121	106	61	153
石英-β型										
石英-多結晶	30	16	12	19	8	1	19	29	7	11
カリ長石	33	9	14	13	11	20	20	15	17	41
斜長石	48	109	120	85	122	152	66	79	99	116
黒雲母	10	8	13	14	12	7	23	9	20	28
白雲母	1						1			
角閃石	14	53	5	14	12	21	17	5	64	40
酸化角閃石			1			2				
単斜輝石			5	8	3					
斜方輝石			4	1	2	3		1		
カンラン石									+	1
緑簾石		2		1			1		1	
ジルコン									+	+
チタン石										+
緑泥石										1
不透明鉱物	2	1	2	1	1	3		1	2	4
玄武岩			2	2						
安山岩		1	5	11	26					1
デイサイト			48	37	54	20				
変質火山岩類	1	2	8	6	9	9	8	5	2	
花崗岩類	161	207	81	38	95	23	66	48	274	276
ホルンフェルス	10	5	7	5	7		52	14	1	1
他の変成岩類										
砂岩			1		1		4			
泥質岩			4	8	3	1		6	2	
珪質岩										
炭酸塩岩										
苦鉄質岩類										
火山ガラス-無色	1	1	1		1	4	2	1		+
火山ガラス-褐色										
変質岩石		5	5	4	1	7	2	3	4	2
変質鉱物	2	3	4	3		10	33	81	18	34
泥質ブロック	12	3		3		25	7	2	4	16
その他										
赤褐色粒子	16	33	4	18	7	43	20	20	22	19
マトリクス	1541	1439	1558	1650	1530	1580	1538	1575	1402	1256
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
石英波動消光	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
石英清澄	+		+		+	+				+
パーサイト	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
マイクロクリン	+	+	+	+	+	+	+		+	+
安山岩の斑晶鉱物				opx	cpx					
デイサイトの斑晶鉱物			opx, cpx, ho, oxyho	opx, cpx, ho, opct	opx, cpx, ho, bq	opct, opq				
変質火山岩類岩質	D	A, D	A, D	A, D	A, D		D	D	A, D	
花崗岩類含有鉱物	bi, ho, ep, zr, ap	bi, ho, ep, zr, ti	bi, mu, ho, ep,	bi, ho	bi, ho	bi, ho	bi, mu, ho, ep	bi, ho	bi, ho, ep, ti	bi, ho, ep
ミルメカイト	+	+	+	+	+					+
ﾏｲｸﾛｸﾞﾗﾌｨｯｸ組織										
火山ガラス形態	B	A', B	C		C	B, C	B	C		C
植物珪酸体	++	+	+	+	+	+	++	+	+	+

鉱物：bi黒雲母，mu無色雲母，ho角閃石，oxyho酸化角閃石，cpx単斜輝石，opx斜方輝石，opq不透明鉱物，opctオパサイト，ep緑簾石，zrジルコン，apリン灰石，tiチタン石，bq：β型石英
変質火山岩類：ＡＤ安山岩質～デイサイト質，Ｄデイサイト質
火山ガラス形態：Ａ泡壁型平板状，Ａ’泡壁型Ｙ字状，Ｂ塊状，Ｃ中間型，Ｄ中間型管状，Ｅ軽石型繊維状，Ｆ軽石型スポンジ状

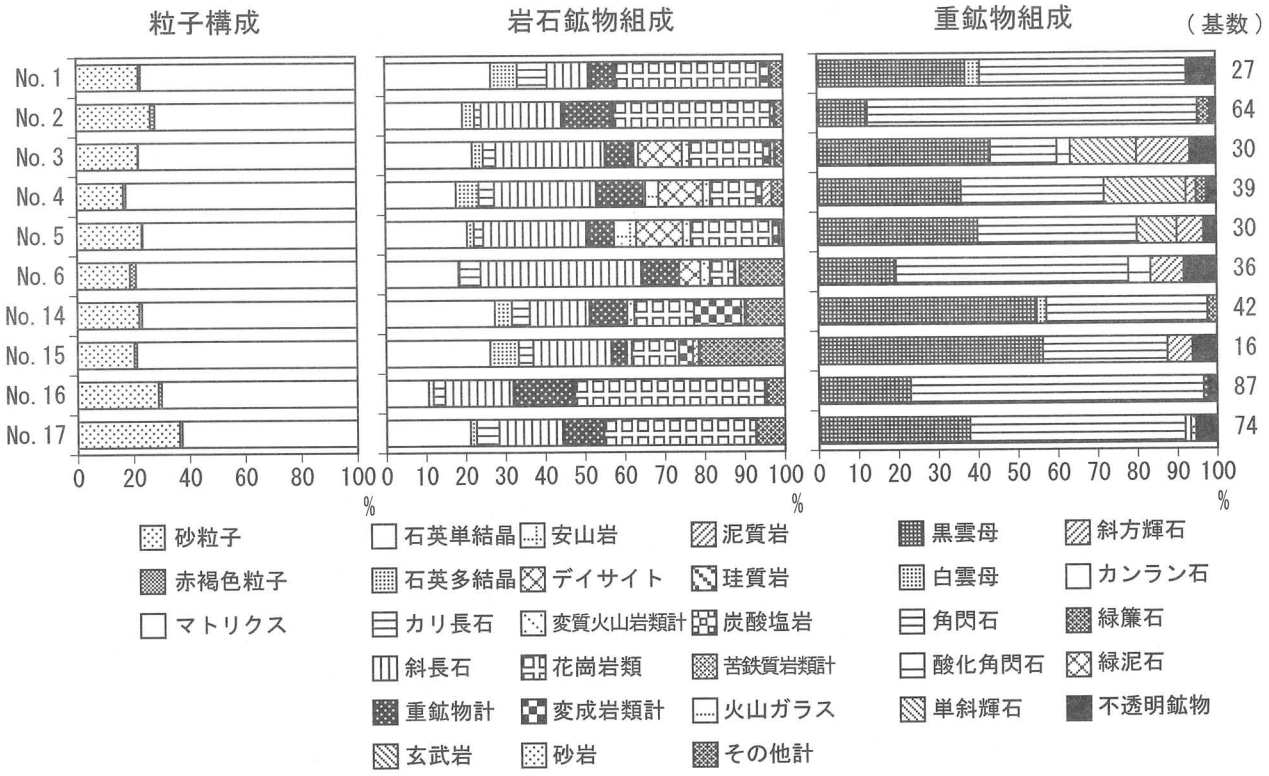


図８　試料の岩石鉱物組成

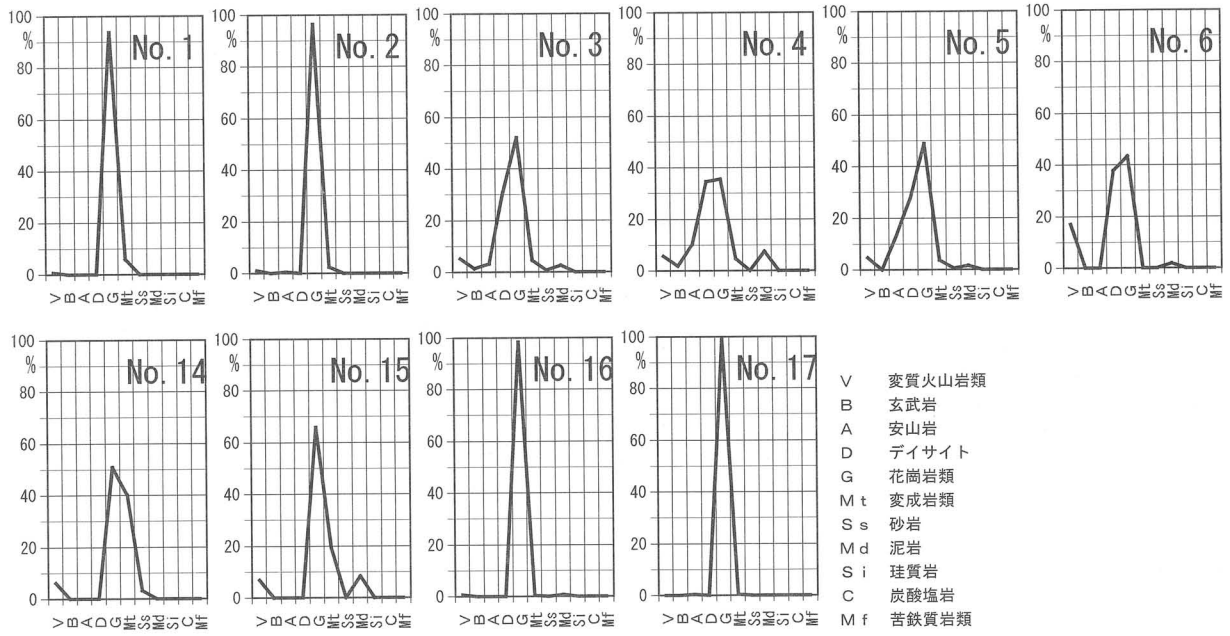


図９　岩石組成折れ線グラフ

表13　折れ線グラフによる分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
G類	花崗岩類の第１ピーク	顕著な第１ピーク	1, 2, 16, 17
G-d類		デイサイトの第２ピーク	3, 4, 5, 6
G-mt類		変成岩類の第２ピーク	14, 15

づいて試料の岩石組成を便宜的に分類した（表13）。クラスタ分析の樹形図を図10・11に示す。クラスタ分析は、折れ線グラフと同様の11種の岩石データを用いて行なった。クラスタ分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。土師器および内耳土器との比較（図10）、および甲府盆地周辺河川砂との比較（図11）を試みた（河西1989,1991,1992,1999,2001,2004a,2004b,2005,2008、河西ほか1989）。図10・11は、クラスタごとに便宜的に数字を付し、一部のクラスタではアルファベットでさらに細分した。以下に特徴を述べる。

土師器　Nos.1～5

器種と胎土との関連性が認められる。

Nos.1～2の高坏は、花崗岩類とその構成鉱物から主として構成されることで特徴づけられる。粒子構成に占める砂粒子の割合（以下含砂率）が22～26%、赤褐色粒子が1～2%である。岩石鉱物組成において、岩石では花崗岩類がほとんどを占め、ホルンフェルスからなる変成岩類をわずかに伴い、石英・斜長石・カリ長石などを含む。重鉱物含有率は普通で、重鉱物組成では、角閃石を主体とし、続いて黒雲母・不透明鉱物を含み、ほかに№1では白雲母を、№2では緑簾石をわずかに伴う。Nos.1～2は、粘土塊Nos.16～17とともに、表13でG類に属し、図10ではクラスタ1aに、図11では笛吹川・重川河川砂とともにクラスタ3bに含まれる。Nos.1～2の原料産地は、主として花崗岩類分布地域に推定される。遺跡に近い重川河川砂№50（新重川橋）・№51（金田橋）が表13のG類に酷似する折れ線グラフを示すこと、重川上流域が甲府崗岩体が広く分布していることなどから遺跡の立地する重川扇状地も花崗岩類分布地域に含まれる。従ってNos.1～2は、地元地域がもっとも有力な産地候補であることから、地元原料を利用して作られた土器である可能性が高いと推定される。

Nos.3～4はS字状口縁台付甕（以下S字甕）であり、№5は薄手の台付甕であるためS字甕の可能性が高いとの考古学的所見が得られている。Nos.3～5は、花崗岩類ばかりでなくデイサイト・安山岩などの火山岩類を伴う岩石的特徴をもつ。粒子構成では、含砂率が17～23%、赤褐色粒子が1%以下を示す。岩石鉱物組成では斜長石・石英が多く、岩石では花崗岩類が多いもののデイサイトが同程度含まれ、安山岩・変質火山岩類・ホルンフェルス・泥質岩のほか、試料によって玄武岩・砂岩などをわずかに含む。さらに重鉱物組成では黒雲母・角閃石が多く、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物を共通して含み、試料によって酸化角閃石・緑簾石などをわずかに伴う。Nos.3～5は、表13でG-d類に属し、図10では甲府盆地西部の多くのS字甕とともにすべてがクラスタ1bに、図11では№4が内耳土器№6や荒川の合流点より下流の笛吹川河川砂№29（豊積橋）とともにクラスタ3cに、Nos.3,5が荒川河川砂№27（長潭橋）や村前東A遺跡のS字甕などとともにクラスタ3dに含まれる。Nos.3～5の原料産地としては、花崗岩類とデイサイトなどが分布する地域が推定される。重川流域の河川砂や生粘土塊と岩石鉱物組成が異なることから遺跡周辺の地元地域に原料産地を推定するのは難しい。Nos.3～5の原料産地候補は、甲府盆地内では花崗岩類が上流に分布しデイサイト～安山岩質の火山噴出物を放出した黒富士火山周辺の荒川・塩川流域とくに河川砂組成との類似性から荒川流域が有力であるが、山梨市周辺地域も花崗岩類ばかりでなくデイサイトの分布も点在することからある程度の可能性が指摘できる。

S字甕が多く分析された村前東A遺跡では、多様な地点から出土したS字甕胎土が、花崗岩類が多い傾向はあるものの多様な岩石鉱物組成を示している。寺部村附第6遺跡では、住居跡出土のS字甕を試料とし、住居跡ごとの土器胎土の均質性が認められている。梶畑B遺跡2号竪穴でのS字甕Nos.3～5の岩石鉱物の均質性は、寺部村附第6遺跡の結果と類似する。S字甕の分析例は少ないことから詳細は不明であるが、傾向として花崗岩類を主体にデイサイトを伴う胎土はどの遺跡でも確認され、かつ縄文中期曽利式土器に見られるような地元原料を用いた各地域での土器生産を支持するデータに乏しいことなどから、S字甕では複数の限定した地域で土器生産が行われ完成品としての土器の移動があった可能性が現在のところ想定される。小林（1991）は、甲府盆地の北西部と南東部とにおけるS字甕の地域差を考古学的に示した。梶畑B遺跡は

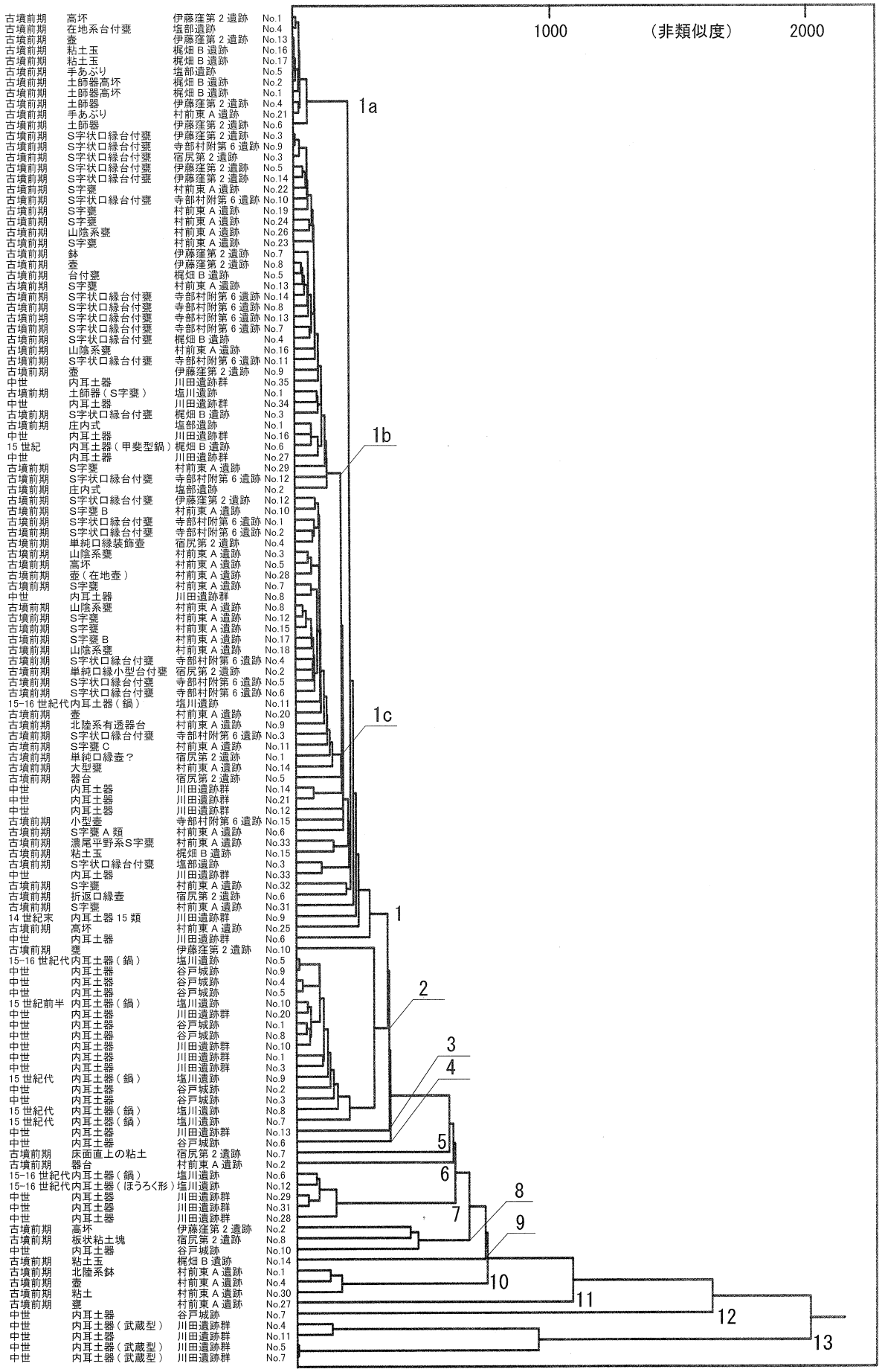


図10　土師器・内耳土器のクラスタ分析樹形図

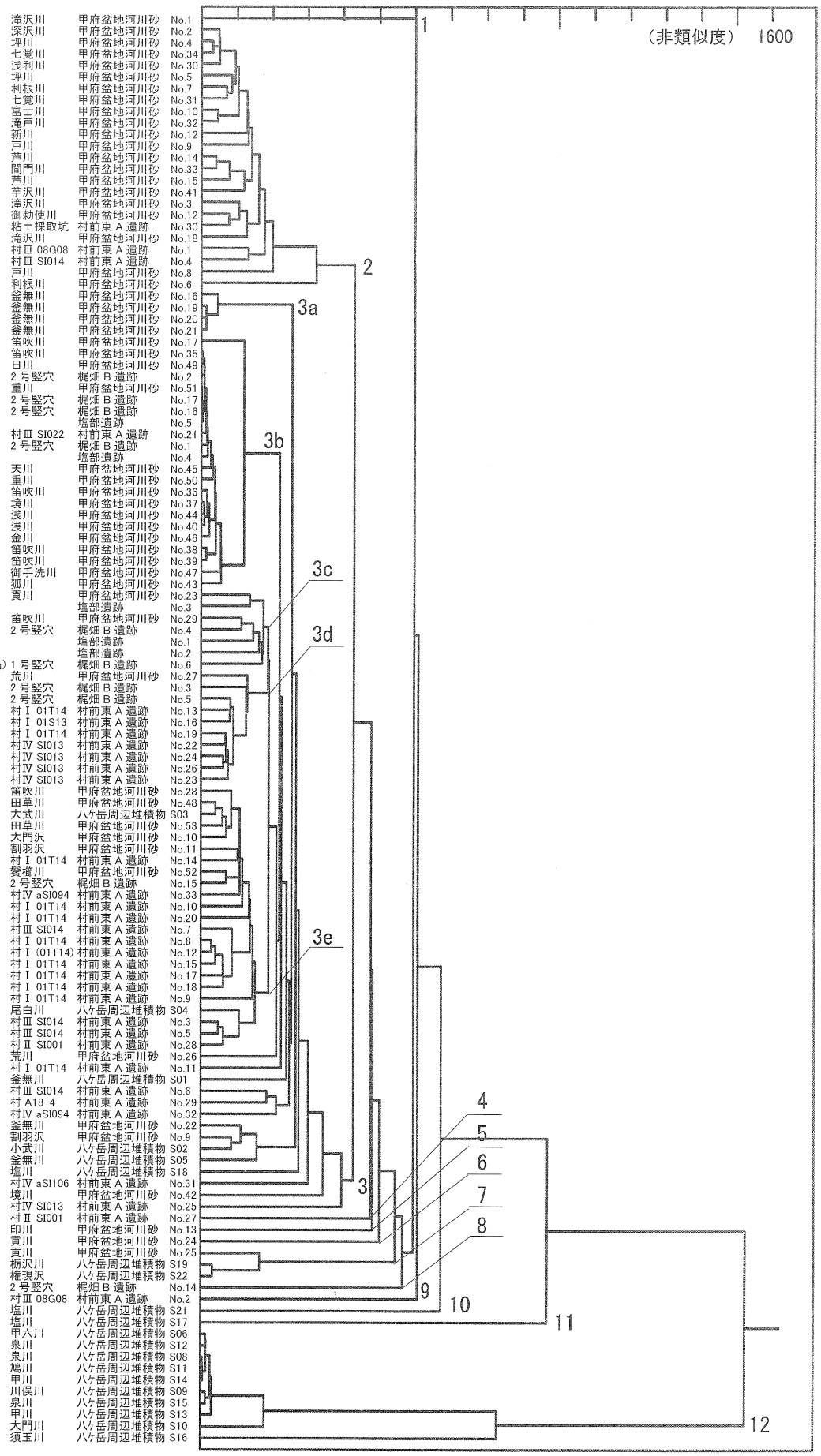


図11　土器・粘土塊と甲府盆地河川砂とのクラスタ分析樹形図

盆地東部でも北寄りに位置しており、今回の分析では北西部地域との胎土の地域差を明らかにすることはできなかった。盆地南部に位置する中央市宮の下遺跡出土の赤塚分類D類相当の甲斐型のS字甕は、胎土に多量の雲母を含んでおり、本県で出土するS字甕に共通することから在地で製作されたものと考古学的観察から推定されている（小林 1998）。今後、盆地南東部のS字甕の胎土分析結果を蓄積していく中でS字甕の土器作りシステムと土器の移動についての全体像を把握していく必要がある。

内耳土器（甲斐型鍋） №6

粒子構成では、含砂率が19%、赤褐色粒子が2%を示す。岩石鉱物組成では斜長石が最も多く、石英がこれに続き、カリ長石を伴う。岩石の含有率は低いものの、花崗岩類が多くデイサイトが続き、変質火山岩類・泥質岩をわずかに含む。重鉱物の含有率は他の土器と同様で、重鉱物組成は角閃石＞黒雲母で、不透明鉱物・斜方輝石・酸化角閃石を伴う。表13ではS字甕 Nos.3 ～ 5 とともにG-d類に属し、図10 ではS字甕 Nos.3 ～ 5 や山梨学院川田運動場遺跡群（以下川田遺跡群）の内耳土器 Nos.16,27,34 などとともにクラスタ 1b に、図11 ではS字甕№4 や笛吹川河川砂№29（豊積橋）などとともにクラスタ 3c に含まれる。№6 の原料産地は、S字甕 Nos.3 ～ 5 と同様に甲府盆地内では荒川・塩川流域が有力である。梶畑B遺跡周辺地質の組成とは一致しないことから搬入品と推定される。甲府盆地内の内耳土器では、デイサイトを含む土器が多い傾向が認められ、デイサイトの分布する黒富士火山周辺の塩川・荒川地域が、内耳土器生産における中心的地域であった可能性が推定されている（河西 2009）。一方で花崗岩類分布地域に原料産地が推定される内耳土器が少ないことが川田遺跡群で指摘されているが、本遺跡でも同様のことが指摘できる。中世の盆地内の内耳土器生産は、地域的な偏りがあり、デイサイト分布地域周辺において中心的に行われ盆地内の各地に供給されていた可能性が、胎土分析結果から推定される。

生粘土塊（粘土玉） Nos.14 ～ 17

生粘土塊は、特徴から二分される。

Nos.14～15は、含砂率が土器と同程度の20～22%で、赤褐色粒子は１%である。岩石鉱物組成では、石英・斜長石が多く、カリ長石を少量伴い、岩石の含有はあまり多くなく、花崗岩類とともにホルンフェルスからなる変成岩類が多い特徴を示し、変質火山岩類・砂岩・泥質岩などを伴い、泥質ブロックが多い特徴も示す。重鉱物量は普通で、重鉱物組成では黒雲母が主体を占め、角閃石が続き、試料によって斜方輝石・不透明鉱物・白雲母・緑簾石などをわずかに含む。表13では G-mt 類に属す。図10では、№14が単独でクラスタ９に、№15 が村前東A遺跡№33などとともにクラスタ１に、図11では、№14 が単独でクラスタ８に、№15 が鬢櫛川河川砂№52（大塚橋）などとともにクラスタ 3e に含まれる。花崗岩類以外にホルンフェルスで特徴づけられる Nos.14～15は、鬢櫛川河川砂との類似性も認められることから地元地質を反映した岩石鉱物組成と考えられる。

Nos.16～17は、含砂率が29～36%と高く、赤褐色粒子は１%である。岩石鉱物組成では、花崗岩類が最も多く、斜長石・石英・重鉱物などがこれに続き、他の岩石ではホルンフェルス・泥質岩・安山岩・変質火山岩類などが極めてわずか検出されている。重鉱物組成では、角閃石が多く、黒雲母が続き、不透明鉱物・カンラン石・緑簾石・緑泥石などがわずかに検出される。Nos.16～17は、土師器高坏 Nos.1 ～ 2 とともに、表13ではG類に属し、図10 ではクラスタ 1a に、図11では重川河川砂№50（新重川橋）・№51（金田橋）とともにクラスタ 3b に含まれる。Nos.16 ～ 17 は、重川河川砂との類似性が認められることから地元地質を反映した岩石鉱物組成と考えられる。含砂率が高いものの岩石鉱物組成の類似性から、土師器高坏 Nos.1 ～ 2 の原料候補になりうる可能性が最も高い粘土塊であると推定される。

建物遺構に伴う粘土試料の分析は、宿尻第２遺跡遺跡と野牛島・西ノ久保遺跡においてなされている（河西 2004b, 2009b）。宿尻第２遺跡では、古墳前期竪穴建物跡の貯蔵穴近くで不定形を呈する床直上の生粘土塊№7 が、周辺地質とは異なる組成を示し、含砂率が低く、土器胎土とは組成が一致するわけではないものの花崗岩類を主体とする点で類似性が認められることから、砂分の混和などによる調整が行われた場合には

土器原料として用いられた可能性が想定できるとされた。野牛島・西ノ久保遺跡では、奈良平安時代の３号竪穴に多量の粘土が不定形で貯蔵されており複数の粘土試料が同時期の土師質須恵器および須恵器とともに分析された。３号竪穴の粘土試料の多くは、地元の御勅使川堆積物と異なり運びこまれた可能性が推定され、粘土が土師質須恵器や須恵器の含砂率、岩石鉱物組成などにおいて類似性が認められることから、粘土が土師質須恵器や須恵器の原料であった可能性が高いと推定された。梶畑Ｂ遺跡の粘土の場合には、粘土塊が球形をしている状況があり、含砂率が高いこと、岩石鉱物組成が土器と類似性が高いことなどから、前の２例との比較においても土器原料であった可能性が高いと推定されるものである。ただし、これらの推定は、粘土塊に含まれる砂粒子の岩石鉱物組成の特徴によるものであり、粘土自体の特徴については、今後化学組成などによってさらに検討する必要があろう。

おわりに

本遺跡では、古墳時代前期２号竪穴から出土した土師器と生粘土塊とを胎土分析し、器種ごとに岩石鉱物組成が均質であり、高坏は北西部の花崗岩類を主体とし、生粘土塊と類似性が高く、地元に原料産地が推定される在地的土器であることが明らかになった。一方、Ｓ字甕は、高坏や生粘土塊と組成を異にし花崗岩類のほかデイサイトを多く含み、甲府盆地北西部の土器胎土と共通性が認められた。中世の１号竪穴出土の甲斐型鍋内耳土器は、花崗岩類とデイサイトを含み、荒川・塩川流域などのデイサイト分布地域周辺に原料産地が推定された。

註

1）デイサイト～流紋岩質の珪長質火山岩をここでは略称してデイサイトとしている。

文献

河西学（1989）「甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成―土器胎土分析のための基礎データ―」『山梨考古学論集Ⅱ』505-523。

河西学（1991）「伊藤窪第２遺跡出土土器の胎土分析」『伊藤窪第２遺跡―埋蔵文化財発掘調査報告書―』韮崎市教育委員会、22-35。

河西学（1992）「塩川遺跡出土土器の胎土分析」『塩川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第70集、173-178。

河西学（1999）「村前東Ａ遺跡出土土師器の胎土分析」『村前東Ａ遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第157集、358-369。

河西学（2001）「谷戸城跡出土内耳土器の胎土分析（抜粋）」『史跡谷戸城跡Ⅲ―平成12年度環境整備事業に伴う発掘調査概報―』大泉村埋蔵文化財調査報告第15集、大泉村教育委員会、14-16。

河西学（2004a）「寺部村附第６遺跡出土土師器の胎土分析」『寺部村附第６遺跡』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書、第２集、60-66。

河西学（2004b）「土師器の胎土分析」『宿尻第二遺跡』韮崎市教育委員会、111-116。

河西学（2005）「塩部遺跡出土土器の胎土分析」『塩部遺跡Ⅱ』甲府市文化財調査報告、30、93-97。

河西学（2008）「山梨学院川田運動場遺跡群出土内耳土器の胎土分析」『山梨学院川田運動場遺跡群（桜井畑遺跡・亀田遺跡・川田久保田遺跡）本文編』甲府市文化財調査報告37、785-794。

河西学（2009a）「胎土組成からみた内耳土器の地域性―長野と山梨の事例から―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』13、125-145。

河西学（2009b）「野牛島・西ノ久保遺跡出土土器の胎土分析」『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書、第20集、59-72。

河西学・櫛原功一・大村昭三（1989）「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』1、1-64。

小林健二（1991）「甲府盆地におけるＳ字甕の定着について」『古文化談叢』26、151-166。

小林健二（1998）「豊富村宮の下遺跡出土のＳ字甕」『山梨県考古学資料集Ⅰ』、森和敏氏退職記念刊行委員会、59-62。

第5章　総　括

第1節　調査の成果

梶畑B遺跡での今回の調査では、調査対象地が道幅14.5mと限定的なことから、遺跡の全貌を明らかにするまでには至らなかったものの、東西方向に遺跡範囲を見極めることができたのは成果のひとつといえる。また遺構・遺物から縄文前期、古墳前期、平安末、中世の各期にわたる集落の営みを見出すことができ、本地域の歴史的な厚みを再確認することとなった。

竪穴の出土状況から、縄文前期、古墳前期の居住期間はごく短期であったとみられる。縄文前期では竪穴1軒と屋外炉・土坑数基のセットにとどまり、1～数家族程度の居住痕跡とみたい。それに対して古墳前期では主軸方向を同じくする2軒がセット関係を保つように近い位置で配置し、両者は同時存在と考えておく。検出された2号竪穴は、ベッド状遺構や2ヶ所の出入り口施設をもつ住居で、生粘土塊を保有するなど特殊性を帯びていることから集落の中心的な竪穴のひとつといえ、推定十数軒からなる集落の一部を明らかにしたものと考えられる。また周辺遺跡での状況から、調査区外に集落に隣接して家族の長を葬った方形周溝墓群の存在を推測することも可能だろう。本遺跡が隆盛を迎えるのは平安末以降で、12世紀前半には竪穴が5軒存在し、それらは間隔を広く保って点在する。さらに同時期かそれ以降とみられる小柱穴群が多数分布することから、ピット群の配置から建物形態を明らかにすることはできなかったものの、竪穴以外に掘立柱構造の建物が多数存在したことが想定された。さらに15世紀代の竪穴状遺構も発見されている。調査区西寄りに群在する長方形の土坑群は軸線をいずれも南北とし、古代末～中世の墓域と考えられるが、本県における墓制の変遷を考えるうえで貴重な一例を加えることとなった。ここでは、そうした調査成果に関し時期を追って整理しておく。

第2節　縄文前期

9号竪穴は縄文前期末、諸磯c期で、炉は不明ながら土器の出土状況、床面上の台石の設置状況から竪穴住居と判断した。1号河道に切られるように存在するが、1号河道の流れは平安末、10世紀後半以降の重川からの氾濫によるものと考えられる。したがって縄文前期の段階では、重川と塩川に挟まれた本遺跡の立地する台地面は安定的で、周辺に存在する一ノ坪遺跡、獅子之前遺跡、大木戸遺跡など前期集落の分布から、縄文前期には濃密に集落が分布する地域であったといえる。一ノ坪遺跡では諸磯c期と推測される竪穴1軒があるのみで、本遺跡のあり方と類似している。大木戸遺跡には前期の竪穴10軒、土坑1基があり、諸磯b期の古段階から中段階を主とし、1時期数軒からなる小集落が土器型式上の数段階の間、維持継続した。獅子之前遺跡は諸磯a期5軒、諸磯b期2軒、土坑10基程度からなる集落で、諸磯a期からb期にかけて同一地点で集落を継続している。それらは2軒が1組をなすような単位構造を見ることができ、同時存在、または建替えを伴う同一系譜をもつ血縁集団からなると考えられる。このように前期諸磯a期に本地域で竪穴住居が出現したのち、b期に集団の拡散傾向を示し、b期末には地域外へ移住するらしい。諸磯c期では本遺跡および一ノ坪遺跡に1軒あるのみで、a・b期の集落とは別地点に最小単位で分散し、短期、移動的な居住形態を選択した諸磯c期の状況を示すものと理解できる。生業形態としては、2号竪穴から出土した2点の打斧、4点の磨り石、台石1点の石器から推測すると、堅果類の加工を主とした様相を呈しているが、竪穴覆土中における後世の流入遺物を含んだ出土遺物からの推測では確定的な結論を導くことは難しい。ただ、通常の磨り石とともに第34図20のようにやや大形のいわゆる稜磨り石を伴う点は、獅子之前遺跡にも見られる前期の特徴ともいえ、例えば中期と比較した場合、対象とした植物質食料の相違があったと考えておく。

そのほか、9号竪穴出土の焼成粘土塊は、片手で粘土を握り締めたものを焼成したらしく、表面には指の跡が明瞭に残っている。単なる偶然というよりは、焼成から廃棄に至る一連の行為が何らかの意図をもって行われたように思われる。焼成粘土塊の存在は、獅子之前遺跡には時期不明ながら3点の焼成粘土塊があるほか、大木戸遺跡2号住（諸磯b期）には最古とみられる台形土器があることから土器制作が行われた状況証拠を伴っており、焼成粘土塊は土器制作という視点で注目すべき遺物である。

本遺跡では竪穴住居の周辺に屋外集石炉2基（45・46号土坑）、円形土坑1基（48号土坑）があり、それらが10数mの範囲内に分布している。45号土坑については土坑上層に多量の小礫があり、覆土中には炭化粒、炭化物混じりの黒色土が存在し、46号土坑も覆土中の礫の量は45号土坑に較べて少ないが、焼土混じりの黒色土で、縄文時代の屋外炉である。時期は不明ながら調査区内には縄文前期以外の縄文土器はほとんどないこと、9号竪穴と近いことから縄文前期の遺構と考える。また調査区西端にある5号土坑は、9号竪穴とは約100mの距離があるが、屋外集石炉下部に敷設された花弁状配石で、これも縄文期の所産であり、周囲に何らかの居住施設があったと考えられる。40号土坑は直径2.4mの円形土坑で、底面は平坦、壁際に周溝状のごく細い溝をもち、小竪穴と呼ぶにふさわしい遺構であり、竪穴に付随する貯蔵施設等の遺構とみなしておく。

第3節　古墳前期

古墳前期の竪穴2軒のうち、2号竪穴は南北に長い隅丸長方形で4本柱をもち、柱穴間をつなぐ内側が土間、その周囲がコ状に一段高いベッド状遺構をもつ。さらに南壁両隅には出入口施設が2ヶ所存在し、弧状の土手内にそれぞれ貯蔵穴といわれる円形ピットをもつ。このように居住施設内の空間区分が確認できるばかりでなく、火災住居のため上屋が焼け落ちた状態で垂木材等が遺存したため、ある程度の上屋構造の推測が可能な稀有な事例といえる。また竪穴内からは生粘土塊4点が西側の壁際に遺存するなど、より具体的な室内の住まい方をうかがうことができる。一方、3号竪穴は2号竪穴よりも小さく浅い。隅丸方形、4本柱穴の竪穴で、南東隅に貯蔵穴らしきピットは存在するが、ベッド状遺構や出入口施設はない。主軸方向は2号竪穴とほぼ同じで、近い位置にあることから同時並存と仮定したが、以上のように4本柱穴を基本としつつ住居形態はいくぶん異なっている。

これらとの比較事例として、西田遺跡には非常に良好な竪穴群が存在する。報告書では古墳前期のS字甕の時期に54軒が存在し、4期に時期細分されているが、住居構造がわかる47軒について、貯蔵穴、出入口施設、ベッド状遺構、炉に着目して時期変遷をみていく。なお当該期の竪穴は隅丸方形、もしくは隅丸長方形のプランで、四方位を意識して長軸方向を南北軸に向けるものが多いほか、東西方向に長軸線をもつものもあるが、ここでは各施設の位置について方位をもとに分類しておく。

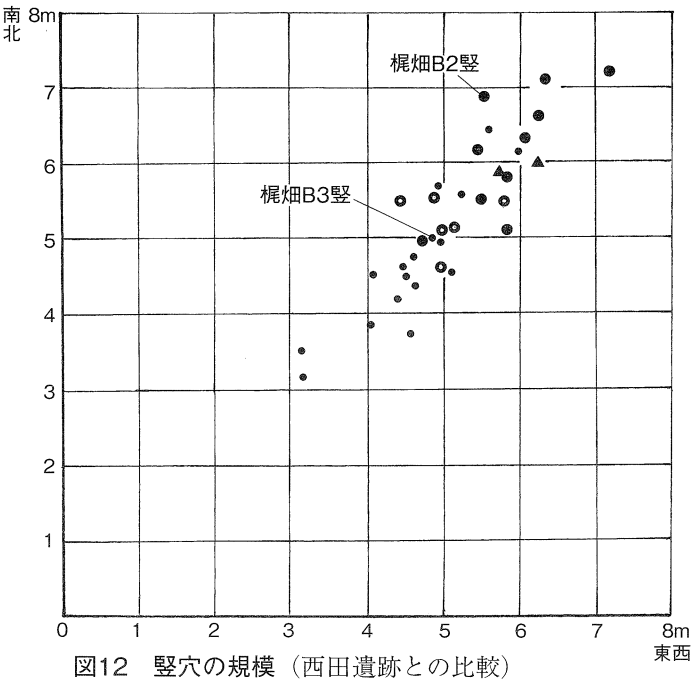


図12　竪穴の規模（西田遺跡との比較）
（●ベッド状遺構なし、▲1(1辺)、○2(L字)、●3(コの字)）

47軒中（Ⅰ期2軒、Ⅱ期6軒、Ⅲ期12軒、Ⅳ期22軒、時期不明5軒）、ベッド状遺構をもつものは21軒（Ⅱ期4軒、Ⅲ期4軒、Ⅳ期13軒）、ないものは26軒（Ⅰ期2軒、Ⅱ期2軒、Ⅲ期8軒、Ⅳ期9軒、時期不明5軒）である。ベッド状遺構を

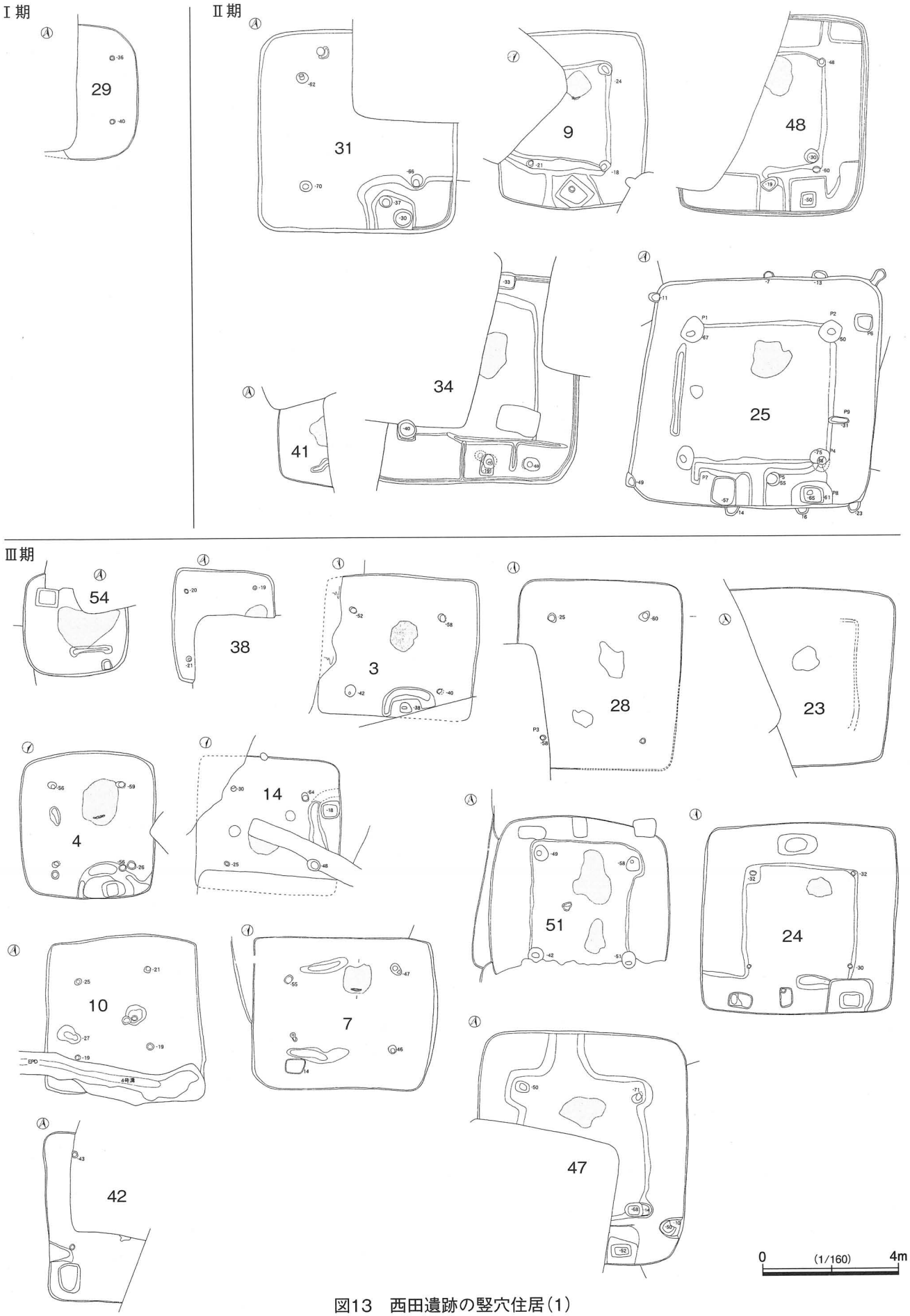


図13　西田遺跡の竪穴住居(1)

Ⅳ期

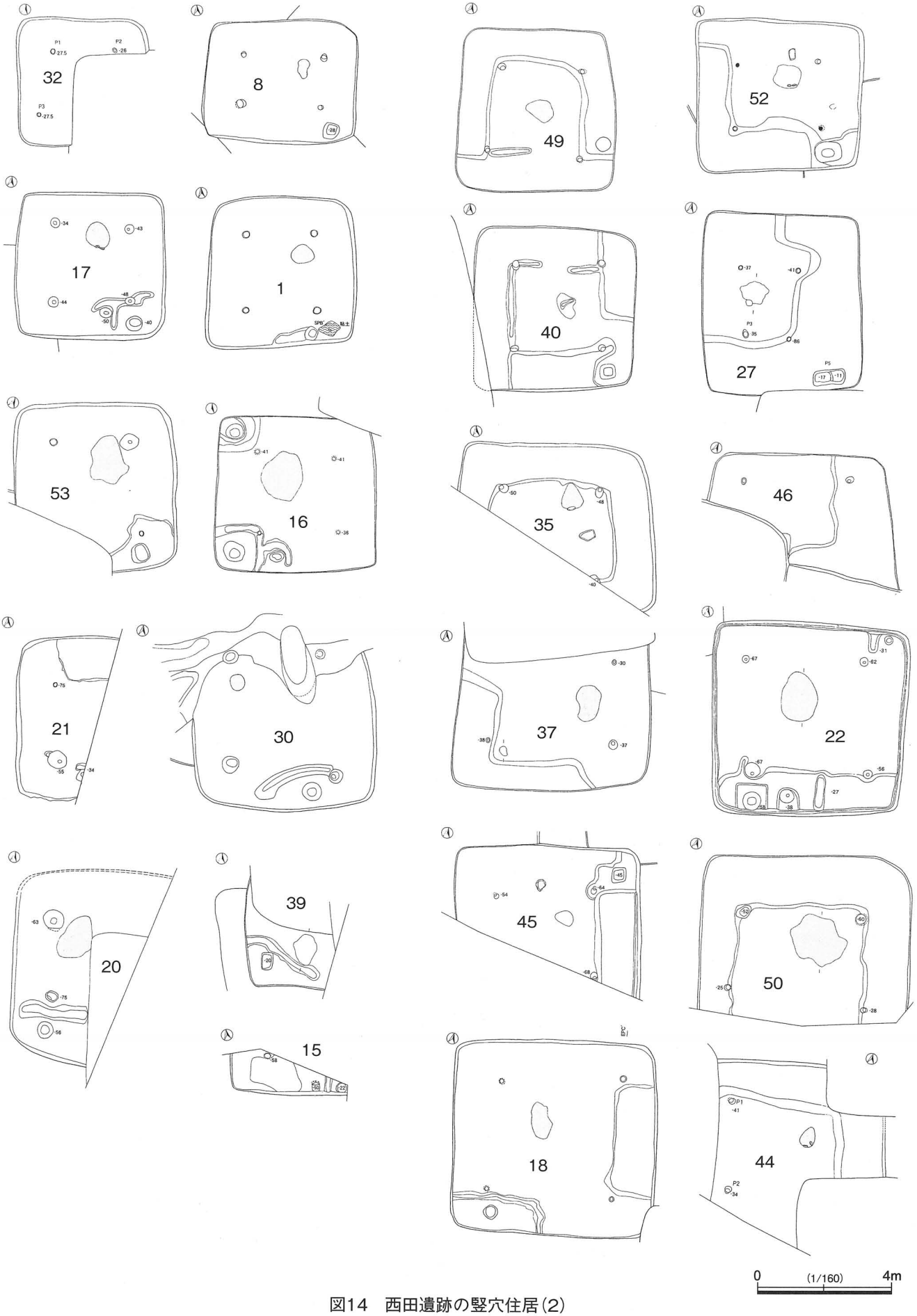


図14　西田遺跡の竪穴住居(2)

もつ21軒中、一方の壁側にのみ１面のベッド状遺構をもつ「1辺タイプ」（西田遺跡の報告では「一の字状」）は４軒（Ⅳ期４軒）、壁続きの２方向に２面のもつ「L字タイプ」は８軒（Ⅱ期１軒、Ⅲ期１軒、Ⅳ期６軒）、土間をはさんで三方に３面のベッド状遺構をもつ「コの字タイプ」は９軒（Ⅱ期３軒、Ⅲ期３軒、Ⅳ期３軒）である。ベッド状遺構の形態と竪穴規模との相関性を検討すると、ベッド状遺構をもたないものは小規模で、竪穴規模が大きいほどベッド数を増す傾向にあり、一辺５m以下ではベッドがなく、５～６m規模の竪穴にL字タイプが多く、5.5～７m規模の例はコの字タイプが多い傾向がある（図12）。ただし５～６m規模の竪穴でもベッド状遺構をもたない例が存在することは注意すべきである。

１辺タイプのうち、南壁側は１軒、東壁側は２軒、北壁側は１軒である。L字タイプでは北東タイプ３軒（Ⅱ期１軒、Ⅲ期１軒、Ⅳ期１軒）、南西タイプ２軒（Ⅳ期２軒）、南東タイプ３軒（Ⅳ期３軒）である。コの字タイプは基本的に南壁側を除く東西北の三方にもつが、北側の中央に境を設けるタイプ（47号住－Ⅲ期）、南壁にもベッドの一部が及ぶもの（48号住－Ⅱ期）等がある。

貯蔵穴は47軒中24軒に存在し、南東隅タイプ17軒（Ⅰ期１軒、Ⅱ期４軒、Ⅲ期４軒、Ⅳ期８軒）、南西隅タイプ６軒（Ⅲ期２軒、Ⅳ期３軒、時期不明１軒）、南中央タイプ１軒（Ⅱ期１軒）と、南東隅タイプを主とし、その逆の南西隅タイプを従とする。柱穴よりも中央寄りに位置する例が多く、柱穴と壁コーナーの間に収まる事例は少ない。平面形では総数29基のうち円形15基、方形14基となる。２基の貯蔵穴をもつ25・34号住はともにⅡ期で、Tの字形の土手状遺構（出入口施設）を伴う。ほかに47号住（Ⅲ期）が２基もつほか、３基もつ例として16号住（Ⅳ期）は南西に２基、北西に１基をもち、いずれも土手状施設が弧状に巡る特殊事例となっている。

出入口施設（土手状遺構）は19例（Ⅰ期１軒、Ⅱ期５軒、Ⅲ期５軒、Ⅳ期７軒、時期不明１軒）あり、貯蔵穴とセットで存在するのを基本とするが、まれに貯蔵穴を伴わない例として２例ある。その位置は貯蔵穴と同じ傾向を示し、貯蔵穴を囲うように弧状に巡るものを主とするほか、Tの字形の土手状遺構を南壁中央東寄りにもつ例が４軒（Ⅱ期３軒、Ⅳ期１軒）あるほか、L字状に直線的となる事例も数例存在する。

炉は地床炉を基本とし、細長い枕石を１個添えた添え石炉、土器を敷いた土器敷炉、土手をもつ粘土貼り炉が存在する。炉が存在する事例には35軒あり、中央奥壁寄り、柱穴間の内側にある例を基本とするほか（21軒）、奥壁側北東寄りに位置する例（２軒）などがある。

以上により西田遺跡における古墳前期の竪穴住居の構造を整理すると、隅丸長方形、隅丸方形、４本柱穴で、炉は中央奥壁寄りに地床炉をもつ。南東隅または南西隅に貯蔵穴を囲う土手状の出入口施設をもち、壁際には東西北側の３面にベッド状遺構をもつ例が多い。ベッド数の有無と数については竪穴規模との相関性が認められ、大形になるほどベッド数が多い傾向にあり、5m以下ではベッド状遺構をほぼ持たないが、それ以上でも持たない事例が存在する。梶畑B遺跡の事例を鑑みると、２号竪穴は東西5.5m、南北7.9mでコの字タイプのベッド状遺構をもち、３号竪穴は東西4.8m、南北5.1mでベッド状遺構がないのは、西田遺跡の傾向に合致するものとして理解できる。

注目すべき遺物の出土状況として、梶畑B遺跡２号竪穴では西壁際からまとまって４個の生粘土塊が出土した。粘土については４章第３節の胎土分析の結果にあるように、４個のうち２個が高坏と類似するなど、土器制作に用いられた可能性は高く、土器の原材料としての粘土を竪穴内に貯蔵したものと考えておきたい。こうした遺物出土状況は竪穴内の利用の仕方、空間区分を考えるうえで興味深い出土事例といえるが、西田遺跡にも生粘土、編物石、ミニチュア土器、台石等の出土事例があり、空間区分を考えるうえで情報を提供している。

西田遺跡１号竪穴では南東隅の壁際、貯蔵穴脇の出入口に相当する場所から白色粘土塊が出土した。また４号住では正確な位置が不明ながら炉の南側に白色粘土塊が遺存し、52号住では東壁際南東隅、貯蔵穴脇から粘土塊が出土している。ともに粘土塊は図面をみる限り玉状ではない。玉状粘土塊の出土例として、管見では笛吹市一宮町鞍掛遺跡の奈良時代の竪穴の東壁際より径20cm大の生粘土塊が10数個出土した事例を知る

のみである。出土位置が壁際で、玉状粘土塊の数は異なるが複数まとまっていたという出土状況が共通し、鞍掛遺跡では土師窯が３基存在し、土器制作に関わる可能性が高い。編物石は西田遺跡 17・21・52 号住で出土している。17号住では南西隅に近い西壁際にまとまり、その脇にほぼ同形のミニチュア土器６個がまとまって出土した。52 号住では南・西壁にベッド状遺構があるが、編物石は北壁際、西寄りから出土した。そのほか、台石が１号住の北東隅近く、35 号住の炉南、45 号住の炉北側床面に設置された状態で出土し、炉周辺の土間空間に分布する傾向がある。粘土玉、編物石を女性に関わる空間区分の指標とするならば、52 号住の生粘土塊を除くと竪穴住居の西側半分にそれらが分布する傾向にあり、竪穴住居内を東側半分と西側半分に２分する男女の性別に基づく空間区分が存在した可能性はある。ただし類例を広く集めて再検討する必要があろう。

梶畑Ｂ遺跡では２号住の火災住居の炭化材の出土状況が印象的であったが、西田遺跡では54軒中わずかに52号住の１軒が火災住居と判断されるに過ぎない。52号住では４本の柱穴のうち２本の柱穴について、床面直上部分の柱材が厚さ 10cm程度炭化して遺存し、梶畑Ｂ遺跡２号竪穴と全く同様の柱痕を留めていた。弥生時代から古墳時代にかけては火災住居が多く、意図的な家屋の焼却行為の想定が行われているが、西田遺跡では非常に少ないといえる。翻って本遺跡２号竪穴については、火災状況から故意かどうかの判断は困難であるが、柱が直立し上屋が焼け落ちた状況を呈すること、生粘土塊を置いたままの状況から生活時における偶発的な火災での焼失ではなかったか。竪穴住居内の壁際には焼土が厚く堆積するのは上屋裾回りを被覆した土屋根が被熱したもので、屋根の形は中央に南北方向の棟をもつ寄棟形式とみられる。なお垂木材等に用いられた木材は、第４章第１節の報告にあるようにクヌギ節、コナラ節など、二次林としての広葉樹利用が判明した点は、古墳前期の木材利用を考える上で有益な成果となった。

第４節　平安末

重複例を含む竪穴住居５軒が分散するように存在する。竪穴規模は概して小さく、竈は４・５・７号竪穴が南東隅に竈をもつコーナー竈、８号竪穴が南西隅に竈をもつコーナー竈であった。全体に竈の造りは貧弱で、４・５号竪穴は石組であるが、７・８号竪穴竈は石組と推測されるもののその痕跡はほとんどない。古代末～中世前期の竪穴については、平石遺跡の報告で県内を大きく郡単位の地域で捉えたほか（櫛原 2002)、塩山地区の重川右岸地域に絞って奈良・平安時代の竪穴住居の形態を整理したものがあり（山梨県 2002)、参考となる。

甲斐型土器が消滅する10世紀中頃以降の古代末、中世前期の土器の変遷については、森原編年（1994 森原）を基本とすることができ、その後、笛吹市一宮町西田町遺跡の良好な資料を得て細分化が可能となった（櫛原 1997)。西田町編年では10世紀後半～13世紀中頃までを３期大別７時期細分し、甲斐型土器の影響の残る１期、柱状高台出現以前の２・３期、柱状高台出現以降の４・５・６・７期とし、おおむね半世紀単位の編年を組んでいる。それによれば、本遺跡 4･5 号竪穴は柱状高台の出現期にあたり、西田町４期（12世紀前半）に相当し、６号竪穴は床面に構築された 27 号土坑の４期の柱状高台土器から同時期とみられる。７号竪穴については北東隅に３期と思われる41号土坑があり、床面出土の坏の形態は４期と推定できるので、やはり４期と捉えておく。８号竪穴については、残念ながら時期不明である。

ここでは近年増加した塩山地区の資料を中心とする甲府盆地東部域（笛吹市・甲州市）の資料を用い、西田町遺跡の時期区分を再検討してみたい。とくに煮沸具については西田町編年時点で資料不足の感があったが、塩山地区の資料は充実している。なお、５・６期については時期細分できる可能性を残しつつ、現段階では細分を保留し、今後の資料増加を待ちたい。

１期（10世紀後半）　皿坏類があり、器壁は前段階同様に薄く、甲斐型坏皿としての特徴となる体部下半の手持ちヘラ削りは消失するが、器形や玉縁口縁に名残を留める。小皿はまだ確立をみていない。大木戸遺跡

19･27号住が該当。煮沸具としては甲斐型甕の系譜を引く肥厚口縁ハケメ甕、ヘラナデによる甕･羽釜がある。

２期（11世紀前半）　本期は１期の玉縁口縁が消え、丸く外反する口縁に変化し、小皿が確立する時期であるが、現時点でも未だ資料が不足し、確定的ではない。西田町２次（笛吹市）H20年度SI03（図15）には小皿に長い脚がついた脚高高台皿がまとまって存在し、大木戸遺跡30号住、五反田遺跡９号住に本期相当の資料がある。煮沸具としては羽釜、ハケメ甕、ナデ甕があり、器壁は厚い。大木戸遺跡20号住は２または３期相当資料。影井遺跡３号住は口縁部が緩く外反した２期に該当する小皿を主とし、灰釉陶器碗を伴う（図

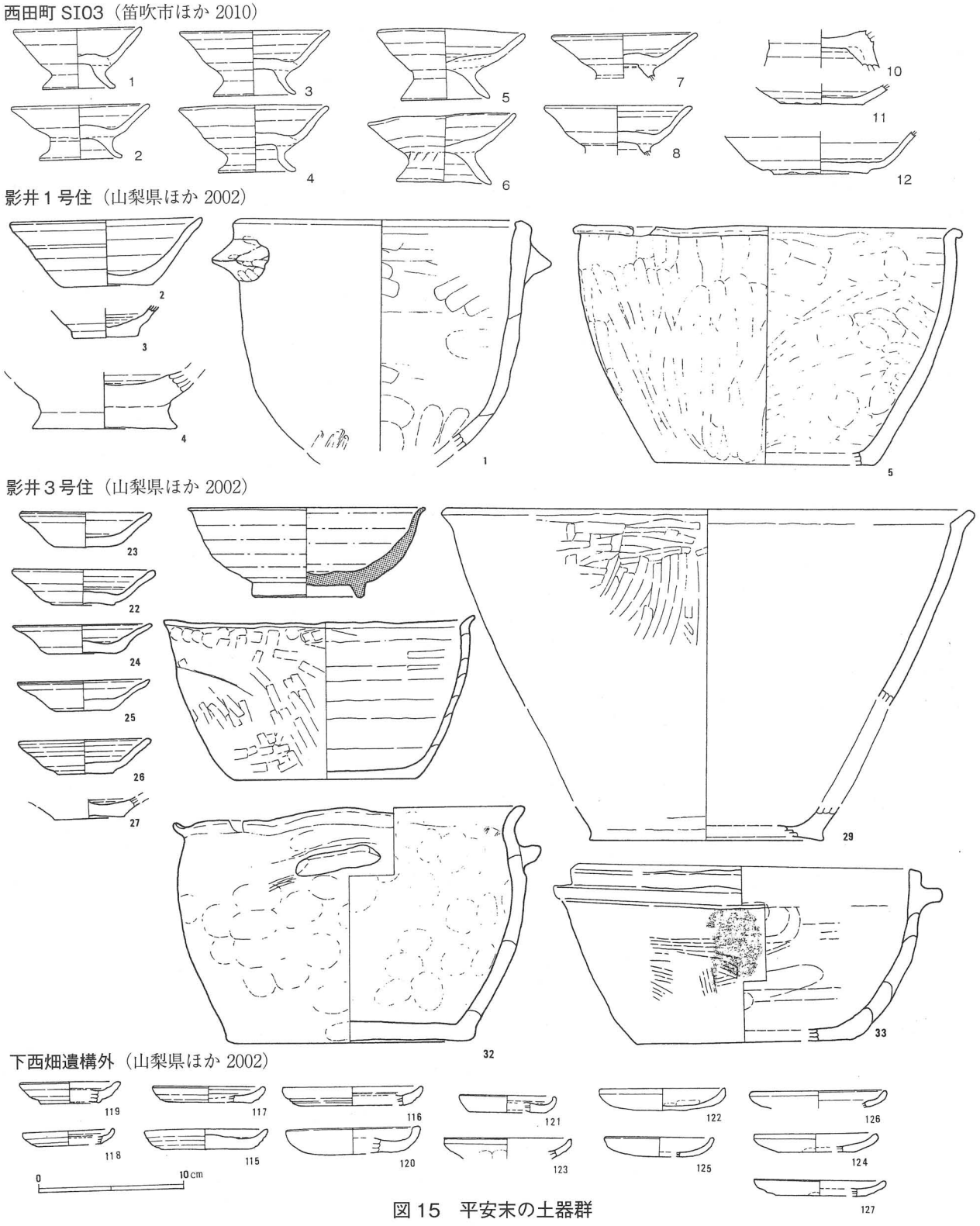


図15　平安末の土器群

15)。煮沸具は器高が低く、肥厚口縁の系譜を引く口縁部が外反したナデ甕を主とするほか、外面に把手をもつ平底甕があり、4期の丸底把手甕出現以前、2～3期の様相をもつ。また低い平底で器高の低い鍔付き土器があり、石鍋の模倣と思われるが、そうであれば影井遺跡3号住の資料群はより新しい段階とみなければならないかもしれない。

3期（11世紀後半） 脚高高台土器群の最後の段階。坏皿類の底部が台状化しつつあり、小皿の存在がより明確となる。高台坏類には柱状ではなく有脚タイプが残る。富士川町（旧増穂町）権現堂遺跡の一括資料が指標となる。大木戸遺跡6号住例は4期相当の柱状高台皿が含まれるものの、有脚高台を主とし本期相当といえる。

4期（12世紀前半） 柱状高台の出現段階。また笠木地蔵遺跡1号住では白磁碗Ⅱまたは Ⅲ類が出土。煮沸具としては羽釜、ハケメ甕、ナデ甕があるほか、影井遺跡1号住で把手甕が出土している（図15)。本遺跡では27号土坑、122号ピットに本期の資料がある。

5・6期（12世紀後半～13世紀初） 柱状高台小皿では高台端部の角状化傾向がみられ、西田町遺跡3号竪穴（図15）は小皿の器高がより低く6期の指標としたが、実際の遺構出土資料では5期と6期の区分が難しいことから、細分の可能性は残しつつとりあえず一緒に扱うこととする。常滑・渥美甕、山茶碗、12世紀後半代の白磁、青磁を伴う例がある。西田町遺跡1号竪穴は本期相当の資料で、虎渓山1号または丸石2号窯式を伴うが、森原編年によれば3期段階が灰釉を伴う最後の段階とされる。西田町遺跡13号溝は器高の低い小皿を主とし、白磁碗、常滑三筋壷がある。一ノ坪遺跡SB08には白磁Ⅲ類が共伴するほか、大木戸遺跡19・21・22号住は本期に該当する土器群を含む。ただし19号住の煮沸具は甲斐型系譜のハケメ甕、ナデ甕を主とし、本期に伴う直立口縁の把手甕等を伴っていない点、再検討を要する。本遺跡では28号土坑、44号土坑が本期の可能性のある資料である。

7期（13世紀中） 小皿は一段と扁平化し、口縁部の立ち上がりは短い。柱状高台小皿は角状高台端部が極端に厚みをもつものがある。西田町遺跡9号竪穴では蓮弁文青磁碗が小皿、柱状高台皿とともに出土している。下西畑遺跡の遺構外遺物には器高の低い底径比の大きい皿がまとまって存在し、手ずくね皿とみられる土器群も存在する（図15)。

古代末から中世前期にかけて隆盛を迎える本地域では、甲府盆地の中でより先進的な地域であったはずだが、貿易陶磁器類では白磁碗が存在するものの国内産陶器類は顕著ではなく、在地土器の様相を含めて土器・陶磁器類にみる特徴は少ない。ただし影井遺跡3号住の煮沸具（図15-33）が石鍋模倣であれば、最先端の情報を入手しえた地域であった証左といえる。

本遺跡では1～2期の資料に1号河道脇のピット出土土器があり、4期段階になるとコーナー竈をもつ竪穴を主とする。5・6期にはピット、土坑にわずかに存在するのみで、その様相は明確ではなく、7期以降に関しても定かではない。5・6期以降は小ピットが多数分布することから、遺構、遺物面では貧弱ではあるが、簡易、小規模な平地式の掘立柱建物群が頻繁に構築された何らかの場であったことが推測しうる。

4・5・7号竪穴竈と6号竪穴内27号土坑では、第4章第2節の報告にあるように、平安末の食物を探ることを目的として覆土内の炭化種実分析を行った。その結果、オオムギ・コムギが確認された4・5号竪穴と、イネの頴・胚乳が確認された7号竪穴、イネの頴・胚乳、オオムギ、コムギ、アワ、キビのほかマメ類、アズキ類等が確認された27号土坑があり、イネの有無で2分できることが指摘された（40頁参照)。従来、平安末から中世にかけては、西田町遺跡（笛吹市一宮町、櫛原 1997）の成果に基づき、オオムギ・コムギの比率が高まると考えたが、6・7号竪穴ではイネの存在が大きい。とくに12世紀前半の27号土坑ではイネのほか多様な雑穀類、マメ類の存在が明らかとなり、食物復元のための重要な手がかりが得られたといえる。

第5節　中　世

中世の遺物としては１号竪穴出土の擂鉢系内耳土器があり、中世後半の信州系内耳土器出現以前の在地的な内耳土器として注目される資料である。近年、佐々木満氏により県内の鉢・鍋について整理され、15世紀初頭に内耳鍋が出現し、16世紀段階で信濃型鍋に完全に移行すると考えられている（2011）。１号竪穴出土の内耳土器は、県内では南アルプス市百々遺跡、山梨市連方屋敷に類例があり、佐々木氏によれば形態的には双耳の丸底鍋で、形態は鉄鍋に近いことから「初期の内耳鍋が鉄鍋の模倣から始められた」という見解を提示している。またそれらは「還元炎による瓦質土器」であり、14世紀～15世紀初頭の中央市上窪遺跡の擂鉢と同じであることから、甲斐国では在地産瓦質の擂鉢系譜により内耳土器生産が始まったことを指摘した。百々遺跡例には内耳土器、擂鉢、常滑甕のほか柱状高台坏皿があり、その高台端部形態から西田町７期とみられるが、柱状高台土器の終末に関する議論が低調なことから７期の年代観を見直す必要があるとともに、内耳土器出現をそこまで遡らせて考えることができるかどうか、その年代観についても検討を要する。この内耳土器を佐々木氏は甲斐独自の在地土器として「甲斐型鍋」と仮称したが、佐々木氏があげた類例のほかに伊保水遺跡１号溝でまとまった個体の出土が知られる（図16）。それらによれば口縁部はわずかに広がりながら内湾し、口唇部は端部がナデによりわずかに窪み、外面は縦方向のナデを特徴とする。胎土には雲母を含み、１号溝出土の擂鉢と同じであるという。

なお本遺跡１号竪穴出土甲斐型鍋については、胎土分析によれば甲府盆地の荒川・塩川流域に類似する（第４章第３節参照）。甲府市川田遺跡には15世紀後半の武蔵型鍋が存在し、胎土分析により関東北西部からの搬入品と評価され、佐々木氏によれば川田館周辺で15世紀後半から16世紀前半までに居館を構えていたと考えられる武田信昌の段階に関わる資料と考えられている。また16世紀以降に甲府盆地全域で普及する通常の内耳土器（信濃型鍋）については、15世紀中葉に信濃守護小笠原氏から跡部氏が守護代となって信濃方面の政治的関与を開始してから信濃との交流の中で制作・流通が始まり、技術的に見ても長野県出土の信濃鍋との遜色がないことから、「工人の招聘なども含めた技術的な導入」を推測している。ただし、甲斐型鍋

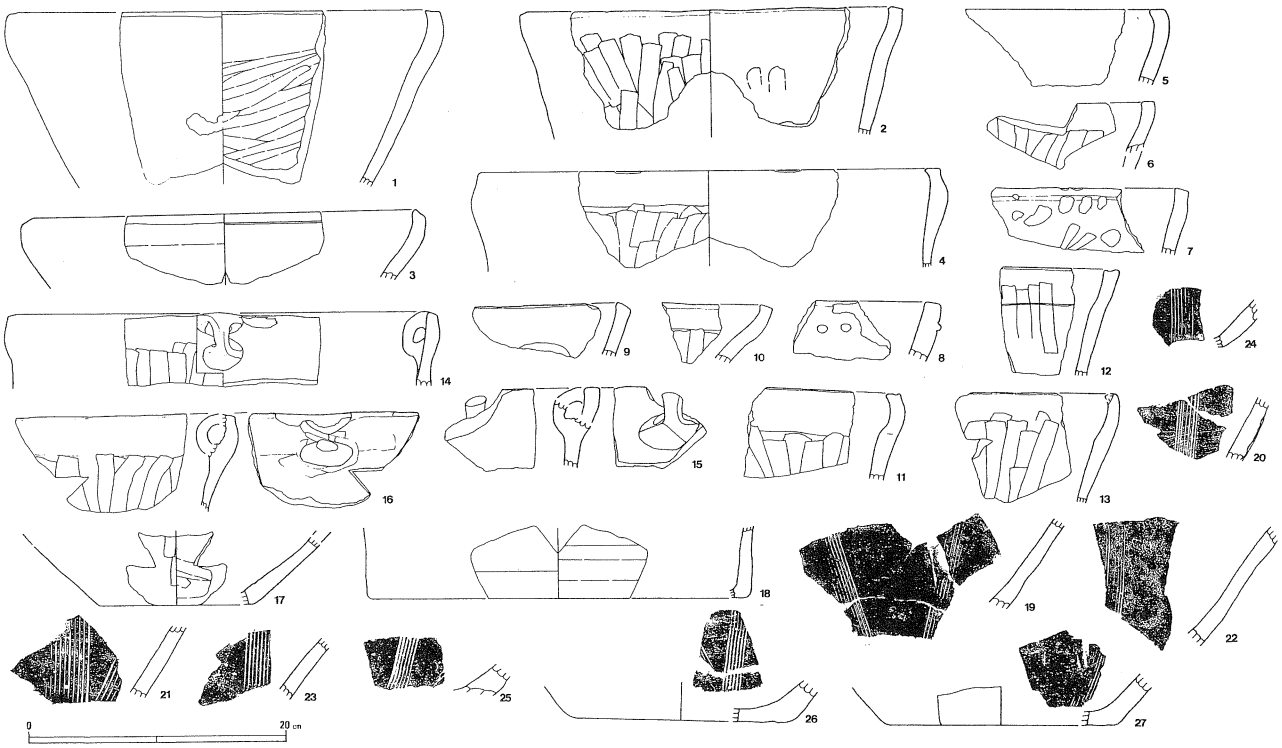


図16　伊保水遺跡１号溝および周辺出土土器（山梨県 1998）

の焼成については、本来の「瓦質」ではなく通常の土製擂鉢同様に酸化炎焼成で、使用の過程で還元的に灰色化したものがあるというように考え、瓦質を特徴として指摘することは避けておきたい。

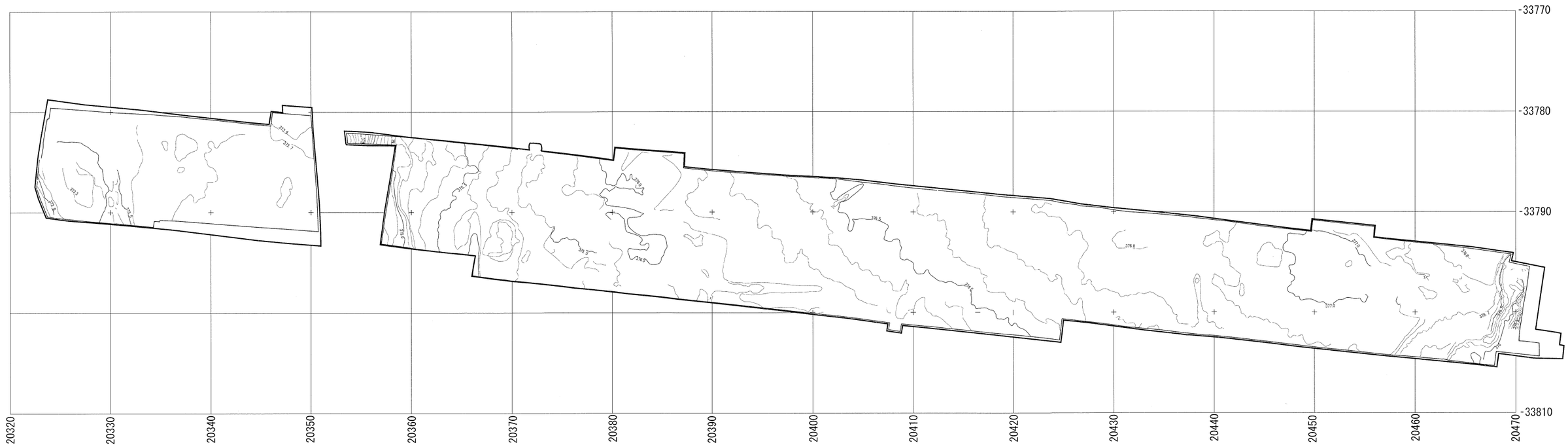
１号竪穴出土の甲斐型鍋は、佐々木氏のいう甲斐型鍋であることから、少なくとも15世紀初頭に遡ると考えられる。内耳土器の成立については、15世紀以前の外耳土器とは全く別形態であることから、内耳をもつ鉄鍋の出土事例はあまり知られていないものの、佐々木氏のいうように内耳鉄鍋の模倣と想定したい。甲斐型鍋の特徴をあらためて整理すると、厚い器壁、口縁内側に内耳をもつこと、弱く外反した体部と丸底の間に稜をもつこと、外面縦位ヘラナデを行うこと、胎土・焼成が擂鉢と同じことから、擂鉢制作を主とした土器制作工人により内耳土器制作が始められ、その系譜は16世紀には引き継がれずに信濃型鍋が主流となる。甲斐型鍋の分布は今のところ甲府盆地全域と考えられているが、甲府盆地東部、峡東地域に目立つ。

中世と考えられる長方形土坑群については、その形態と規模、群在性から墓坑と考えられる。本遺跡での墓坑とみられる土坑には長方形、円形の２者があり、長方形の１・３・７号土坑が南北軸で横一列に並び、６号が７号土坑の南側に配置するなど集中する。規模は1.7～３m、幅50cm～１mで、壁は直立ないし内傾、底は平坦となる。また円形土坑には２・４・10・11号土坑等があり、東西方向にやや間隔を開けて配置するが、その位置は長方形土坑と同じ調査区東側に寄っている。直径90cm～1.4mで壁は直立ないし内傾、底は平坦である。両者の重複関係が２号土坑と３号土坑の切り合いに見られ、３号土坑の長方形土坑が２号土坑の円形土坑を切っている。いずれも土坑の時期を示す遺物を伴わないため時期は定かでないが、調査区内の遺構の時期から平安末から中世とみられる。長方形土坑と平安末（12世紀前半）の竪穴と主軸方向がほぼ同じことから、長方形土坑は12世紀前半、円形土坑はそれ以前と考え、屈葬から伸展葬への流れを想定しておく。また円形土坑は平安期に多いとされる円形土坑の系譜を引くものと考える。ただ平安時代には確実な伸展葬が知られており、古代～中世の墓制変遷については改めて整理する必要があろう。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、甲州市役所、甲州市役所建設課、甲州市教育委員会および地元の方々にはご理解、ご協力を賜わり、調査および整理に参加された方々には多大なるご尽力をいただいた。文末ではあるがすべての方々に厚く御礼申し上げ、感謝の意を表したい。

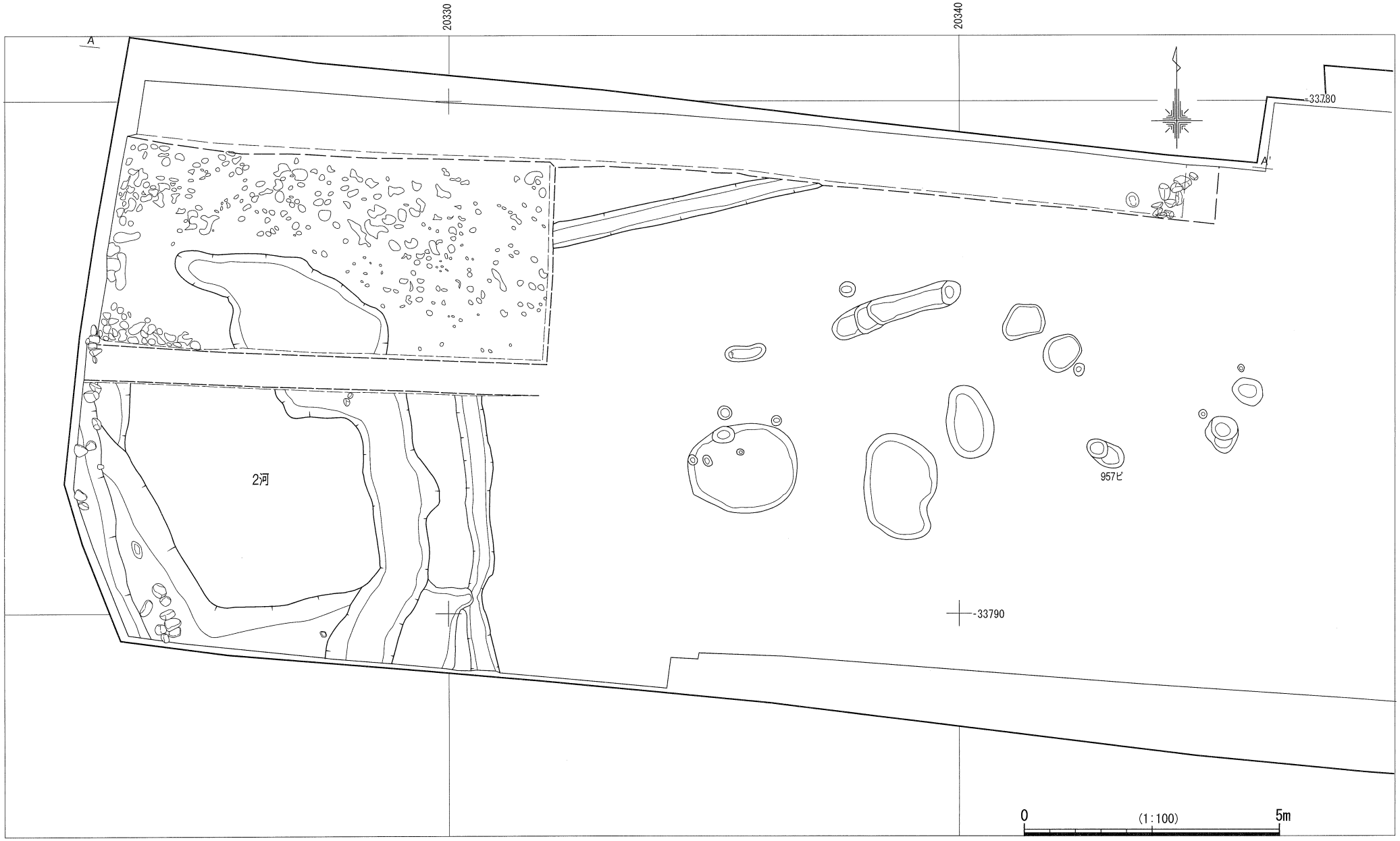
【参考文献】

山梨県教育委員会　1988『西田遺跡―第１次発掘調査報告書―』
山梨県教育委員会ほか　1991『獅子之前遺跡発掘調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第61集
森原明廣　1994「山梨県地域における古代末期の土器様相―「甲斐型土器」の消滅とその後―」『丘陵』14
櫛原功一　1997「出土土器の年代」『西田町遺跡調査報告書』　西田町遺跡発掘調査団ほか
山梨県教育委員会　1997『西田遺跡―第２次発掘調査報告書―』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第138集
一宮町教育委員会・西田町遺跡発掘調査団ほか　1997『西田町遺跡調査報告書』　一宮町文化財調査報告　第23集
山梨県教育委員会ほか　1997『一ノ坪遺跡発掘調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第141集
山梨県教育委員会ほか　1997『伊保水遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第149集
山梨県教育委員会ほか　2002『下西畑遺跡　西畑遺跡　影井遺跡　保坂家屋敷墓』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第196集
山梨県教育委員会ほか　2002『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第194集
山梨県教育委員会ほか　2003『大木戸遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第205集
笛吹市教育委員会・（財）山梨文化財研究所ほか　2010『西田町遺跡（第２次・第３次）』　笛吹市文化財調査報告書　第23集
佐々木満　2011「甲斐国における中世後半の土器様相―鉢・鍋を中心に―」『山梨県考古学協会誌』20

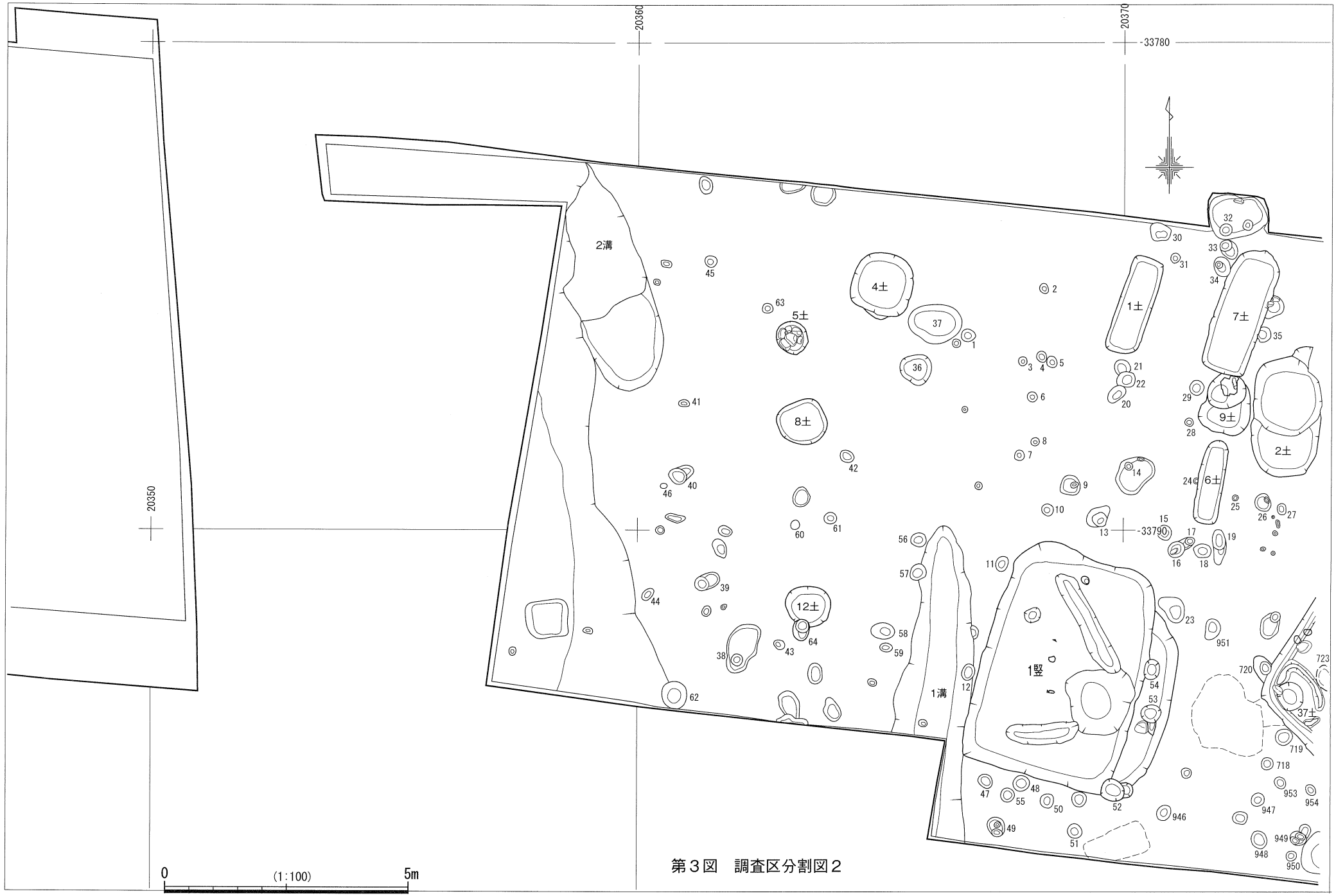


0 (1:400) 20m

第１図　調査区全体図および地形図



第２図　調査区分割図１


20360
20370
-33780
20350
-33790
2溝
1溝
1竪
1土
2土
4土
5土
6土
7土
8土
9土
12土
37土
0
(1:100)
5m

第３図　調査区分割図２

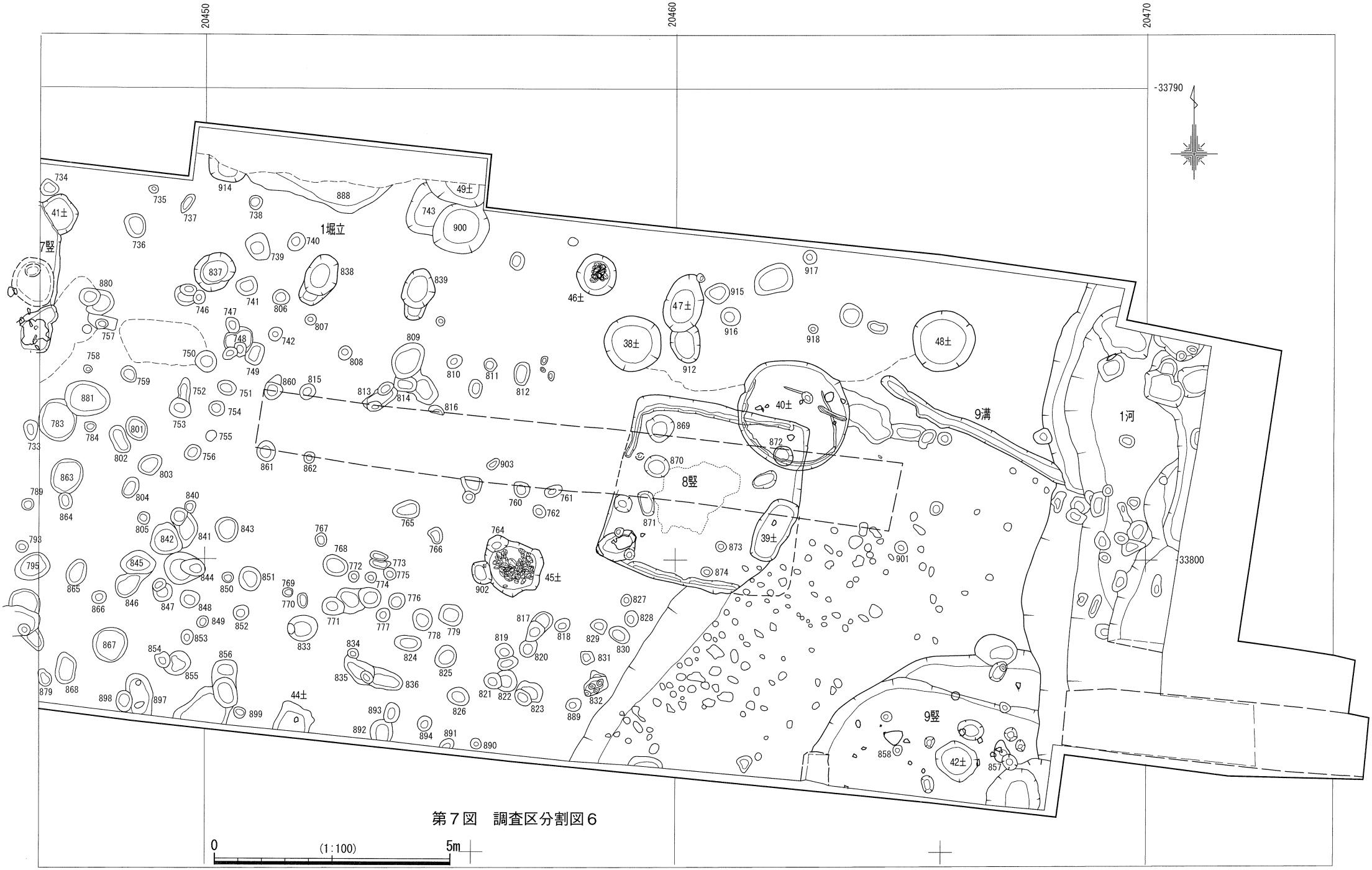
20380
20390
-33790
-33800
7土
3土
9土
2土
6土
10土
11土
3竪
2竪
3溝
13土
14土
30土
31土
32土
33土
34土
36土
37土
4竪
5竪
15土
17土
8溝
10溝
0
(1:100)
5m

第４図　調査区分割図３

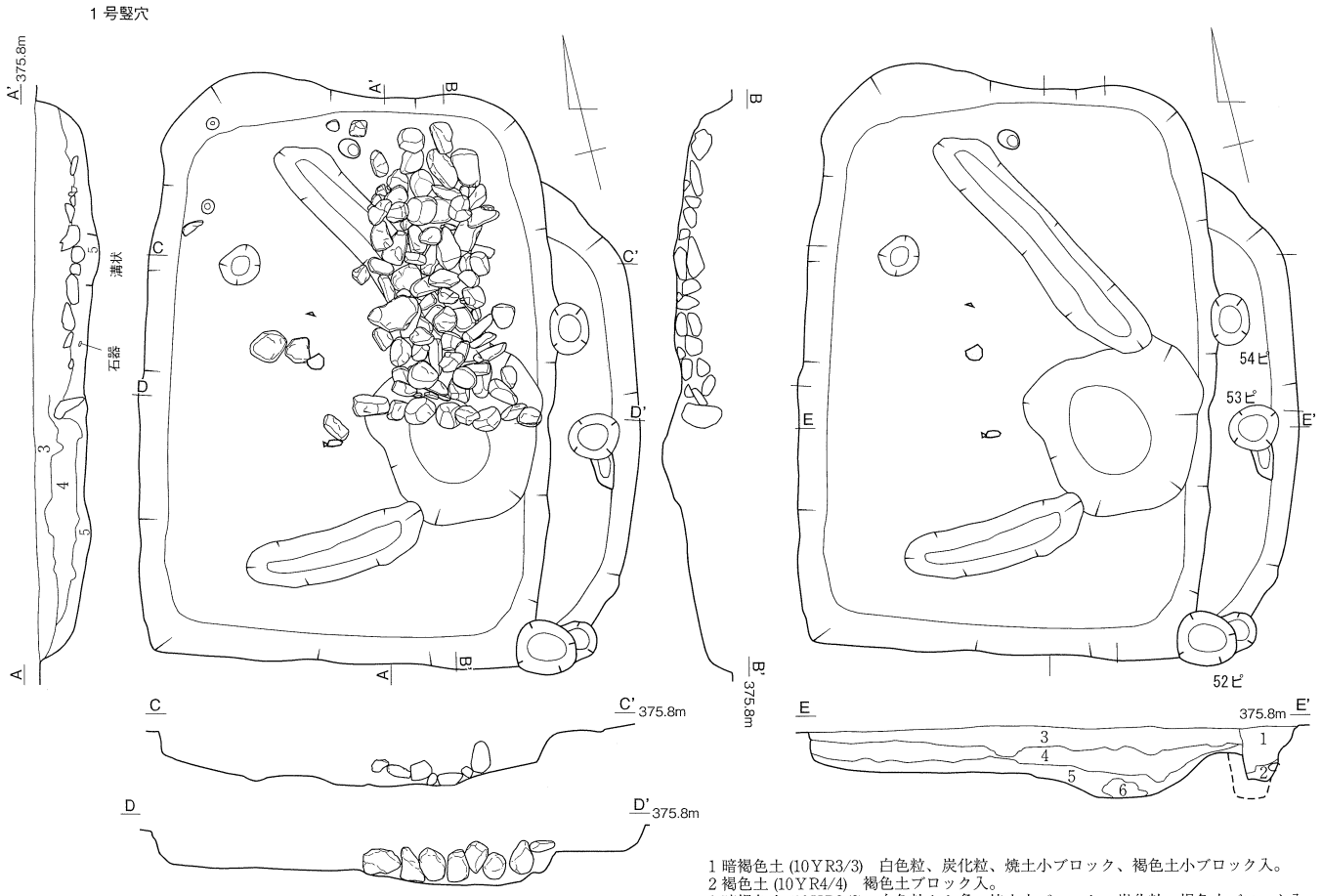
20400
20410
20420
試掘坑
7溝
8溝
10溝
6溝
6竪
1焼
15土
16土
17土
18土
19土
20土
22土
27土
28土
29土
35土
-33790
-33800
0
(1:100)
5m

第５図　調査区分割図４

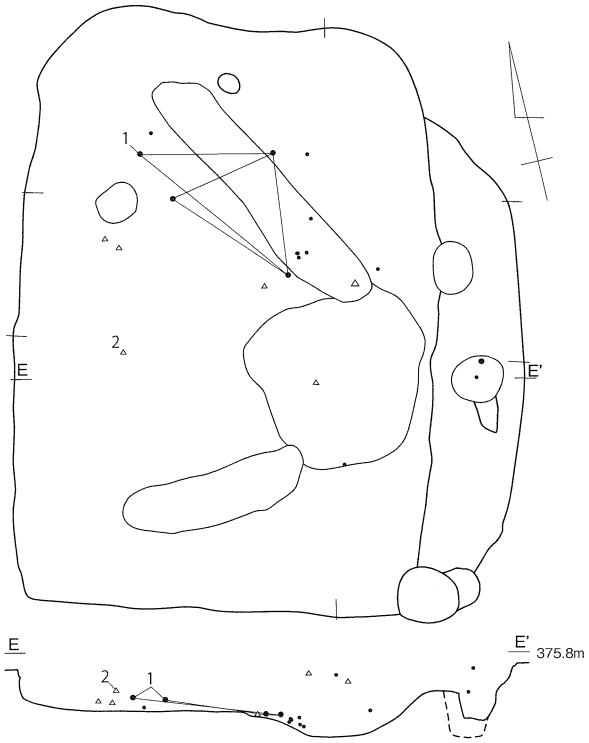
第６図　調査区分割図５

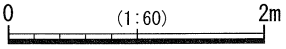

20450
20460
20470
-33790
33800
1堀立
7竪
8竪
9竪
9溝
1河
41±
49±
38±
47±
46±
48±
40±
39±
45±
44±
42±
0
(1:100)
5m

第７図　調査区分割図６



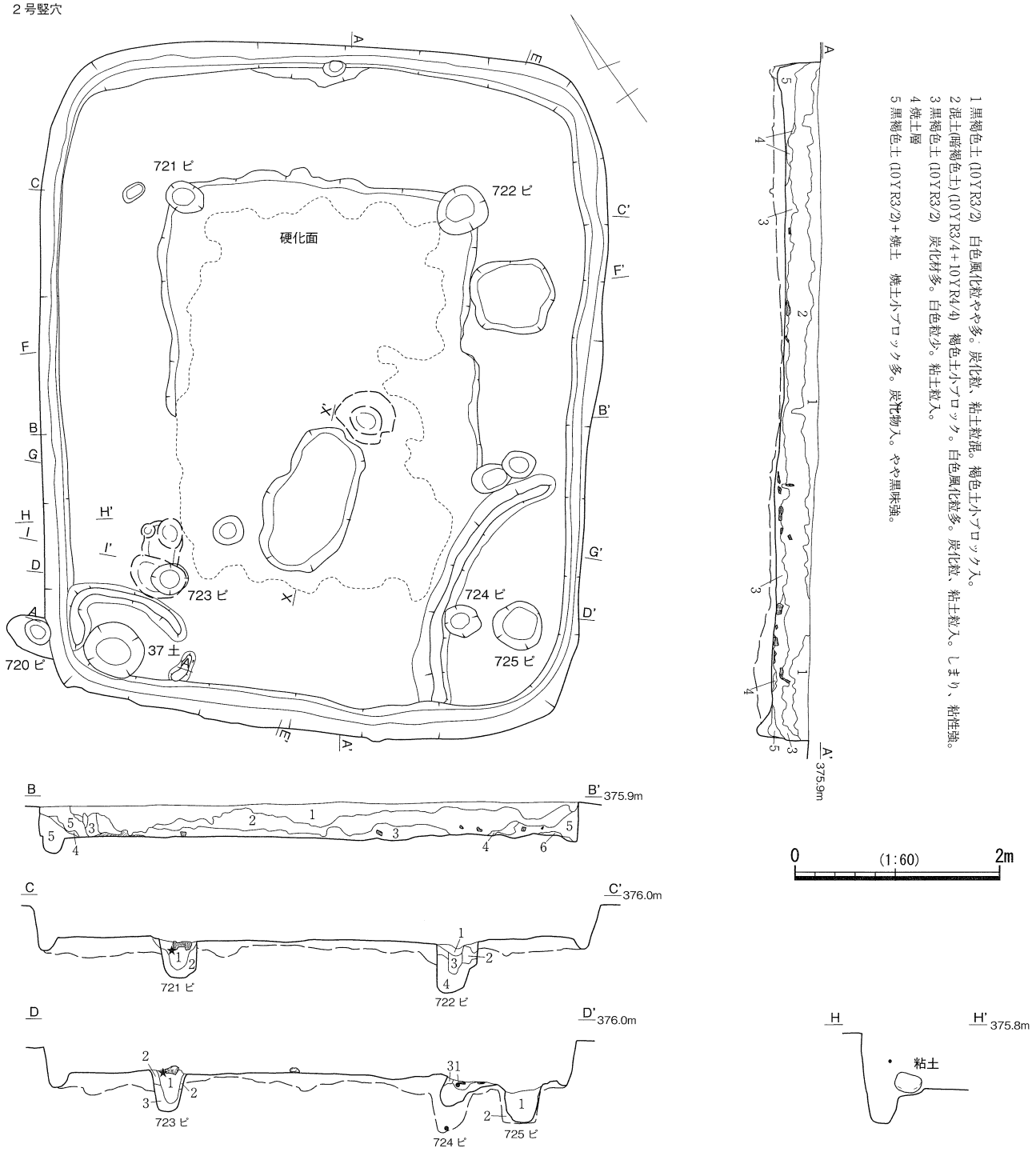
1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒、炭化粒、焼土小ブロック、褐色土小ブロック入。
2 褐色土 (10YR4/4)　褐色土ブロック入。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒やや多。焼土小ブロック、炭化粒、褐色小ブロック入。しまり、粘性強。
4 褐色土 (10YR4/4)　褐色土小ブロック主体。白色粒、ローム小ブロック入。上層に焼土ブロック有。しまり、粘性強。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　やや灰色味有。白色粒、褐色土小ブロック、炭化粒入。しまり、粘性強。
6 褐色土 (10YR4/4)　褐色土ブロック入。





第８図　１号竪穴

2号竪穴



1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒やや多。炭化粒、粘土粒混。褐色土小ブロック入。
2 混土(暗褐色土) (10YR3/4＋10YR4/4)　褐色土小ブロック。白色風化粒多。炭化粒、粘土粒入。しまり、粘性強。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　炭化材多。白色粒少。粘土粒入。
4 焼土層
5 黒褐色土 (10YR3/2)＋焼土　焼土小ブロック多。炭化物入。やや黒味強。

2号竪穴

1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒やや多。
炭化 粒、粘土粒混。褐色土小ブロック入。
2 暗褐色混土 (10YR3/4＋10YR4/4) 褐色土小ブロック入。
白色風化粒多。炭化粒、粘土粒入。しまり、粘性強。
3 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化材多。白色粒少。粘土粒入。
4 焼土
5 黒褐色土 (10YR3/2)＋焼土　焼土小ブロック多。炭化物入。
やや黒味強。
6 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 床直上、褐色土主体。

721号ピット

1 暗褐色土 (10YR3/3)　焼土粒、焼土小ブロック、
炭化材、炭化物、白色風化粒入。
2 黄褐色土 (10YR5/6)　黄褐色小ブロック多。

722号ピット

1 黒褐色土 (10YR3/2)　炭化物やや多。焼土粒、白色風化粒入。
2 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)～暗褐色土 (10YR3/4)
黄褐色小ブロック入。
3 暗褐色土 (10YR3/3) 1層類似。炭化物少 。
黄褐色小ブロック入。柱根。
4 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　黄褐色ブロック主。

723号ピット

1 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)～暗褐色土 (10YR3/4)
炭化材立つ。炭化物やや多。焼土粒やや有。
白色風化粒入。
2 黄褐色(砂質)土 (10YR5/6)　埋め土。地山に似る。
3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　黄色土小ブロック入。

724号ピット

1 暗褐色土 (10YR3/4)　焼土小ブロック入。炭化材有。
炭化物やや多。白色風化粒入。
2 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)～暗褐色土 (10YR3/3)
黄褐色小ブロック入。
3 黄褐色土 (10YR5/6)　土手盛り土。

725号ピット

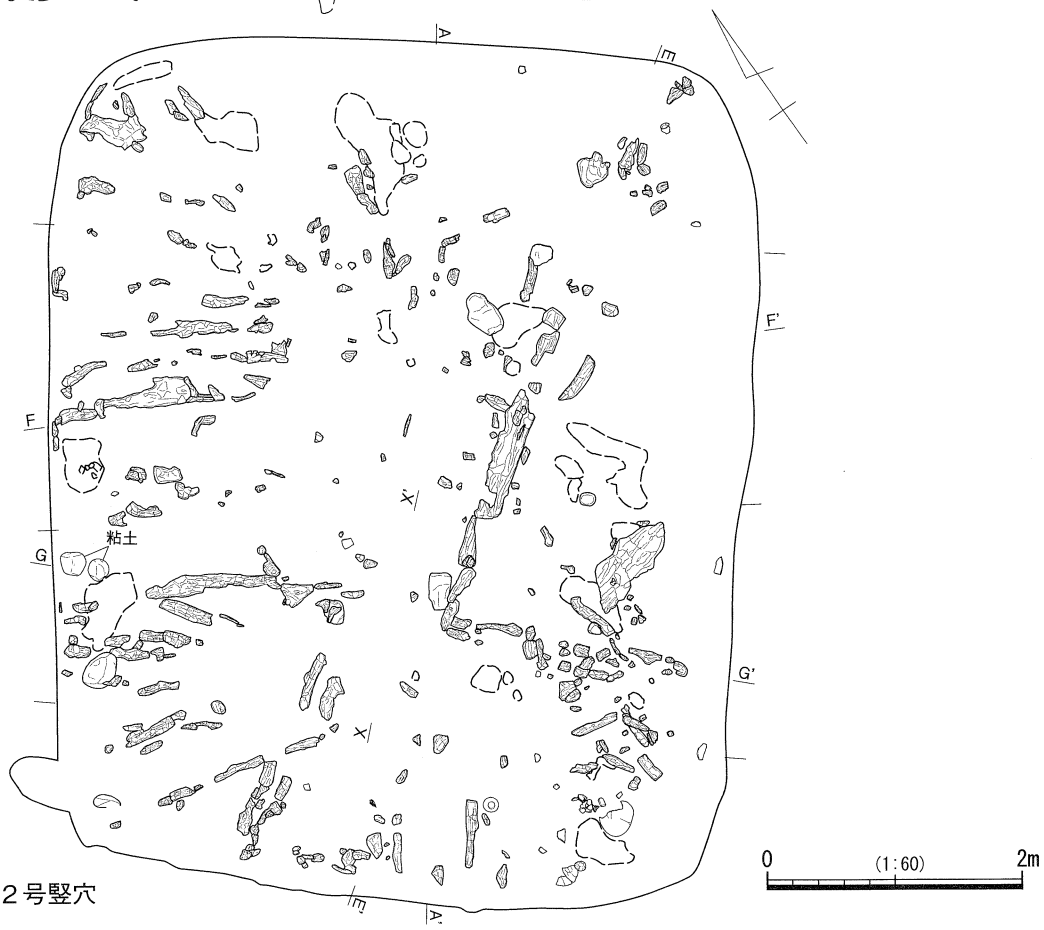
1 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)～暗褐色土 (10YR3/4)
炭化物、焼土粒やや多。ローム(褐色土)小ブッロク入。
2 黄褐色土 (10YR5/6)　地山壁落土。

第9図　2号竪穴

２号竪穴 炭化物微細・断面図

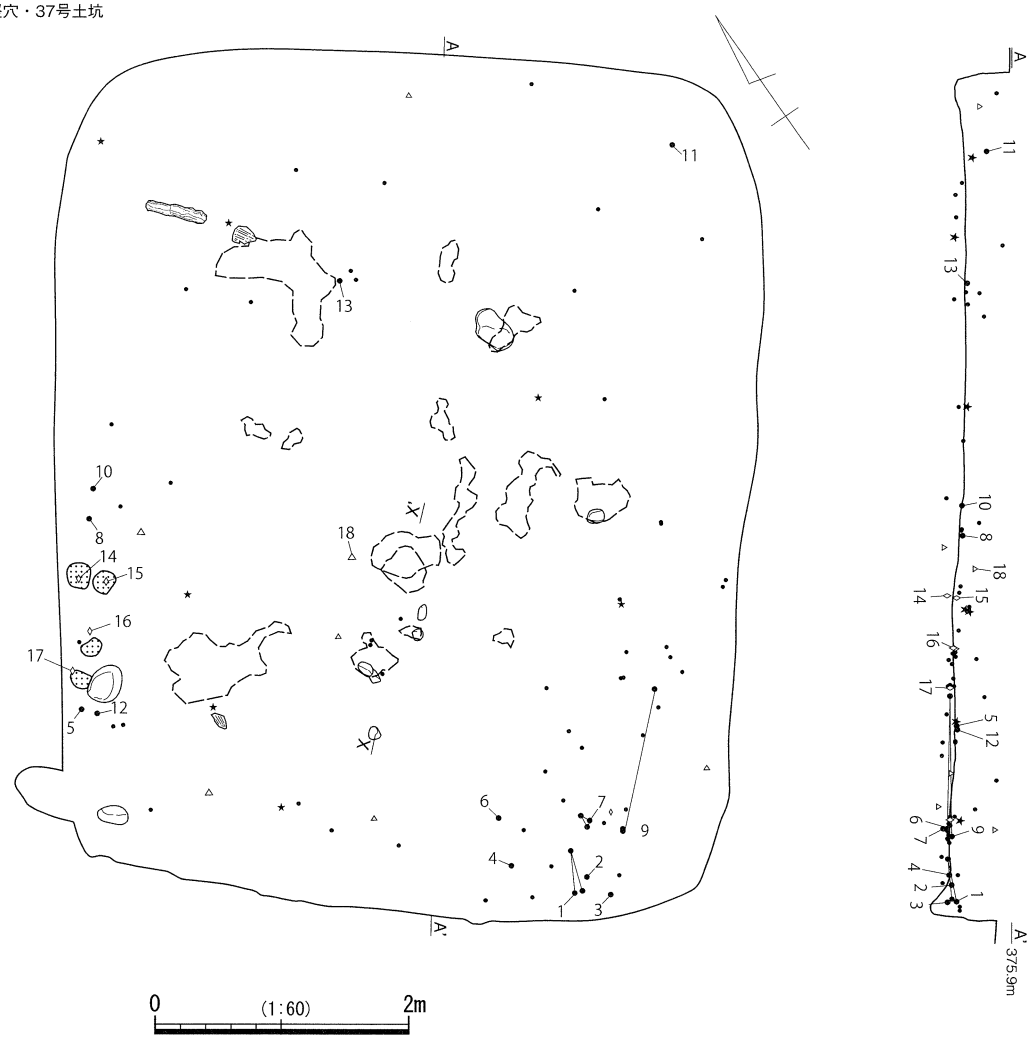
１層目

２層目

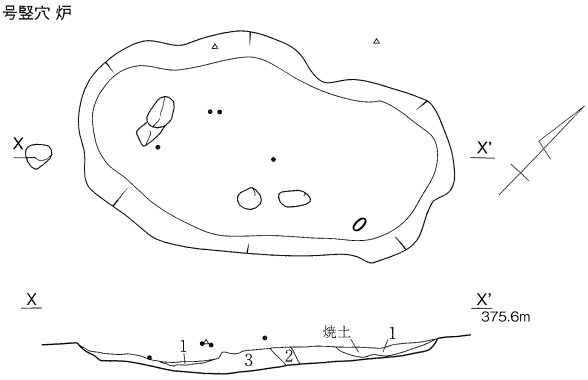


第10図　２号竪穴

2号竪穴・37号土坑

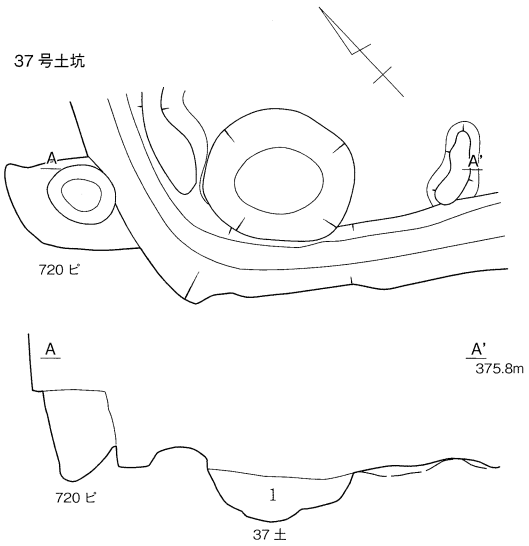


2号竪穴 炉



1 焼土層　黒褐色ブロック混(炭化粒混じり)。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　根状の落ち込み。
3 黄褐色土 (10YR5/6)　やや砂質。地山直上～地山。

37号土坑

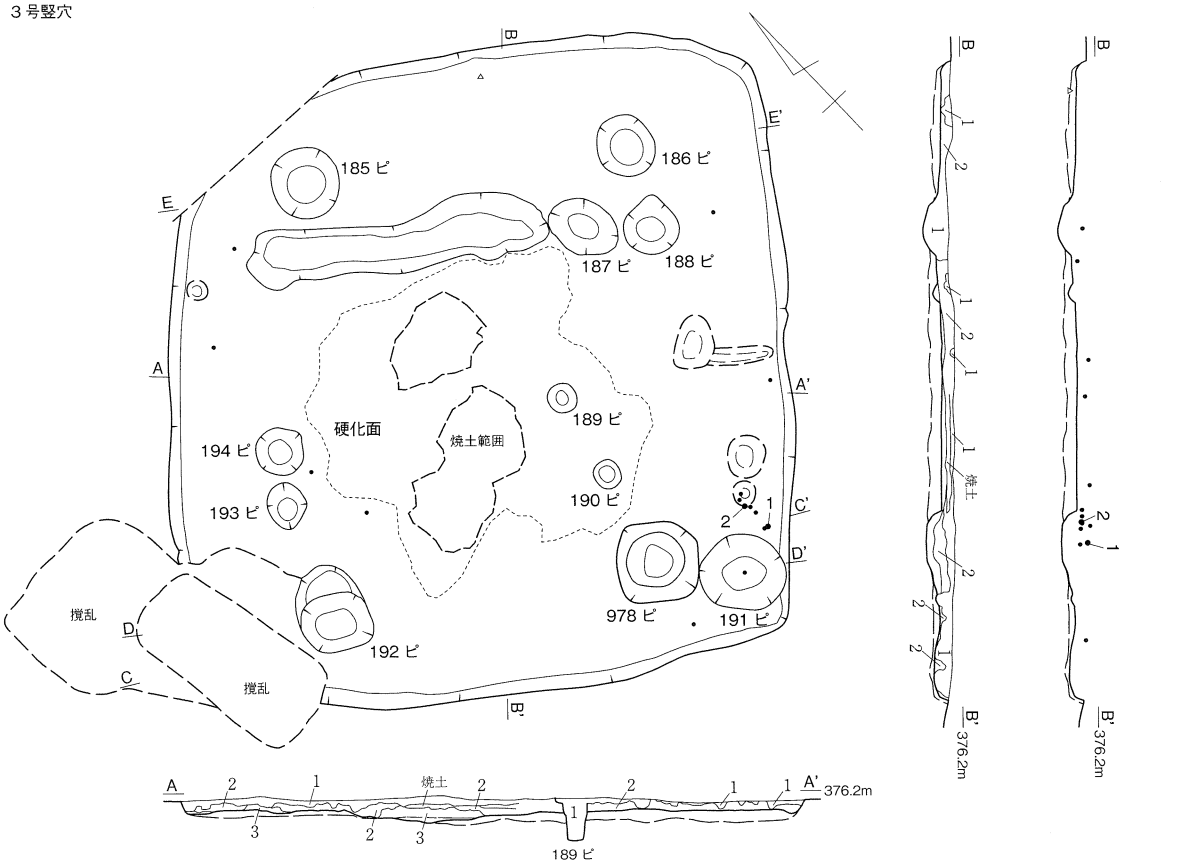


1 暗褐色土 (10YR3/4)　黄褐色土小ブロック、白色粒入。黒味弱。

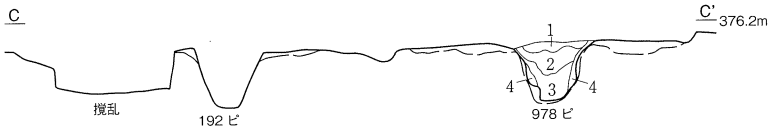
0 (1:30) 1m

第11図　2号竪穴

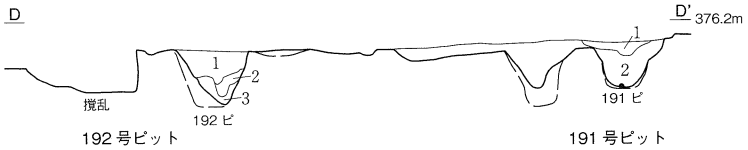
3号竪穴



1 黒褐色土 (10YR3/2)　黒味有。灰褐色小ブッロク混。焼土小ブロック入。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色味強。焼土小ブロック、 褐色土小ブロック入。貼り床か。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　炭化粒、灰褐色土小ブロック入。貼り床下の埋め土か。



978 号ピット
1 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色土小ブロックやや多く混。
2 暗褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック混。炭化粒、焼土小ブロック入。
3 黒褐色土 (10YR3/1)　黒味有。
4 褐色土 (10YR4/4)　地山に近い。



192 号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック、白色粒やや多。
2 黒褐色土 (10YR2/3)　黒味有。やや密。褐色土小ブロック入。
3 褐色土 (10YR4/4)　地山に近い。

191 号ピット
1 黒褐色土 (10YR2/3)　白色粒やや多入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　炭化粒、褐色土粒、白色粒入。

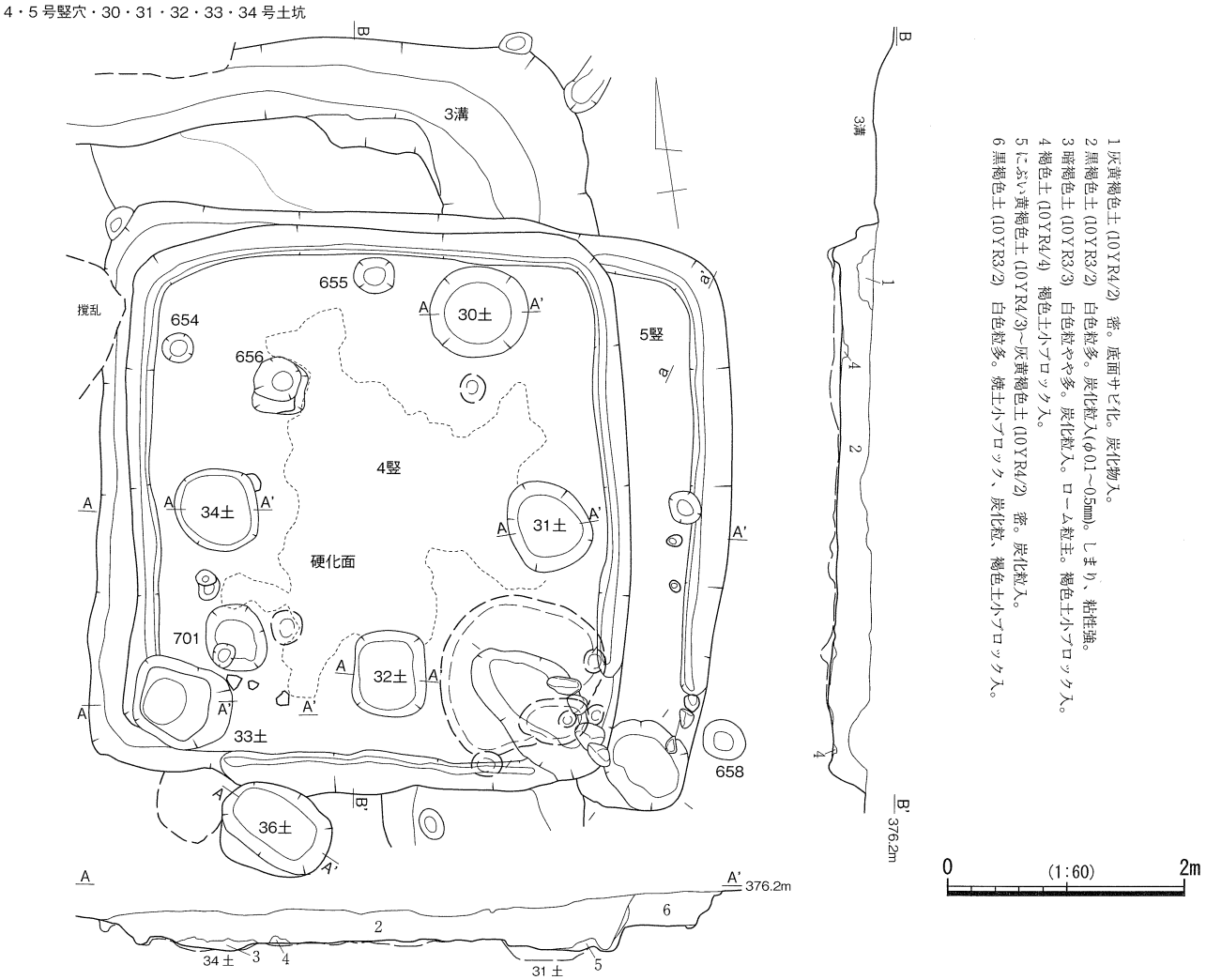
185 号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色粒、炭化粒入。黒味有。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色土入。

186 号ピット
1 暗褐色土 (10YR3/4)　白色粒多。炭化粒入。
2 褐色土 (10YR4/4)　白色粒入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　やや密。褐色土小ブロック入。
4 暗褐色土 (10YR3/3)

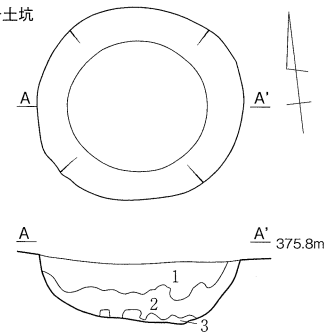
0　(1:60)　2m

第12図　3号竪穴

4・5号竪穴・30・31・32・33・34号土坑

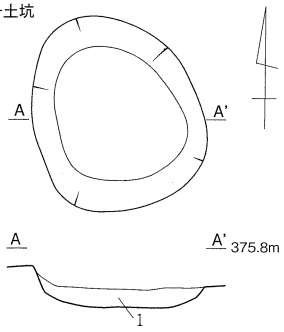


30号土坑



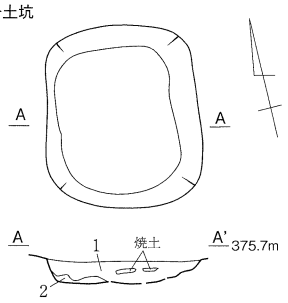
1 暗褐色土 (10YR3/3) 白色風化粒多。褐色土小ブロック入。
2 黒褐色土 (10YR3/2) 褐色小ブロック、焼土粒入。褐色味有。
3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土に近い。地山とは異なる。

31号土坑



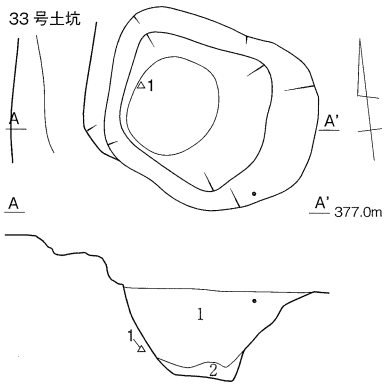
1 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化粒(φ0.3cm)、焼土小ブロック入。白色風化粒有。やや砂質。小礫少々。

32号土坑



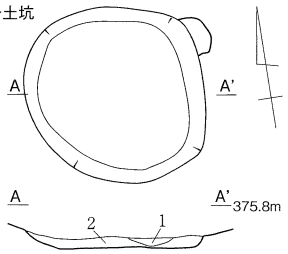
1 暗褐色土 (10YR3/3) 白色風化粒やや多。焼土小ブロック入。
2 暗褐色砂質土 (10YR3/4) 地山に近い。

33号土坑



1 暗褐色土 (10YR3/3) 土層に白色風化粒やや多。土師器片、磨斧片出土。
2 暗褐色土 (10YR3/4) 黄色味有。

34号土坑

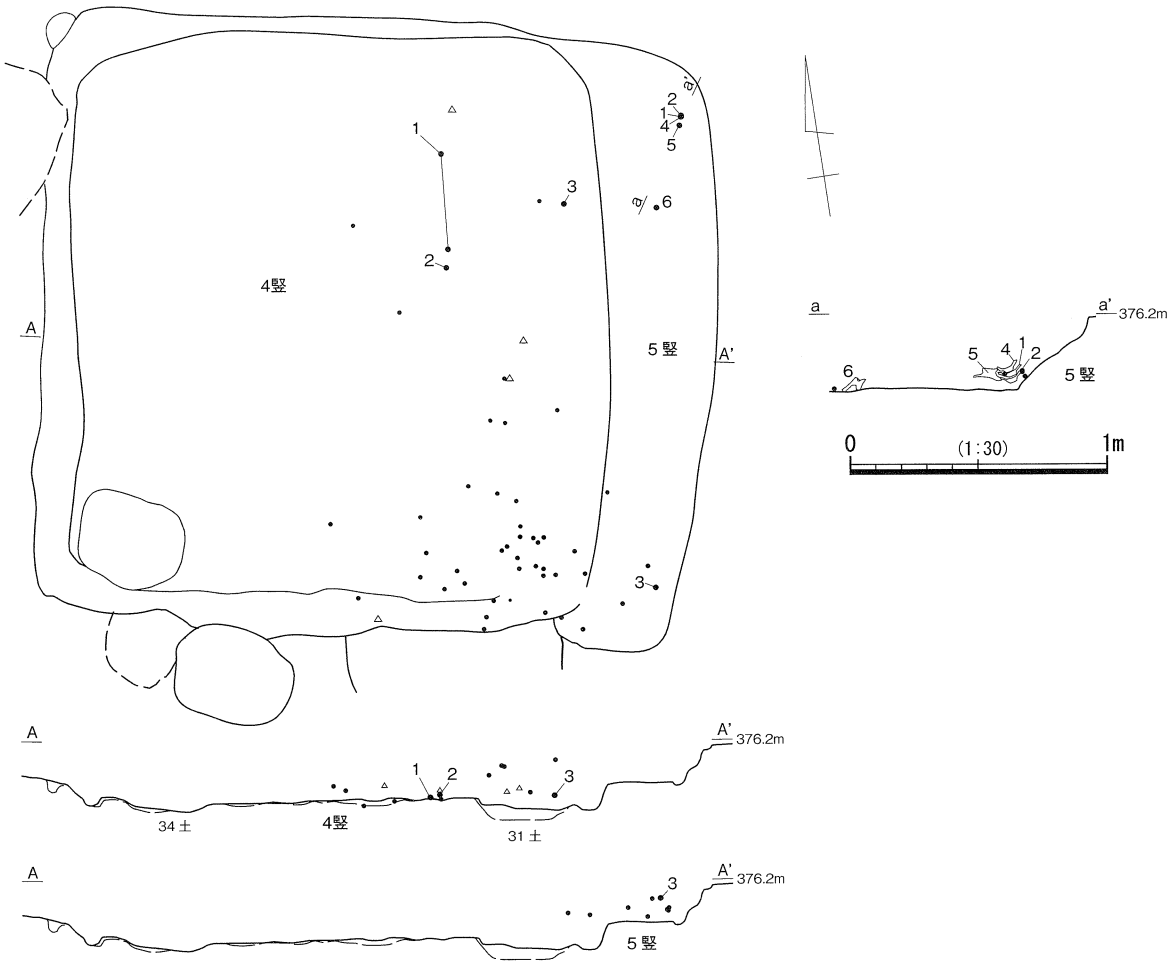


1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土ブロック入。白色風化粒やや多。
2 褐色砂質土 (10YR4/4) 地山に類似。焼土小ブロック入。白色風化粒多。

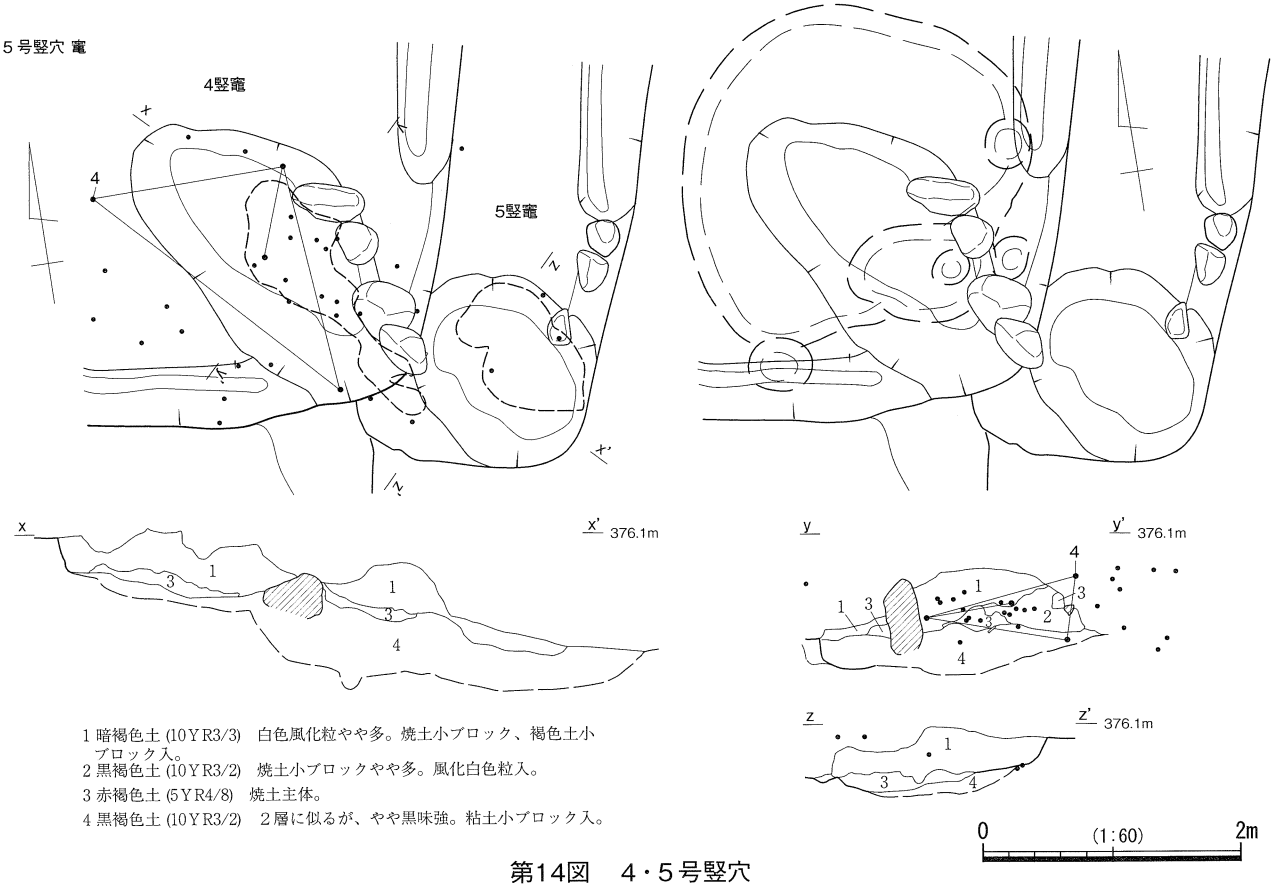
0 (1:30) 1m

第13図 4・5号竪穴

4・5号竪穴



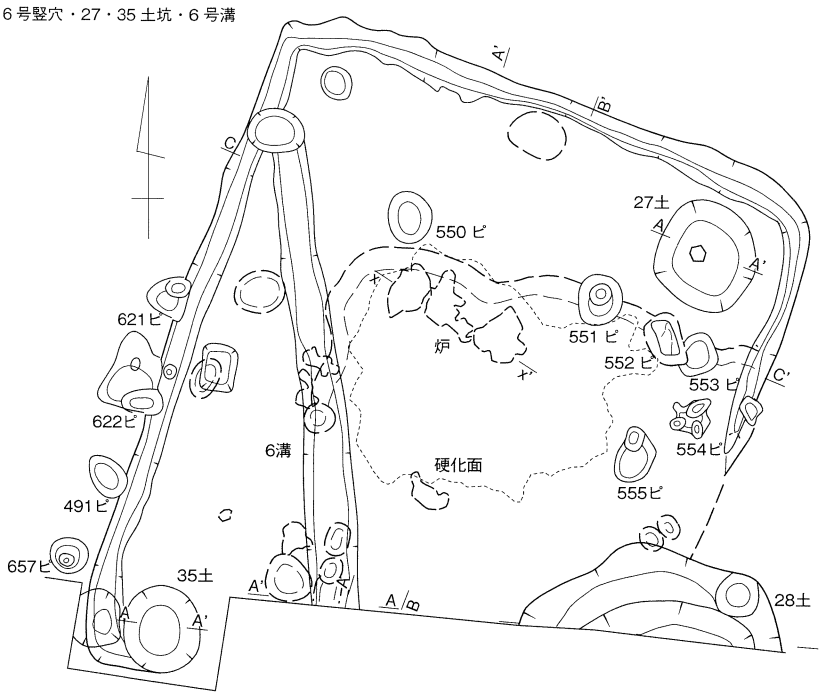
4・5号竪穴 竈

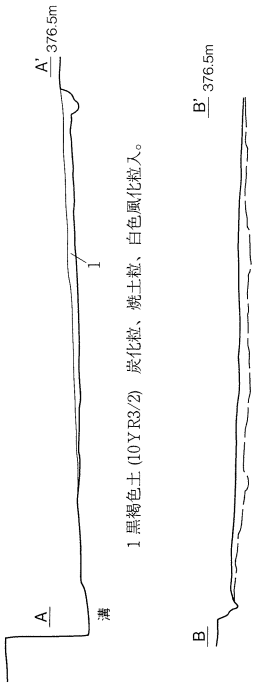


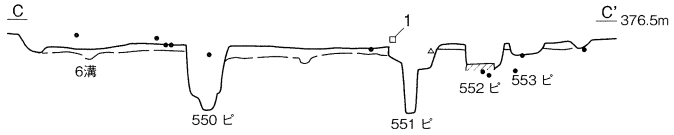
1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒やや多。焼土小ブロック、褐色土小ブロック入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土小ブロックやや多。風化白色粒入。
3 赤褐色土 (5YR4/8)　焼土主体。
4 黒褐色土 (10YR3/2)　２層に似るが、やや黒味強。粘土小ブロック入。

第14図　4・5号竪穴

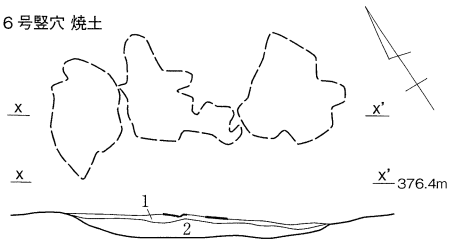
6号竪穴・27・35土坑・6号溝



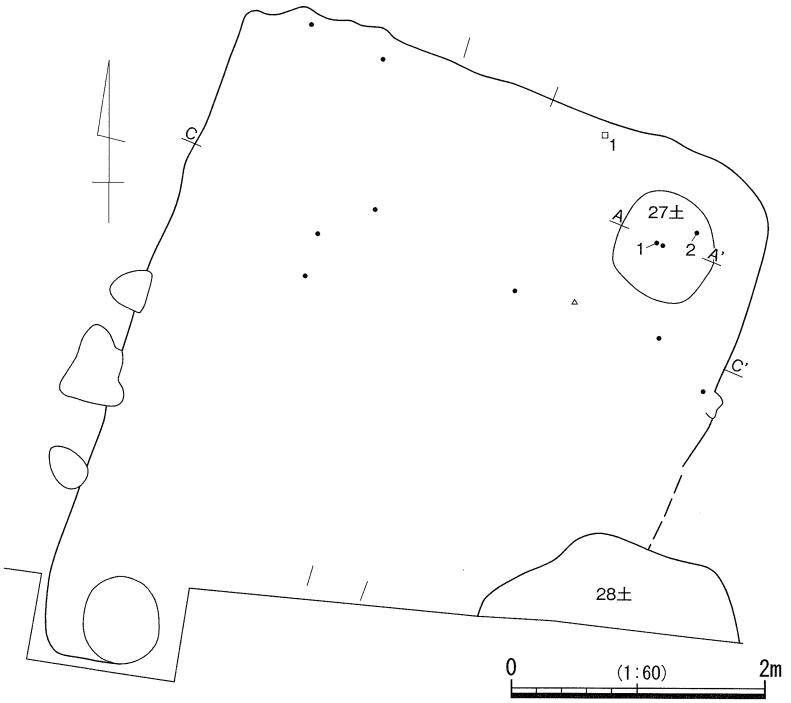




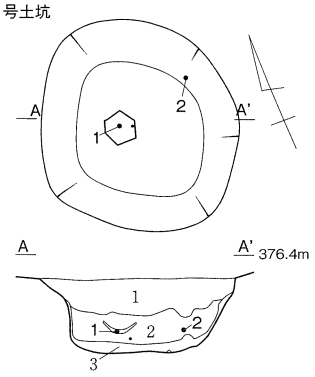
6号竪穴 焼土



1 焼土
2 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) やや灰黄味有。地山に近い。

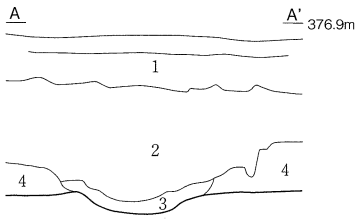


27号土坑



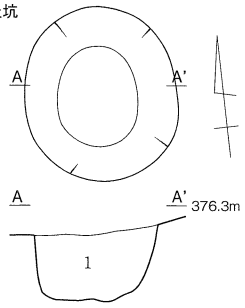
1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土小ブロック、炭化粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/1) 炭化粒多。黒味強。
褐色土小ブロック、焼土粒、F小ブロック入。
3 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 褐色土小ブロック多。壁崩落土。

6号溝



1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 耕作土。表土。白色風化粒多。
2 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) やや黄味有。白色風化粒入。
3 暗褐色土 (10YR3/4) やや黄味弱。
4 暗褐色土 (10YR3/3) やや黒味有。

35号土坑

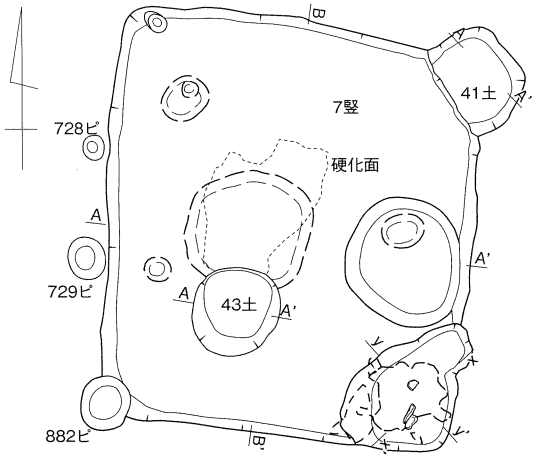


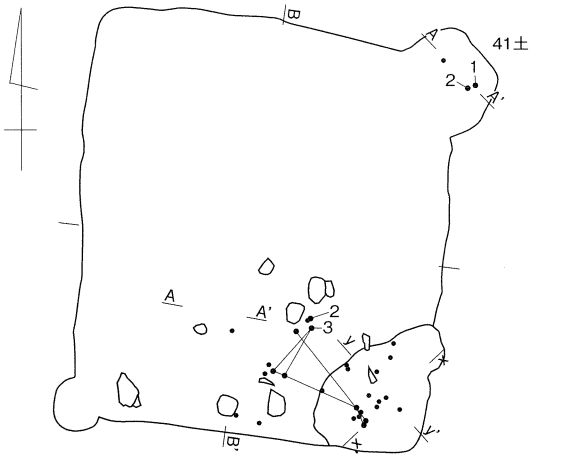
1 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土粒、炭化粒少々有。

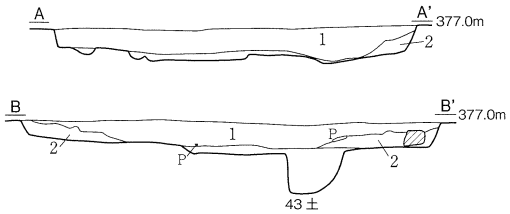
0 (1:30) 1m

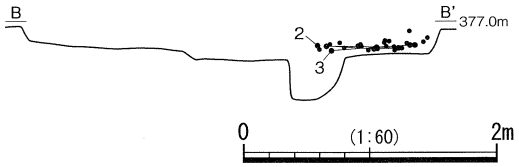
第15図 6号竪穴

7号竪穴・41・43号土坑



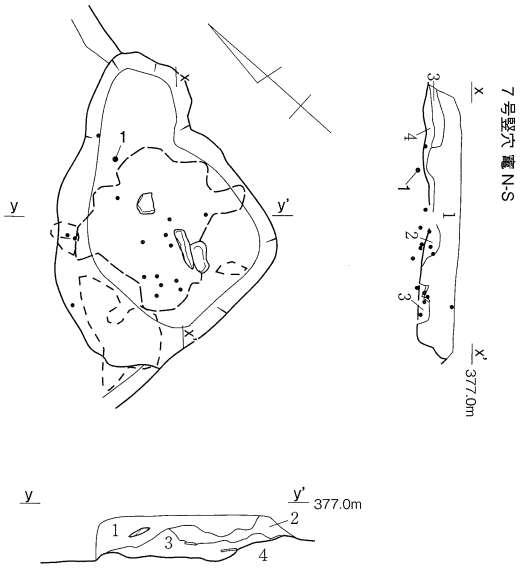






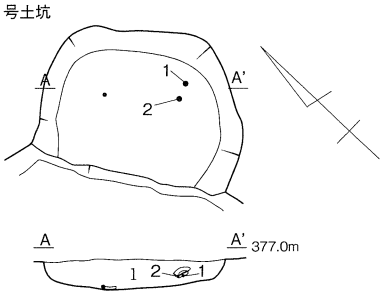
1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒やや多。炭化粒、焼土粒、褐色土小ブロック入。やや灰色味有。
2 黒褐色土 (10YR3/1)　炭化粒入。やや黒味有。褐色土小ブロック入。

7号竪穴 竈



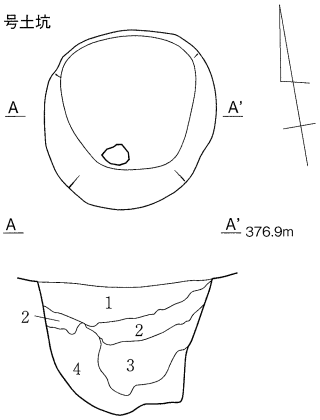
1 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土粒、炭化粒、礫、白色風化粒、褐色粒入。
2 灰黄褐色土 (10YR5/2)　灰色味有。
3 焼土層 (2.5YR4/4)
4 褐色土 (10YR4/4)　地山。

41号土坑



1 黒褐色土 (10YR3/2)　白粒、褐粒混。平安末土師器片有、サビ粒入。やや灰色味有。

43号土坑

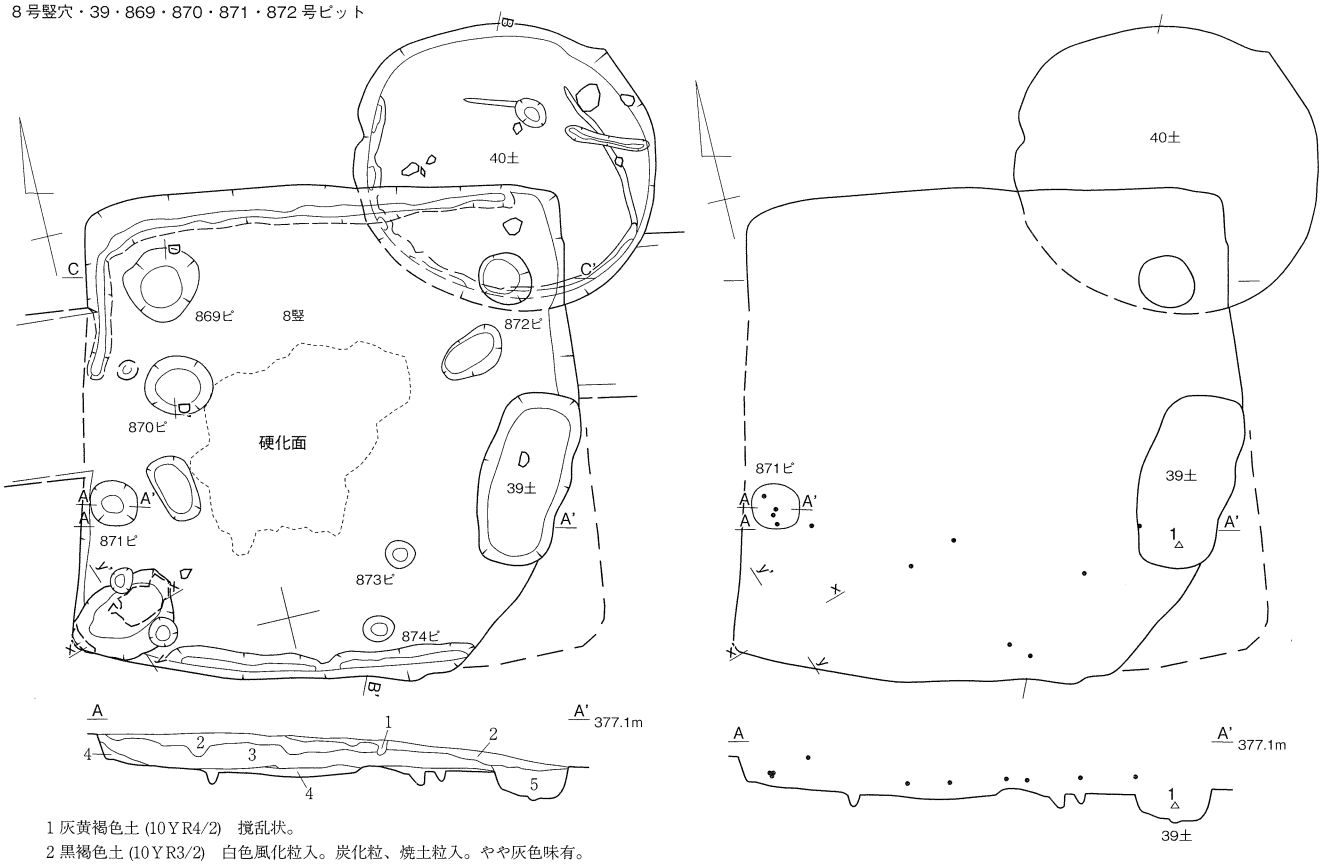


1 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色土ブロック、白色風化粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/1)　褐色土小ブロック入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　黄褐色土小ブロック入。
4 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　壁と同質の黄褐色砂質土主体。黒褐色土小ブロック混。白色風化粒入。

0 (1:30) 1m

第16図　7号竪穴

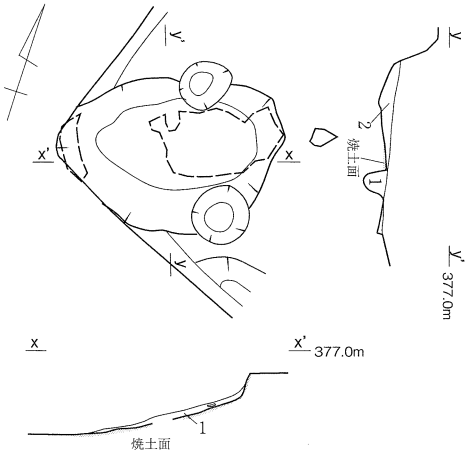
8号竪穴・39・869・870・871・872号ピット



1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　撹乱状。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒入。炭化粒、焼土粒入。やや灰色味有。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒、褐色土小ブロックやや多。焼土粒、炭化粒入。
4 黒褐色土 (10YR3/2)　やや黒味有。焼土粒入。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　褐色土小ブロック入。

40号土坑
1鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　白色粒多。竪穴床面ローム主体。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒やや多。土器片入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　黒味やや強い。
4 褐色土 (10YR4/4)　地山類似。

8号竪穴 竈



1 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土粒、炭化粒入。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　竈礫の抜き穴か。焼土入。焼土面は硬。

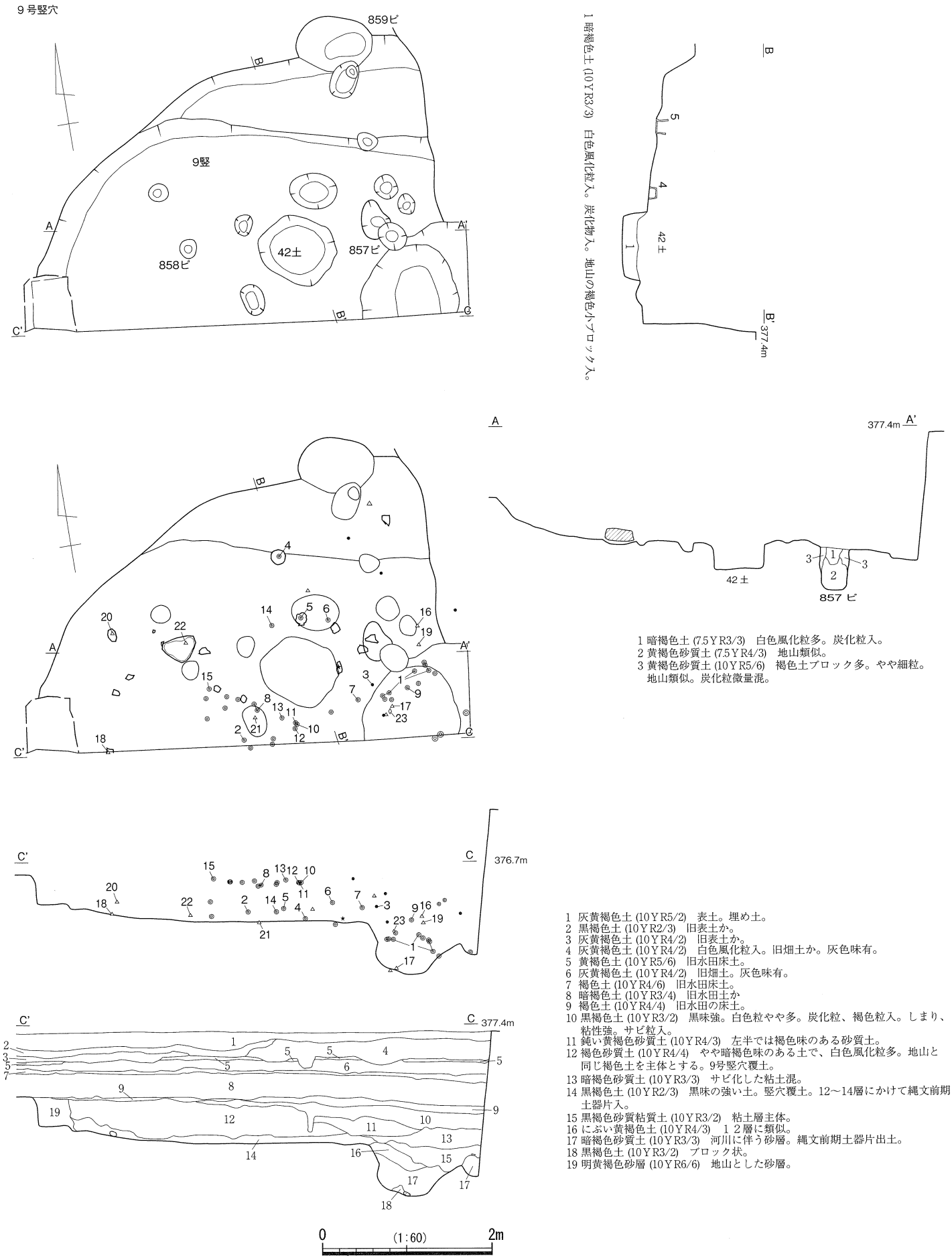
869・870号ピット

869号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒、焼土粒入。
2 褐色土 (10YR4/4)　地山と同質の褐色土(粘質土)。黒褐色土小ブロック混。
3 黒褐色土 (10YR3/1)　やや黒味有。1層に似る。1層よりも白色粒少。
4 褐色土 (10YR4/4)　壁崩落土の褐色土。

870号ピット
1 褐色土 (10YR4/4)　白色風化粒多。焼土粒やや目立つ。褐色土小ブロック入。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒、黄褐色土粒入。

871号ピット

第17図　8号竪穴



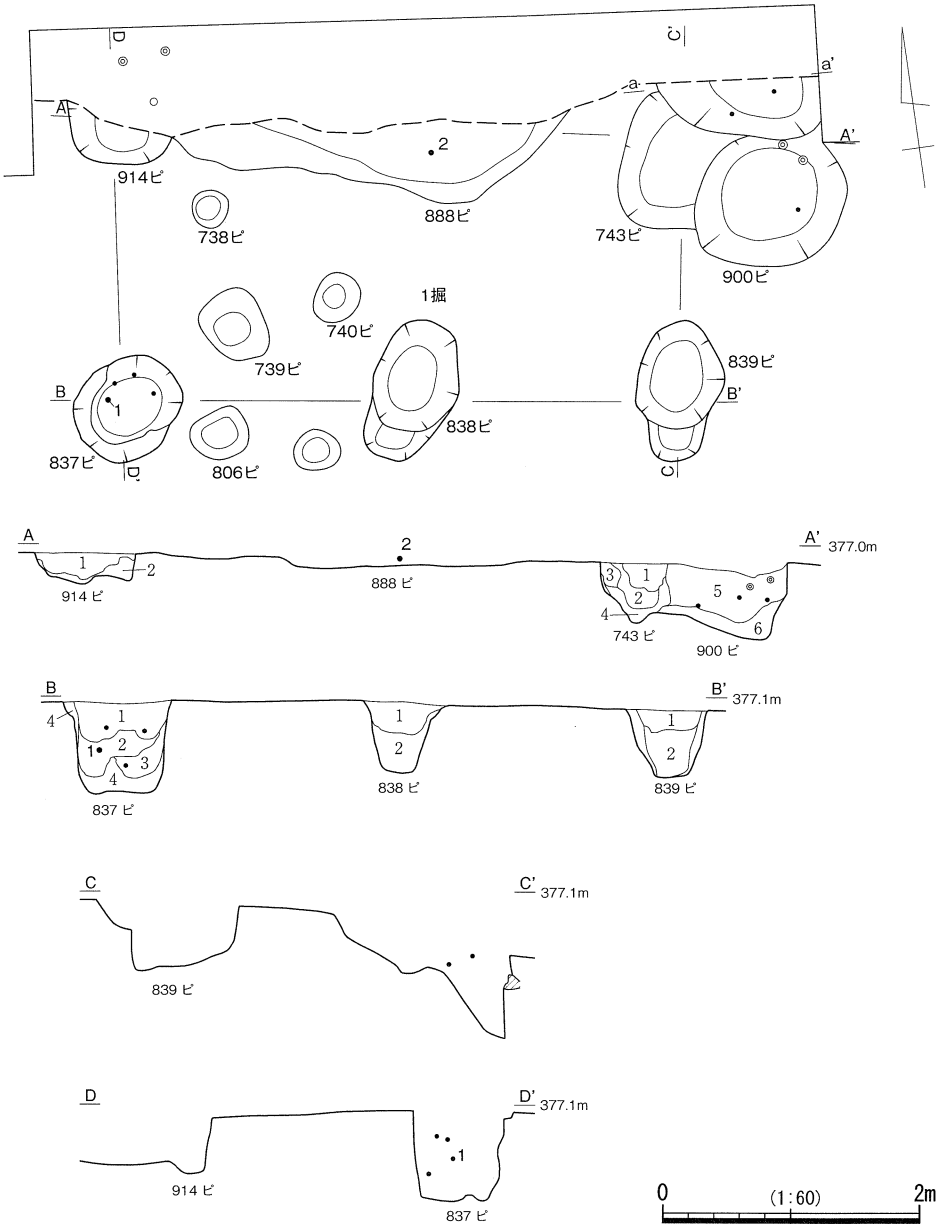
1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒入。炭化物入。地山の褐色小ブロック入。

1 暗褐色土 (7.5YR3/3)　白色風化粒多。炭化粒入。
2 黄褐色砂質土 (7.5YR4/3)　地山類似。
3 黄褐色砂質土 (10YR5/6)　褐色土ブロック多。やや細粒。地山類似。炭化粒微量混。

1 灰黄褐色土 (10YR5/2)　表土。埋め土。
2 黒褐色土 (10YR2/3)　旧表土か。
3 灰黄褐色土 (10YR4/2)　旧表土か。
4 灰黄褐色土 (10YR4/2)　白色風化粒入。旧畑土か。灰色味有。
5 黄褐色土 (10YR5/6)　旧水田床土。
6 灰黄褐色土 (10YR4/2)　旧畑土。灰色味有。
7 褐色土 (10YR4/6)　旧水田床土。
8 暗褐色土 (10YR3/4)　旧水田土か
9 褐色土 (10YR4/4)　旧水田の床土。
10 黒褐色土 (10YR3/2)　黒味強。白色粒やや多。炭化粒、褐色粒入。しまり、粘性強。サビ粒入。
11 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/3)　左半では褐色味のある砂質土。
12 褐色砂質土 (10YR4/4)　やや暗褐色味のある土で、白色風化粒多。地山と同じ褐色土を主体とする。9号竪穴覆土。
13 暗褐色砂質土 (10YR3/3)　サビ化した粘土混。
14 黒褐色土 (10YR2/3)　黒味の強い土。竪穴覆土。12～14層にかけて縄文前期土器片入。
15 黒褐色砂質粘質土 (10YR3/2)　粘土層主体。
16 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　１２層に類似。
17 暗褐色砂質土 (10YR3/3)　河川に伴う砂層。縄文前期土器片出土。
18 黒褐色土 (10YR3/2)　ブロック状。
19 明黄褐色砂層 (10YR6/6)　地山とした砂層。

第18図　９号竪穴

1号掘立建物



914号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/1)　白粒やや多。褐色粒入。黒味強。
2 褐色土 (10YR4/4)　地山類似。

743・900号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/1)　褐色土小ブロック、焼土粒入。黒味強。
2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　やや砂質。1層の黒褐色土小ブロック含む。
3 褐色土 (10YR4/4)　黒褐色土小ブロック入。
4 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)　地山類似。黒褐色土小ブロック少々含む。6層類似。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　焼土粒、炭化粒、白色粒子、黄褐色土小ブロック入。
6 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)　地山よりはやや暗い。地山類似。

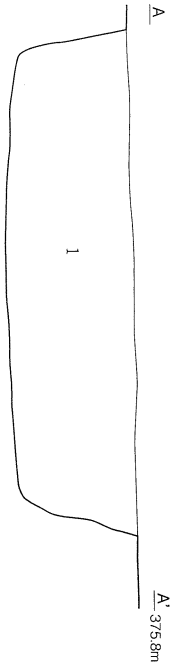
837号ピット
1 黒褐色土 (10YR2/3)　白色風化粒多。焼土粒、炭化粒入。灰褐色小ブロック混。
2 暗褐色土 (10YR3/4)～褐色土 (10YR4/4)　4層類似のブロック土主体。白色風化粒混。粘質土。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　1層類似。白色風化粒は少ない。
4 褐色土 (10YR4/4)　白色風化粒混。粘質。

838号ピット
1 黒褐色土 (10YR2/3)　白色風化粒多。褐色土小ブロックやや多く混。炭化粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/1)　白色風化粒少。黒味強。

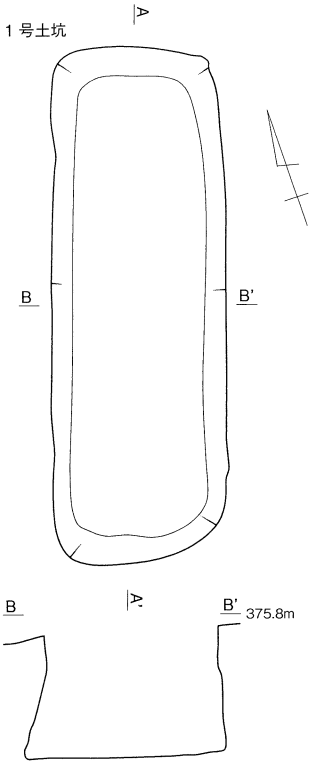
839号ピット
1 黒褐色土 (10YR3/1)　白色風化粒やや多。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　炭化物(φ1.0cm)有。

第19図　1号掘立

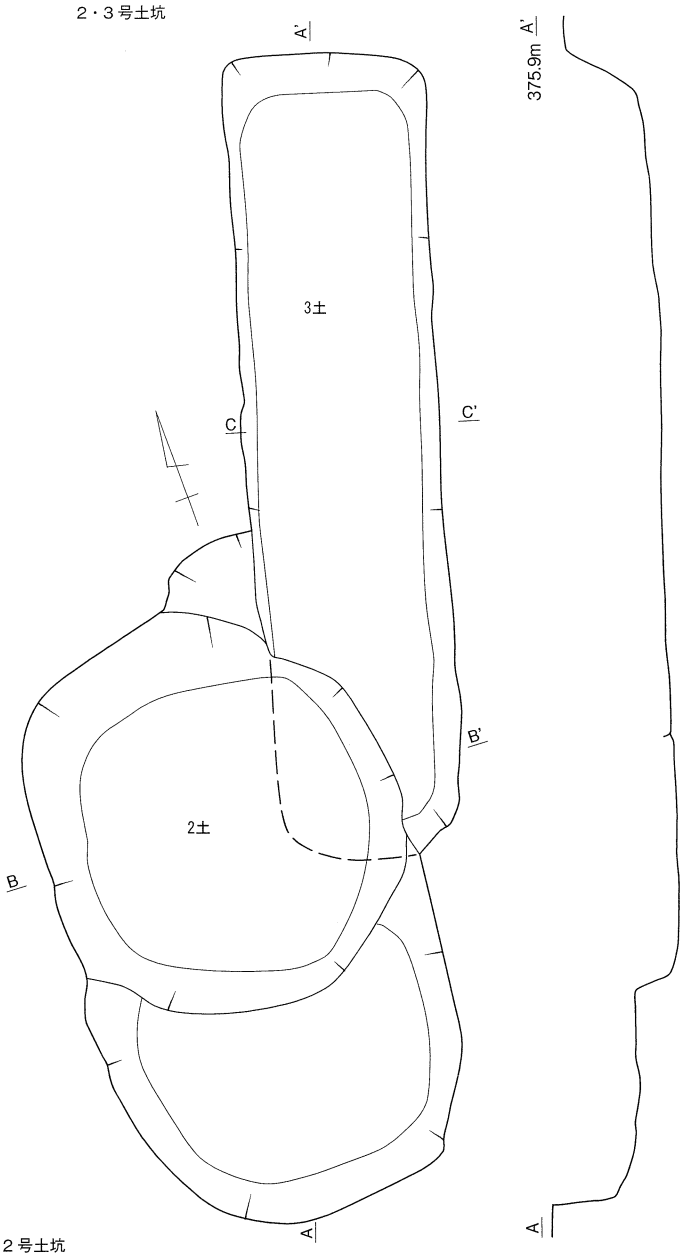
1 黒褐色土 (10YR3/2)　地山のロームブロックを全体的に含む。白色粒入。しまり、粘性有。



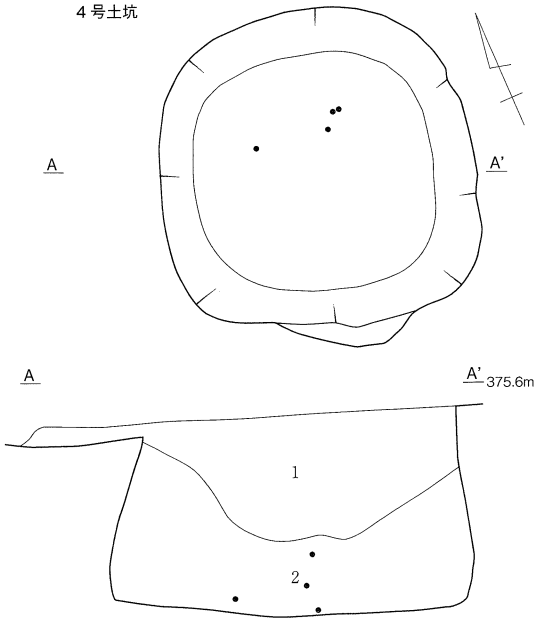
1号土坑



2・3号土坑

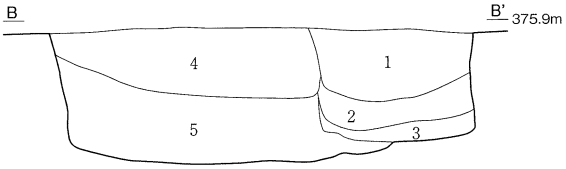


4号土坑



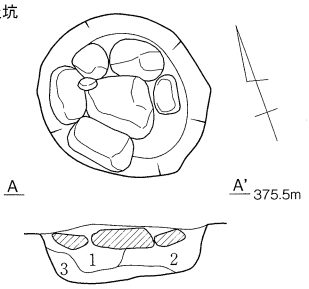
1 黒褐色土 (10YR3/2)　ローム(地山)の少ブロック多。
炭化物、褐色土小ブロック有。白色風化粒やや多。しまり、粘性強。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　地山の少ブロックやや多。1層に似るが、
1層より白色風化粒少。しまり、粘性強。

2号土坑



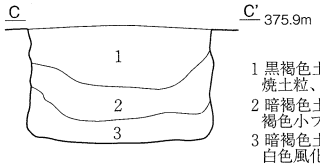
1 黒褐色土(10YR3/2)　白色風化粒、地山黄色小ブロックやや多。焼土粒、炭化粒、褐色小ブロック有。しまり、粘性強。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　黄色小ブロック、白色粒、炭化粒、褐色小ブロック、焼土粒有。しまり、粘性強。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　黄色小ブロック、褐色小ブロック有。白色風化粒やや少。しまり、粘性強。
4 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒多。炭化物、焼土粒、褐色小ブロック有。しまり、粘性強。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒、炭化物、褐色小ブロック有。4層より白色粒少。4層に類似。
しまり、粘性強。

5号土坑



1 黒色土 (10YR2/1)　炭化物粒多。黒味強。炭化物有。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　炭化物粒有。
3 暗褐色土 (10YR3/4)　地山類似。炭化粒有。

3号土坑

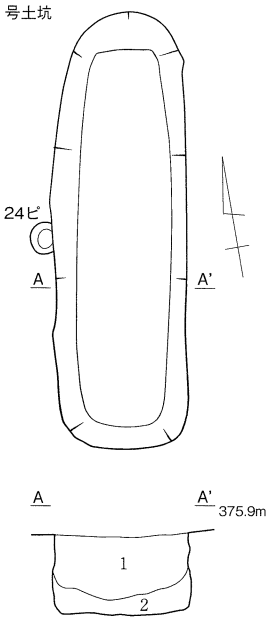


1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒、地山黄色小ブロックやや多。
焼土粒、炭化粒、褐色小ブロック有。しまり、粘性強。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　黄色小ブロック、白色粒、炭化粒、
褐色小ブロック、焼土粒有。しまり、粘性強。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　黄色小ブロック、褐色小ブロック有。
白色風化粒やや少。しまり、粘性強。

0　(1:30)　1m

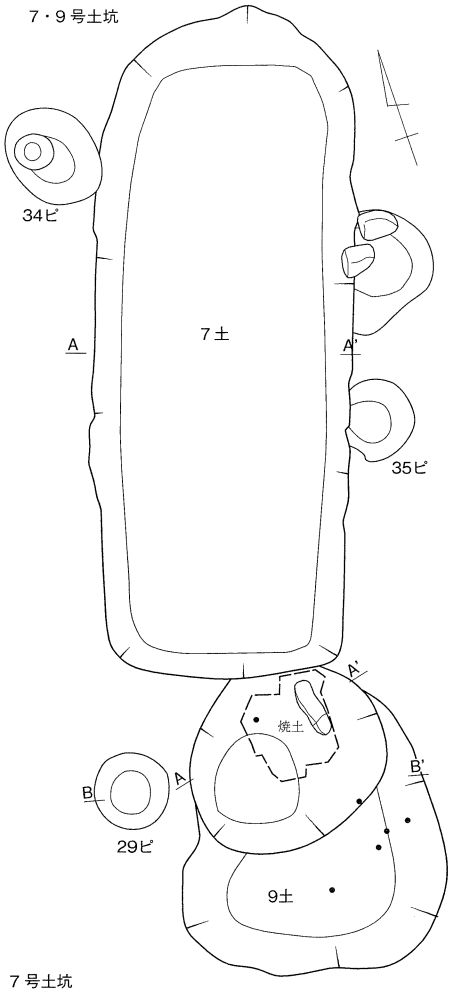
第20図　土坑

6号土坑

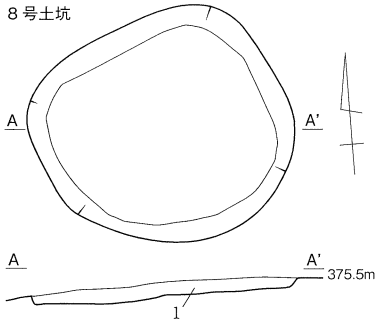


1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒多。
ローム小ブロック入。しまり、粘性強。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　白色粒含む。
ローム小ブロック、褐色小ブロック入。

7・9号土坑

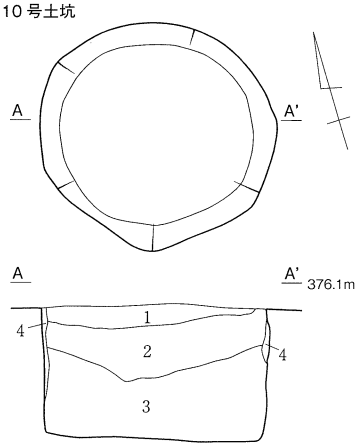


8号土坑



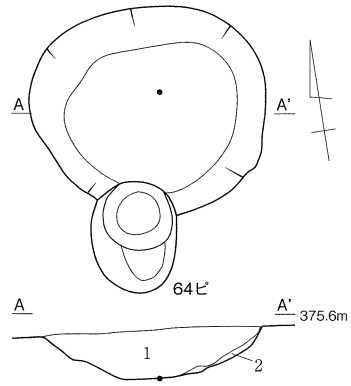
1 褐色土 (10YR4/4)　白色粒多。地山より褐色味強。
褐色粒有。しまり、粘性強。炭化物、焼土粒有。

10号土坑



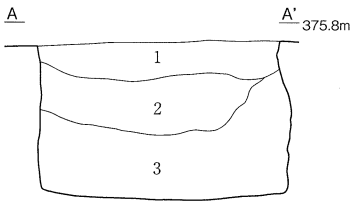
1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒多。褐色小ブロック、
炭化粒、灰褐色土入。しまり、粘性強。
2 黒褐色土 (10YR2/3)　黄褐色小ブロックやや多。
黒褐色小ブロックやや多。白色風化粒、褐色粒入。
しまり、粘性強。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　黄褐色小ブロック、白色粒入。
しまり、粘性強。
4 褐色土 (10YR4/4)　地山～地山直上。

12号土坑



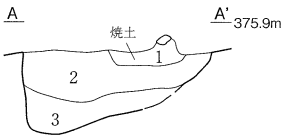
1 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　白色風化粒多。
炭化粒、焼土粒入。密。
2 褐色土 (10YR4/4)　地山直上～直上。
白色風化粒多。

7号土坑

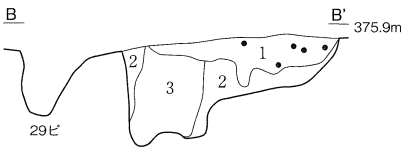


1 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒多。炭化粒有。
黄色ローム小ブロック入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　白色粒少。炭化粒、
ローム小ブロック、褐色土小ブロック入。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　ローム小ブロックやや多。
白色粒、黒褐色土小ブロック入。

9号土坑

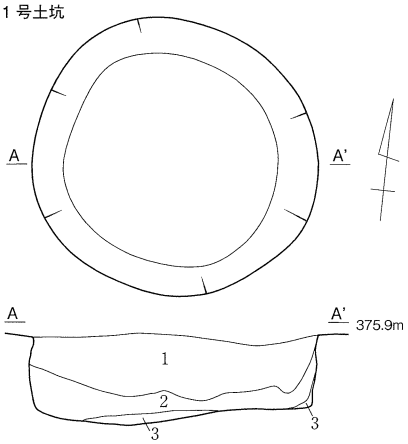


1 焼土層
2 褐色土 (10YR4/4)　白色粒、褐色粒多。
3 暗褐色土 (10YR3/4)　焼土小ブロック、白色粒入。



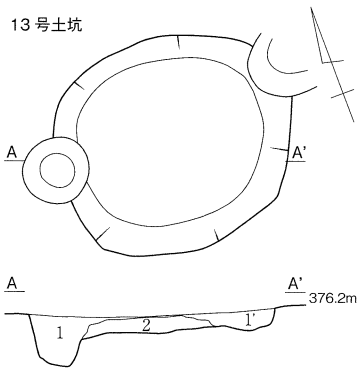
1 暗褐色土 (10YR3/3)　炭化粒やや多。焼土小ブロック、
白色粒、褐色小ブロック入。
2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　褐色土主体。暗褐色小ブロック入。
白色粒やや多。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒、褐色小ブロック、炭化粒入。

11号土坑



1 暗褐色土 (10YR3/3)　風化白色粒やや多。
褐色小ブロック、ローム小ブロック入。炭化物有。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　やや灰色味有。
白色粒少々、褐色小ブロック入。
3 褐色土 (10YR4/4)　地山ローム土。地山直上。

13号土坑

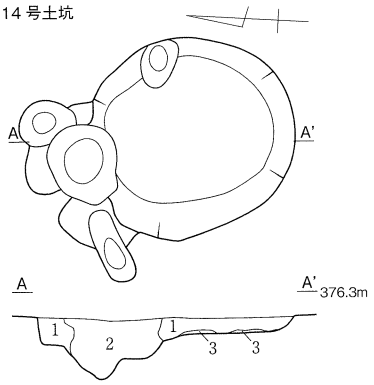


1 暗褐色土 (10YR3/3)　やや黒味強。炭化物入。
1' 暗褐色土 (10YR3/3)　黒色小ブロック入。
2 褐色土 (10YR4/4)

0　(1:30)　1m

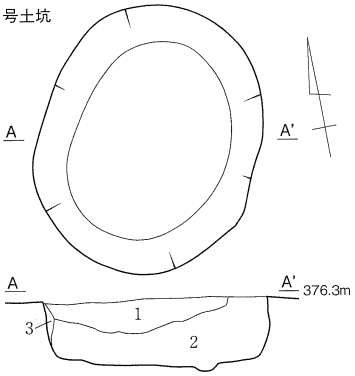
第21図　土坑

14 号土坑



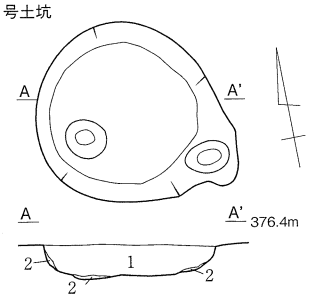
1 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土粒、白色粒有。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土混。焼土粒、炭化粒有。やや密。
3 褐色土 (10YR4/4)　地山直上。

15 号土坑



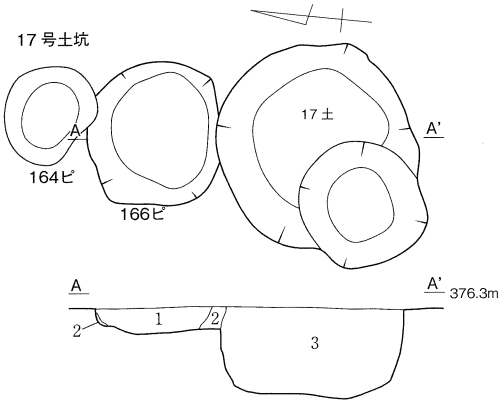
1 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色小ブロック、炭化粒入。しまり、粘性有。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　褐色小ブロック多。炭化粒、焼土粒入。しまり、粘性有。
3 褐色土 (10YR4/4)　地山。一部堀り過ぎ。

16 号土坑



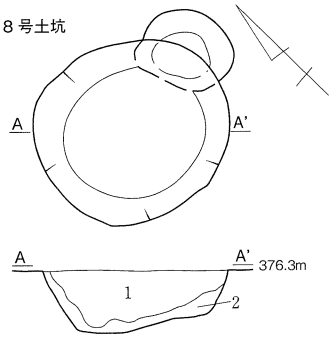
1 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック、炭化粒有。
2 褐色土 (10YR4/4)　地山直上の褐色土。

17 号土坑



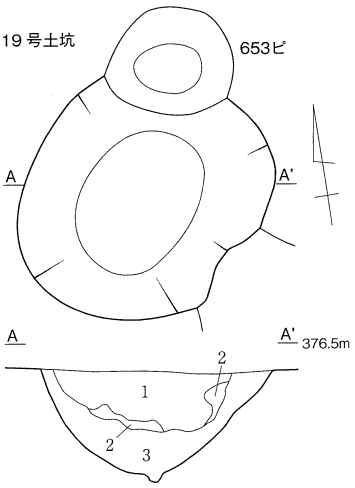
1 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土小ブロック、炭化粒有。しまり、粘性有。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色味有。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロックやや多。しまり、粘性有。

18 号土坑



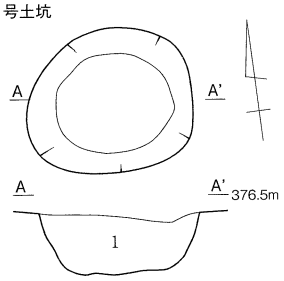
1 黒褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒やや多。褐色土小ブロック混。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色粒入。

19 号土坑



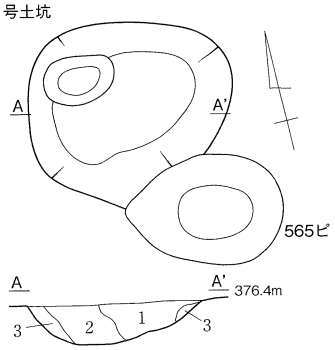
1 黒褐色土 (10YR3/2)　黒色土小ブロック、褐色土小ブロック、白色粒入。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色土ブロック主体。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック入。1 層に類似。炭化粒入。

20 号土坑



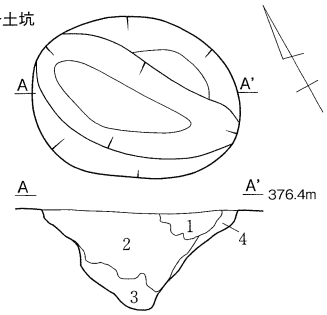
1 黒褐色土 (10YR3/2)　灰色味有。炭粒有。砂粒やや多。褐色土小ブロック、焼土粒入。

21 号土坑



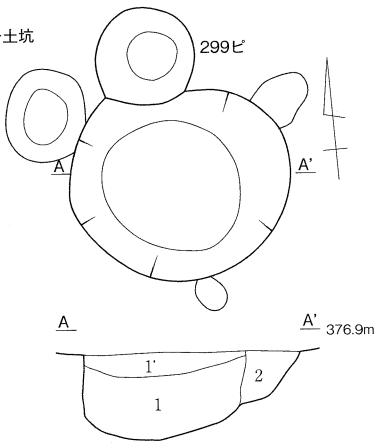
1 暗褐色土 (10YR3/3～3/2)　白色風化粒入。黒味有。炭化粒、焼土粒入。密。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　白色風化粒やや多。炭化粒入。
3 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　地山直上。

22 号土坑



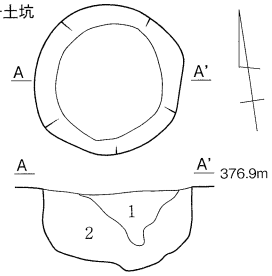
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　灰色味強。撹乱状。
2 黒褐色土 (10YR3/1)　褐色土小ブロック入。黒味強。炭化粒入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック入。褐色土やや多。
4 褐色土 (10YR4/4)　地山に近い。

23 号土坑



1 黒褐色土 (10YR3/2)
1' 白色風化粒目立つ。焼土粒、褐色土小ブロック有。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　地山類似。白色風化粒有。

24 号土坑

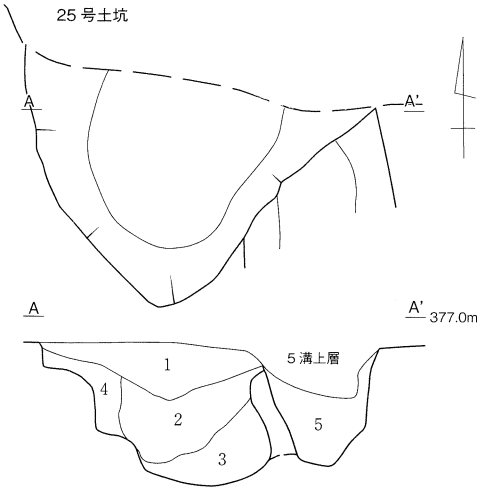


1 暗褐色土 (10YR3/3)　褐色土ブロック、灰色土ブロックやや多く含む。白色風化粒、しまり、粘性有。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　しまり、粘性有。

0　(1:30)　1m

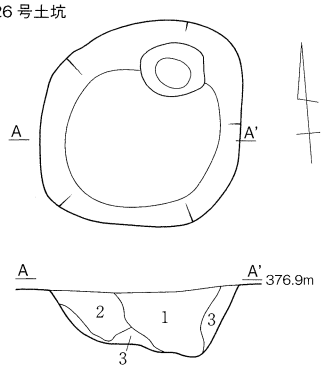
第22図　土坑

25 号土坑



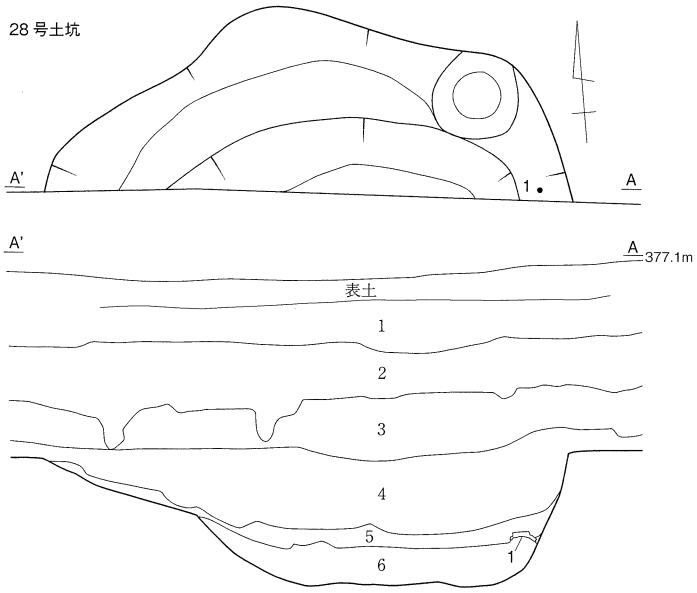
1 黒褐色土 (10YR3/1)　やや黒味強。褐色粒、焼土粒有。炭化粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　焼土粒、炭化粒、褐色粒入。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　褐色粒やや多。
4 暗褐色土 (10YR3/4)　地山に近い。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒やや多。

26 号土坑



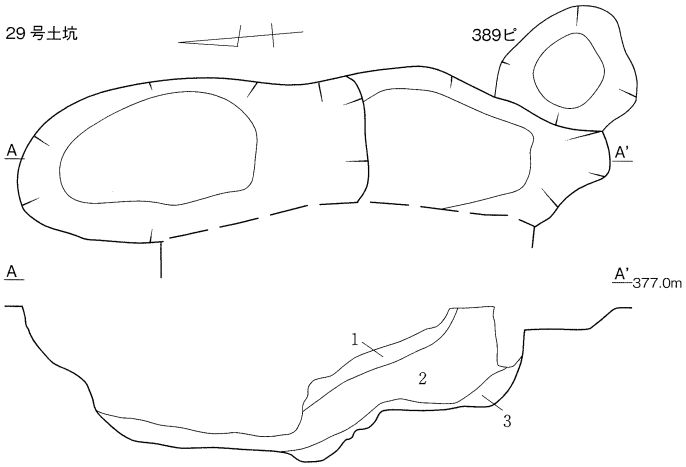
1 黒褐色土 (10YR3/2)　2 層とほぼ同じ。
　褐色土小ブロック入。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　やや黒味有。
3 暗褐色土 (10YR3/4)　地山直上の褐色土主体。

28 号土坑



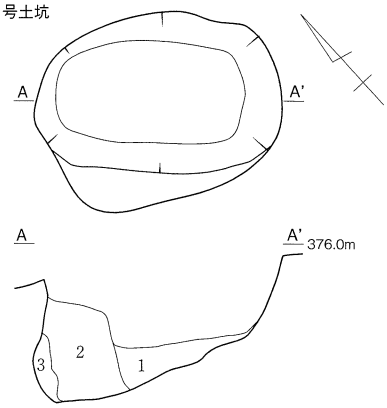
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)
2 鈍い 黄褐色土 (10YR4/3)　やや黄味有。白色風化粒入。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　やや黒味有。
4 暗褐色土 (10YR3/2)　やや黒味有。黒褐色土小ブロックやや多。
5 褐色砂質土 (10YR4/4)　砂質土。
6 黒褐色土 (10YR3/1)　やや黒味有。黒褐色土小ブロックやや多。4層類似。

29 号土坑



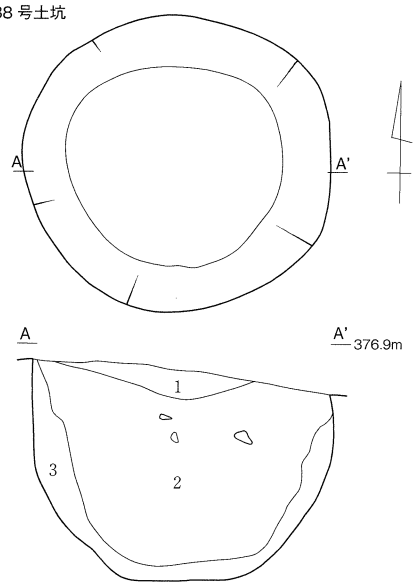
1 黒褐色土 (10YR3/1)　やや灰色味有。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒含む。褐色土小ブロック入。
3 暗褐色土 (10YR3/4)　地山に近い。暗褐色土主体。

36 号土坑



1 黒褐色土 (10YR3/1)　炭化粒、褐色土小ブロック入。黒味有。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　1 層より黒味強。褐色土小ブロック入。
3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)　地山・崩落土との混土。

38 号土坑

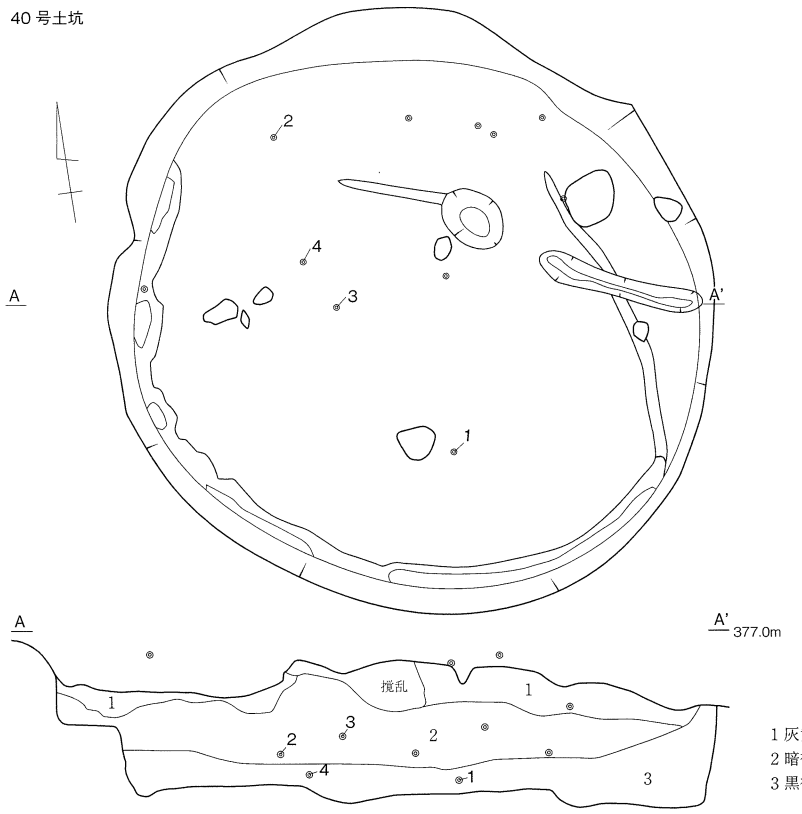


1 黒褐色土 (10YR3/1)　やや黒味有。白色風化粒入。土師器片入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　礫、白色風化粒、焼土粒、炭化粒入。
3 褐色砂質土 (10YR4/4)　壁崩落土(壁と同質)。

0　(1:30)　1m

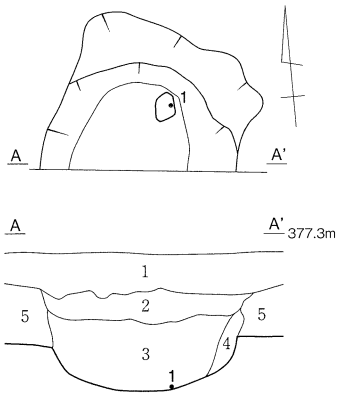
第23図　土坑

40 号土坑



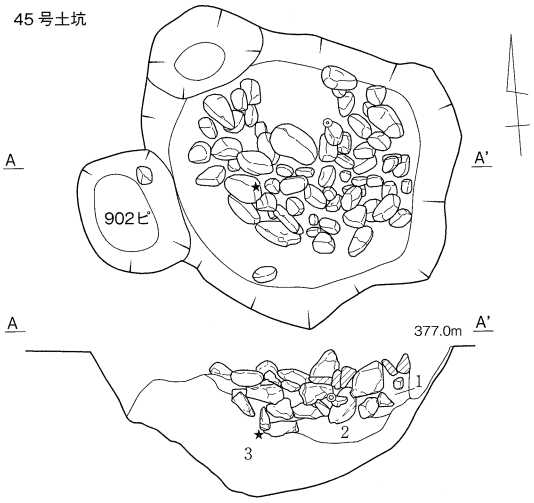
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　褐色土ブロック上層に含む。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒多。炭化粒、焼土粒入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　黒味やや強い。白色風化粒、炭化粒(φ2mm)入。

44 号土坑



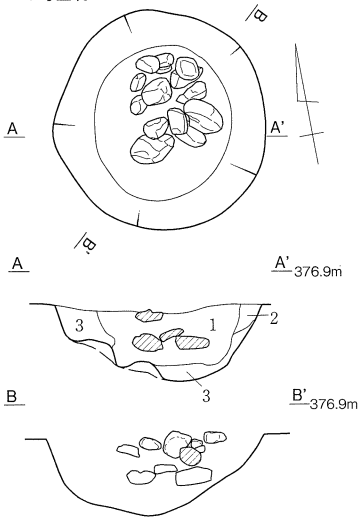
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　表土。耕作土。白色風化粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　褐色土小ブロック混。白色風化粒入。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　平安末土器入。やや灰色味有。
4 暗褐色土 (10YR3/3)　5 層類似。やや黒味有。
5 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒やや多。

45 号土坑



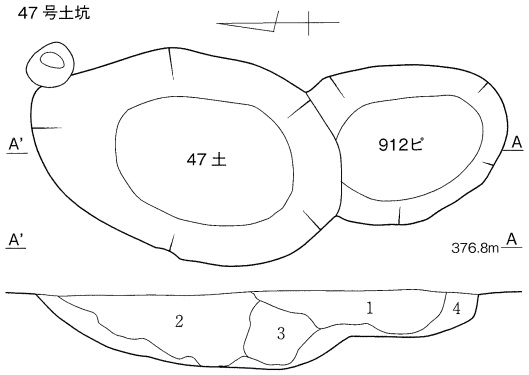
1 暗褐色土層 (10YR3/4)　炭化粒、焼土粒、褐色土小ブロック入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　黒味有。(炭化粒多く混)
3 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒多。地山類似。炭化物層-炭化材。

46 号土坑



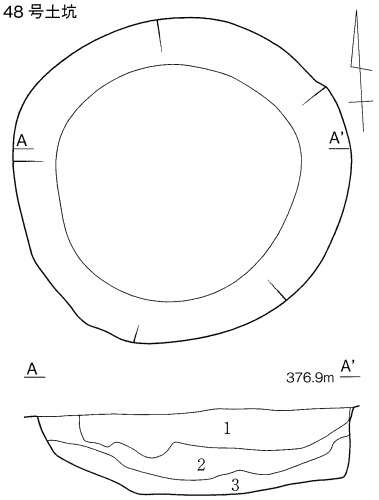
1 黒褐色土 (10YR3/1)　礫入。黒味強い。焼土入。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　白色粒多。
3 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　2層に類似するが、白色粒はやや少ない。地山類似。やや暗い。

47 号土坑



1 暗褐色土 (10YR3/3)　白・黄褐色粒入。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　黄褐色土小ブロック、白色風化粒入。1 層類似。やや黄味有。
3 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　黄褐色土主体。やや砂質。焼土粒入。
4 褐色土 (10YR4/4)　地山と同質の黄褐色土ブロック主体。暗褐色土ブロック入。

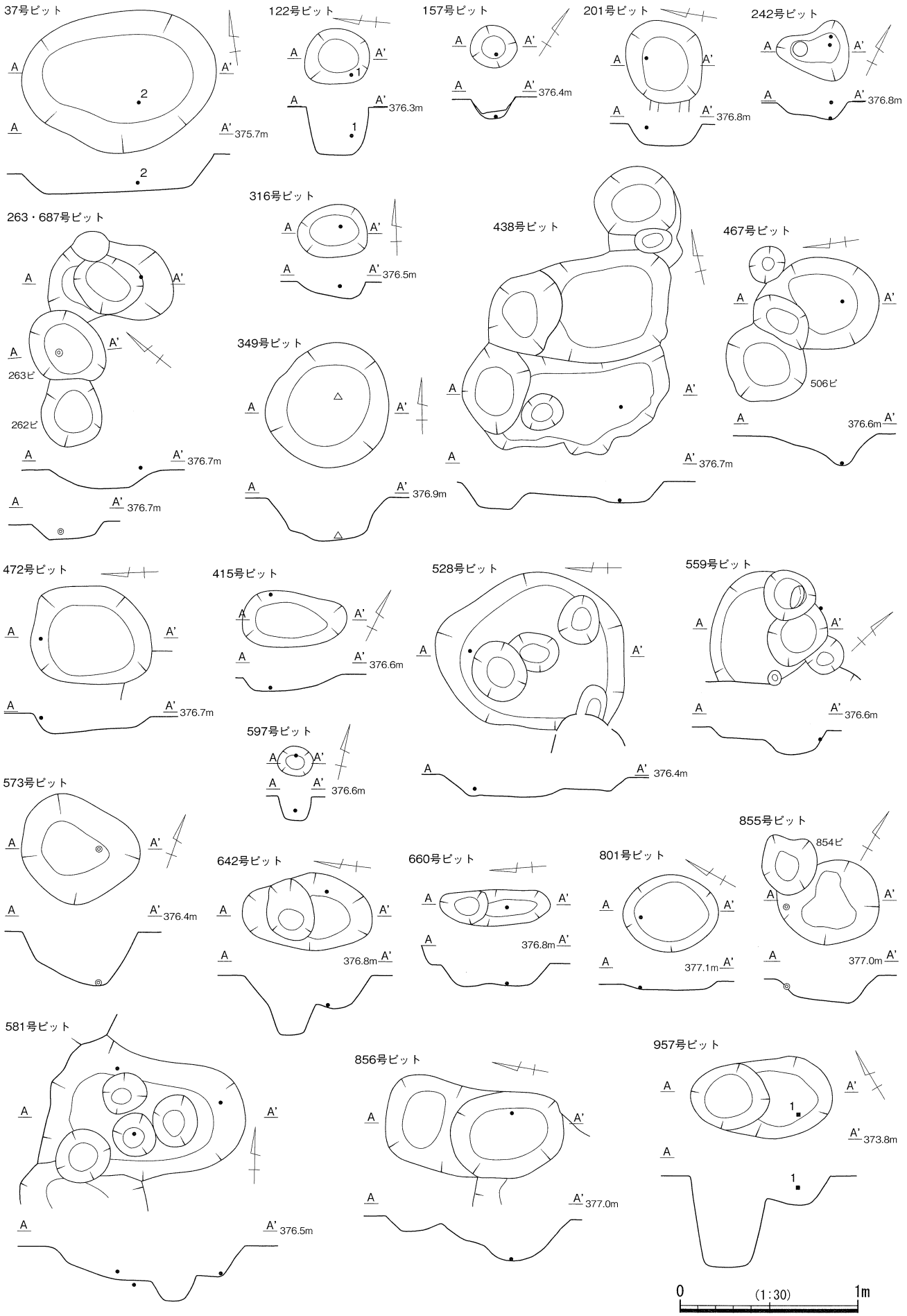
48 号土坑



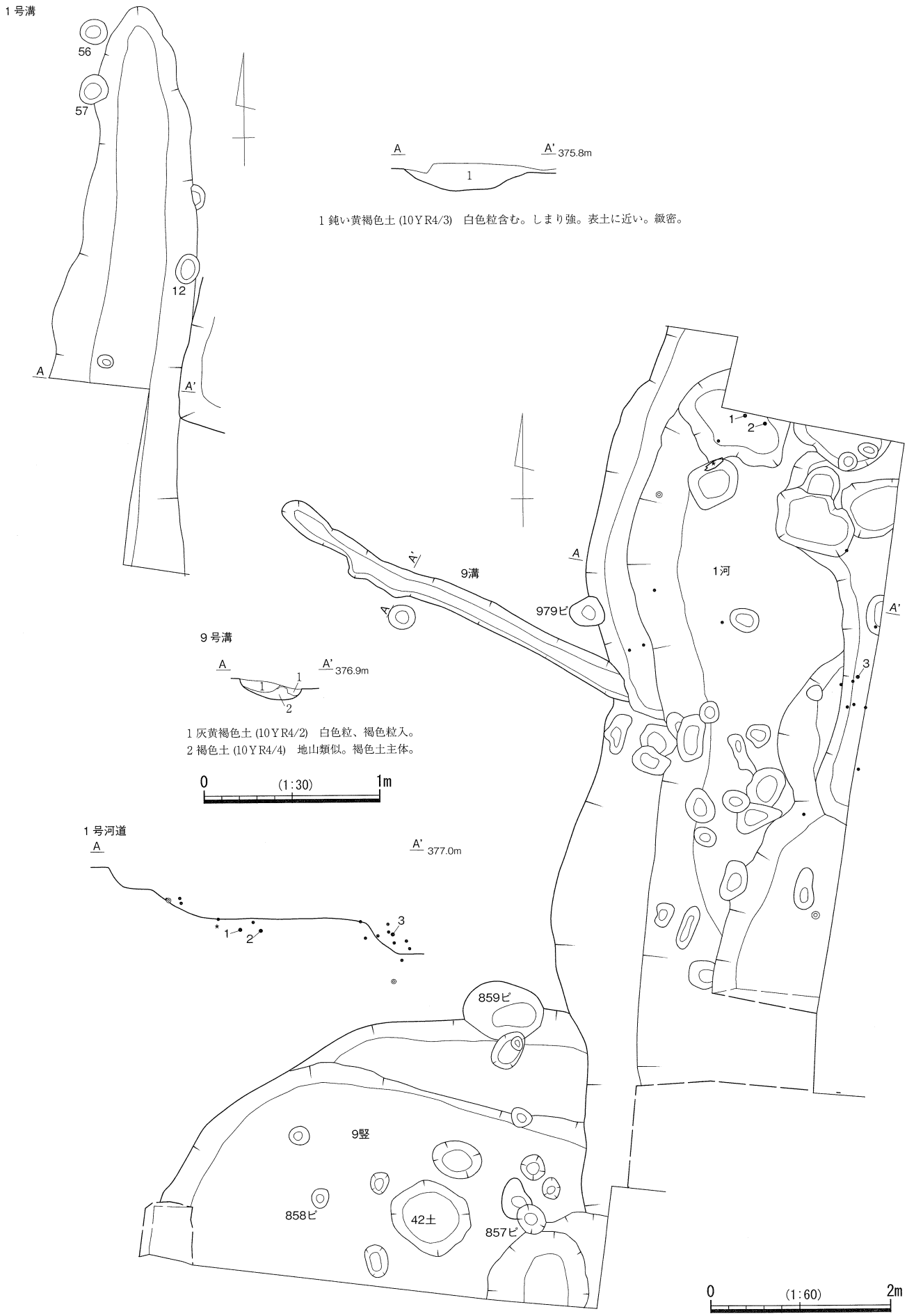
1 暗褐色土 (10YR3/3)　白色粒子多。焼土粒、炭化粒入。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　黄褐色土ブロックやや多。黒褐色土小ブロック、白色粒子入。
3 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　地山類似。やや暗い。

0　(1:30)　1m

第24図　土坑

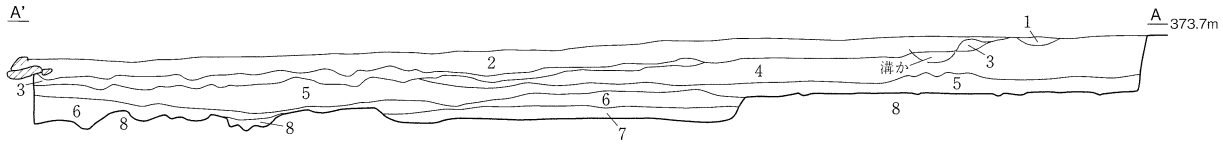

37号ピット
375.7m
122号ピット
376.3m
157号ピット
376.4m
201号ピット
376.8m
242号ピット
376.8m
263・687号ピット
263ピ
262ピ
376.7m
316号ピット
376.5m
349号ピット
376.9m
438号ピット
376.7m
467号ピット
506ピ
376.6m
472号ピット
376.7m
415号ピット
376.6m
597号ピット
376.6m
528号ピット
376.4m
559号ピット
376.6m
573号ピット
376.4m
642号ピット
376.8m
660号ピット
376.8m
801号ピット
377.1m
855号ピット
854ピ
377.0m
581号ピット
376.5m
856号ピット
377.0m
957号ピット
373.8m
0
(1:30)
1m

第25図　ピット

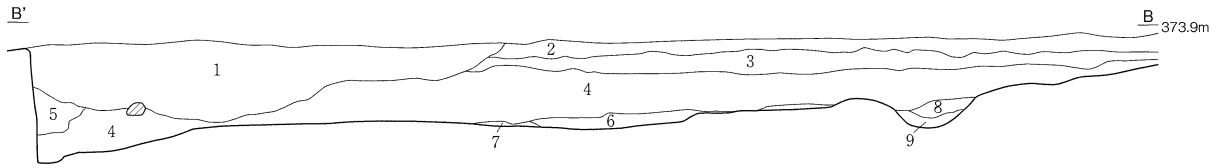

1号溝
56
57
12
A
A'
A
A' 375.8m
1
1 鈍い黄褐色土 (10YR4/3)　白色粒含む。しまり強。表土に近い。緻密。
9溝
979ピ
1河
9号溝
A
A' 376.9m
1
2
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　白色粒、褐色粒入。
2 褐色土 (10YR4/4)　地山類似。褐色土主体。
0
(1:30)
1m
1号河道
A
A' 377.0m
859ピ
9竪
858ピ
42土
857ピ
0
(1:60)
2m

第26図　溝・1号河道

2号河道

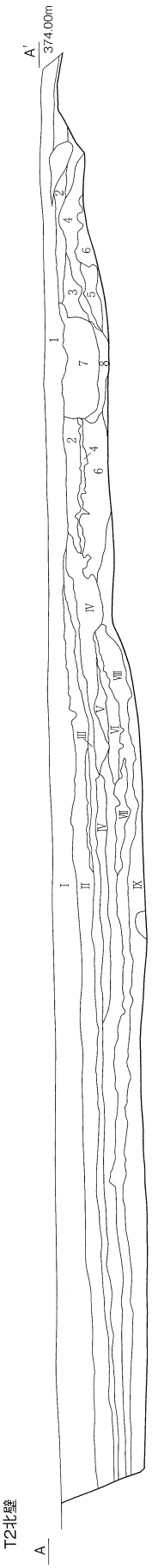


1 攪乱　焼土・炭混(現代か)
2 黒褐色砂質土(10YR3/2)　白色粒多。サビ入。
3 黄褐色砂質土(10YR5/6)　サビ入。褐色砂層主体。
4 黒褐色土(10YR3/1)　白色粒入。サビ入。
5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)　旧水田床土状。遺物(平安末)出土。
6 黒褐色土(10YR2/3)　8層にやや類似。白色粒入。8層の小ブロックを多く含む。
7 黒褐色土(10YR3/1)　6層よりやや黒味弱。白色粒入。
8 黒色粘土(10YR2/1)　漆黒の粘土。黒味強。



1 黒褐色土(10YR3/1)　攪乱状。
2 黒褐色土(10YR3/1)　旧水田層。
3 褐色土(10YR4/4)　旧水田床土。
4 黒褐色土(10YR3/2)　褐色砂質土ブロックを含む。炭化物有。サビ入。
5 黒褐色土(10YR2/3)　黒味強。昭和40年代のゴミ入。攪乱。
6 黒褐色土(10YR3/2)　8層に類似。白色風化粒入。炭化物入。サビ入。
7 鈍い黄褐色土(10YR5/4)　地山。
8 黒褐色土(10YR3/2)　溝内の覆土。灰色味有。白色風化粒入。サビ入。
9 黒褐色土(10YR3/1)　黒味強。

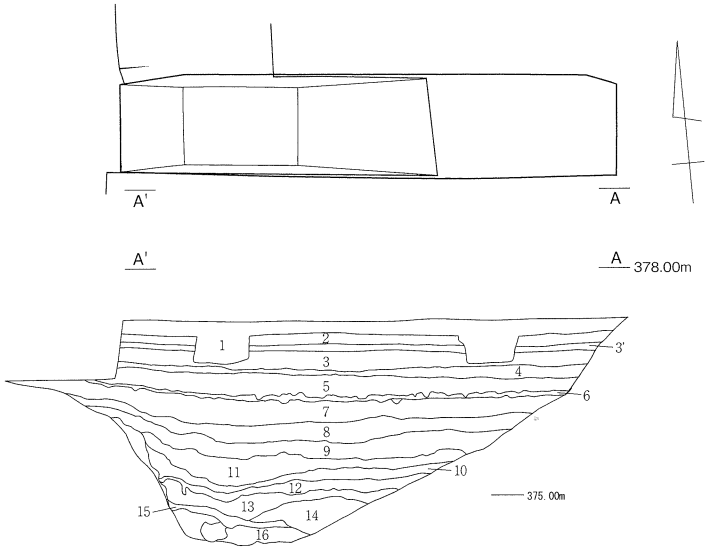
第27図　2号河道



T2北壁
1 灰黄褐色土(10YR4/2)　表土、耕作土。
2 にぶい黄褐色砂質土(2.5Y6/4)　サビ混入、雲母多。
3 暗灰褐色砂(2.5Y5/2)　砂層、雲母多、炭化物混入。
4 黒褐色砂質土(10YR3/2)　炭化物混入。雲母やや多。
5 灰白色砂層(10YR8/1　やや粗い砂層。サビ入。
6 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4)　しまり、粘性有、サビ入。
7 にぶい黄褐色土(10YR5/4)　暗渠か。砂層入。
　地山(6層)のブロックを多く含む。
8 黒褐色砂質粘土(10YR3/2)　4層とほぼ同じ。

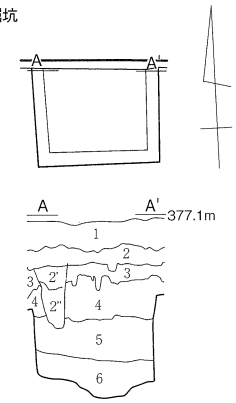
I 灰黄褐色土(10YR4/2)　表土。
II 暗褐色土(10YR3/4)　雲母多。サビ入。
III 黒色粘土(10YR2/1)　黒味強。土器片有。
IV 黒褐色土(10YR3/1)　砂粒。雲母多。
V 黒色粘質土(10YR2/3)　黒味強。
VI 灰白砂層(10YR7/1)　砂層中に黒色土層が薄く入る。
VII 灰白砂層(10YR8/2)　白味のある砂層。
VIII 黒色粘土(10YR2/3)
IX 灰黄褐色砂層(10YR6/2)　雲母多。

T1南壁



T1南壁
1 暗褐色土(10YR3/4)　表土。
2 にぶい黄褐色土(10YR5/3)　旧水田層か。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　(上層に床土有)。炭化物入。
3' にぶい黄褐色土(10YR4/3)　(床土)。炭化物入。
4 黄褐色土(10YR5/6)　床土。
5 暗褐色土(10YR3/4)　土器片入。サビ入。礫有。粘性、しまり有。
6 にぶい黄褐色砂層(10YR5/4)　やや粗。
7 黒褐色土(10YR3/2)　黒味強。炭化物入。土器片入。粘性、しまり有。
8 暗褐色土(10YR3/3)　砂粒入。サビ入。粘性、しまり有。炭化物入。
9 にぶい黄褐色砂層(10R4/3)　白色砂層と暗褐色土の混土。砂層。
10 黒褐色砂質土(10YR3/2)　サビ入。粘土層入(暗褐色)。粘土、しまり、粘性強。
11 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　黒味のある粘土。しまり、粘性強。
12 灰黄褐色砂層(10YR5/2)　砂層主。サビ入。
13 黒色粘土(10YR3/1)　黒色粘土主。サビ入。
14 灰黄褐色砂層(10YR5/2)　砂層主。サビ入。やや粗。
15 暗褐色土(10YR3/3)　11層類似の土。
16 にぶい黄色砂層(2.5Y6/4)　壁と同色。サビ分を含んだ砂層。やや細かい砂層(砂質土)。

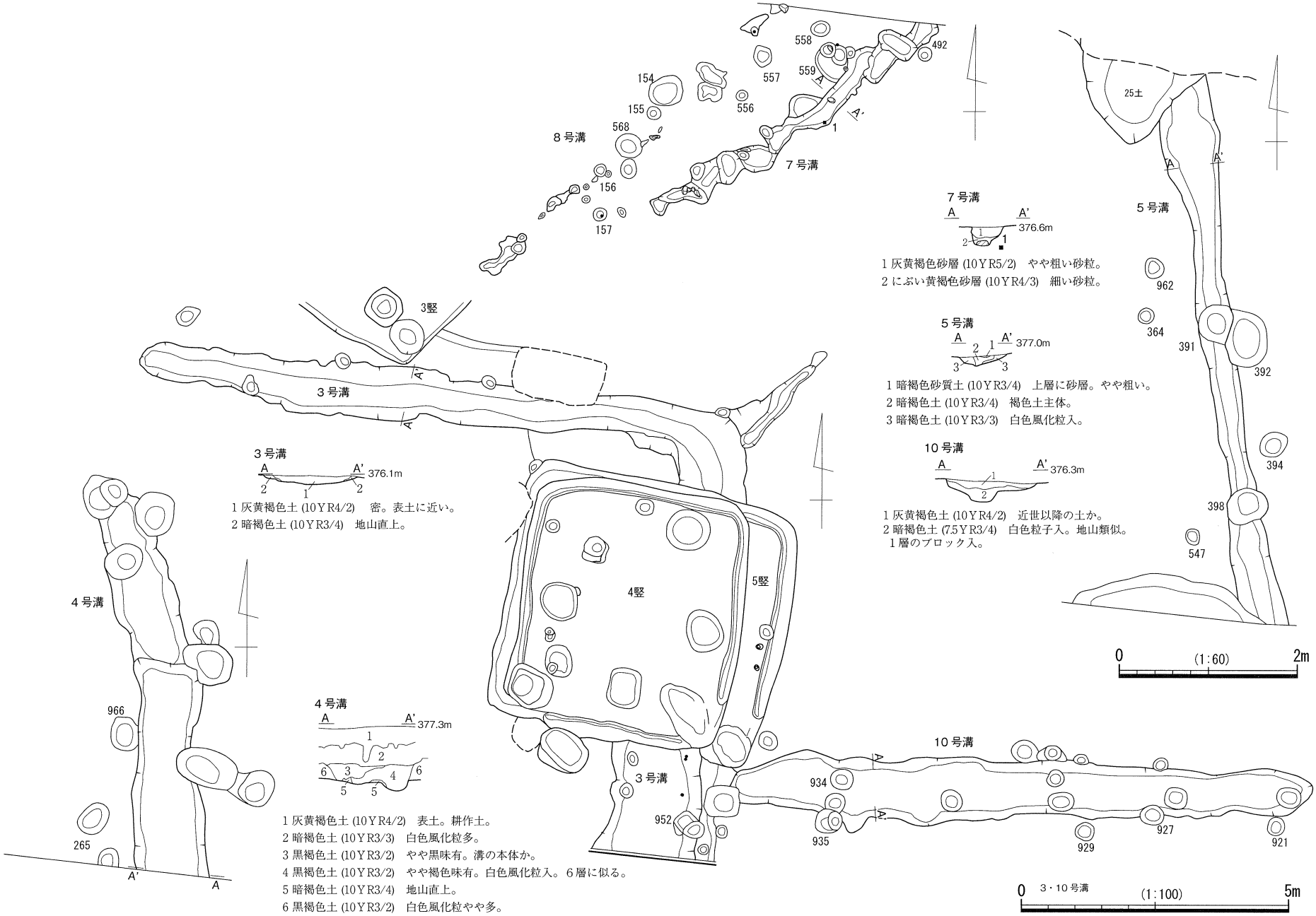
試掘坑



試掘坑
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　耕作土。表土。密。白色粒入。
2 黒褐色土 (10YR3/2)　炭化粒入。白色粒多。
2' 暗褐色土 (10YR3/2)　白色粒多。褐色粒入。
2" 黒褐色土 (10YR3/2)～黒褐色土 (10YR3/1)　褐色土小ブロック、灰褐色土小ブロックやや多。
3 黒褐色土 (10YR3/1)　黒味強。白色粒多。褐色粒入。
4 暗褐色粘質土 (10YR3/4)　白色粒多。褐色粒、炭化粒、焼土粒入。しまり、粘性強。
5 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)　白色粒やや多。しまり有。
6 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)白色粒は少。しまり有、粘性弱。

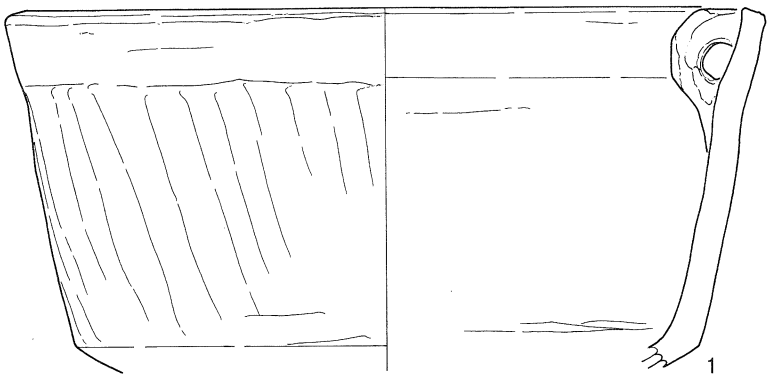
0　(1:100)　5m

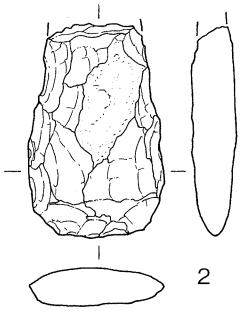
第28図　河道・試掘坑


8号溝
7号溝
5号溝
3号溝
4号溝
10号溝
3竪
4竪
5竪
25土
154
155
156
157
568
556
557
558
559
492
962
364
391
392
394
398
547
966
265
934
935
952
929
927
921
A
A'
1
7号溝
A A' 376.6m
1 灰黄褐色砂層 (10YR5/2)　やや粗い砂粒。
2 にぶい黄褐色砂層 (10YR4/3)　細い砂粒。
5号溝
A A' 377.0m
1 暗褐色砂質土 (10YR3/4)　上層に砂層。やや粗い。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　褐色土主体。
3 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒入。
10号溝
A A' 376.3m
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　近世以降の土か。
2 暗褐色土 (7.5YR3/4)　白色粒子入。地山類似。
1層のブロック入。
3号溝
A A' 376.1m
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　密。表土に近い。
2 暗褐色土 (10YR3/4)　地山直上。
4号溝
A A' 377.3m
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)　表土。耕作土。
2 暗褐色土 (10YR3/3)　白色風化粒多。
3 黒褐色土 (10YR3/2)　やや黒味有。溝の本体か。
4 黒褐色土 (10YR3/2)　やや褐色味有。白色風化粒入。6層に似る。
5 暗褐色土 (10YR3/4)　地山直上。
6 黒褐色土 (10YR3/2)　白色風化粒やや多。
0 (1:60) 2m
0 3・10号溝 (1:100) 5m

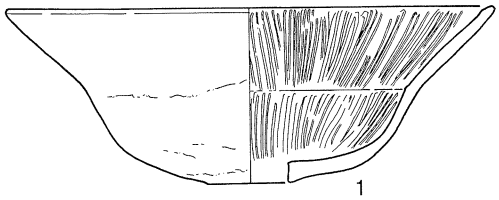
第29図　溝

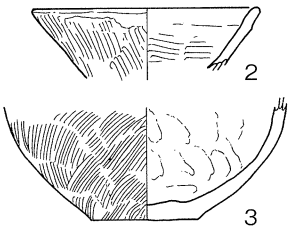
1号竪穴

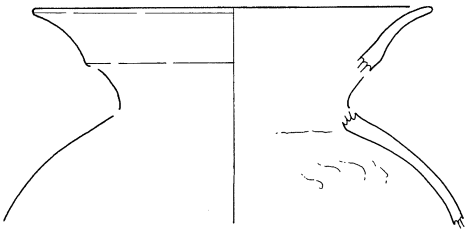


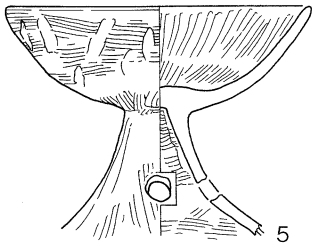


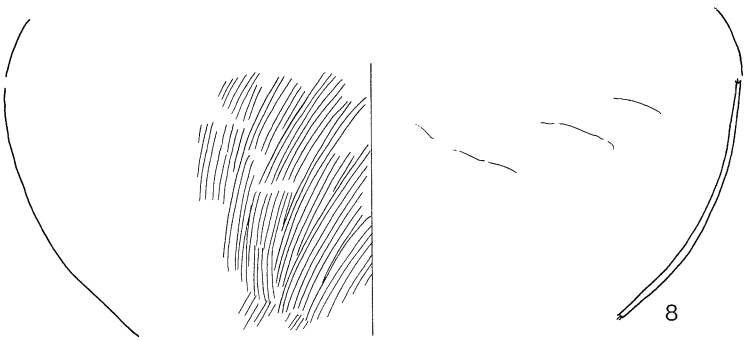
2号竪穴

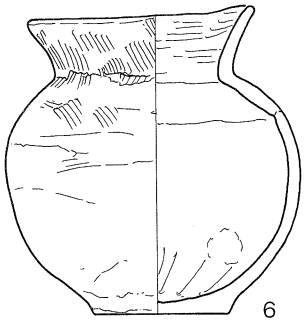


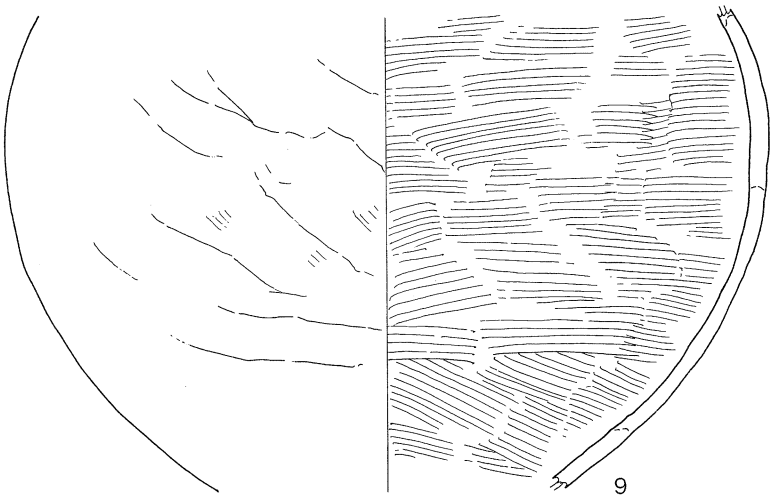


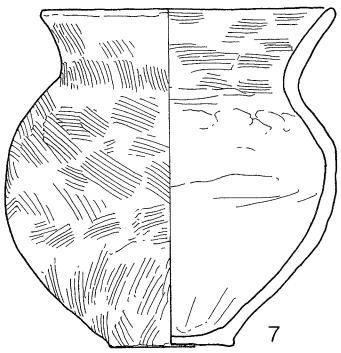


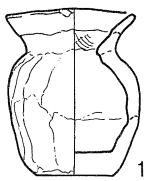


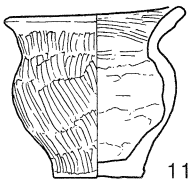


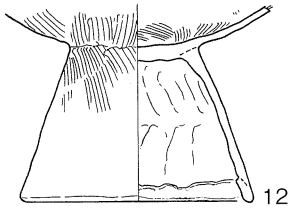


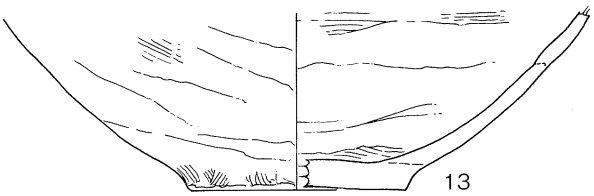






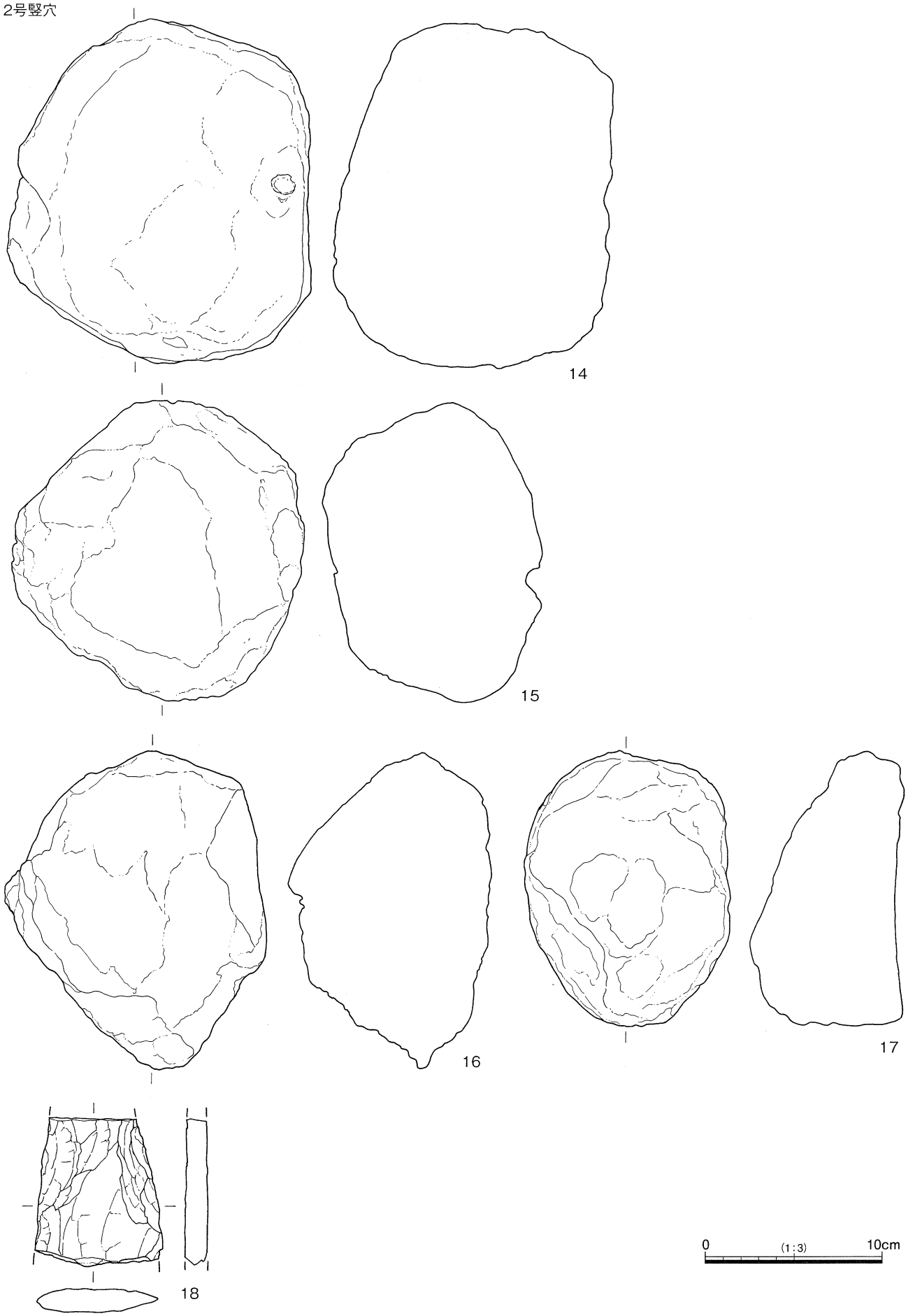




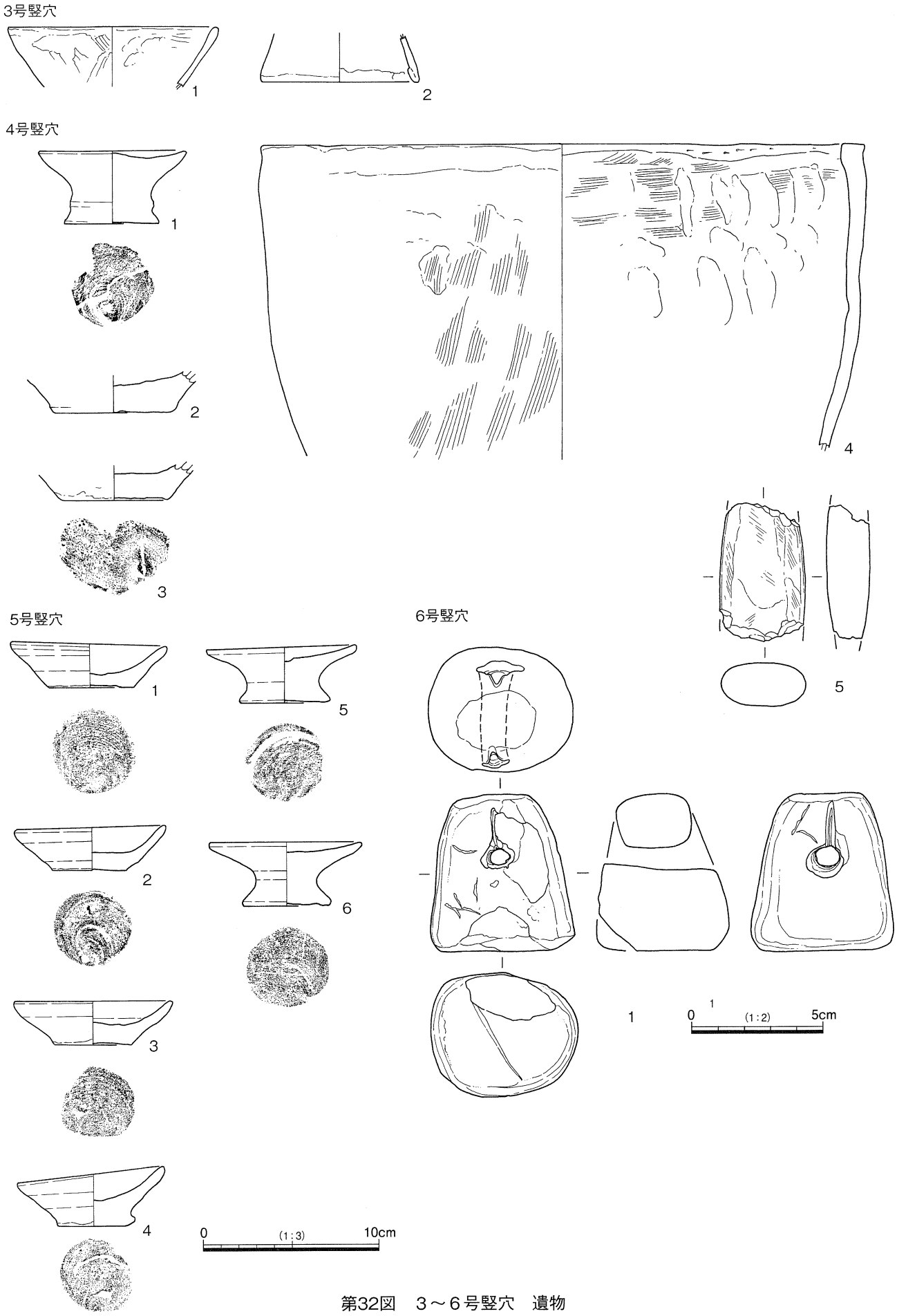


0 (1:3) 10cm

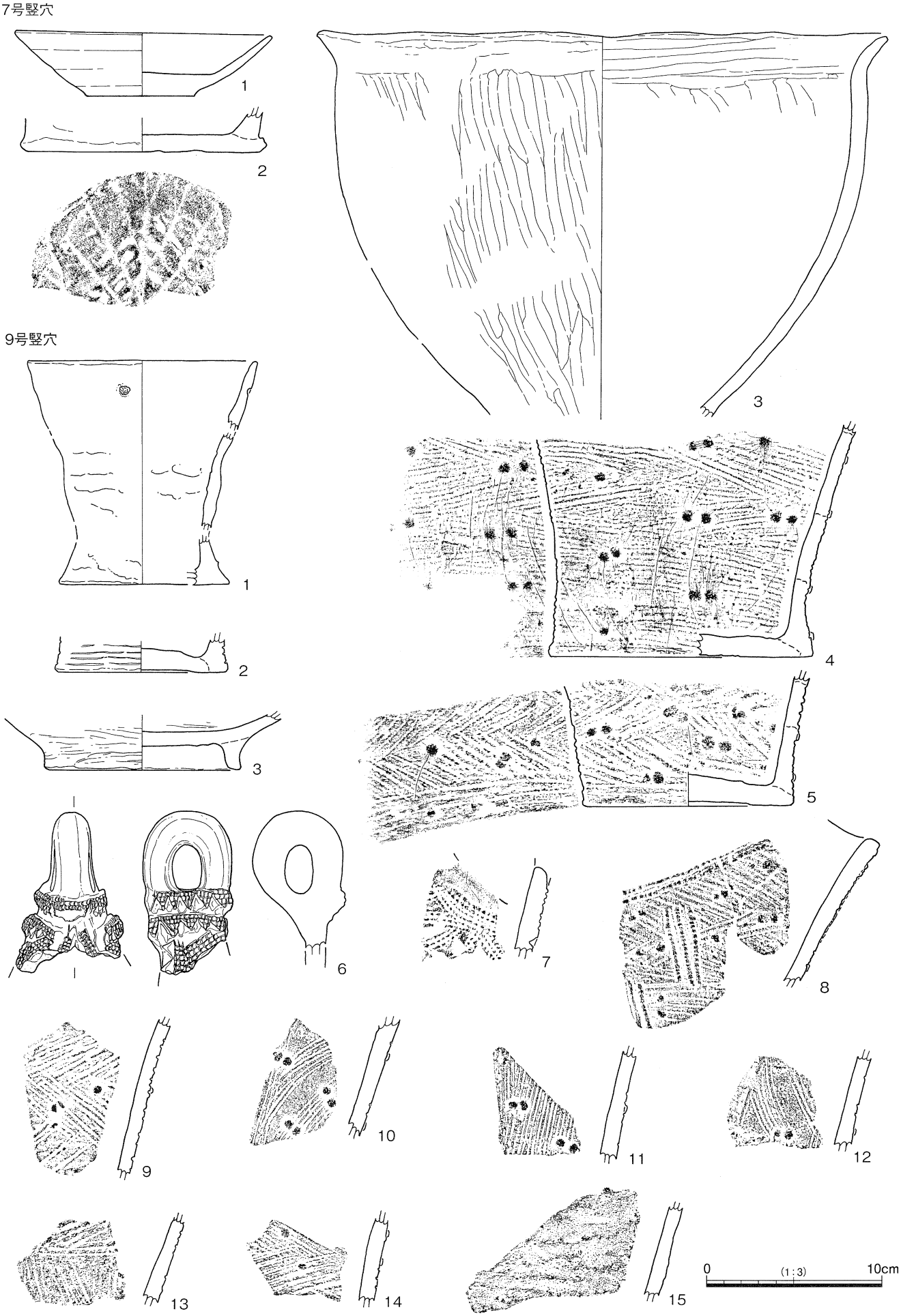
第30図　1・2号竪穴　遺物



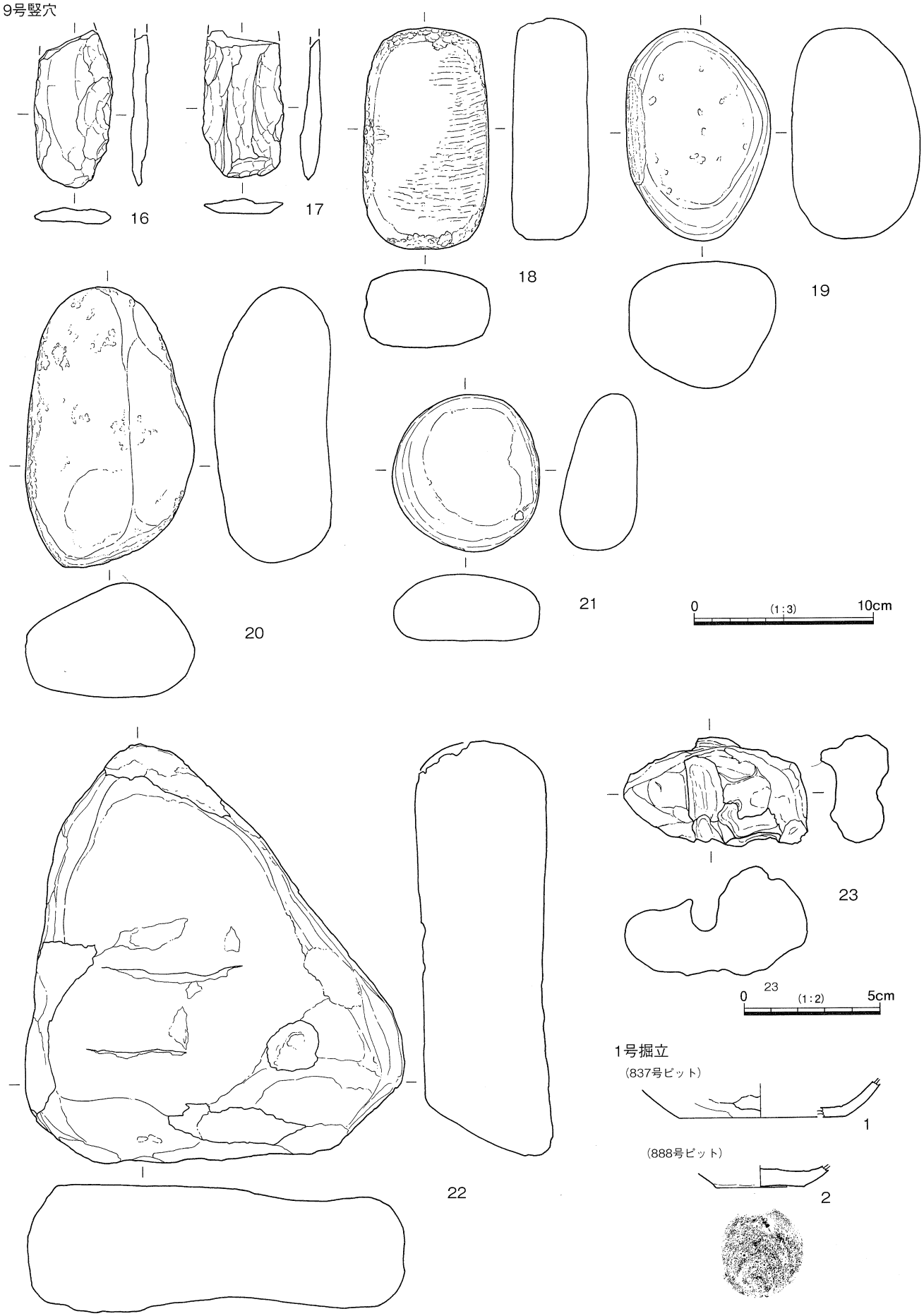
第31図　２号竪穴　遺物



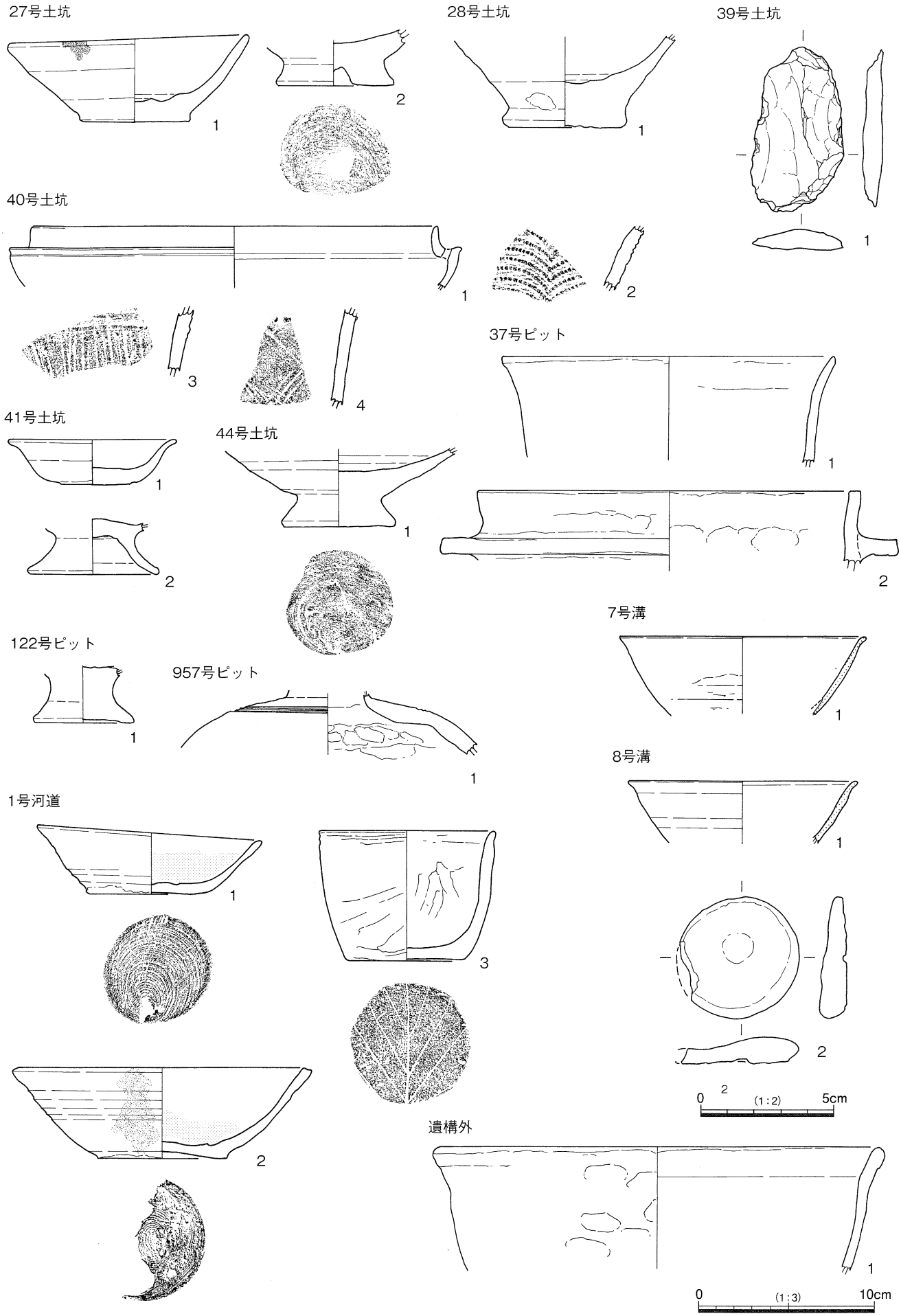
第32図　3～6号竪穴　遺物



第33図　7・9号竪穴　遺物



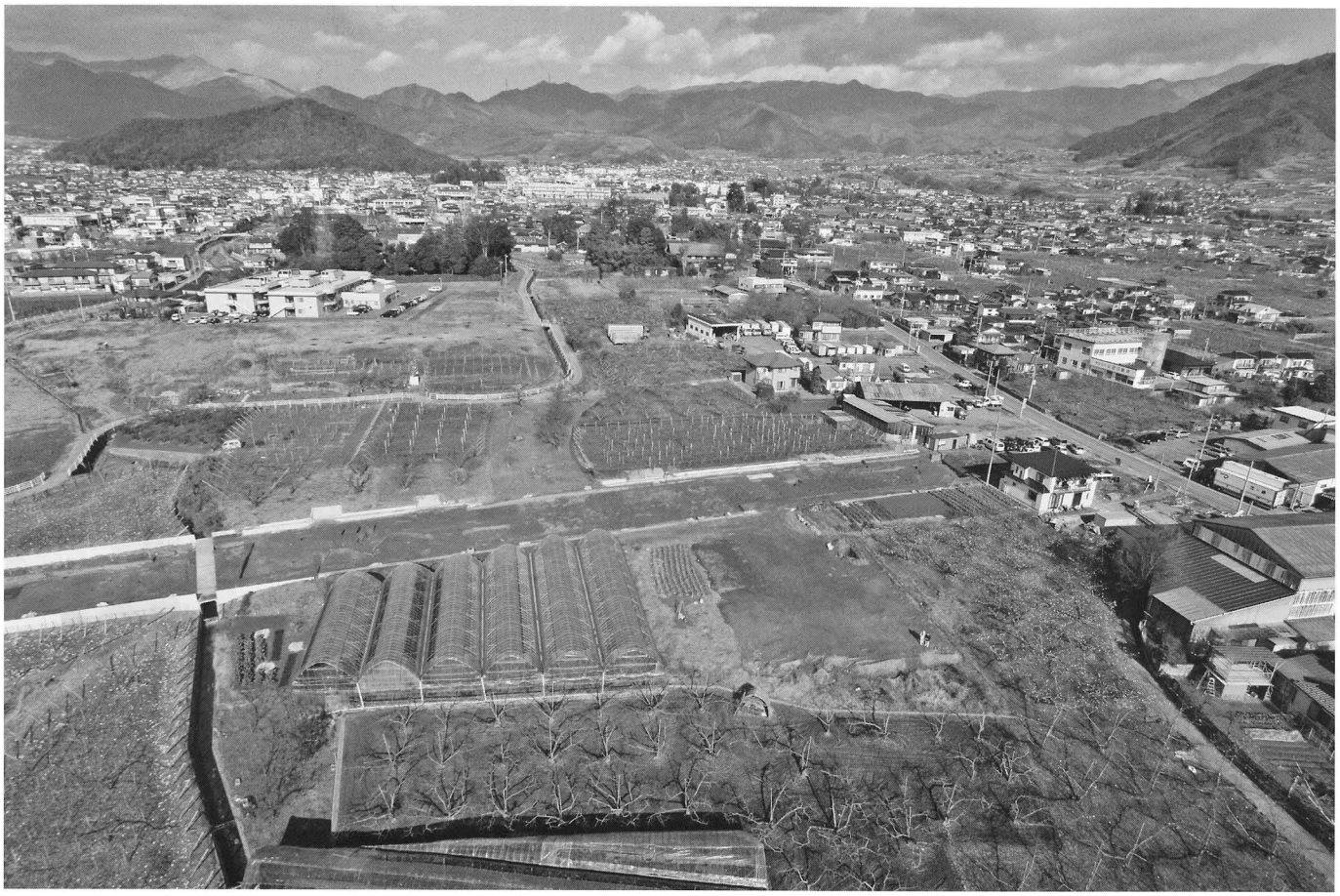
第34図　9号竪穴・1号掘立　遺物



第35図　土坑・ピット・溝・河道・遺構外　遺物

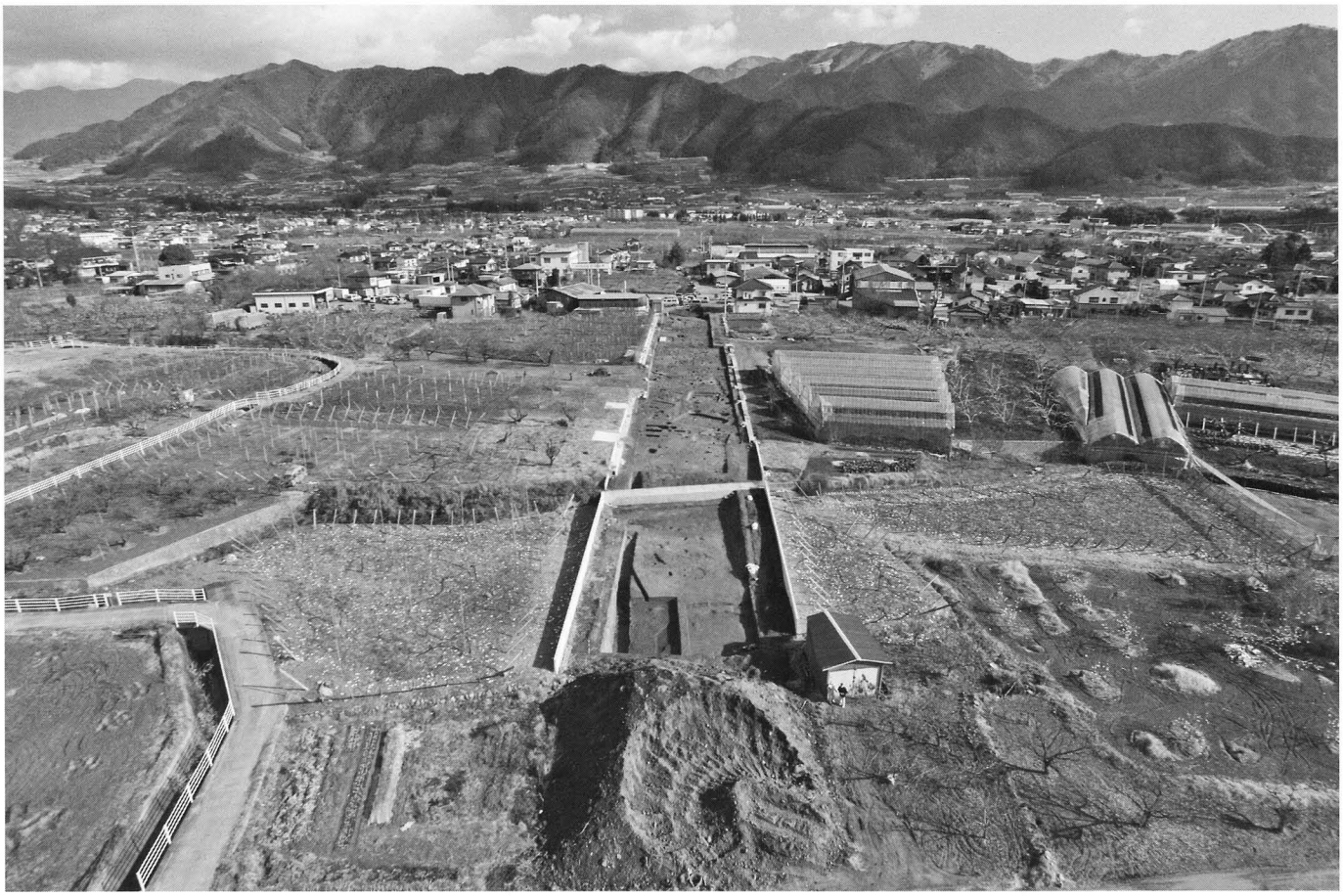
1　梶畑B遺跡全体

図版２

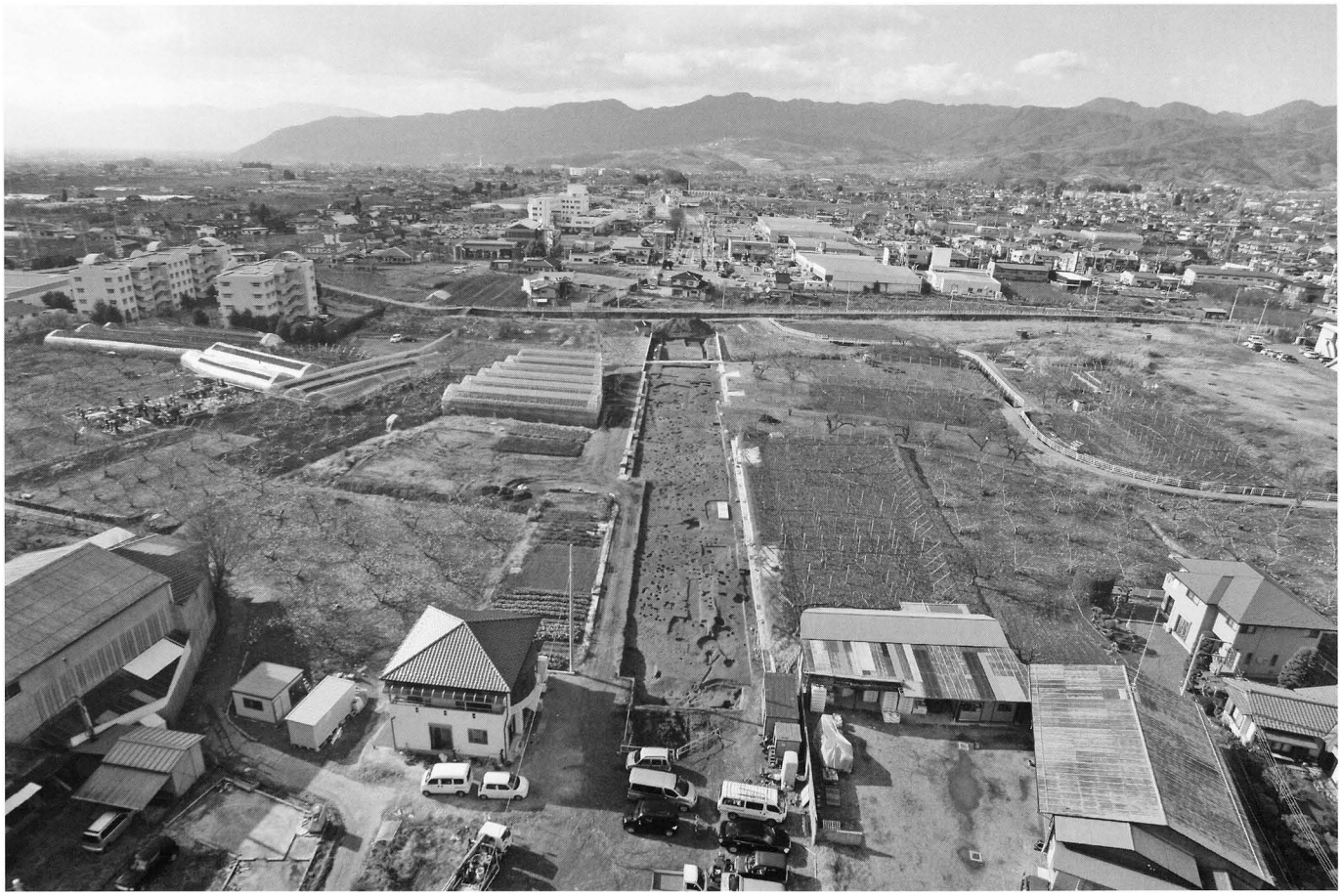


１　調査区俯瞰（南より）

２　調査区俯瞰（上より）



1　調査区俯瞰（西より）



2　調査区俯瞰（東より）

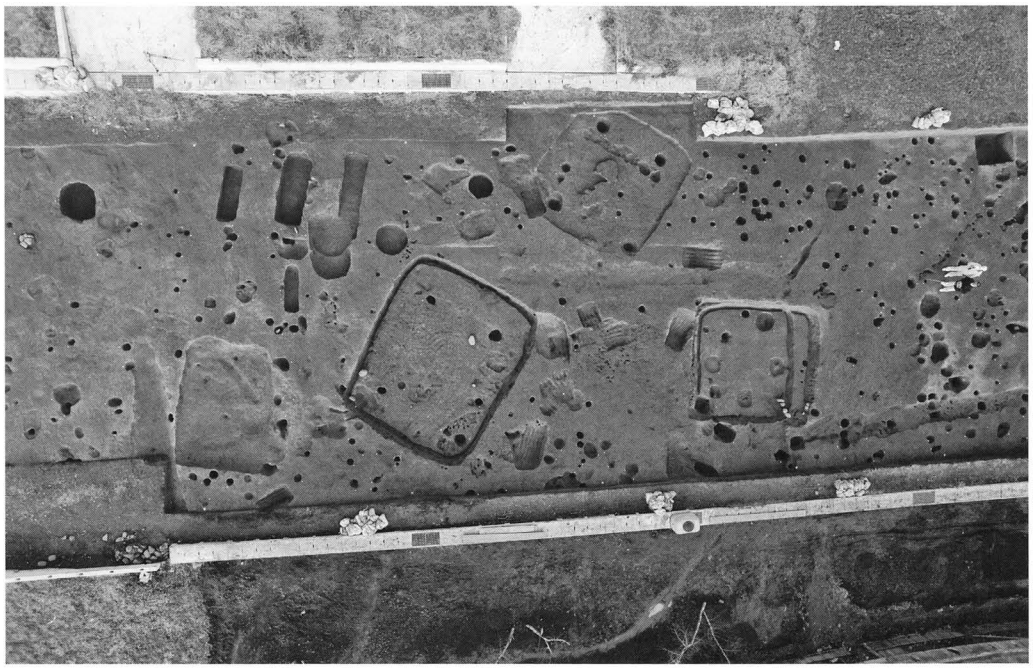
図版 4

1　調査区俯瞰（東区）

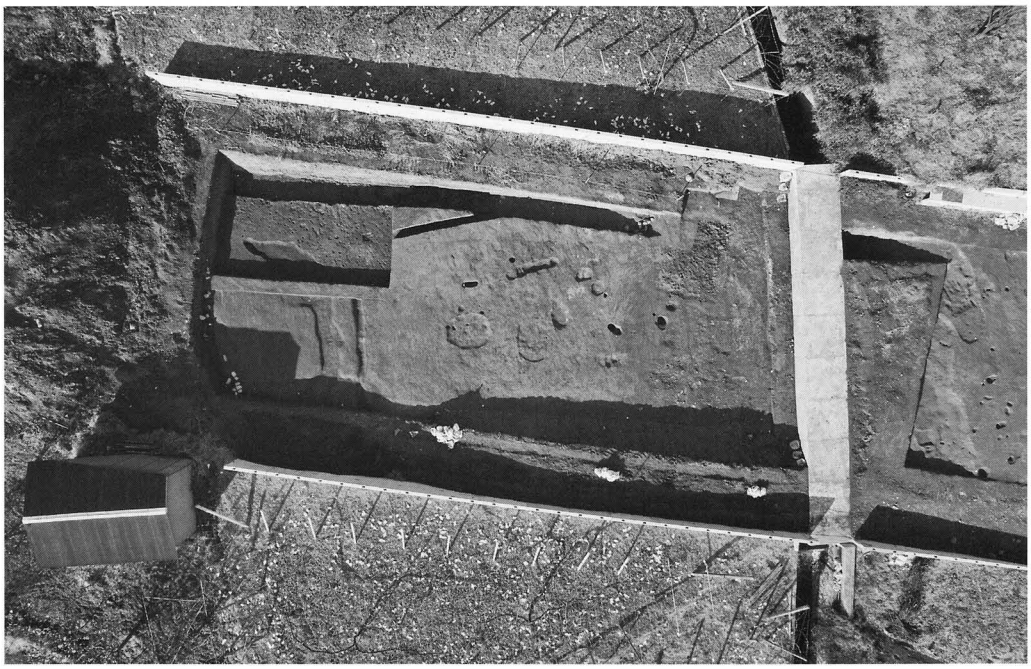
2　調査区俯瞰（東区）

3　調査区俯瞰（東区）

1　調査区俯瞰（東区）

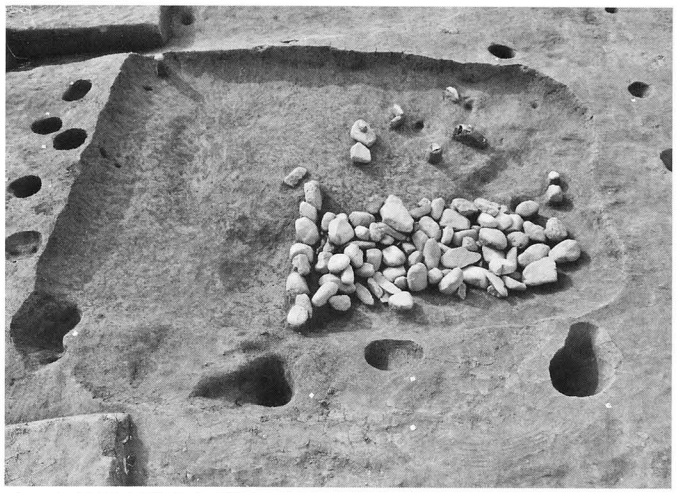


2　調査区俯瞰（東区）



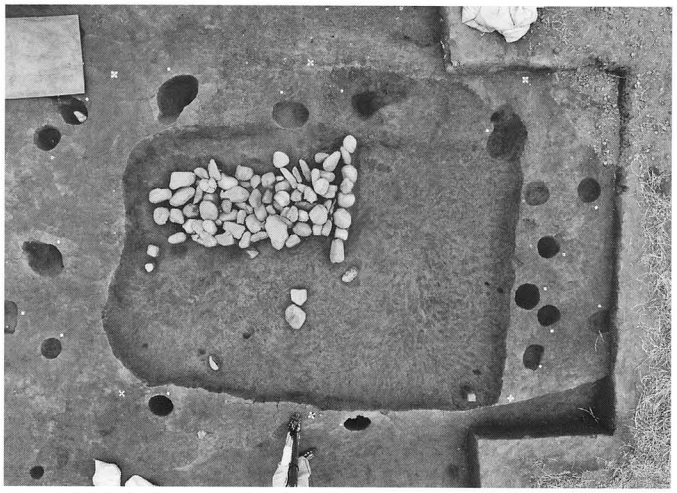
3　調査区俯瞰（西区）

図版６

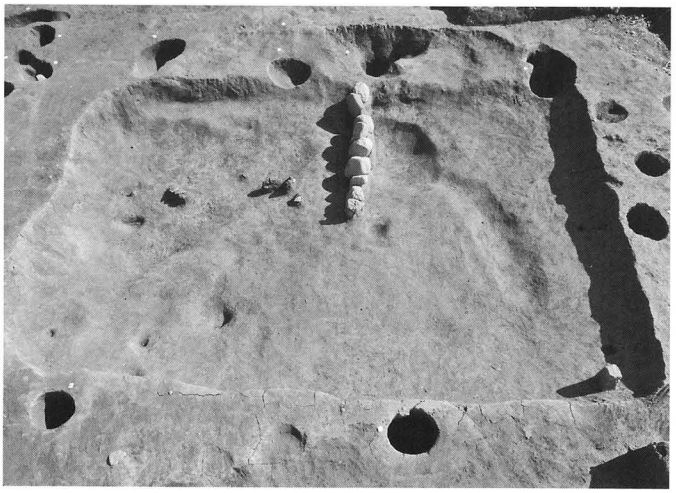


１　１号竪穴礫出土状況

２　１号竪穴礫出土状況



３　１号竪穴ポール撮影による俯瞰



４　１号竪穴完掘状況（列状配石を残す）

５　２号竪穴調査状況

６　２号竪穴調査状況

７　２号竪穴炭化材出土状況

８　２号竪穴遺物出土状況

1　２号竪穴炭化材出土状況

2　２号竪穴炭化材出土状況

3　２号竪穴ミニチュア土器出土状況

4　２号竪穴遺物出土状況

5　２号竪穴遺物出土状況

6　２号竪穴炭化材出土状況

7　２号竪穴炭化材出土状況

8　２号竪穴炭化材出土状況

図版８

１　２号竪穴炭化材出土状況

２　２号竪穴炭化材出土状況

３　２号竪穴炭化材出土状況

４　２号竪穴炭化材出土状況

５　２号竪穴粘土塊出土状況

６　２号竪穴炭化材出土状況

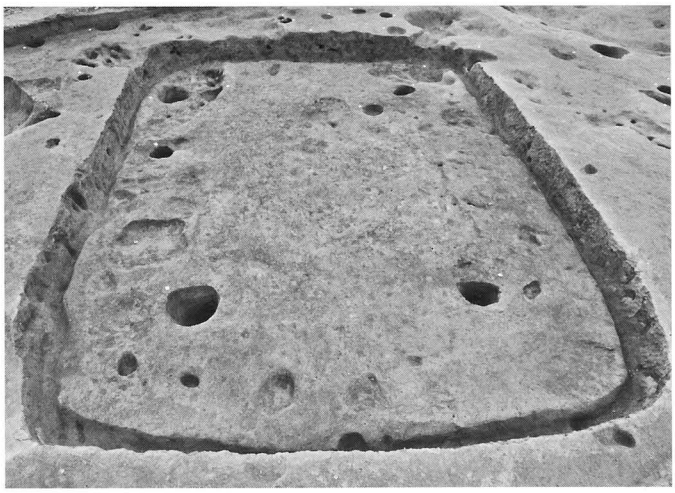
７　２号竪穴完掘状況

８　２号竪穴南西隅土手構造

1　２号竪穴南東隅土手構造

2　２号竪穴柱炭化材

3　２号竪穴柱炭化材

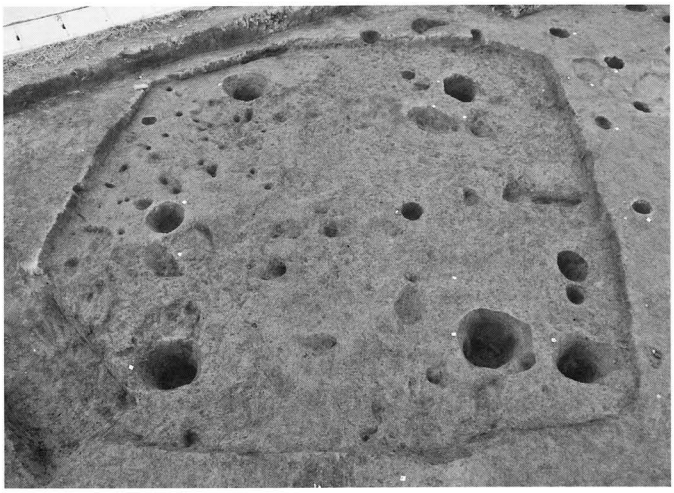


4　２号竪穴完掘状況

5　２号竪穴掘り方面

6　３号竪穴遺物出土状況

7　３号竪穴完掘状況



8　３号竪穴掘り方面

図版 10

1　4・5号竪穴遺物出土状況

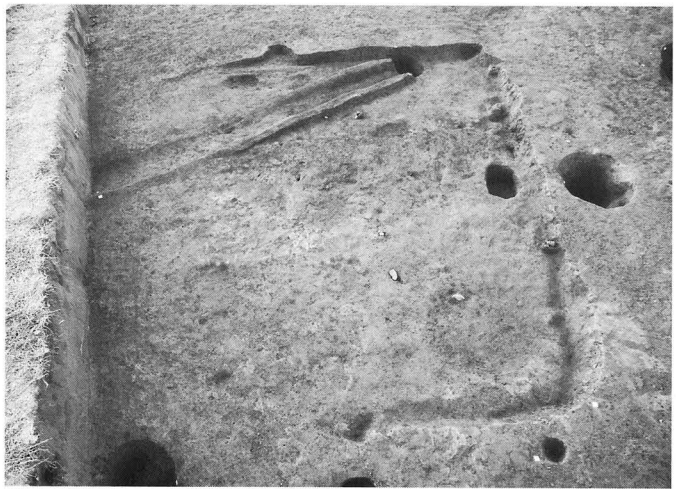
2　4・5号竪穴遺物出土状況

3　5号竪穴遺物出土状況

4　4号竪穴竈付近遺物出土状況

5　4・5号竪穴完掘状況

6　4・5号竪穴掘り方面



7　6号竪穴遺物出土状況

8　6号竪穴遺物出土状況

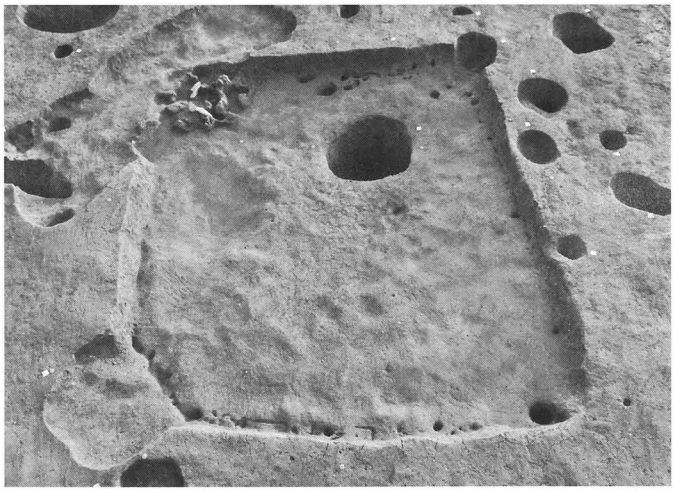
1　4・5号竪穴竈

2　6号竪穴完掘状況

3　1～5号竪穴付近

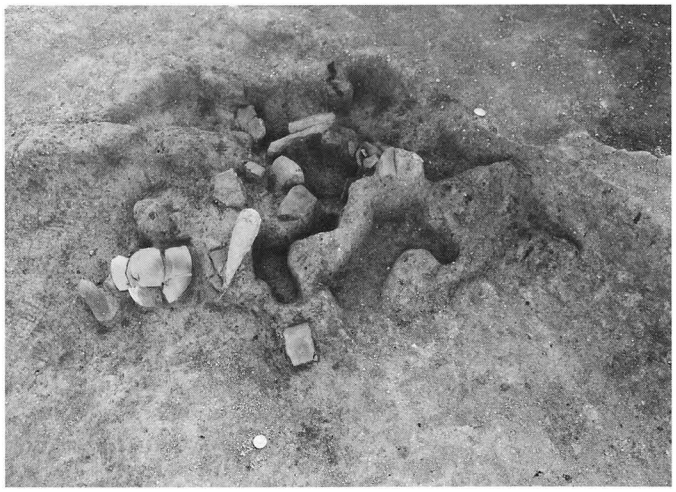
4　7号竪穴遺物出土状況

5　7号竪穴竈周辺遺物出土状況



6　7号竪穴完掘状況

7　7号竪穴掘り方面



8　7号竪穴竈

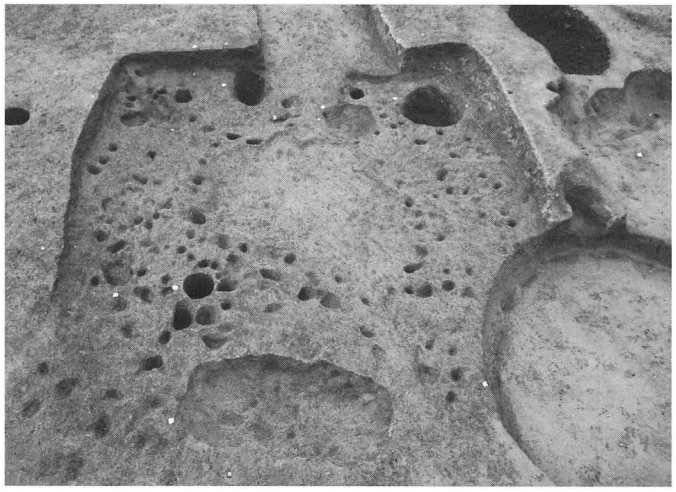
図版 12

1　７号竪穴竈

2　８号竪穴遺物出土状況

3　８号竪穴完掘状況

4　８号竪穴竈



5　８号竪穴掘り方面

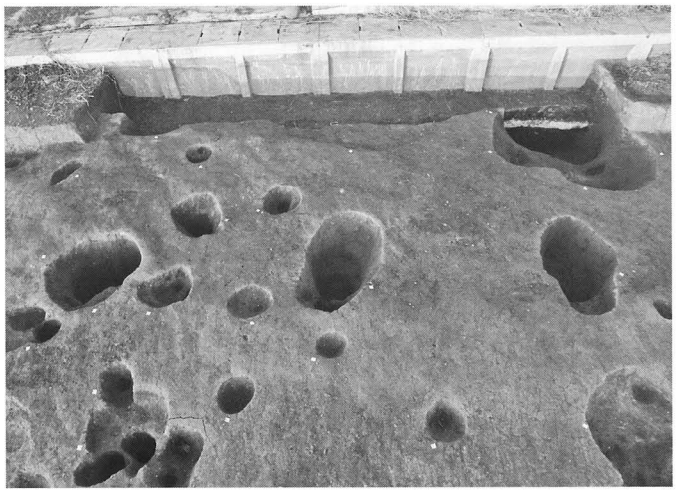
6　９号竪穴遺物出土状況

7　９号竪穴遺物出土状況

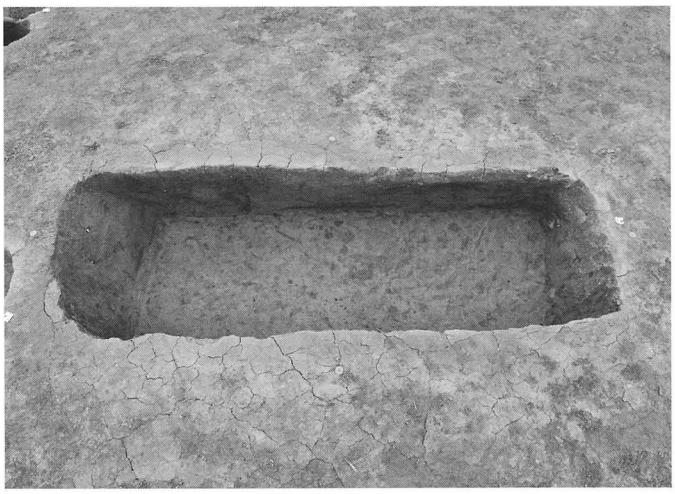
8　９号竪穴遺物出土状況

1　９号竪穴完掘状況

2　９号竪穴台石出土状況



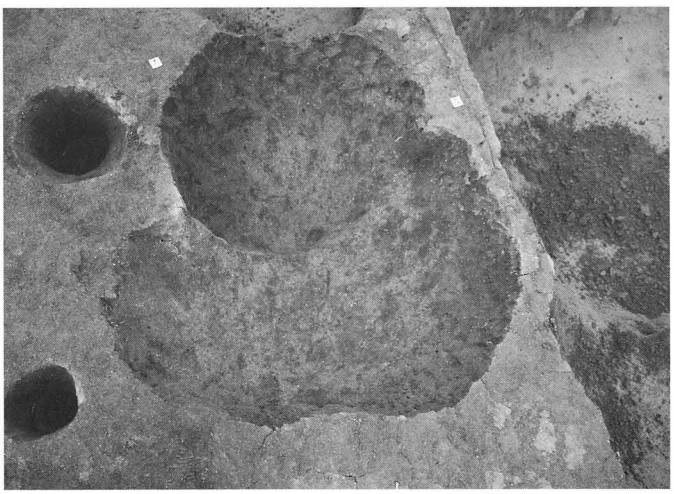
3　１号掘立完掘状況



4　１号土坑完掘状況

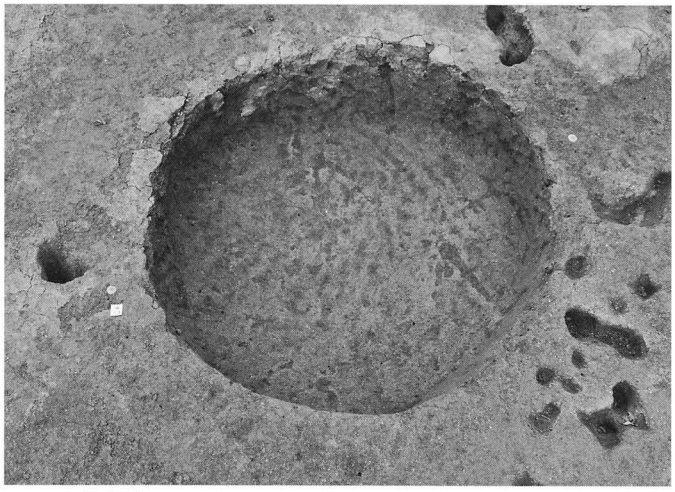
5　１～７号土坑付近

6　５号土坑

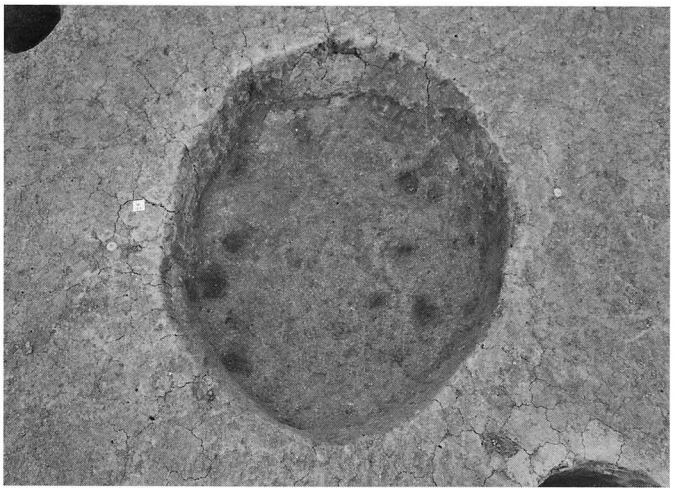


7　９号土坑

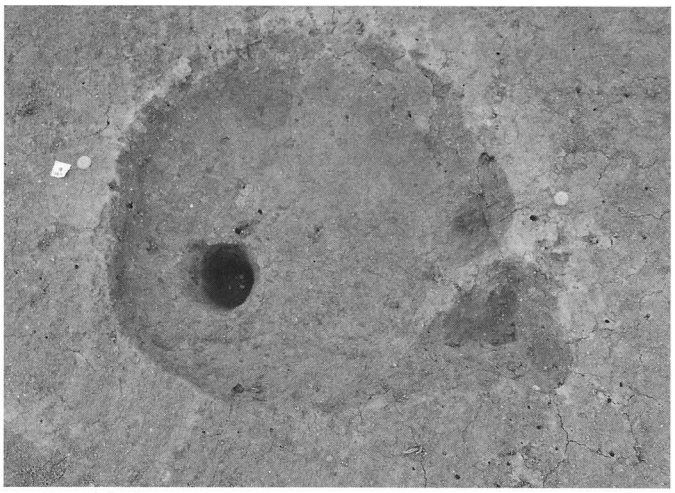
8　10号土坑



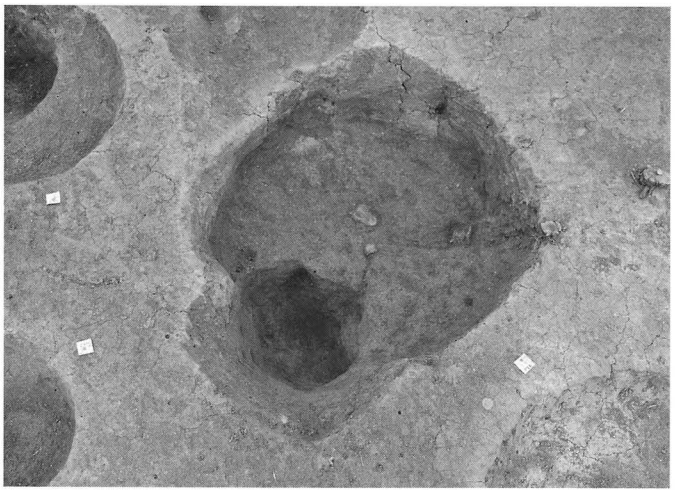
1　11号土坑



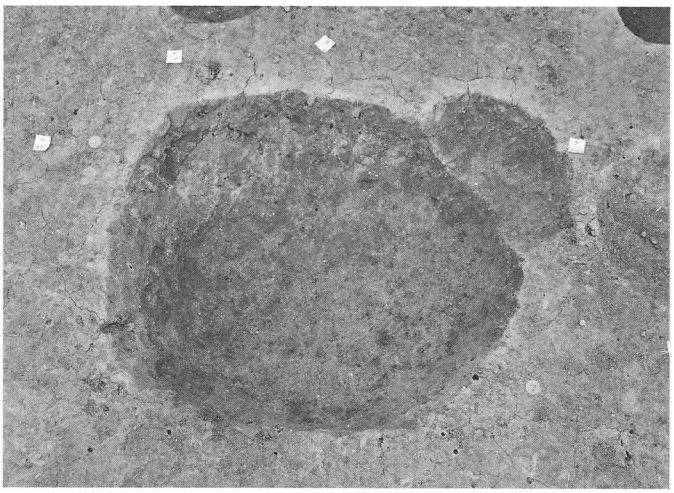
2　15号土坑



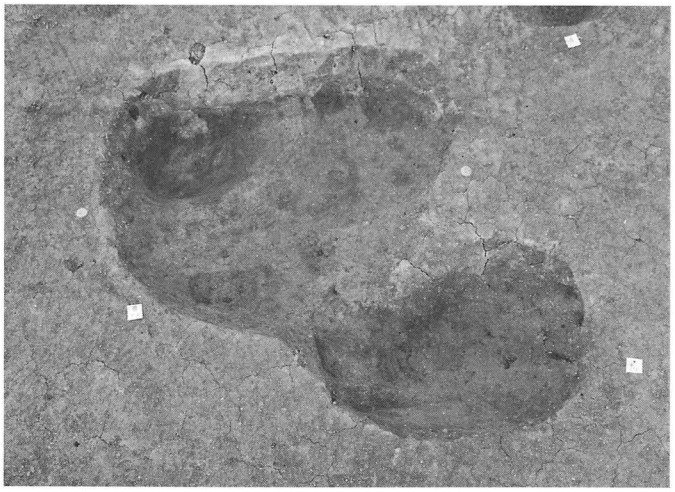
3　16号土坑



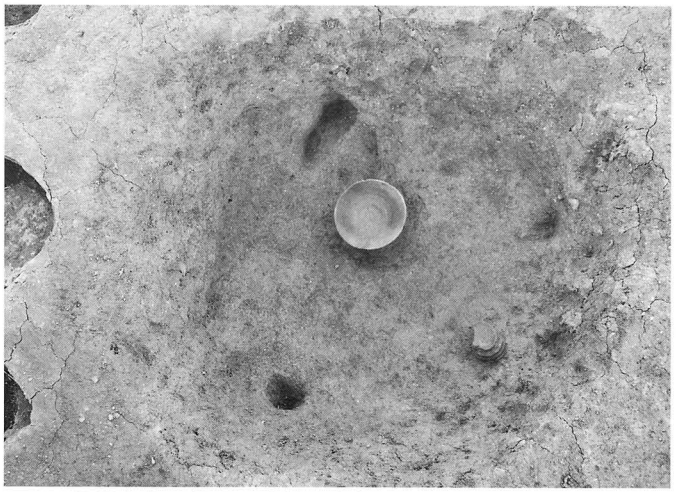
4　17号土坑



5　18号土坑



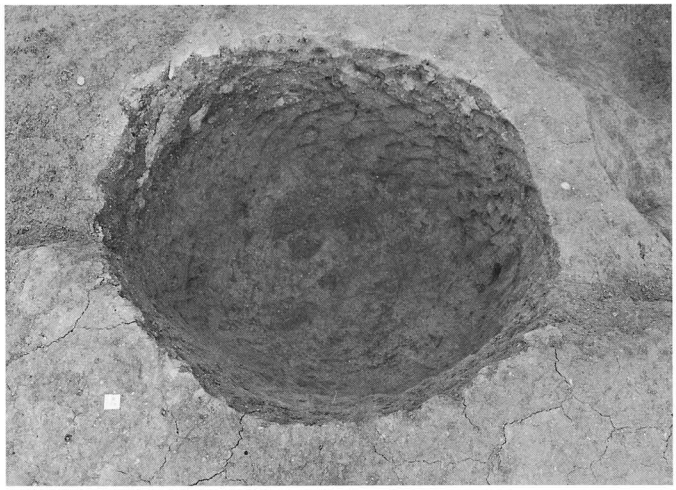
6　21号土坑



7　6号竪穴内27号土坑遺物出土状況

8　27号土坑完掘状況

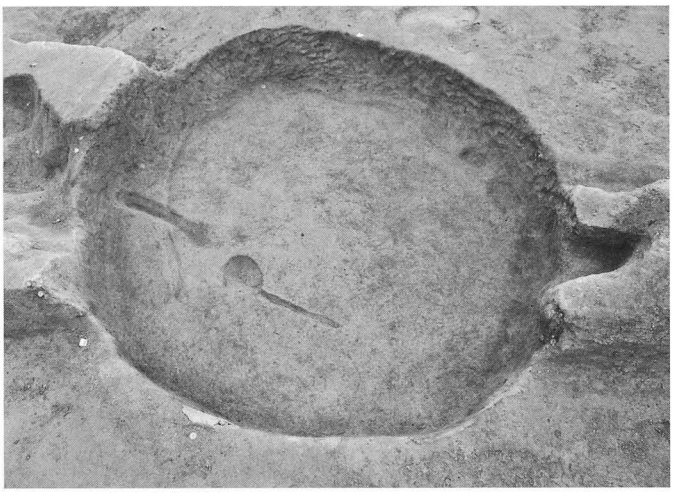
1　29号土坑



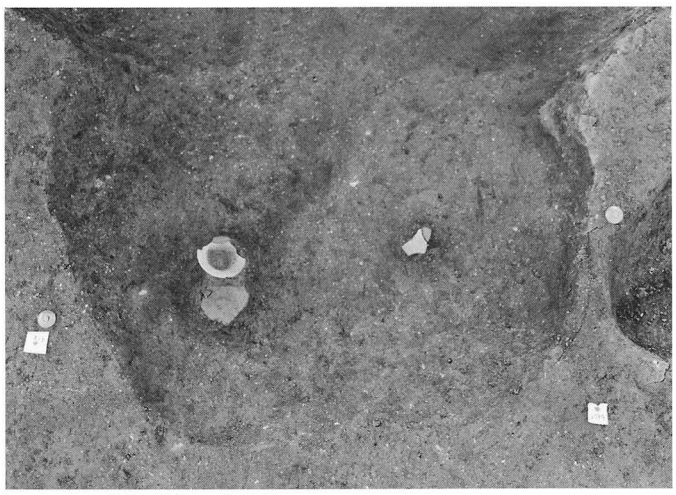
2　38号土坑

3　39号土坑

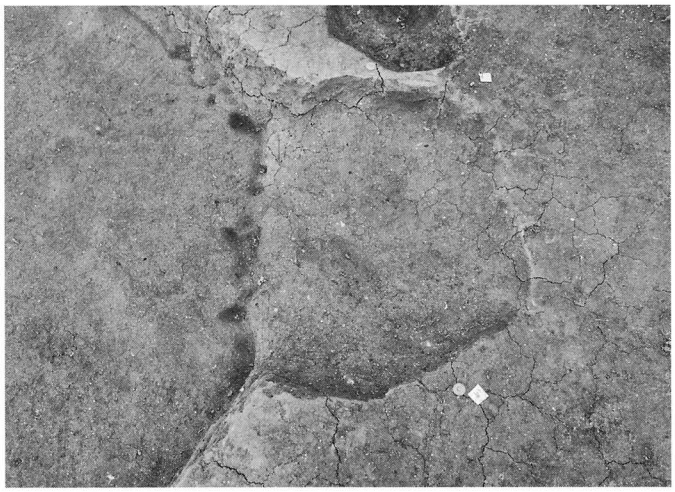
4　40号土坑礫出土状況



5　40号土坑完掘状況



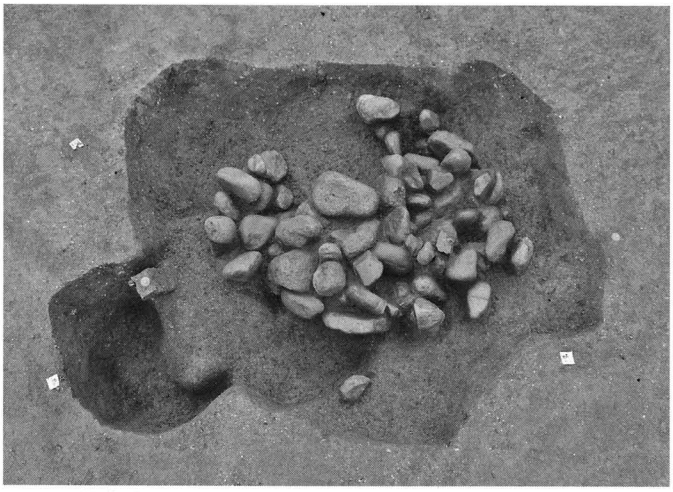
6　41号土坑遺物出土状況



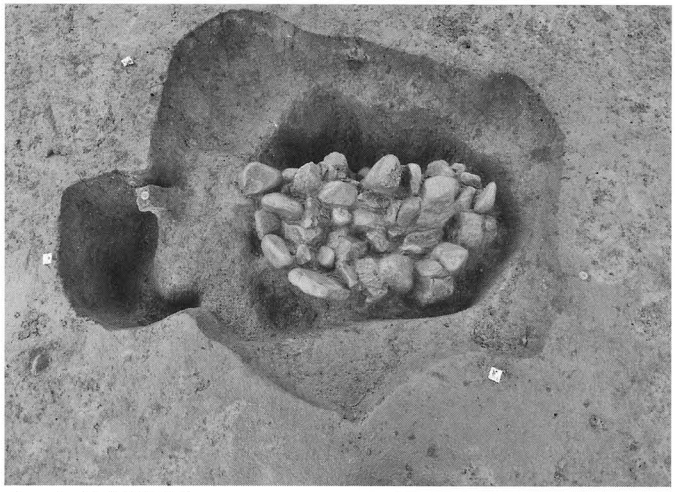
7　41号土坑完掘状況

8　42号土坑

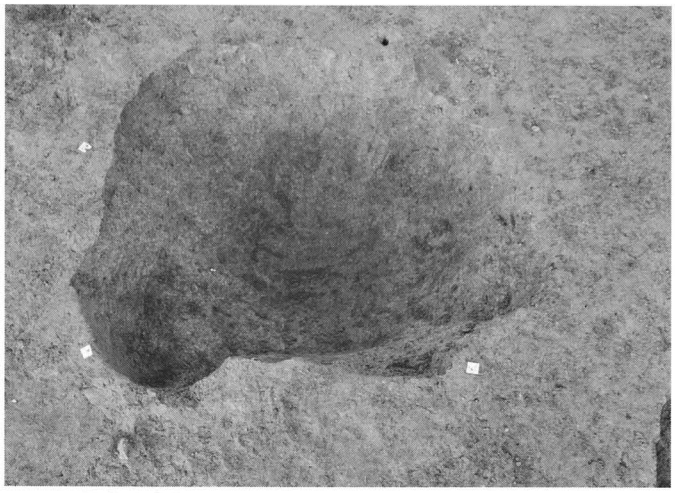
1　44号土坑



2　45号土坑上層



3　45号土坑下層



4　45号土坑完掘

5　46号土坑

6　1号河道

7　1号河道断面

8　1号河道断面（9号竪穴上層）

1　1号河道内土器出土状況

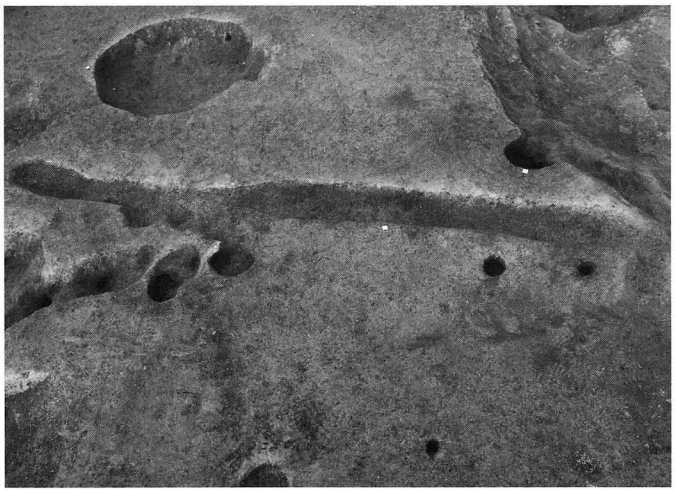
2　1号河道内土器出土状況

3　2号河道

4　2号河道下層

5　1号溝

6　4号溝

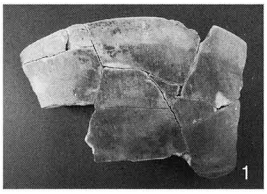


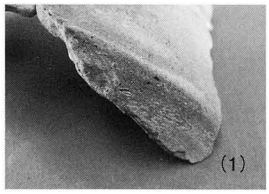
7　9号溝

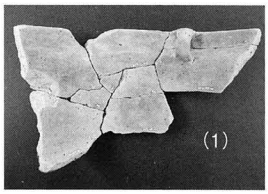
8　2号河道内溝

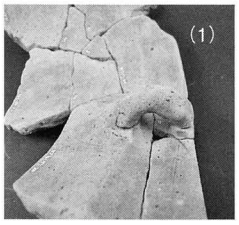
図版 18

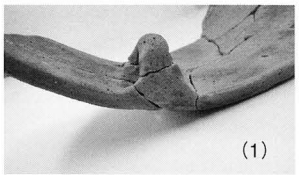
1竪

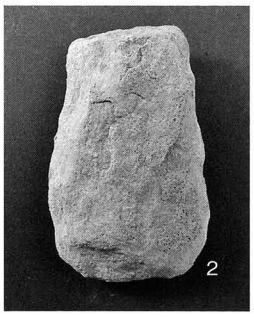




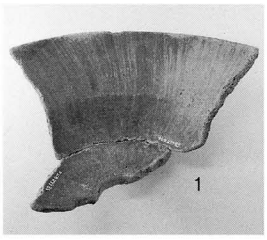


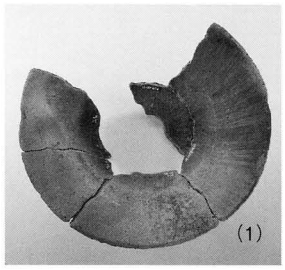


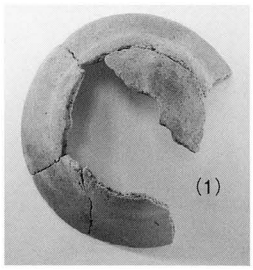


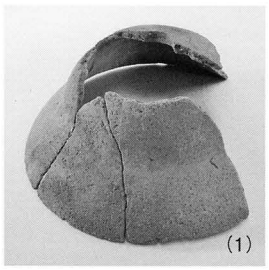


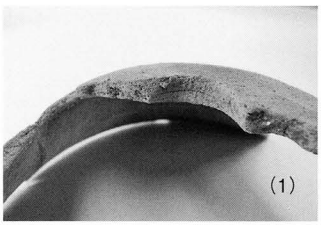
2竪

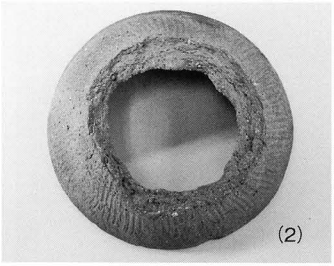


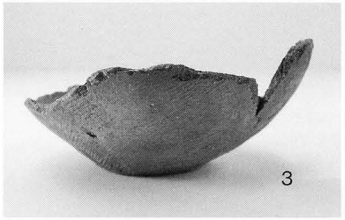


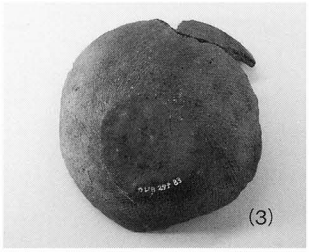


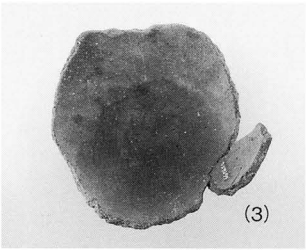


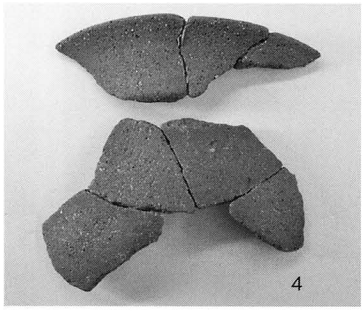


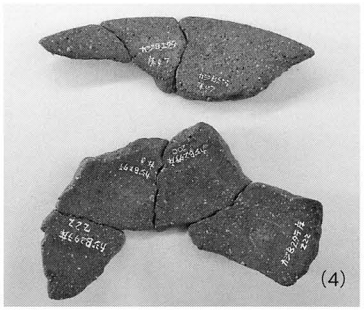


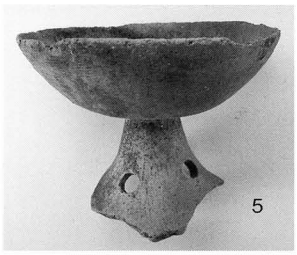


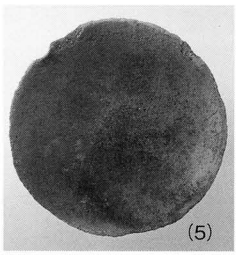


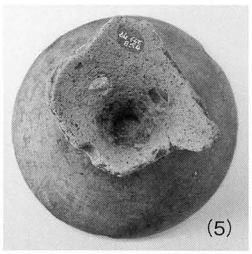


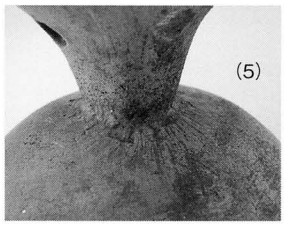


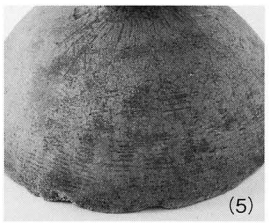


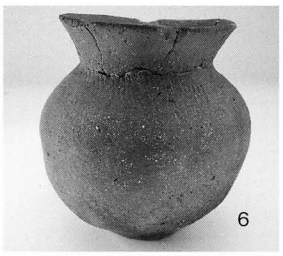


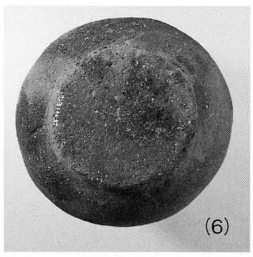


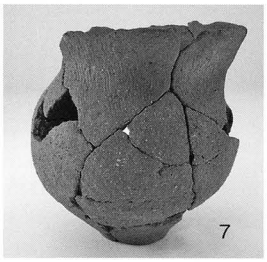


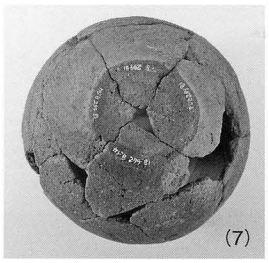


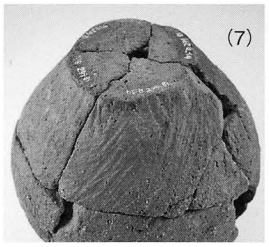


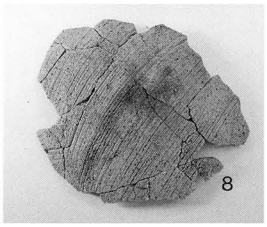


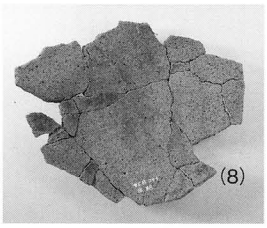


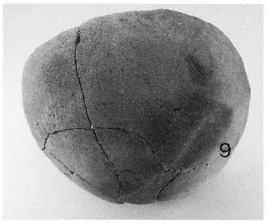


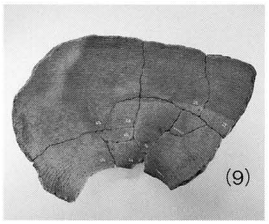


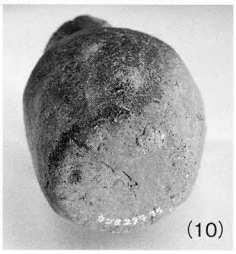


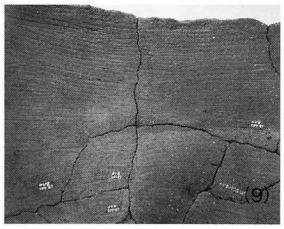


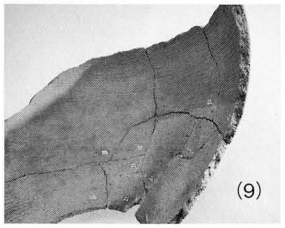


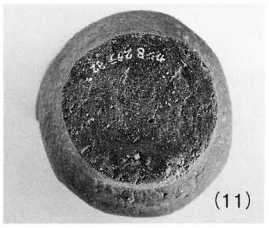




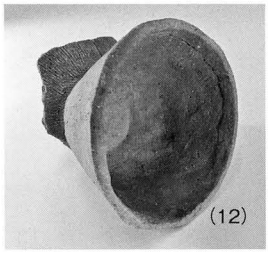


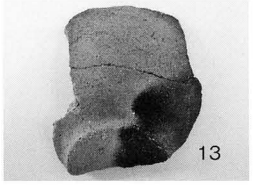


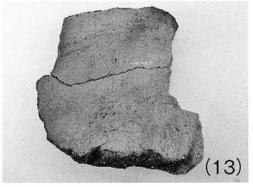


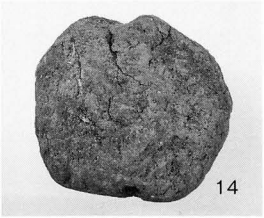


12

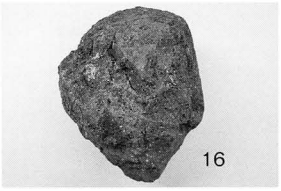

(12)

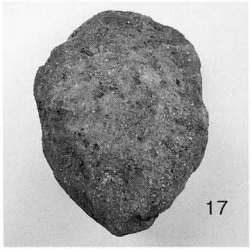

13

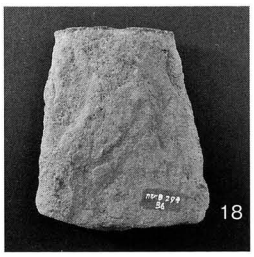

(13)


14

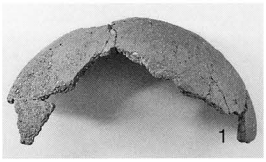
15

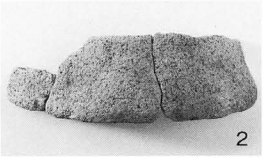

16

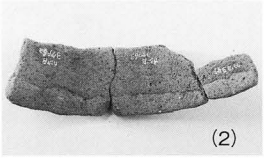

17


18

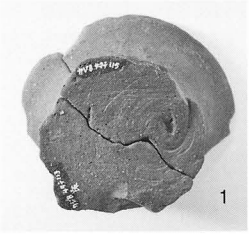
3竪


1

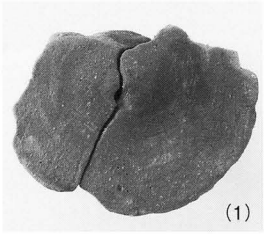

2

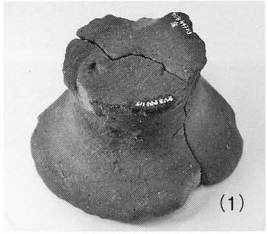

(2)

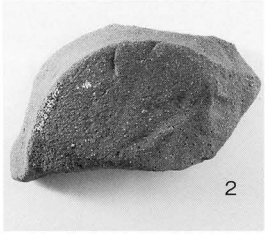
4竪

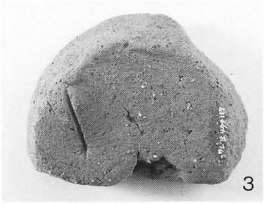

1

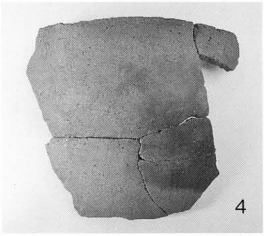
(1)

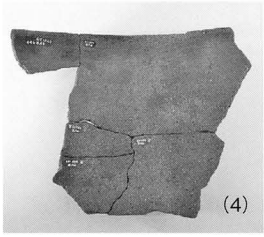

(1)

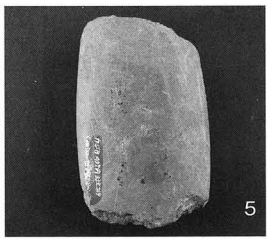

(1)

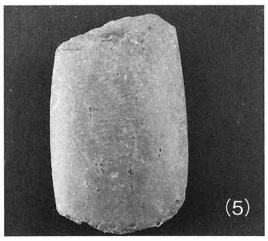

2


3

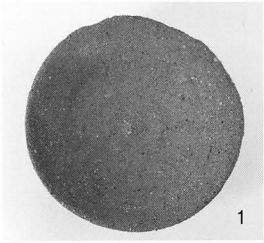

4


(4)

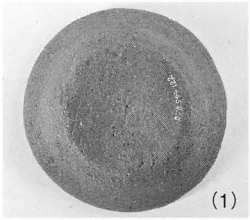

5

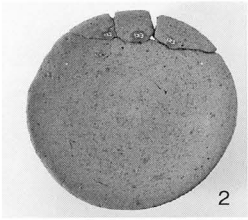

(5)

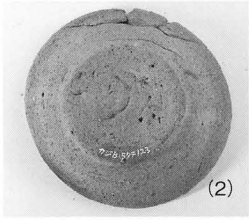
5竪


1

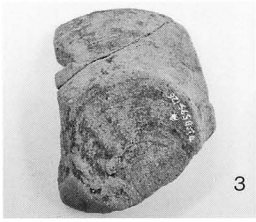
(1)


(1)


2

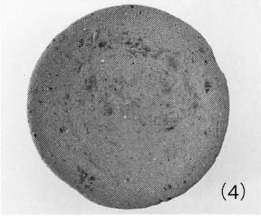

(2)

(2)

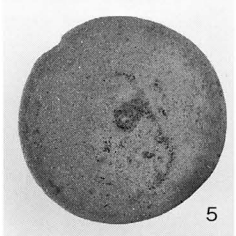

3

(3)

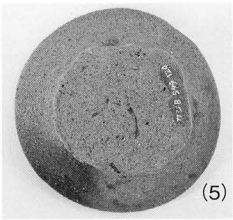
4


(4)

(4)

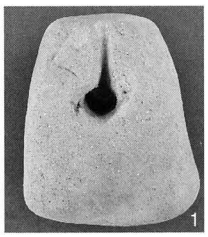

5

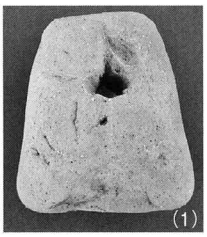
(5)

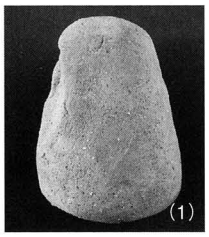

(5)

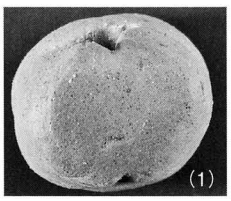
6

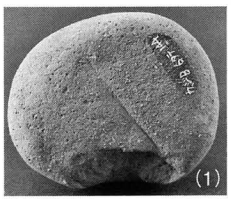
6竪

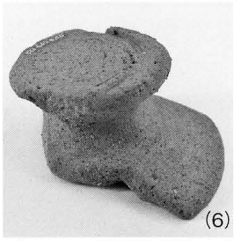

1


(1)


(1)

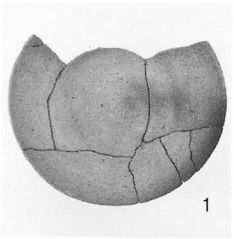

(1)

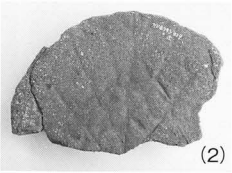

(1)

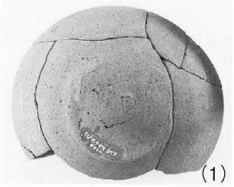

(6)

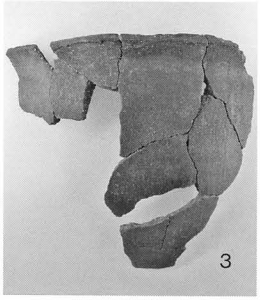
図版 20

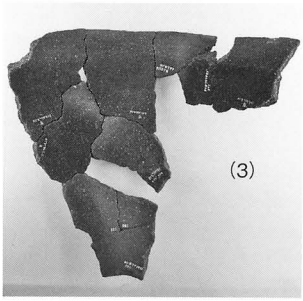
7竪



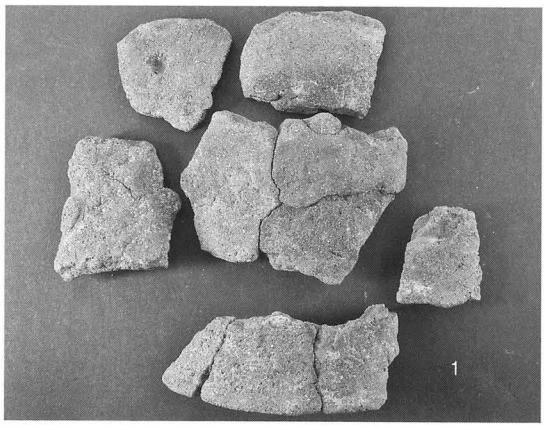


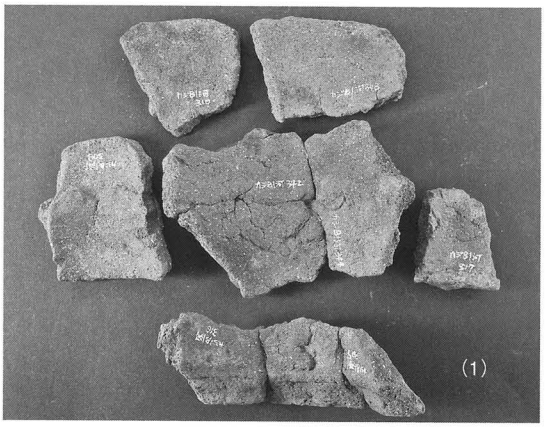


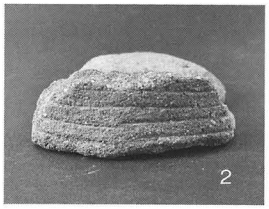


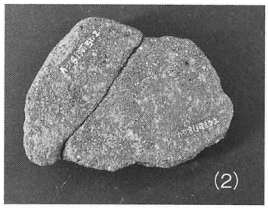


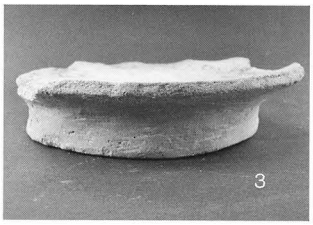
9竪

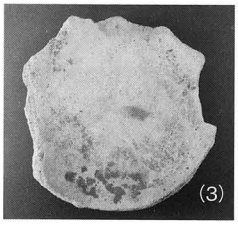


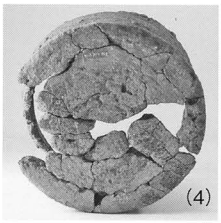


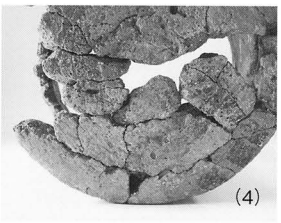


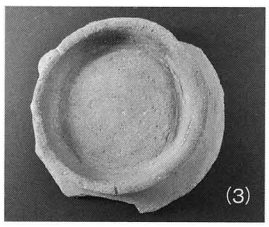


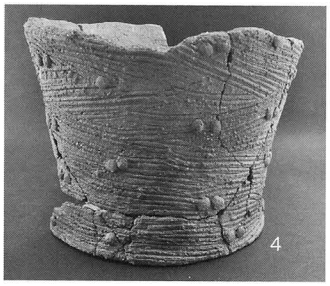


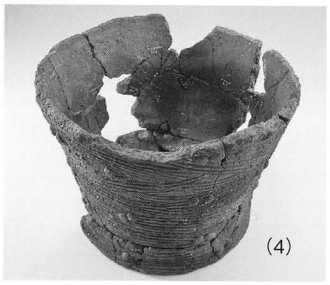


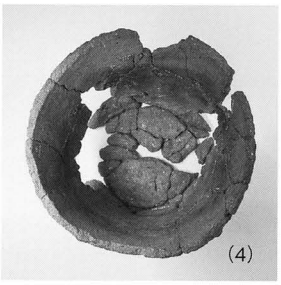


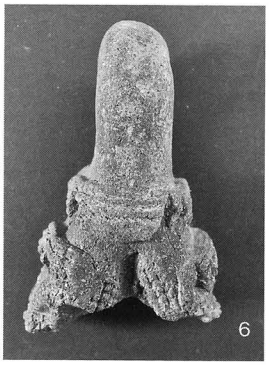


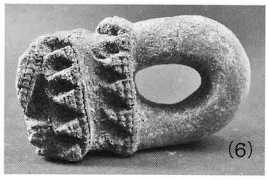


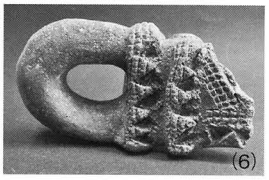


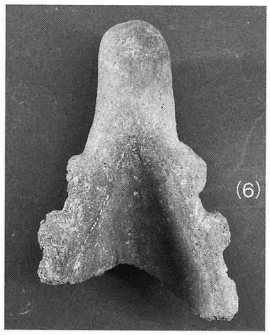


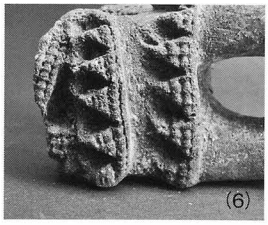


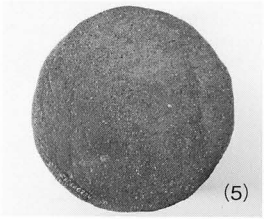


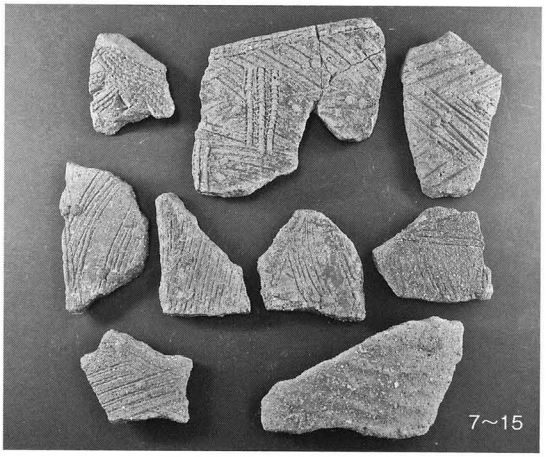


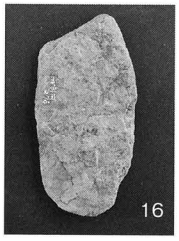


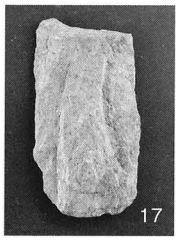


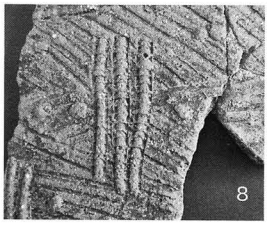


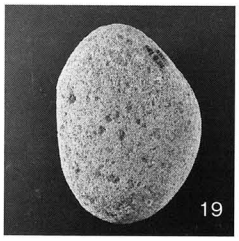


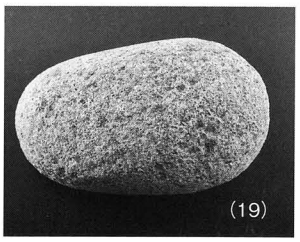


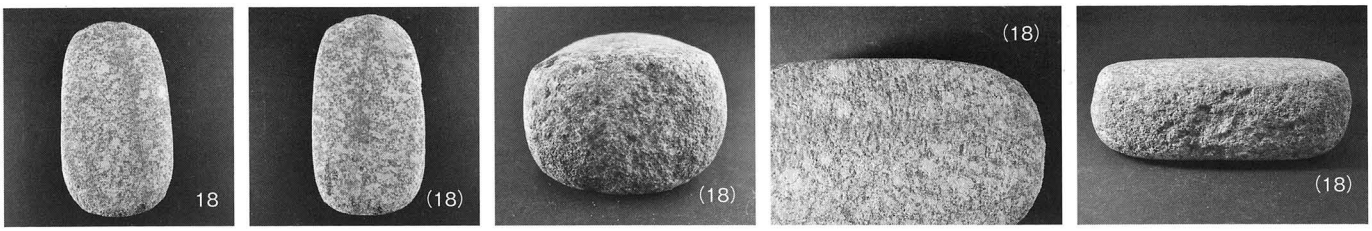


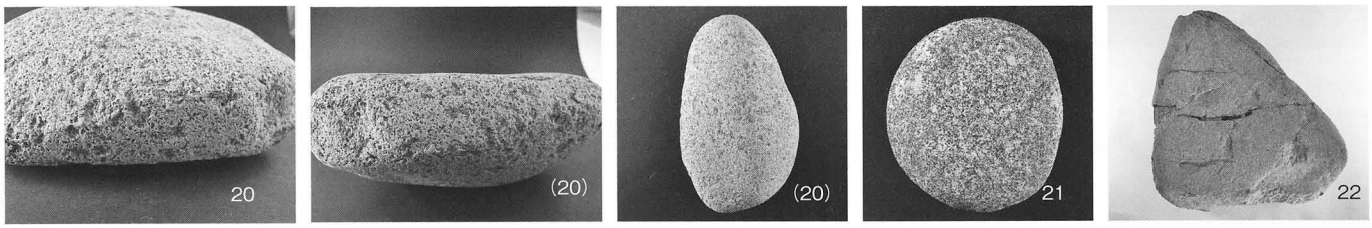


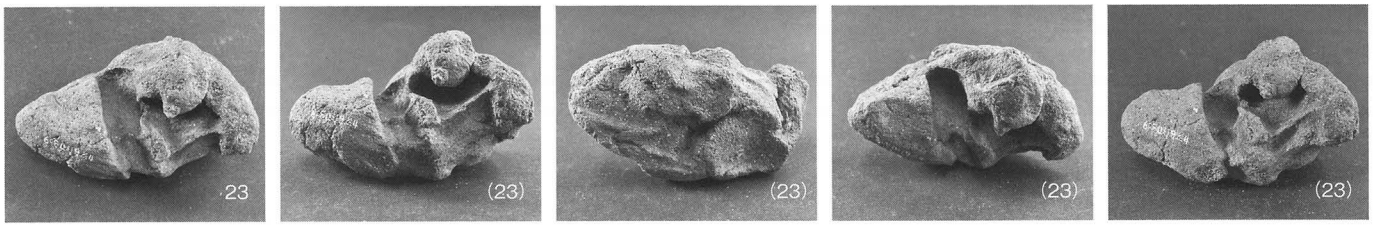






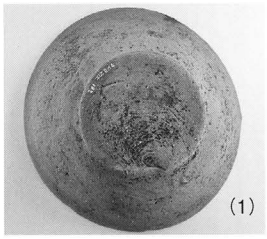


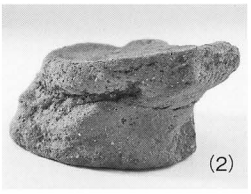




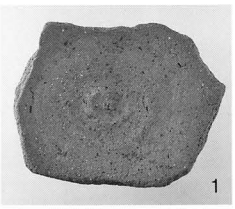
1 掘立

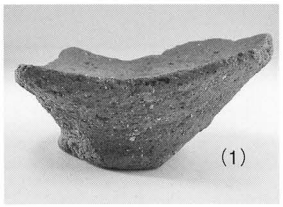
27土

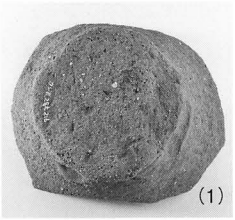




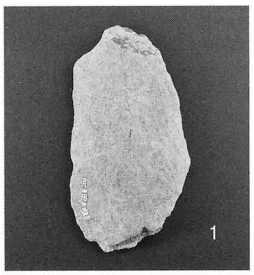
28土



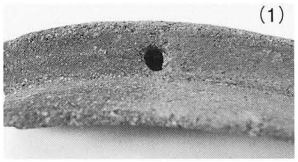


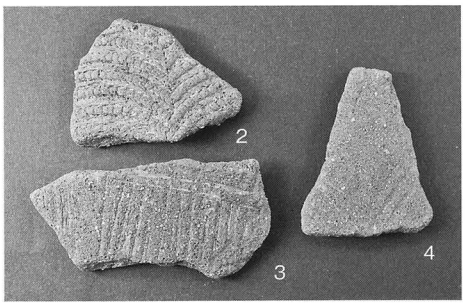


39土

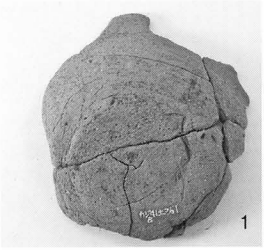


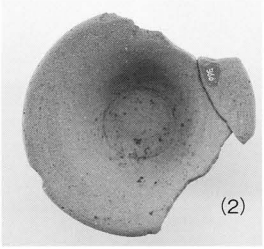
40土

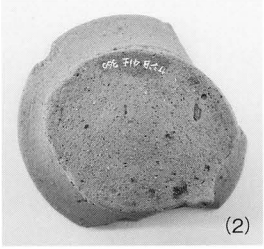




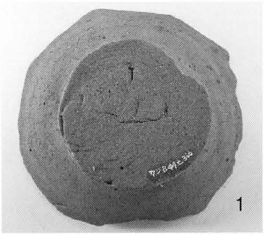
41土

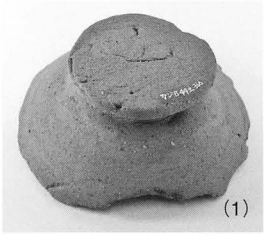


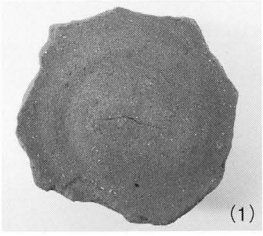




44土

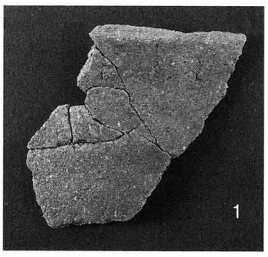


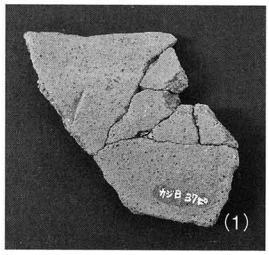




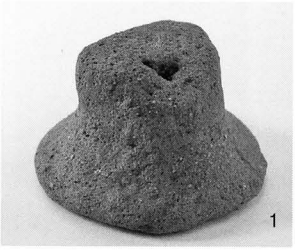
図版 22

37ピ

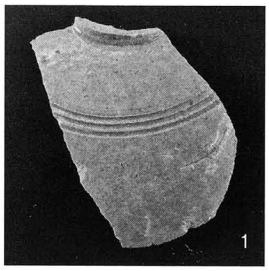


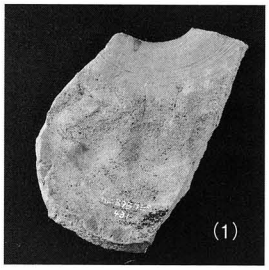


122ピ

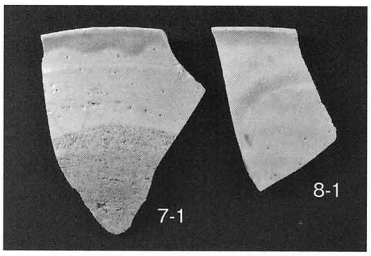


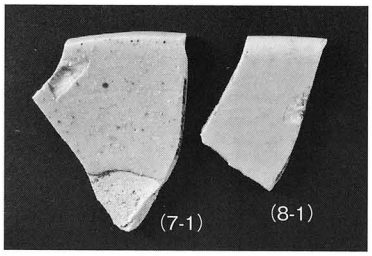
957ピ

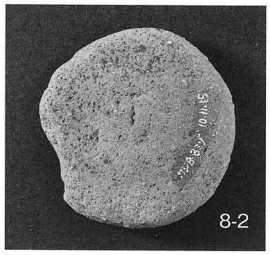




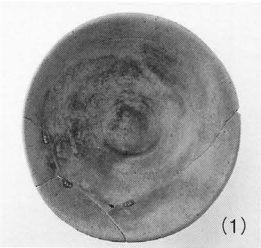
7・8溝

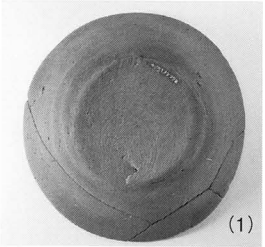


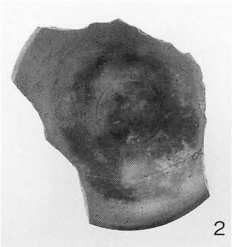


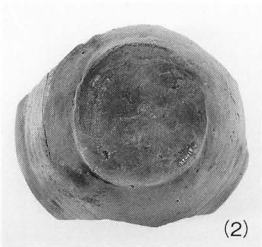


1河

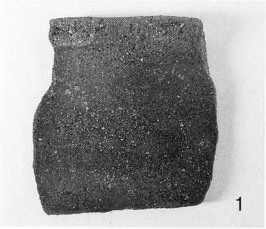


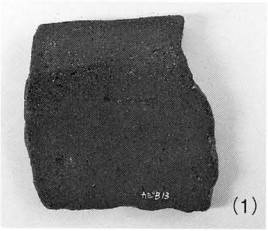






遺構外





報告書抄録

ふりがな	かじばたけびーいせき
書名	梶畑Ｂ遺跡
副書名	市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	櫛原功一・河西　学・松元美由紀・高橋　敦
編集機関	財団法人　山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566　℡ 055-263-6441
発行年月日	西暦2012年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かじばたけびーいせき 梶畑Ｂ遺跡	やまなしけんこうしゅうしえんざんくまの 山梨県甲州市塩山熊野303番地ほか	19213	塩 27	35° 41′ 42.7410″	138° 43′ 31.4883″	平成22年10月1日～12月27日	1827㎡	市道下塩後22号線建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梶畑Ｂ遺跡	集落遺跡	縄文前期・古墳前期・平安後期・中世	竪穴住居跡９・掘立柱建物跡１・ピット・溝・河道跡・屋外集石炉	縄文土器・土師器・白磁・古瀬戸・土製品・生粘土塊・ミニチュア土器・石器・焼成粘土塊	２号竪穴は古墳初頭の焼失家屋で、出入口が南東と南西隅に２ヶ所存在し、西壁際に生粘土塊４個検出された。

要約	縄文前期、諸磯期には竪穴住居が１軒、周辺に屋外集石炉、土坑があり、一つの小集団の姿を示す。古墳初期には竪穴が２軒あり、うち２号竪穴は焼失家屋で、４本柱穴をつなぐように壁際がベッド状を呈し、南西・南東隅に弧状の出入口施設がある。また西壁際には生粘土塊４個がまとまっていた。平安後期の竪穴は５軒で、 特殊な土錘状土製品が出土している。またピットが多数存在し、それらの中には平安後期の遺物を含むものがあり、掘立柱建物跡が多数含まれるとみられる。その他、白磁碗片や古瀬戸三筋壷片があり、平安末～鎌倉期の高級陶磁器が存在したことがわかる。また15世紀頃の竪穴状遺構が１基あり、土鍋が出土した。

甲州市文化財調査報告書　第10集

梶畑B遺跡

— 市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書 —

平成24年(2012)　3月14日　発行

編　集　㈶山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566　TEL 055－263－6441

発　行　甲州市・甲州市教育委員会
〒404-8501 山梨県甲州市塩山上於曽1085-1　TEL 0553－32－2111
㈶山梨文化財研究所

印　刷　㈱帝京サービス